青森県埋蔵文化財調査報告書第74集

長者森遺跡

－東北縦貫自動車道八戸線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－

昭和57年度

青森県教育委員会

長者森遺跡発掘調査報告書正誤表

ページ　行	誤	正
図目次　第9図	遺跡配置図	遺構配置図
図目次　第68図	縄文時代早期～晩期土器～晩期土器分布図	縄文時代早期～晩期土器分布図
図版目次 第21図版	溝状遺構	溝状ピット
図版目次 第22図版	溝状遺構	溝状ピット
図版目次 第23図版	溝状遺構	溝状ピット
図版目次 第61図版	弥生時代土器	弥生式土器
P　5．22行め	南部浮石面	八戸火山灰層上面
P 27．2行め	高さ約30cmケルン状	高さ約30cmのケルン状
P 29．10行め	壺型土器	壺型土器（第89図－2）
P 47．12行め	西壁は	南壁は
P 49．22行め	中撮火山灰	中撮浮石
P 50．21行め	つぶされた状態	つぶれた状態
P 87．　3	撚絡文	綾絡文
P140．20行め	塗付	塗布
P147．20行め	炭化出に	炭化物に
P155．30行め	過度期	過渡期
P158．20行め	絡状体系	絡条体系
P159．2行め	単軸の1段LrとRc	単軸の1段LrとRℓ
P161．5行め	福島中道り	福島中通り
P171．4行め	～とされている。(金剛、1974・増子、1978)	～とされている（金剛、1974・増子、1978）。

青森県埋蔵文化財調査報告書第74集

長者森（ちょうじゃもり）遺跡

－ 東北縦貫自動車道八戸線関係
埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－

昭和57年度

青森県教育委員会

序

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴い、路線内に所在する長者森遺跡の記録保存のため、発掘調査を実施し、その成果をまとめたものであります。

調査の結果、縄文時代早期から晩期の土器や多くの遺構が発見されました。

本報告書が、今後、埋蔵文化財の保護と研究にいささかでも役立てば幸いと思います。

ここに、調査の実施及び本報告書の作成にあたって、種々御協力、御指導をいただいた調査員をはじめ、関係各位に厚くお礼を申し上げます。

昭和58年３月

青森県教育委員会

教育長　二ツ森　重　志

例　　言

1．本報告書は、昭和56年度に実施した東北縦貫自動車道八戸線建設に係る八戸市長者森遺跡の発掘調査報告書である。

2．執筆者の氏名は、それぞれ文末に付した。

3．掲載した地形図は、日本道路公団から提供されたものを使用した。

4．使用した図版のスケールは、各々に示している。なお、写真図版については、任意の縮尺とした。

5．土器の色調は、『新版標準土色帖』（小山・竹原編1967　日本色研事業株式会社）に基づいて記載した。

6．資料の鑑定は、次の諸氏に依頼した。（敬称略）

陶磁器鑑定　金沢大学文学部助教授　佐々木　達夫

石 質 鑑 定　県立八戸高等学校教諭　松山　　力

7．本報告書の作成において、次の諸氏から御教示を得た。（敬称略、順不同）

桜田　　隆（秋田県埋蔵文化財センター主事）

工藤　竹久（八戸市教育委員会文化係主事）

小笠原　善範（八戸市教育委員会文化係主事）

中村　良幸（岩手県大迫町教育委員会主事）

橋　　善光（むつ工業高等学校事務長）

工藤　清泰（浪岡町教育委員会主事）

高田　和徳（岩手県一戸町教育委員会文化財係主事）

岩崎　卓也（筑波大学助教授）

中谷　保美（平館村立平舘小学校教諭）

鈴木　保彦（日本大学芸術学部講師）

瀬川　　滋（青森県考古学会会員）

田中　寿明（青森県考古学会会員）

8．文中の引用及び参考文献については、巻末に記載し、注記の場合は、文中の末尾に記載した。

目　　次

序
例言
第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項 …… 1
1．調査に至る経過 …… 1
2．調　査　要　項 …… 1
第Ⅱ章　調査の方法と経過 …… 4
1，調 査 の 方 法 …… 4
2．調　査　経　過 …… 5
第Ⅲ章　遺 跡 の 概 観 …… 7
1．遺跡の位置と地形 …… 7
2．遺跡周辺の地形と地質について …… 7
3．遺 跡 の 層 序 …… 14
4．周 辺 の 遺 跡 …… 19
第Ⅳ章　検出遺構と出土遺物 …… 21
（検　出　遺　構）
1．焼　石　遺　構 …… 22
2．焼　土　遺　構 …… 29
3．配　石　遺　構 …… 31
4．土　　壙 …… 33
5．溝 状 ピ ッ ト …… 52
6．風　倒　木 …… 59
（出　土　遺　物）
1．遺物の出土状況 …… 65
2．土　　器 …… 68
（縄 文 時 代）
第Ⅰ群土器（縄文時代早期） …… 68
第Ⅱ群土器（縄文時代前期） …… 69
第Ⅲ群土器（縄文時代中期） …… 71
第Ⅳ群土器（縄文時代後期） …… 82
第Ⅴ群土器（縄文時代晩期） …… 85

3．石　　器 …… 115
4．土偶・土製品 …… 138
5．弥生時代の土器 …… 140
6．土　師　器 …… 140
7．陶　磁　器 …… 143
8．泥面子（どろめんこ） …… 143
9．古　　銭 …… 143
第Ⅴ章　小　　結 …… 146
1．遺　　構
（1）焼石遺構について …… 146
（2）焼土遺構について …… 148
（3）配石遺構について …… 148
（4）土壙について …… 149
（5）溝状ピットについて …… 149
2．土　　器
（1）第Ⅰ群土器について …… 153
（2）第Ⅱ群土器について …… 153
（3）第Ⅲ群土器について …… 156
（4）第Ⅳ群土器について …… 158
（5）第Ⅴ群土器について …… 161
3．石器について …… 161
4．土偶・土製品について …… 169
5．弥生時代の土器について …… 169
6．中世陶磁器について …… 170
7．泥面子について …… 170
第Ⅵ章　ま　と　め …… 172

図　目　次

第 1 図　東北縦貫自動車道八戸線建設予定路線内遺跡位置図 …… 3
第 2 図　グリッド配置図 …… 4
第 3 図　調査区及び周辺の地形 …… 8
第 4 図　遺跡周辺の地形分類図 …… 11
第 5 図　地質分布図 …… 13
第 6 図　長者森遺跡基本層序 …… 16
第 7 図　長者森遺跡層序 …… 17
第 8 図　周辺の遺跡 …… 20
第 9 図　遺跡配置図 …… 21
第 10 図　第 1 号焼石遺構 …… 22
第 11 図　第 1 号焼石遺構出土遺物 …… 23
第 12 図　第 2 号焼石遺構 …… 24
第 13 図　第 3 号焼石遺構 …… 25
第 14 図　第 3 号焼石遺構出土遺物 …… 26
第 15 図　第 4 号焼石遺構 …… 27
第 16 図　第 5 号焼石遺構 …… 28
第 17 図　第 1 号焼土遺構 …… 29
第 18 図　第 2 ~ 8 号焼土遺構 …… 30
第 19 図　配石遺構出土遺物 …… 31
第 20 図　配石遺構 …… 32
第 21 図　第 1 号土壙 …… 33
第 22 図　第 2 号土壙 …… 34
第 23 図　第 2 号土壙出土遺物 …… 35
第 24 図　第 3 号土壙 …… 36
第 25 図　第 4 号土壙 …… 36
第 26 図　第 5 号土壙 …… 37
第 27 図　第 6 号土壙出土遺物 …… 37
第 28 図　第 6 号土壙 …… 38
第 29 図　第 7 号土壙 …… 39
第 30 図　第 8 ・ 9 ・ 11号土壙 …… 40
第 31 図　第10号土壙 …… 41
第 32 図　第10号土壙出土遺物 …… 41
第 33 図　第12号土壙 …… 42
第 34 図　第13号土壙 …… 43
第 35 図　第14号土壙 …… 44
第 36 図　第15号土壙 …… 44
第 37 図　第16号土壙 …… 45
第 38 図　第17号土壙 …… 45
第 39 図　第18号土壙 …… 46
第 40 図　第19号土壙 …… 46
第 41 図　第19号土壙出土遺物 …… 47
第 42 図　第20・22号土壙 …… 48
第 43 図　第21号土壙 …… 49
第 44 図　第21号土壙出土遺物 …… 49
第 45 図　第23号土壙出土遺物 …… 50
第 46 図　第23号土壙 …… 51
第 47 図　第 1 号溝状ピット …… 52
第 48 図　第 2 号溝状ピット …… 53
第 49 図　第 3 号溝状ピット …… 54
第 50 図　第 4 号溝状ピット …… 55
第 51 図　第 5 号溝状ピット出土遺物 …… 55
第 52 図　第 5 号溝状ピット …… 56
第 53 図　第 6 号溝状ピット …… 57
第 54 図　第 7 号溝状ピット …… 58
第 55 図　第 1 号風倒木 …… 59
第 56 図　第 2 号風倒木 …… 59
第 57 図　第 2 号風倒木出土遺物 …… 59
第 58 図　第 3 号風倒木 …… 60
第 59 図　第 4 号風倒木 …… 61

第 60 図　第 5 号風倒木 …… 61
第 61 図　第 6 号風倒木 …… 62
第 62 図　第 7 号風倒木 …… 62
第 63 図　第 8 号風倒木 …… 63
第 64 図　第 9 号風倒木 …… 64
第 65 図　第10号風倒木出土遺物 …… 64
第 66 図　第10号風倒木 …… 64
第 67 図　切断蓋付土器出土状態 …… 65
第 68 図　縄文時代早期～晩期土器
～晩期土器分布図 …… 66
第 69 図　第Ⅳ群土器出土状態
（C 地区第Ⅱ層）…… 67
第 70 図　第Ⅰ・Ⅱ群土器実測図 …… 73
第 71 図　第Ⅰ群土器拓影図（1）…… 74
第 72 図　第Ⅰ群土器拓影図（2）…… 75
第 73 図　第Ⅰ群土器拓影図（3）…… 76
第 74 図　第Ⅱ群土器拓影図（1）…… 77
第 75 図　第Ⅱ群土器拓影図（2）…… 78
第 76 図　第Ⅱ群土器拓影図（3）…… 79
第 77 図　第Ⅱ群土器拓影図（4）…… 80
第 78 図　第Ⅱ群土器拓影図（5）…… 81
第 79 図　撚糸文模式図 …… 84
第 80 図　第Ⅲ群土器実測図（1）…… 87
第 81 図　第Ⅲ群土器実測図（2）…… 88
第 82 図　第Ⅳ群土器実測図（1）…… 89
第 83 図　第Ⅳ群土器実測図（2）…… 90
第 84 図　第Ⅳ群土器実測図（3）…… 91
第 85 図　第Ⅳ群土器実測図（4）…… 92
第 86 図　第Ⅳ群土器実測図（5）…… 93
第 87 図　第Ⅳ群土器実測図（6）…… 94
第 88 図　第Ⅳ・Ⅴ群土器実測図 …… 95
第 89 図　第Ⅴ群土器実測図 …… 96
第 90 図　第Ⅲ～Ⅴ群土器底部実測図 …… 97
第 91 図　第Ⅲ群土器拓影図（1）…… 98
第 92 図　第Ⅲ群土器拓影図（2）…… 99
第 93 図　第Ⅲ群土器拓影図（3）…… 100
第 94 図　第Ⅳ群土器拓影図（1）…… 101
第 95 図　第Ⅳ群土器拓影図（2）…… 102
第 96 図　第Ⅳ群土器拓影図（3）…… 103
第 97 図　第Ⅳ群土器拓影図（4）…… 104
第 98 図　第Ⅳ群土器拓影図（5）…… 105
第 99 図　第Ⅳ群土器拓影図（6）…… 106
第100図　第Ⅳ群土器拓影図（7）…… 107
第101図　第Ⅳ群土器拓影図（8）…… 108
第102図　第Ⅳ群土器拓影図（9）…… 109
第103図　第Ⅳ群土器拓影図（10）…… 110
第104図　第Ⅳ群土器拓影図（11）…… 111
第105図　第Ⅳ群土器拓影図（12）…… 112
第106図　第Ⅴ群土器拓影図（1）…… 113
第107図　第Ⅴ群土器拓影図（2）…… 114
第108図　石器の部位名称・分類 …… 116
第109図　磨製石斧製作工程 …… 120
第110図　石器実測図（1）…… 126
第111図　石器実測図（2）…… 127
第112図　石器実測図（3）…… 128
第113図　石器実測図（4）…… 129
第114図　石器実測図（5）…… 130
第115図　石器実測図（6）…… 131
第116図　石器実測図（7）…… 132
第117図　石器実測図（8）…… 133
第118図　石器実測図（9）…… 134
第119図　石器実測図（10）…… 135
第120図　石器実測図（11）…… 136
第121図　石器実測図（12）…… 137

第122図　土偶・土製品実測図 …… 139
第123図　弥生式土器実測図 …… 141
第124図　弥生式土器拓影図 …… 142
第125図　土師器及び陶磁器実測図 …… 144
第126図　泥面子実測図及び古銭拓影図 … 145
第127図　溝状ピット位置図 …… 150
第128図　第Ⅲ群土器展開模式図 …… 157
第129図　粗製土器変遷図 …… 159
第130図　石器計測基準 …… 164
第131図　石鏃計測図 …… 165
第132図　石器計測図 …… 166
第133図　磨石計測図 …… 167
第134図　器種別石材構成比 …… 168

表　目　次

第 1 表　地質層序表 …… 12
第 2 表　八戸火山灰層序表 …… 13
第 3 表　黒色土層層序表 …… 14
第 4 表　十和田火山灰完新
　　世火山灰編年表 …… 15
第 5 表　周辺の遺跡一覧表 …… 19
第 6 表　第 1 号焼石遺構
　　出土遺物計測表 …… 23
第 7 表　第 3 号焼石遺構
　　出土遺物計測表 …… 26
第 8 表　配石遺構出土遺物計測表 …… 31
第 9 表　第 2 号土壙出土遺物観察表 …… 35
第 10 表　第 6 号土壙出土遺物観察表 …… 39
第 11 表　第10号土壙出土遺物観察表 …… 41
第 12 表　第19号土壙出土遺物観察表 …… 47
第 13 表　第21号土壙出土遺物観察表 …… 49
第 14 表　第23号土壙出土遺物観察表 …… 50
第 15 表　第 5 号溝状ピット　55
　　出土遺物観察表 …… 55
第 16 表　第 2 号風倒木出土遺物観察表 … 60
第 17 表　第10号風倒木出土遺物観察表 … 64
第 18 表　石器分類表 …… 115
第 19 表　石鏃計測表 …… 117
第 20 表　石匙計測表 …… 117
第 21 表　石箆計測表 …… 118
第 22 表　不定形削器計測表 …… 118
第 23 表　Ｒ．フレイク計測表 …… 119
第 24 表　磨製石斧計測表 …… 120
第 25 表　磨石計測表(1)…… 121
第 26 表　磨石計測表(2)…… 122
第 27 表　磨石計測表(3)…… 123
第 28 表　石皿計測表 …… 123
第 29 表　打製石斧計測表 …… 124
第 30 表　半円状扁平打製石器計測表 …… 124
第 31 表　凹石計測表 …… 124
第 32 表　砥石計測表 …… 125
第 33 表　敲石計測表 …… 125
第 34 表　溝状ピット一覧表
　　(青森県)…… 151・152

図　版　目　次

第１図版　遺跡遠景 …… 1
第２図版　遺跡近景 …… 2
第３図版　遺跡基本層序 …… 3
第４図版　第１～３号焼石遺構 …… 4
第５図版　第２・３号焼石遺構 …… 5
第６図版　第４号焼石遺構 …… 6
第７図版　第５号焼石遺構 …… 7
第８図版　第１号焼土～６号焼土 …… 8
第９図版　配石遺構 …… 9
第10図版　第１・３・４号土壙 …… 10
第11図版　第２号土壙 …… 11
第12図版　第５・６号土壙 …… 12
第13図版　第８号土壙 …… 13
第14図版　第９・10号土壙 …… 14
第15図版　第11・12号土壙 …… 15
第16図版　第13・14号土壙 …… 16
第17図版　第15・16号土壙 …… 17
第18図版　第17・18・19号土壙 …… 18
第19図版　第20・22号土壙 …… 19
第20図版　第23号土壙 …… 20
第21図版　第２・５号溝状遺構 …… 21
第22図版　第３・４号溝状遺構 …… 22
第23図版　第６・７号溝状遺構 …… 23
第24図版　第１号風倒木 …… 24
第25図版　第４・５号風倒木 …… 25
第26図版　第７・８号風倒木 …… 26
第27図版　第９・10号風倒木 …… 27
第28図版　遺物出土状態（１） …… 28
第29図版　遺物出土状態（２） …… 29
第30図版　第１・３号焼石遺構、配石遺構出土遺物 …… 30
第31図版　遺構内出土遺物 …… 31
第32図版　第Ⅰ群土器 …… 32
第33図版　第Ⅰ・Ⅱ群土器 …… 33
第34図版　第Ⅱ群土器（１） …… 34
第35図版　第Ⅱ群土器（２） …… 35
第36図版　第Ⅱ群土器（３） …… 36
第37図版　第Ⅲ・Ⅳ群土器 …… 37
第38図版　第Ⅳ群土器 …… 38
第39図版　第Ⅳ・Ⅴ群土器 …… 39
第40図版　第Ⅲ群土器（１） …… 40
第41図版　第Ⅲ群土器（２） …… 41
第42図版　第Ⅲ・Ⅳ群土器 …… 42
第43図版　第Ⅳ群土器（１） …… 43
第44図版　第Ⅳ群土器（２） …… 44
第45図版　第Ⅳ群土器（３） …… 45
第46図版　第Ⅳ群土器（４） …… 46
第47図版　第Ⅳ群土器（５） …… 47
第48図版　第Ⅳ群土器（６） …… 48
第49図版　第Ⅳ・Ⅴ群土器 …… 49
第50図版　第Ⅴ群土器・底部 …… 50
第51図版　石鏃・石匙 …… 51
第52図版　石匙・石錐・不定形削器 …… 52
第53図版　不定形削器・Ｒ．フレイク …… 53
第54図版　Ｒ．フレイク・磨製石斧・磨石石斧拡大写真 …… 54
第55図版　残核・剥片 …… 55
第56図版　打製石斧・半円状扁平打製石器・磨石 …… 56
第57図版　磨石（１） …… 57
第58図版　磨石（２） …… 58
第59図版　磨石・敲石・凹石・石皿 …… 59
第60図版　土偶・土製品 …… 60
第61図版　弥生時代土器 …… 61
第62図版　土師器・陶磁器・泥面子・古銭 …… 62

第Ⅰ章　調査に至る経過と調査要項

１．調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線建設予定路線は、昭和45年６月に基本計画が策定され、昭和52年９月に実施計画の認可並びに青森県と岩手県内の路線ルートが同時に発表された。総延長41.88㎞のうち、県内ルート分は14.28㎞である。青森県教育委員会では、日本道路公団の依頼により昭和53年４月と11月の２度にわたって、県内建設予定路線内（三戸郡南郷村、福地村、八戸市）の遺跡分布調査を実施したところ、周知の遺跡（右エ門次郎窪、韮窪）以外に12か所の遺跡と思われる箇所が認められた（161.230㎡）。その後、今後の調査等について両者が協議し、周知の遺跡の12か所は試掘調査を行って埋蔵文化財包蔵地（遺跡）か否かを決定することとなった。そこで県教育委員会では、昭和54年９月～10月の２カ月にわたり、12か所の試掘対象遺跡のうち６か所について試掘調査を実施した結果、２か所（№１、10）が除外され、最終的には12か所が発掘調査対象遺跡となった。また、これらの遺跡は、番号で呼称していたが、小字名からとった遺跡名に変更した。

昭和54年10月、日本道路公団仙台建設局から、５遺跡の発掘調査の依頼があり、翌昭和55年４月からその通跡の発掘調査を実施した。引き続き、本遺跡をはじめ、鴨平（１）鴨平（２）昼巻沢、白山平（２）の５遺跡の発掘調査依頼があったので、昭和56年度にその調査を実施することになった。

２．調　査　要　項

（１）調査目的

東北縦貫自動車道八戸線建設工事に先立ち、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資する。

（２）遺跡名及び所在地

長老森（ちょうじゃもり）遺跡

青森県八戸市田面木字長者森68～ 10他

（３）調査対象面積

10,000㎡

（４）調査期間

昭和56年４月20日～同年８月31日

（５）調　査　依　頼　者

日本道路公団仙台建設局

（６）調 査 受 託 者

青森県教育委員会

（７）調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

（８）調査協力機関

八戸市教育委員会、三八教育事務所

（９）調 査 参 加 者

調査指導員

小井田　幸哉（青森県文化財保護審議会委員）

村越　　潔（弘前大学教育学部教授、青森県文化財保護審議会委員）

調査協力員

吉田　月二郎（前八戸市教育委員会教育長）

岩谷　喜代美（八戸市教育委員会教育長）

調　査　員

松山　　力（青森県立八戸高等学校教諭）

調査補助員　中島　友文、工藤　正宏、佐藤　玲子、田浦　澄子

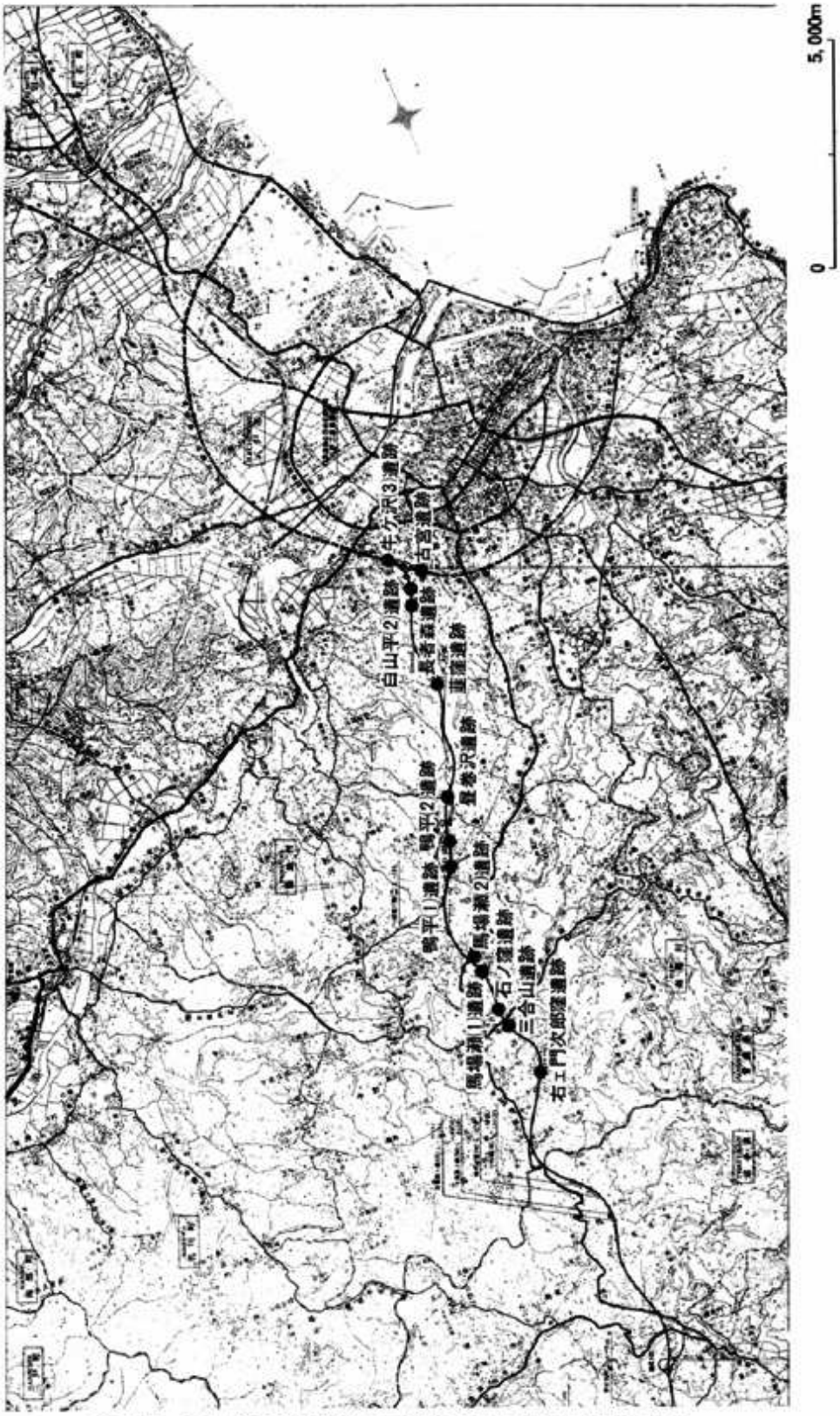
田島　一雄（東北学院大学学生）

西野　　緑（弘前大学学生）

岩見　知子（東海大学学生）

青森県埋蔵文化財調査センター

前　所　長	北山　峰一郎	（昭和57年４月１日青森県立郷土館副館長へ）
所　　長	工藤　泰典	（昭和57年４月１日から）
次　　長	古井　睦夫	
総 務 課 長	森内　四郎	（昭和57年４月１日から）
調査第二課長	山田　洋一	
総務課主任主査	高谷　重彰	（昭和57年４月１日青森県立郷土館総務課主幹係長事務取扱）
総 務 課 主 査	成田　静男	
調査第二課主事	成田　滋彦	
調査第二課主事	岡田　康博	
総 務 課 主 事	藤川　正紀	
臨 時 職 員	岩田　　満	（山田　洋一）



第1図　東北縦貫自動車道八戸線建設予定路線内遺跡位置図

第Ⅱ章　調査の方法と経過

１．調 査 の 方 法

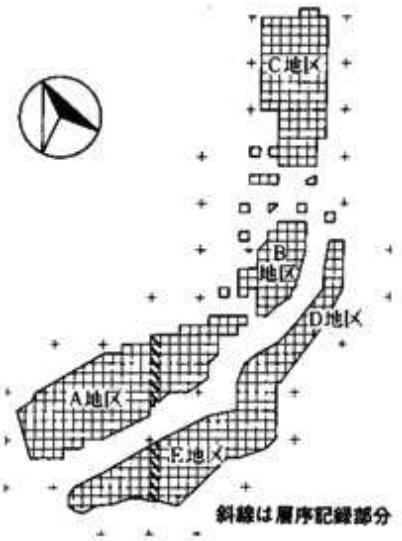
（調査区設定）

日本道路公団設置の路線中心杭№480と、№480＋20を任意に選び、それを結ぶ線を南北方向の基準線とし、№480＋40で直交する線を東西方向の基準線とした。

更に、調査区の南側から北へ１・２・３の順に番号を付し、東西方向にはアルファベットをＡＺ～ＢＡのように付した。

調査区は、4×　4mを１単位として角杭を設置し、20m間隔に計測基準用の丸太杭を打った。グリッドの呼称は、北西隅の杭番号による。

測量原点（ＢＭ）は、任意に８地点を設置し、標高は道路公団設置杭の標高を使用した。また、遺跡は、緩斜面でしかも二筋の沢谷が入りくんだ舌状地形で非常に複雑な地形であるため、この地形を考慮し、西側からＡ～Ｅ地区の５地区に分類し呼称した。



第２図　グリッド配置図

（粗　掘　り）

標準土層の設定は、混入物・粘性・しまり・色調の差異などから区分し、上からⅠ層、Ⅱ層とローマ数字を用いた。粗掘りは、層位ごとに掘り下げることにした。

（遺構調査）

確認面でおさえることを基本とし、４分法及び遺構の小規模なものについては２分法を用いた。また、土層観察用のセクションベルトを設定し、覆土の堆積状況を把握しながら掘り下げた。遺構内の堆積土は、上から１・２・３の順に算用数字で表し、出土遺物は柱状に残し、Ｐ番号を示して堆積土との関連を追求した。

（遺　　物）

グリッド単位で、層位ごとに番号を付け遺物を取りあげた。その際、土器・土製品は白カードでＰ番号、石器・石製品は青カードでＳ番号、文化遺物は赤カードでＣ番号を用いた。

（実測図　写真撮影）

実測図は、すべて遣り方測量を用いて作図した。遺構の縮尺は、焼石遺構を1/10とし、他の遺

構を1/20とした。土器は微細図をつくり、縮尺は土器出土状況から1/5・1/10とした。

写真撮影は、35・50㎜の小型カメラを用い、カラースライドフィルム、モノクロフィルムを使用した。

遺構・遺物の撮影については、まず、出土年月日・遺構名・層位・撮影方向等を記入した小黒板を撮り、その後遺構は、確認面、土層断面、遺物出土状況、完掘の順に撮影を行った。遺物は、出土状況を中心に撮影を行った。そのほかに、遺跡の遠・近景、調査状況等も適宜、撮影した。

2．調　査　経　過

4月21日、八戸市中央公民館において、関係各機関・調査員等により鴨平(1)、鴨平(2)、白山平遺跡(2)との合同調査打ち合わせ会議を行い、調査方法等具体的な事項について検討し、その後、各現場の状況を視察した。

4月22日、プレハブ設置を行った。器材の運搬は、悪路のため直接現場には搬入せず、隣接する白山平遺跡(2)経由で行った。

遺跡の地目は、全域山林であり、木立は、伐採・除去されていたが、木枝等が運び出されておらず、調査区にグリッドを設定するために、まず、これらの枝葉処理・笹刈り等の作業から開始した。

調査区のA地区西側から粗掘りを開始し、A地区とE地区の間にある沢を土捨場とした。山林であったため、木根が多く、また、一部急斜面等もあり粗掘り作業に予想以上の時間がかかった。第Ⅰ層中からは、縄文時代後期の土器片が数片出土した。

5月上旬、AQラインを基本層序とするために、幅2m、長さ40mの深掘りを行い、南部浮石面まで露出した。深掘り作業の結果、第Ⅲ層は中掫浮石層に相当するが、八戸周辺にみられるような明確な堆積を示しておらず、中掫浮石層を一つの目安とし、層位的に発掘を試みた調査は困難をきたした。

6月上旬、B地区の緩斜面第Ⅱ層中から切断蓋付土器が出土し、また、周辺に縄文時代後期の遺物が多く散布している。遺物の捨て場と考えられた。A～C地区にかけては、第Ⅰ・Ⅱ層中から染付の陶磁器片が多く出土した。

7月上旬、A地区では、溝状ピットを3基検出したが、これらは斜面に対して直交し、幅広い開口部を持つなど、従来のタイプとは異質な面がみられた。

A地区の沢寄りから、円形の落ち込みが連続して確認され、住居跡かと思われたが、精査の結果、自然の落ち込みと判明した。D地区からは、焼石遺構が検出された。

7月下旬、E地区の舌状台地の調査に取りかかった。このE地区は、当初、地形等から遺構、

遺物が集中して出土するのではないかと予想したところである。遺構は、焼石・配石・土壙・風倒木痕が密集しており、更に土壙と風倒木痕の切り合いが激しく、遺構の精査にかなり手間どった。落し穴状遺構は、一基のみの検出である。遺物は、縄文時代早期から晩期の各時期にわたり出土した。

8月中旬、B地区から長径15mの大土壙を検出した。深さは、確認面から2.5mまで達したが、湧水が激しく、壁の崩落に注意しながら精査を行った。遺構の覆土には、基本層序で明瞭でなかった中掫浮石が層をなして堆積していた。

8月下旬、この時期には珍しく長雨にたたられたが、調査員一同、雨中で作業を敢行し、調査を終了した。

（成田　滋彦）

第Ⅲ章　遺　跡　の　概　観

１．遺跡の位置と地形（第１・２・３図）

東北縦貫自動車道八戸線の終点である八戸市は、太平洋に面した県南地方の中心都市である。長者森遺跡は、八戸市の郊外、南方約４kmの地点に位置し、八戸市田面木字長者森68- 10ほかに所在する。周辺には白山浄水場、八戸畜協厩舎、根城小学校笹子分校などの施設がある。

長者森遺跡は、隣接する白山平遺跡（２）（昭和56年度、57年度当センターで発掘調査）から南西に緩く下る斜面の一部と、西に続く二筋の沢谷の浸食によって形成された舌状地形によって構成される（調査の結果、遺跡の範囲は更に東側斜面へ伸びると思われる）。舌状地形は、西に向って突出し、その先端から遠く、歴史的に由来のある同市八幡（やわた）・鵜対（うづい）の家並を眺望できる。沢はいずれ小河川となり、八幡を通り馬淵川に注ぐ。遺跡近辺は同様に沢の浸食が発達し、本遺跡と似たような地形を示すが、舌状地形であるのはここだけである。標高は、最大75m、最小61mで、その比高差は14mである。

遺跡は、山林に囲まれていることもあり、自然環境に恵まれ、調査中にも対岸で水鳥、カモシカを確認している。舌状地形の北側対岸の斜面の先端には、豊富な湧き水があり、飲料にも適し、付近に小魚が生息している。

調査前の遺跡の現状は、大部分雑木林で、沢の部分にはススキ、カヤが繁茂していた。（沢の一部分は、明治から昭和初期にかけて、水田として利用されたということを調査中に聞いた。）

（岡田　康博）

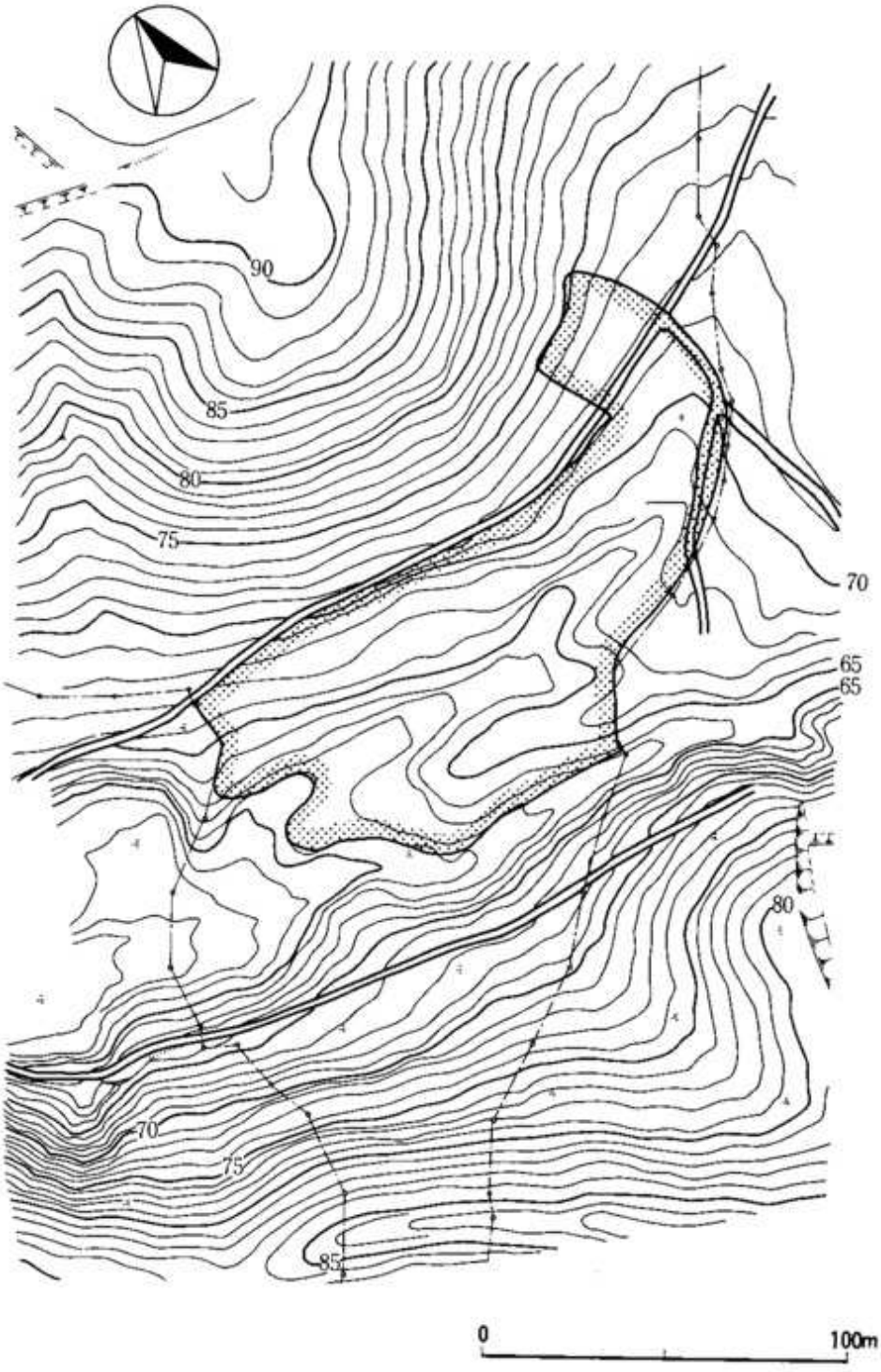
２．遺跡周辺の地形と地質について

（１）遺跡周辺地域の地形（第４・５図）

東北自動車道八戸線の予定路線及び関連開発予定地のうち、八戸市域内には、ほぼ南北方向およそ7.5km区間に、南から鴨平（１）鴨平（２）、昼巻沢、韮窪（にらくぼ）、長者森、白山平（２）牛ケ沢（３）鵜窪（うずらくぼ）などの各遺跡が連なっている。

青森県南東部のうち、馬淵川～名久井岳東麓～岩手県境～階上岳西麓から北麓～太平洋岸に囲まれた、東西約25km、南北約20kmの地域は、川沿いや海岸沿いの平坦面がよく残された中・低位の段丘、それより高くゆるやかに起伏する丘陵地（高位段丘）、河川の谷壁などの急斜面や急崖、および海岸や河谷底の低平な沖積地で構成されている。

この地域は、岩手県軽米町を通りぬけ、北々東方の八戸湾に流れ下る新井田川によって２分されている。名久井岳東麓線～馬淵川と新井田川にはさまれた地域は、岩手県北の折爪岳山塊北部東側山麓から、北々東の八戸湾に向かって、紡錘状にはりだす丘陵・段丘群となっている。その主体は、高さ140～300mの蒼前平段丘高位面が開析された丘陵地で、おもにその北側か



第３図　調査区及び、周辺の地形

ら北西側に、順次により高度の低い丘陵・段丘群が続いている。

この地域の北半部の南東側には、地域南半部の南郷村鳩田付近に源を発し北東方へ下り八戸市是川の差波で新井田川に合流する頃巻川があって、丘陵地を削りこみ、特に下流部では高さ（丘陵面と谷底部の標高差）最大100m余りの急斜面（谷壁）をつくっている。頃巻川中流域にあたる南郷村泥障作（あおづくり）の北西方、南郷村・福地村・八戸市相互の行政区界の交差する付近からは、地域北半部を縦断するように土橋川が流れ、八戸市の売市地区西縁に達している。

土橋川は、八戸市ニツ家付近までは、頃巻川とそれに続く新井田川の西を、ほぼ2㎞の距離で平行するように北々東へ流れ、一端北々西方へ向きをかえたあと再びゆるく湾曲して北々東へ向かっている。両側の丘陵・段丘面の縁辺部と谷底の沖積面との間は、高さ（標高差）最大60m余りの急斜面（谷壁）となっている。

土橋川最上流谷頭付近（鴨平（１）・（２）遺跡付近）は、標高200m前後のゆるやかに起伏する丘陵面となっており、ここからやや東よりに北方へ、次第に高度を低くしながら細長くのびる丘陵・段丘面の背部（稜線に沿う面）は、土橋川と西方を流れる馬淵川の水系の分水嶺に相当している。この背部の中心線（分水界）と土橋川の間は１㎞以内の幅である。一方、土橋川最上流の谷頭のすぐ西に谷頭をもち、北々西へ下って、通清水の西で馬淵川に注ぐ谷と馬淵川を西縁とし、背部中心線を東縁とする地域は、北西方へ向かって低くなり、その間をいくつもの小河川が刻んでいる。これらの小河川は、いずれもおしなべてみれば北西へ下り、馬淵川に合するもので、土橋川と馬淵川の間に北々東方へ突きだす丘陵・段丘群の幅は、鴨平と通清水の間で４㎞以上であるが、北方に狭くなり、八戸市根城・売市地区で1.5㎞から１㎞となる。

この地域の丘陵・段丘群は、上位から蒼前平段丘・天狗岱段丘・高館段丘・根城段丘・田面木段丘に区分でき、そのうち蒼前平段丘・天狗岱段丘は、さらにそれぞれ上位・下位の２段に区分できる。第４図は鴨平付近以北の地形区分図である。

蒼前平段丘は、新井田川より東方の八戸平原地域では広い平坦面が残されているが、この地域では平坦面に乏しく、ほとんどが開析されて、起伏に富んだ丘陵地となっている。第４図では、急斜面部を開析地とし、相対的に傾斜のゆるい起伏地から平坦地までを段丘面（丘陵面）としてある。蒼前平段丘は、丘陵地背面（緩傾斜の丘陵面）の高さが140～300mの高位面と、高さ100～120m以上の低位面に区別される。

天狗岱段丘は、八戸市域北部の天狗岱付近に広い平坦面をもつ段丘であるが、この地域では蒼前平段丘同様、かなり開析がすすんでおり平坦面に乏しいが、ニツ家付近と根城地区の南方の地域（笹子付近まで）及び通清水・法領屋敷とその北東の地域にやや広い平坦面がある。このうち、ニツ家付近と根城の南方の地域及び法領屋敷の北東の地域では平坦面高度が85～110m余りで天狗岱段丘高位面に相当し、それより低い60m以上の部分が低位面に相当する。第４

図では、天狗岱段丘相当のうち、比較的急斜面になっているところは開析地としてある。

高館段丘は、この地域では標高30m以上で、比較的平坦面がよく残されているところが多い。第４図では、段丘崖や開析された斜面も含めて分布を示してある。

根城段丘は標高15m以上（一部15m未満）の、平坦面のよく残された段丘である。田面木段丘は、洪積段丘中最下位の段丘で、平坦面の傾斜がやや大きい。

土橋川谷頭部付近の鴨平（１）・（２）遺跡を除けば、各遺跡はいずれも、土橋川の西に沿う丘陵背面（尾根に相当する稜線に沿う面）上や、それを西～北方から削りこむ谷の谷頭部にある。

長者森遺跡は、この地域の北端部近く、平坦面の広い天狗岱段丘高位面を、西から削りこむ谷の谷頭部斜面の下半に位置している。この谷は、遺跡の西北西1.5㎞の高館段丘上に建つ八戸工業高等専門学校の南を西に向かい、南東から北西方向に向かう谷と合し、馬淵川を北西方に押しやるように突きだす、扇状地性の沖積地を形成している。八戸工業高等専門学校をのせる高館段丘の平坦面は、北東一南西方向に切られて南東方に円弧状に高位面を削りこんだような、半径約１㎞の半円状のひろがりを示している。その縁と、東から南方をとりまく天狗岱段丘面との間は、比高50m程度の開析された急斜面となり、前述の２つの谷は、この部分を浸食して、天狗岱段丘にくいこんでいる。遺跡と直近の高館丘面の縁（西方）との間の距離は500～600mである。

一方、遺跡のある谷頭斜面部を抱きかかえるように、北方から東を通り南方まで広がる天狗岱段丘高位面は、平坦面がよく残され、その標高は90～115m程度である。遺跡の東方１㎞付近には、土橋川が流れ、遺跡と土橋川にはさまれる天狗岱段丘上位面と土橋川谷底沖積面との標高差は50mあって、その間はかなり急な斜面となっている。遺跡の北方およそ１㎞付近から北は、開析斜面となって、北端部にはりだす低位の根城段丘面に下っている。また南方では、1.5㎞付近より先で蒼前平段丘面に遷移し、次第に高さを増す丘陵背面が続いている。

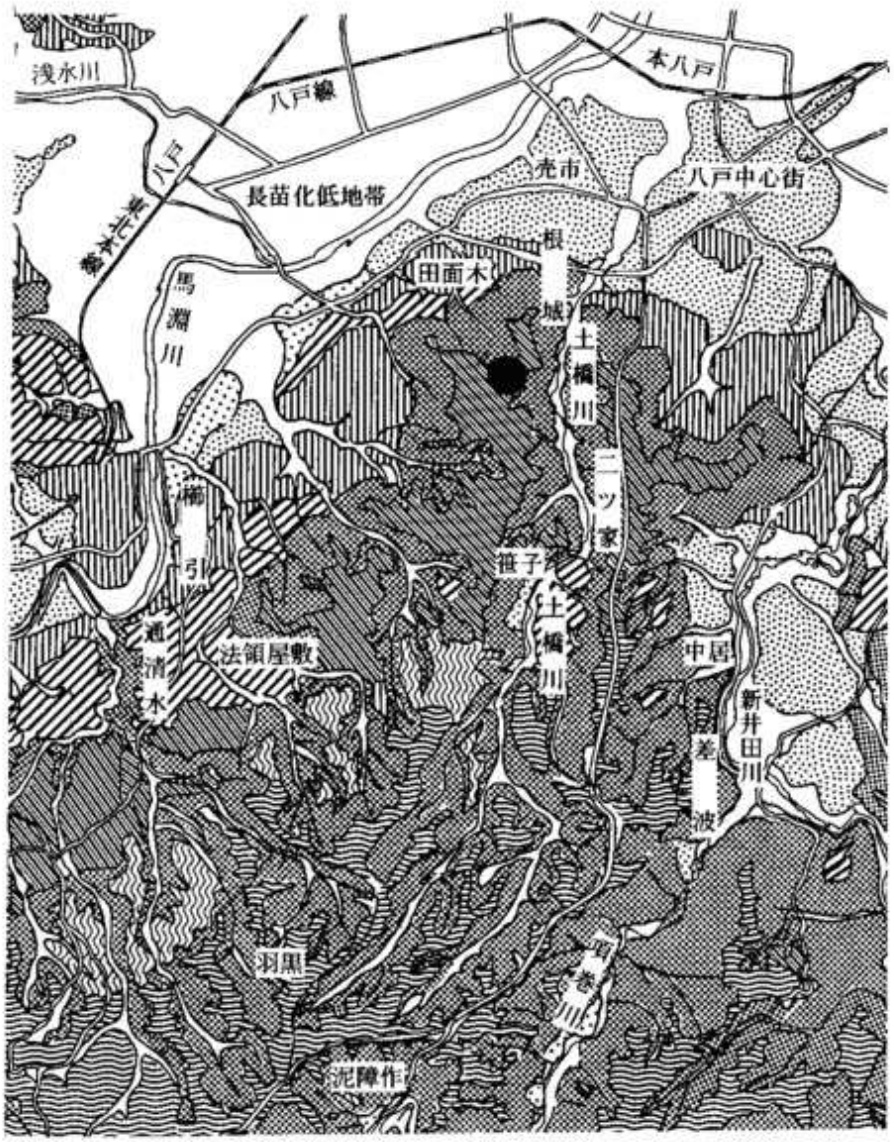
（２）地 質 の 概 略

新井田川と、馬淵川下流とにはさまれた地域の地質層序は第１表のとおりである。そのうち長者森遺跡を中心とした地域の地質分布を第５図に示した。

遺跡周辺の基盤は、おもに第三紀中新世の安山岩や火山砕屑物で、ところによってその上に鮮新世の地層とみられる礫岩・砂岩・泥岩を主とする地層がのっている。

これらの基盤岩類を覆って、洪積世の段丘堆積物や褐色火山灰（ローム）層と、黒色土層にはさまれて沖積世の火山砕屑物が分布するほか、河谷底には軟弱な沖積層が存在する。洪積世の段丘堆積物は、ふつう数m程度の厚さの砂礫層で、チャートや安山岩礫を多く含んでいる。

褐色火山灰層は、下から天狗岱・高館・八戸火山灰層の３層に分けられる。天狗岱火山灰層は、厚さ数m以内の、しまって固い暗褐色の粘土質火山灰を主としている。高館火山灰層は、



第4図　遺跡周辺の地形分類図

明るい色調の粘土質褐色火山灰を主とし、数枚以上のそれぞれに特徴のある厚さ数10cmの粘土質浮石層をはさみ、全体層厚は５～８mである。

八戸火山灰層は、灰白色～明黄褐色の砂質火山灰層と浮石層の互層、及びその上の明褐色火山灰層で構成される。互層部は下からⅠ～Ⅵの６層に区分されるが、それぞれの特徴と層厚は

地質年代		層	序
第四紀	沖積世	―苫小牧火山灰層― ―十和田a降下火山灰層― ―十和田b降下火山灰層― ―中掫浮石層― ―南部浮石層― ―二ノ倉火山灰層―	沖積低地―泥・砂・礫など 台地部―黒色土層 火山灰層（浮石層）
	洪積世	八戸火山灰層 （田面木段丘）	火山灰層・浮石層
		高舘火山灰層	粘土質褐色火山灰層（ローム）・浮石層
		根城段丘堆積物	河成礫
		高舘段丘堆積物	シルト・砂・砂礫
		天狗岱火山灰層	粘土質褐色火山灰層（ローム）・浮石層
		天狗岱段丘堆積物	砂鉄質砂・砂礫
第三紀	鮮新世	斗川層相当層	泥岩・砂岩・凝灰岩、(軟体動物化石)
	中新世	名久井岳安山岩類相当層	火山砕屑岩（含溶結凝灰岩）・頁岩

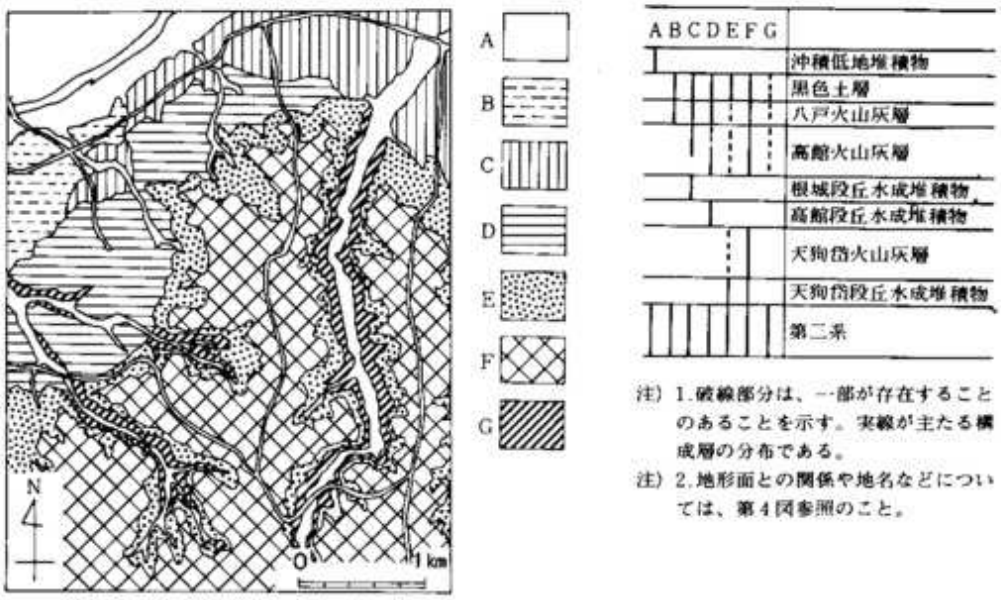
第１表　地質層序表

第２表に示した通りである。上部の明褐色火山灰層までを含めた厚さは、遺跡周辺で1.5m前後である。上限はふつう黒色土層に漸移するが、ごく一部の地域で、明褐色火山灰層の上に橙褐色火山灰層が数10cm以内の厚さでのるところがあり、本遺跡でも谷底部に近い部分で観察された。二ノ倉火山灰層に相当するものと思われる。

地表直下の黒色土類中には、下から南部浮石層・中掫浮石層・十和田b降下火山灰層・十和田a降下火山灰層・苫小牧火山灰層など、少なくても５枚の火山砕屑物層がはさまれる。

南部浮石層は、粒径0.3～２cm程度の黄橙色～明褐色～赤褐色の浮石が密集した、未膠結でくずれやすい。粗粒砂大の火山岩片のまじる浮石層であるが、昼巻沢遺跡よりも北方の地域では分布しない。中掫浮石層は、おもに砂粒大の黄色浮石が未膠結状態で密集した浮石層であるが、本地域では、ところどころで厚さ10～30cmの連続した地層となっているほかは、厚さ５～20cmの浮石密集塊として断続するところもあるが、多くの場所では黒色土と混合した土層となり年代の大まかな指標とはなっても、厳密な年代指標層とはなり得ない。

十和田b降下火山灰層は、噴出源の十和田湖の東側20km以内では、下半が白色浮石、上半が



第5図　地質分布図

青灰色砂質火山灰の2層で構成されるが、その外側の地域では白色浮石部のみが分布する。本地域では、粒径0.2～0.6（最大2）cmの固い白色浮石の集まる1～5cmの厚さの浮石層が局部的にみられるにすぎず、一般にはその浮石が黒色土中に散在する状態のところが多い。

十和田a降下火山灰層は、灰白色～淡灰黄色のシルト状細粒火山灰層であるが、本地域では歴史時代奈良・平安期の遺構や小谷跡あとのような当時の凹地の覆土中に、レンズ状の形態で垂れさがる最大層厚数cmの薄層として、ところどころにみられるにすぎないが、鶏窪遺跡ではその上位の苫小牧火山灰層とともに最大層厚が20cm程度の例がみられた。

	層相	層厚(cm)	備考
Ⅶ	褐色火山灰	20～50	上部黒色土へ漸移
Ⅵ	浮石	10～30	粒径0.5～2cm程度の浮石
Ⅴ	粘土質砂質火山灰	20～40	よくしまる
Ⅳ	浮石	20～40	粒径0.5～5cm程度の固い浮石
Ⅲ	砂質火山灰	4～8	よくしまる
Ⅱ	浮石	3～6	粒0.5～5cm程度の固い浮石
Ⅰ	粘土質砂質火山灰	30～60	中位に浮石層、その他数列の浮石列

第2表　八戸火山灰層序表

年代		記号	土層	火山堆出物	備考
歴史時代		Ⅰ	暗褐色土層		耕作土・その他の表土
				苫小牧火山灰層	
		Ⅱ	灰黒色土層	十和田a火山灰層	
続縄文時代					
縄文時代	晩期	Ⅲ	暗褐色土層	十和田b火山灰層	黒色土層の下半は中撤浮石への漸移部で暗黄褐色。
	後期				
	中期	Ⅳ	粘土質黒褐色土層 粘土質暗褐色土層 粘土質浮石質暗褐色土層	中撤浮石層	上部から下部への土層の特徴変化は特定の年代ごとの変化を意味しない。 南部浮石の直上に浮石がちらばる。
	前期				
	早期			南部浮石層	
			粘土質黒褐色～暗褐色土層	二ノ倉火山灰層	
中・旧石器時代		Ⅴ	褐色火山灰層 泥・砂・礫層 基盤岩の風化土層	八戸火山灰層 高館火山灰層 天狗岱火山灰層	

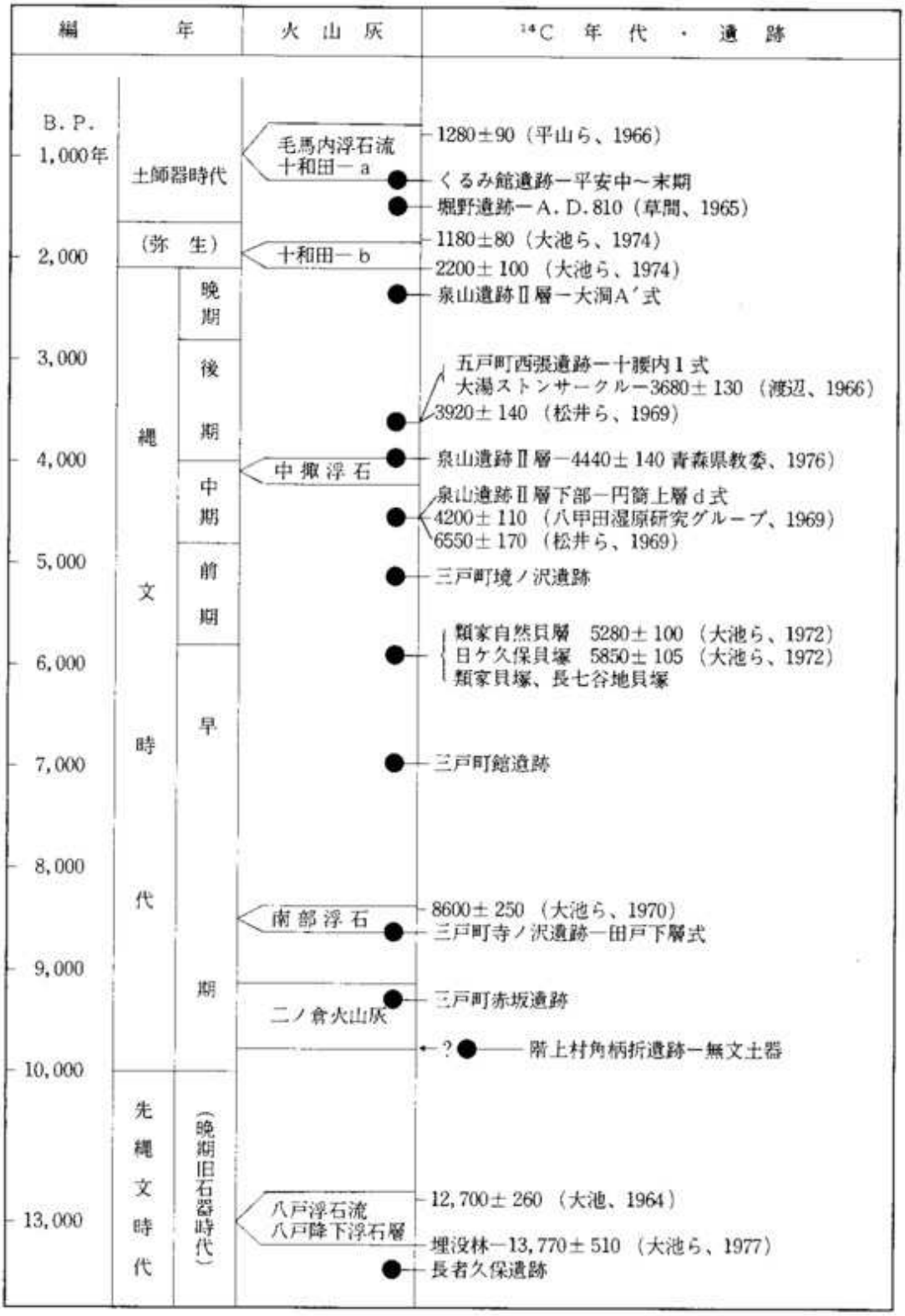
第3表　黒色土層層序表

以上の、黒色土層中に含まれる沖積世火山砕屑物層及び八戸火山灰層の降下年代については、第3表を参照されたい。そのうち、中撤浮石層の降下年代については、最近岩手県北及び十和田市の遺跡で、遺構の時代との関係から、絶対年代はともかく相対年代の上で縄文時代前期後半にさかのぼる可能性が強まっている。十和田a降下火山灰については10世紀頃、またニノ倉火山灰については9000～1万年前の降下と考えられる。

近年になって、十和田a降下火山灰層より数10～200年後の間の降下と考えられる苫小牧火山灰層ともう一つの降下火山灰層の存在が、町田洋氏らの研究と三辻利一氏の蛍光X線分析の資料から明らかにされ、本地域でも、鶏窪遺跡や根城跡をはじめ、いくつかの遺跡でその存在が確認されている。　　（松山　力）

3．遺跡の層序（第6・7図）

本遺跡は、北東に位置する白山平遺跡（2）から、南西に下る緩斜面と、二筋の沢にはさまれた西に伸びる舌状地形によって構成されており、その比高差は10m以上である。旧地形が予想以上に風化、浸食を受けているため、比較的良好な堆積状態を示すAQライン東壁を基本層序として記録した。しかし、沢谷の箇所は、湧水のために一部記録が不可能なところもある。以下、基本層序についてその観察結果を述べる。

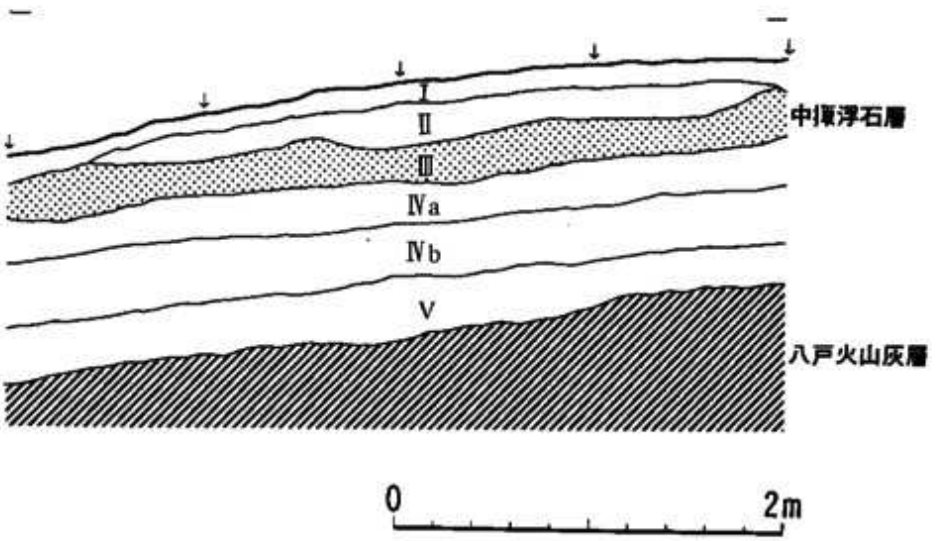


第4表　十和田火山完新世火山灰編年表

基 本 層 序

第Ⅰ層（表土）黒褐色シルト層

山林であったために草木根が多く、湿性・粘性とも弱く、しまりがない。この層全体に白色・淡黄色・褐色の３種の微細な浮石（降下火山灰？）が少量含まれ、また、一部下位に直径２～４㎜の褐色浮石が密集して含まれている。この層から、陶磁器・鉄製品・泥面子など、主として中・近世～現代の遺物が出土した。



第６図　長者森遺跡基本層序

第Ⅱ層　黒色シルト層

この層全体に直径１～５㎜の十和田ｂ降下火山灰白色浮石粒が含まれ、Ⅰ層より湿性・粘性とも強く、しまりがある。黒色シルトに混じって、Ⅲ層からの漸移で中掫浮石を全体的に少量含む。この層から、縄文時代後・晩期・弥生時代の遺物が出土した。

第Ⅲ層　帯黄黒色シルト層

中掫浮石（相当）層。元来、この浮石層は明黄色褐色土であるが、本遺跡では、中掫浮石の降下範囲の東限のためか、明瞭な堆積状態を示す地点は少なく、更に、上位、下位層との混合のため汚れているのが一般的でわずかに、調査区東側及び遺構内に純粋な浮石層がみられた。

第Ⅳａ層　黒色粘土混じりシルト層

上部は、下部に比べて黒色が強く直径２～15㎜程度の褐色浮石（南部浮石の吹き上がりとみ

られる）を少量含む。

第Ⅳｂ層　鈍い黒褐色粘土混じりシルト層

全体に黒褐色を基調とするが、下位は褐色が強くなり、直径２～15㎜程度の褐色浮石（南部浮石）を多量に含む。

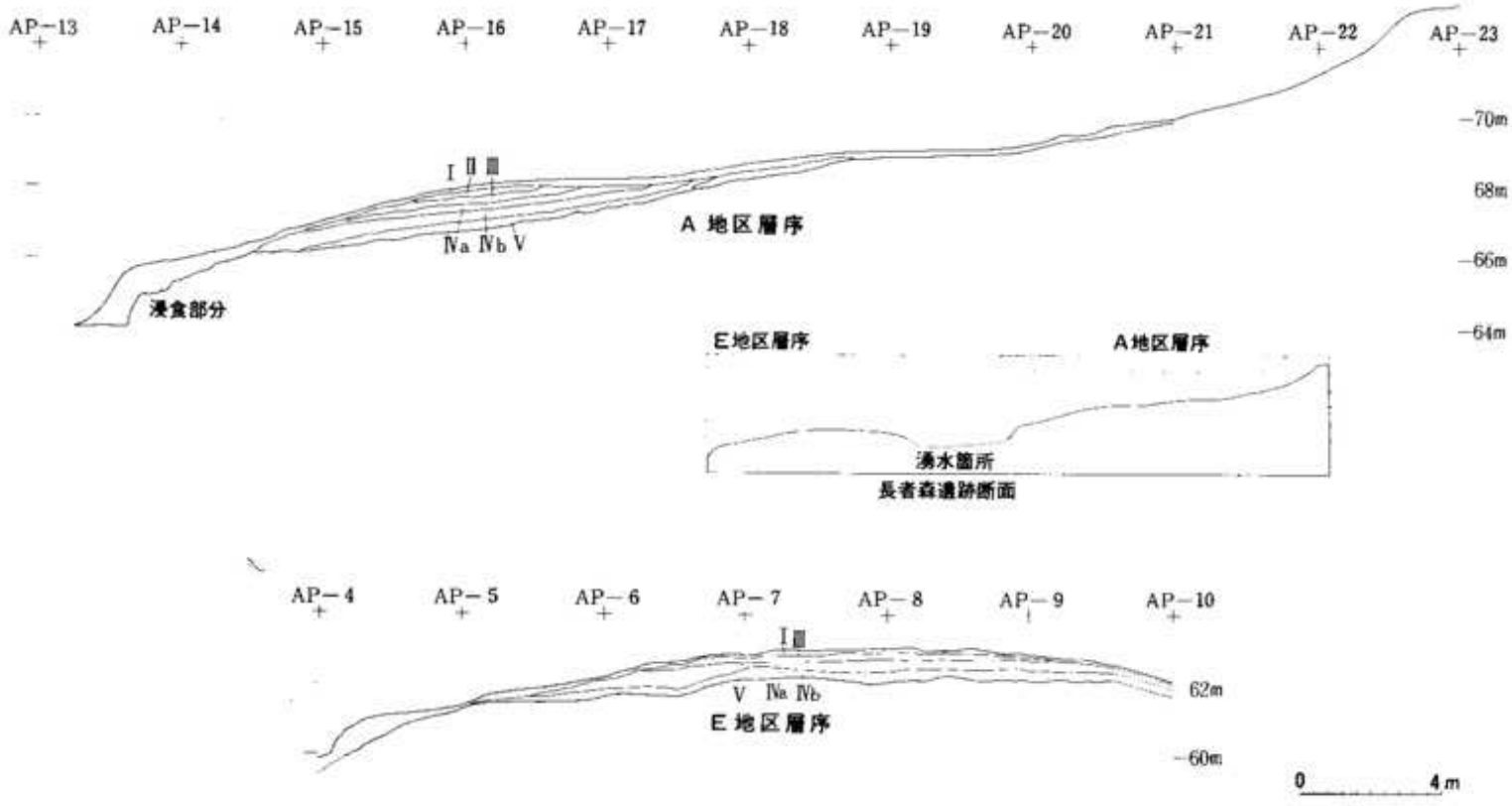
本来、堆積状態、遺物の出土状態からみて同一の層としてとらえるべきものであるが、この層自体が比較的厚層であるため南部浮石の含まれる密度の濃淡によって便宜的にａ・ｂに区別した。第Ⅳａ層・第Ⅳｂ層ともに、下部になるにつれて粘性・湿性が増し、局部的に湧水箇所がみられる。

第Ⅴ層　　鈍い褐色シルト混じり粘土層

腐食ローム層。粘土に近い褐色シルトで、粘性・湿性・しまりとも強く、囲い。直径２～15㎜程度の褐色浮石を少量含み、下部は若干黒色味を帯びる。この層は、標高の低いところでは比較的厚く、高いところでは一般的に薄く、ところによっては確認できないところもある。遺物は出土しなかった。

八戸市南西部や南郷村などでは、第Ⅳｂ層と第Ⅴ層の問に南部浮石層が見られるが、本遺跡は南部浮石の降下範囲の東限に位置しているため、単純堆積層としては確認できなかった。第Ⅴ層より下は八戸火山灰層となる。八戸火山灰層は、その中で６層に細分されているが、本遺跡では層が厚いこともあり、また、無遺物層とのことであるので、第Ⅴ層より下を一括した。

（岡田　康博）



第7図　長者森遺跡の層序

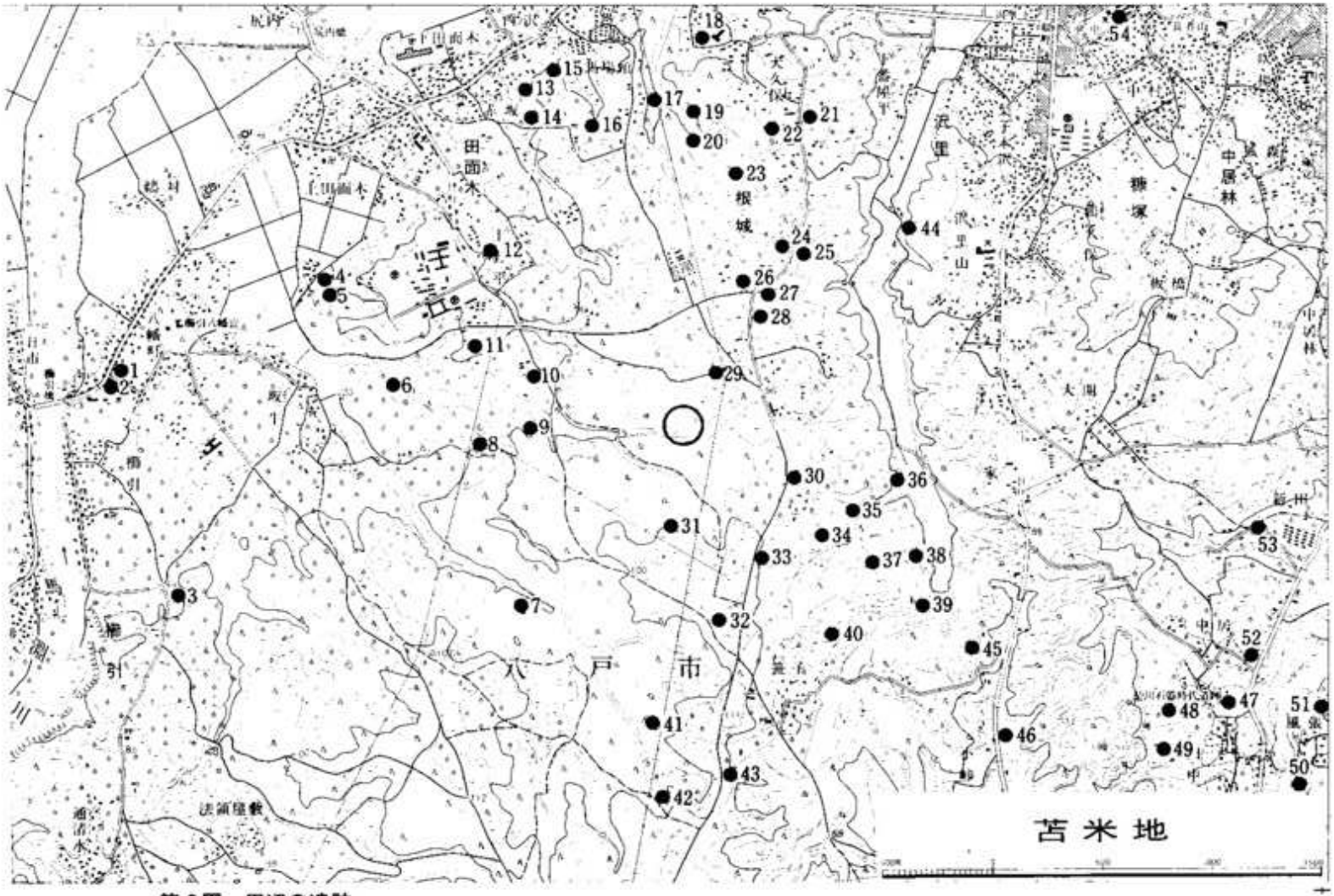
4．周辺の遺跡（第8図）

八戸市には、縄文時代早・前期の長七谷地貝塚をはじめ、同晩期の是川遺跡、古墳－奈良時代の鹿島沢古墳群、中世の根城跡など著名な遺跡が多く、特に、先史時代の遺跡は、戦後の発掘調査による古代文化の究明に大きく貢献している。

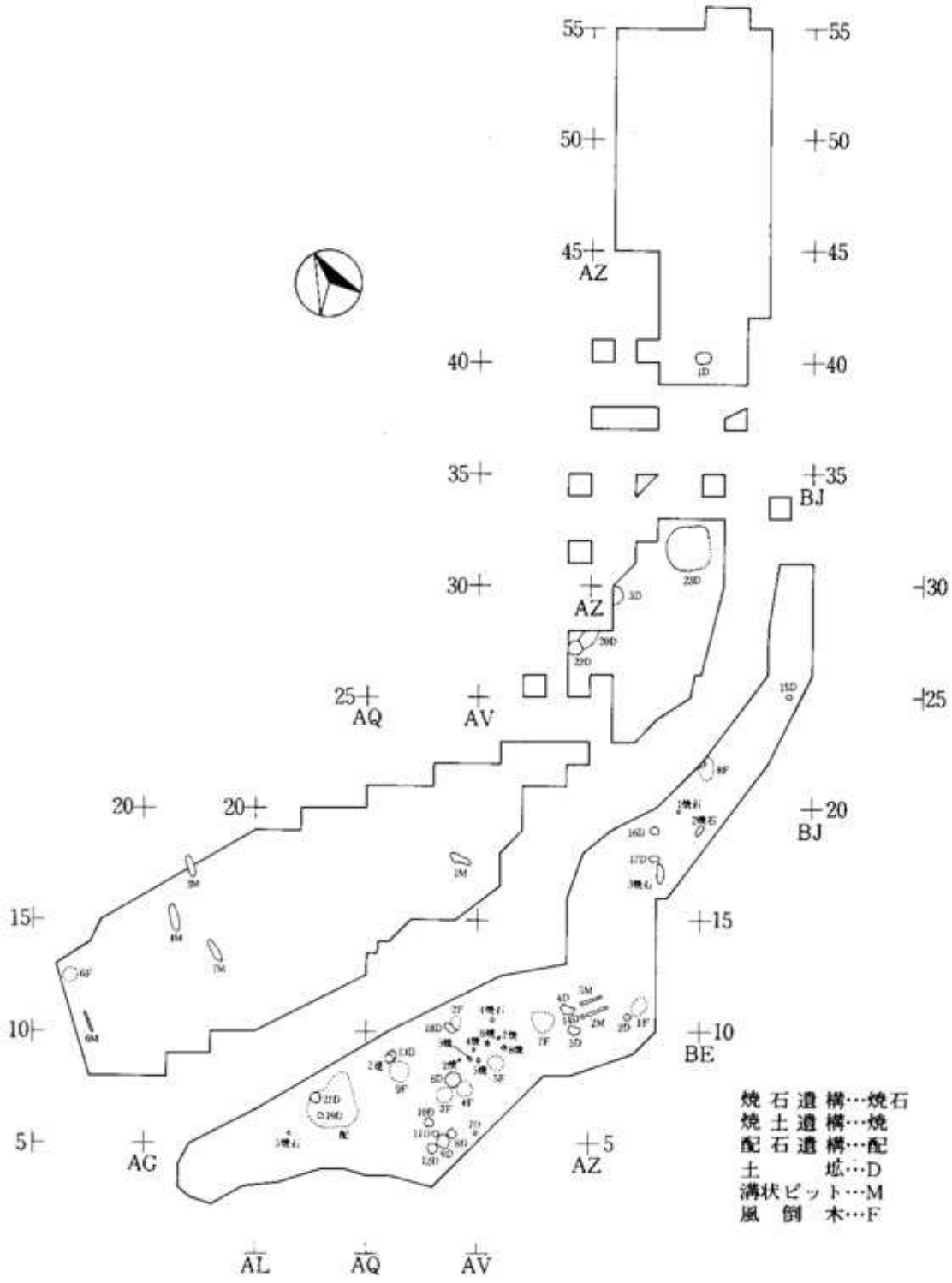
また、ほかにも多くの遺跡が分布する。以下、周辺の遺跡を列記した。（昭和53年3月地域振興整備公団刊行の八戸新都市開発整備事業に係る環境調査報告書、同年10月県教育委員会刊行の遺跡地図及び遺跡地名表を参照したものである。）　（岡田　康博）

第5表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	時代	No.	遺跡名	所在地	時代
1	千石屋敷遺跡	八戸市八幡字千石屋敷	晩	28	湯浅屋新田遺跡(2)	八戸市沢里字湯浅屋新田	歴前史
2	八幡貝塚	〃 八幡字館ノ下	晩	29	白山平遺跡(2)	〃 根城字白山平	後
3	櫛引遺跡	〃 櫛引字岡前	城跡	30	丹後平遺跡(1)	〃 根城字丹後平	後
4	上野平遺跡(1)	〃 田面木字上野平	後・晩	31	田面木平遺跡(1)	〃 田面木字田面木平	歴後史
5	上野平遺跡(2)	〃 〃	歴史	32	田面木平遺跡(2)	〃 〃	歴史
6	盲提沢遺跡(1)	〃 田面木字盲提沢	後歴・晩史	33	丹後平遺跡(3)	〃 根城字丹後平	歴後史
7	笹の沢頭遺跡	〃 坂牛字笹の沢頭	後	34	丹後平遺跡(2)	〃 〃	歴後史
8	盲提沢遺跡(2)	〃 田面木字盲提沢	後	35	丹後谷地遺跡(2)	〃 根城字丹後谷地	歴後史
9	盲提沢遺跡(3)	〃 〃	後	36	丹後谷地遺跡(1)	〃 〃	前後歴中・史
10	盲提沢遺跡(4)	〃 〃	中歴・後史	37	丹後谷地遺跡(4)	〃 〃	歴後史
11	酒美平遺跡	〃 田面木字酒美平	中歴・後史	38	丹後谷地遺跡(3)	〃 〃	歴後史
12	田面木遺跡	〃 田面木字外久保15	歴中史	39	丹後谷地遺跡(5)	〃 〃	歴後史
13	田面木赤坂遺跡(1)	〃 田面木字赤坂	歴後史	40	笹子遺跡(1)	〃 根城字笹子	歴後史
14	田面木赤坂遺跡(2)	〃 〃	歴後史	41	鳥ノ木沢遺跡	〃 田面木字鳥ノ木沢	後
15	田面木赤坂遺跡(3)	〃 〃	歴後史	42	菰窪遺跡	〃 田面木字菰窪	後
16	鵜窪遺跡	〃 田面木字鵜窪	早・後・弥歴史	43	笹子遺跡(2)	〃 根城字笹子	歴後史
17	内沢遺跡	〃 根城字内沢	後	44	鍋久保遺跡	〃 沢里字鍋久保	後
18	大久保遺跡(1)	〃 根城7－14	後歴・晩史	45	小峠遺跡	〃 是川字小峠	後・晩
19	牛ケ沢遺跡(1)	〃 根城字牛ケ沢	中・後・晩歴史	46	小峠一里塚	〃 〃	一里塚
20	牛ケ沢遺跡(2)	〃 〃	後	47	中居遺跡	〃 是川字中居	早・晩
21	大久保遺跡(2)	〃 根城字大久保	歴後史	48	一王寺遺跡(1)	〃 是川字一王寺	前・中
22	鹿島沢古墳	〃 根城字鹿島沢34－35	歴史	49	一王寺遺跡(2)	〃 〃	前・中
23	牛ケ窪遺跡(1)	〃 根城字牛ケ窪	歴後史	50	風張遺跡	〃 是川字館ノ内	後歴・晩史
24	牛ケ沢遺跡(2)	〃 〃	中	51	風張遺跡(1)	〃 是川字稲荷上	後歴・晩史
25	古宮遺跡	〃 沢里字古宮	歴史	52	堀田遺跡	〃 是川字堀田	中・後・晩
26	白山平遺跡(1)	〃 根城字白山平	歴史	53	新田遺跡	〃 是川字新田	中
27	湯浅屋新田遺跡(1)	〃 沢里字湯浅屋新田	歴前史	54	糠塚遺跡	〃 糠塚字南糠塚33	後



第8図　周辺の遺跡

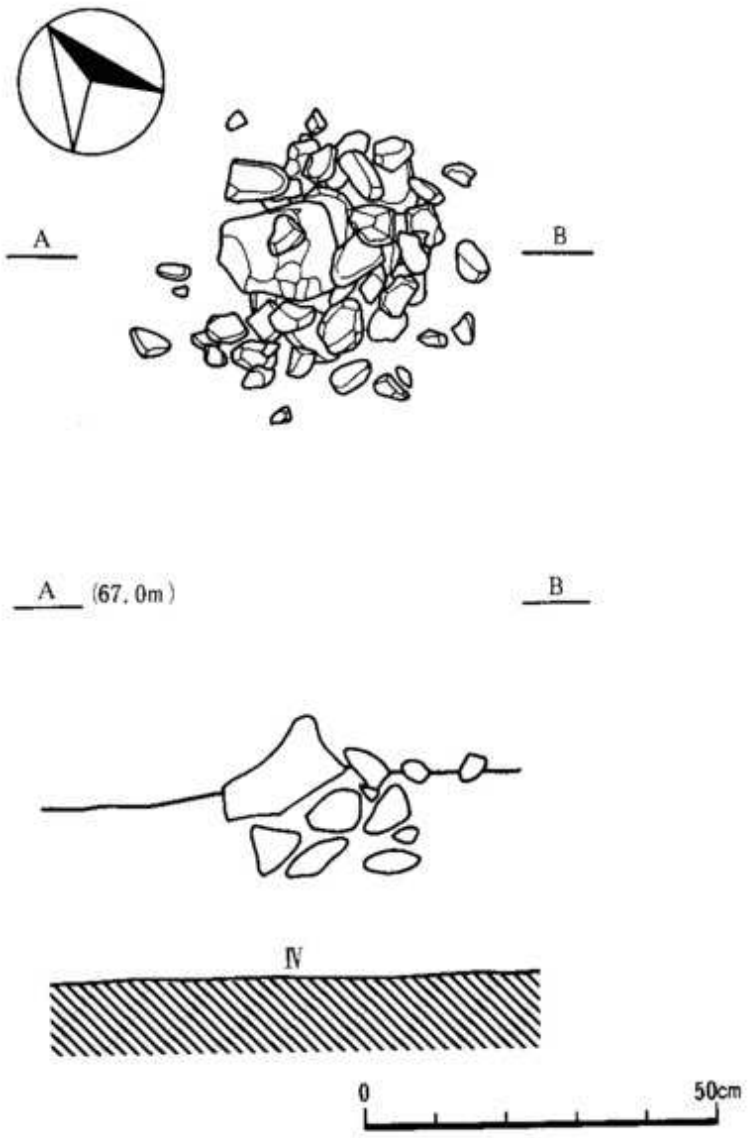

55
50
45
AZ
40
35
BJ
30
AZ
25
AQ
AV
20
20
BJ
15
10
BE
5
AG
AZ
AL
AQ
AV
焼石遺構…焼石
焼土遺構…焼
配石遺構…配
土　　坑…D
溝状ピット…M
風　倒　木…F

第9図　遺構配置図

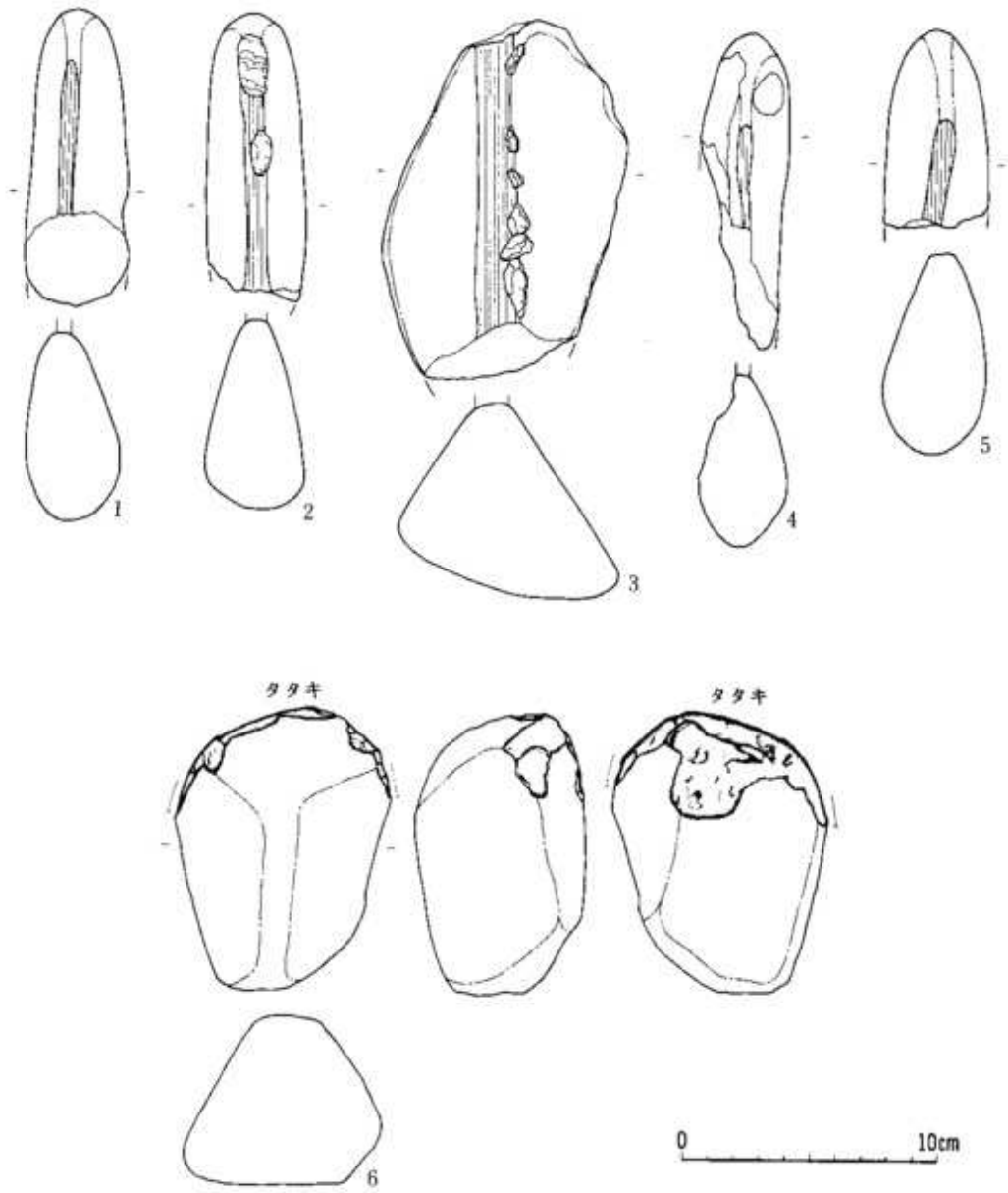
（検　出　遺　構）

1．焼石遺構

調査区Ｄ・Ｅ地区の沢沿いより５基検出された。以下、各遺構について述べる。



第10図　第１号焼石遺構



第11図　第１号焼石遺構出土遺物

No.	器種	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
1	磨石	BC−20 Ⅳ	(116)	40	74	(402)	砂岩	扁 1面すり、敲打痕 半欠
2	〃	〃 〃	(112)	39	73	(433)	〃	〃 1面すり 〃
3	〃	〃 〃	(141)	95	77	(1,008)	〃	三 1面すり、敲打痕 1部欠損
4	〃	〃 〃	(123)	35	67	(331)	輝緑岩	扁 1面すり 半欠
5	〃	〃 〃	(78)	41	78	(355)		〃 1面すり 〃
6	敲石	〃 〃	110	84	66	742		頭上部、敲打痕 完形

第６表　第１号焼石遺構出土遺物計測表

第１号焼石遺構（第10・11図）

（位置と確認）

Ｄ地区沢沿いのＢＣ－20グリッドの北東側、ＢＤ－20グリッド寄りに位置し、第Ⅳ層上面で最上部の礫を確認した。

（形状と規模）

平面形は、長径約50cmのほぼ円形を示し、断面は、高さ約30cmのケルン状である。大きさ10cm前後の礫を２～４段に積み重ね、傾斜する側には比較的大型のものを配している。礫は、すべて著しく火熱を受けているため赤褐色に変色し完形のものは少なく、ひび割れが入ったり破損しているものが多い。

構築された当時の生活面は第Ⅳ層下部と思われるが、確認することはできなかった。

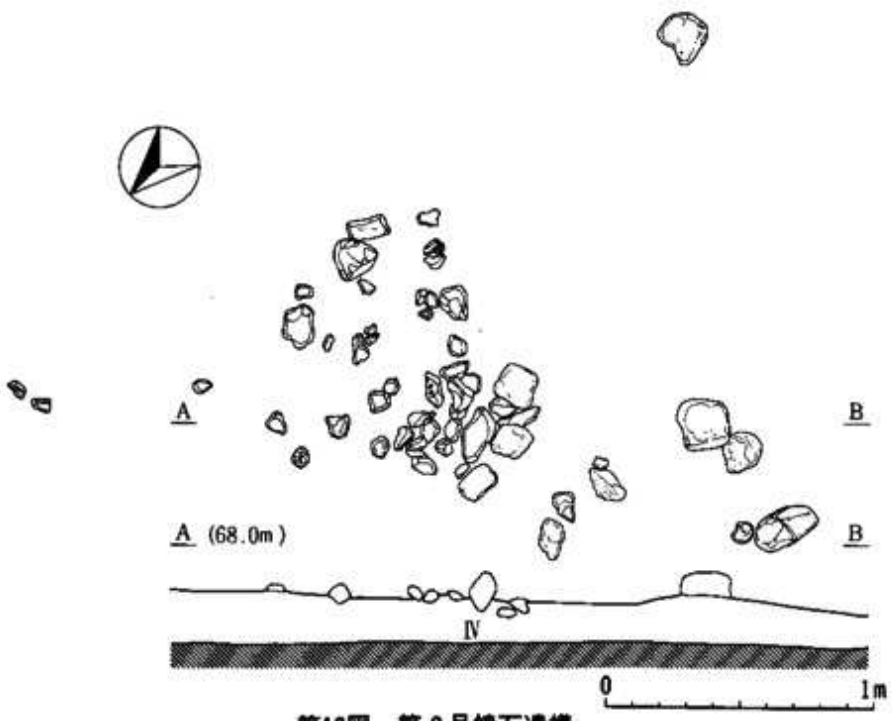
（遺物と遺構）

遺構は掘り方を持たず、遺構自体、または周囲からも炭化物や焼土、灰等検出されなかった。焼石の中より、磨石５点、敲石１点が出土している。

第２号焼石遺構（第12図）

（位置と確認）

Ｄ地区のＢＥ－19グリッドを中心に、長径約220cm、短径120cmの不整楕円形を示す範囲に



第12図　第２号焼石遺構

散在し、第Ⅳ層上面で最上部の礫を確認した。

（形状と規模）

平面形は、不整楕円形の広がりを示し、礫の重なりも２段程度である。礫はすべて、著しく火熱を受けているため赤褐色に変色し、もろくなっていて、ひび割れが入ったり破損しているものがある。本遺構は、他の焼石遺構より大きい礫で構築されている。構築された当時の生活面は、確認することができなかった。

（遺物と遺構）

遺構は掘り方をもたず、遺構自体または周囲からも炭化物や焼土、灰等検出されなかった。遺物は出土していない。

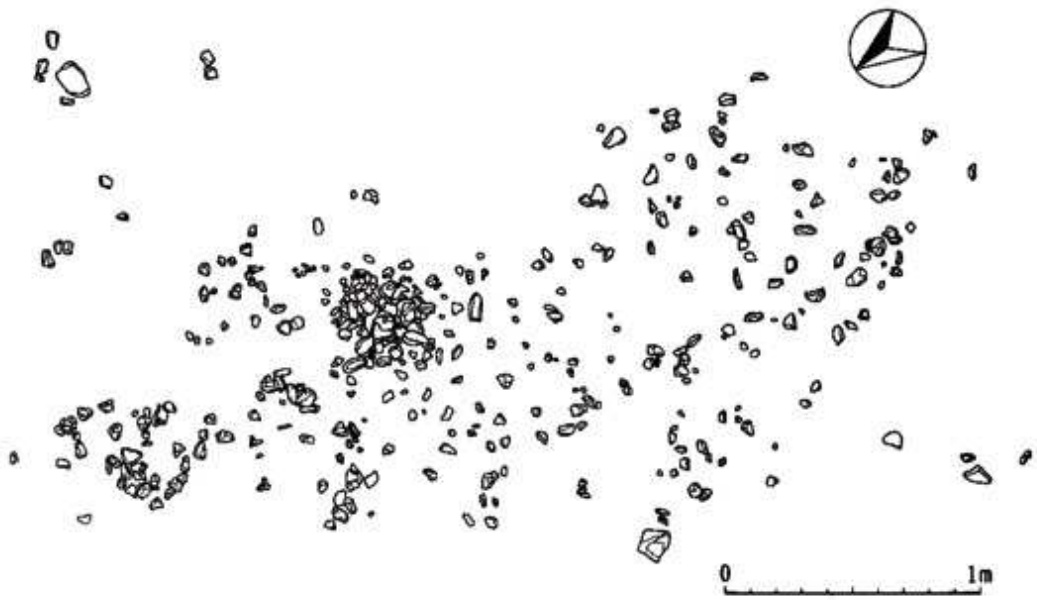
第３号焼石遺構（第13・14図）

（位置と確認）

Ｄ地区のＢＣ－17・ＢＤ－18グリッド全体にわたって広く散在し、第Ⅳ層上面で最上部の礫を確認した。

（形状と規模）

平面形は、長径約400㎝、短径約200㎝の不整楕円形の広がりを示し、全体的にはまばらに散在するが、一か所だけ特に密集する箇所がある。この部分は、大きさ約10㎝の礫を２～４段に積み重ねており、断面形はケルン状である。ほかは、大きさ約５㎝の小さい礫で形成され、

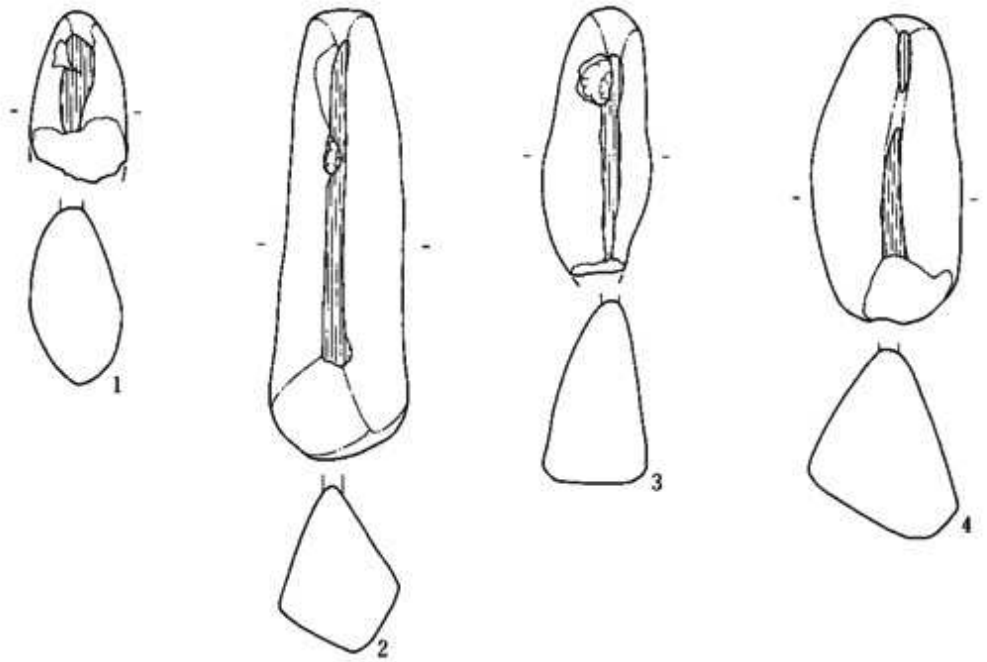


第13図　第３号焼石遺構

礫はすべて著しく火熱を受けているためもろくなっていて、ひび割れが入り破損しているものが多い。ほかの焼石遺構に較べて完形の礫が少なく、3～5㎝の剥片状に破損した状態で分布したことが特徴である。

（遺物と遺構）

遺構は掘り方を持たず、遺構自体または周囲からも炭化物や焼土、灰等検出されなかった。焼石の中より磨石3点、敲石1点が出土している。ほかに、遺物は出土しなかった。



第14図　第3号焼石遺構出土遺物

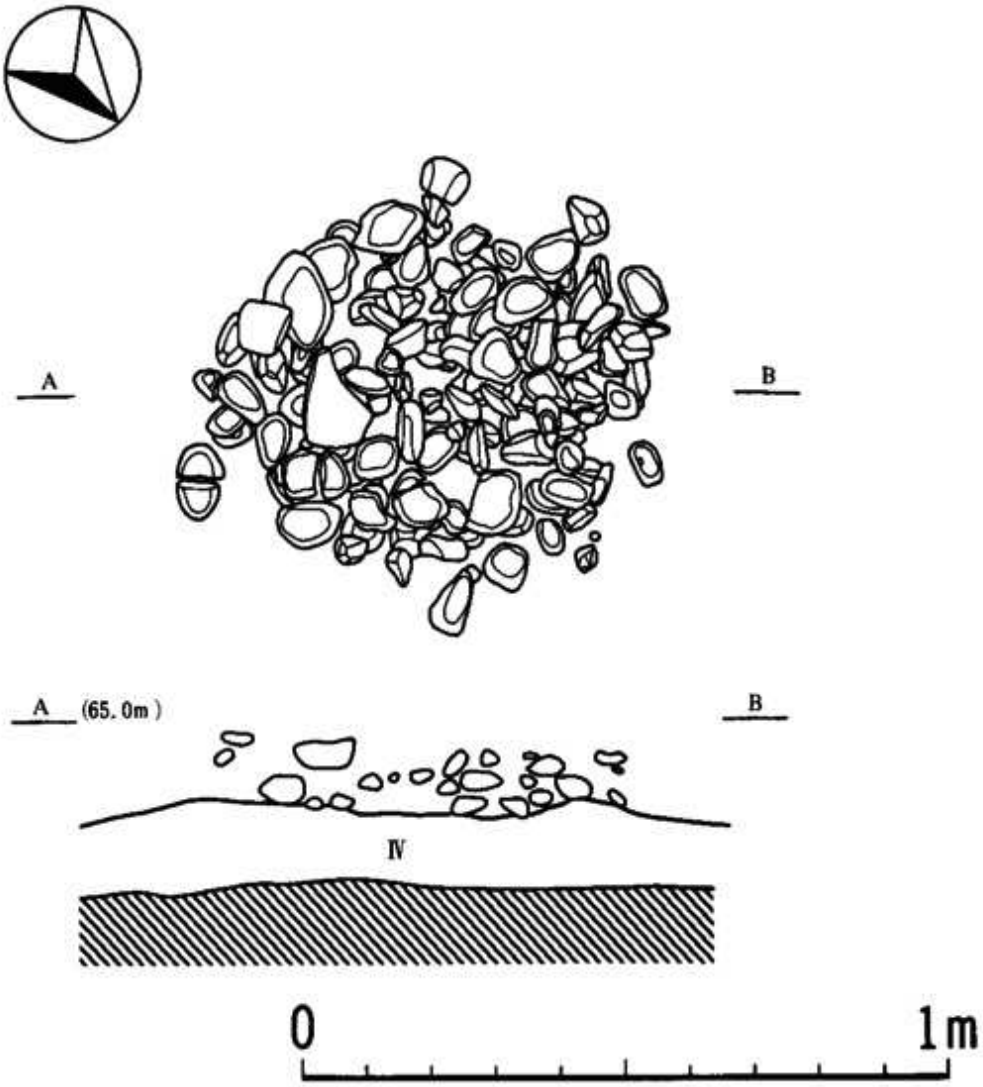
第7表　第3号焼石遺構出土遺物計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
1		BC－18　Ⅳ	(65)	67	37	(155)	安山岩	扁　1面すり　半欠
2		〃　〃	172	54	63	715	砂岩	四角柱　1面敲すり　完形
3		〃　〃	101	42	70	277	〃	三　1面すり　半欠
4		〃　〃	118	74	61	561	頁岩	三　1面すり　下部欠

第4号焼石遺構（第15図）

（位置と確認）

A地区に面した沢沿いの北向斜面AT－11グリッドの南側に位置し、第Ⅳ層上面で最上部の礫を確認した。



第15図　第４号焼石遺構

（形状と規模）

平面形は、長径約80cmのほぼ円形を示し、断面は、高さ約30cmケルン状である。外縁には比較的大きめの礫を用い、中心部には小型のものを幾段にも積み重ねている。礫はすべて、著しく火熱を受け、赤褐色に変色し非常にもろくなっていて、ひび割れの入っているものや破損しているものがある。焼石の中に充填されている堆積土は非常に軟らかい。生活面は検出することができなかった。

（遺物と遺構）

遺構の掘り方はなかったが、焼石内の堆積土から微量の炭化物が検出された。周囲からは、焼土、灰等検出されなかった。ほかに、遺物は出土しなかった。

第５号焼石遺構（第16図）

（位置と確認）

Ｅ地区舌状地形の先端部にＡＬ－６グリッドの中央部に位置し、第Ⅳ層上面で最上部の礫を確認した。

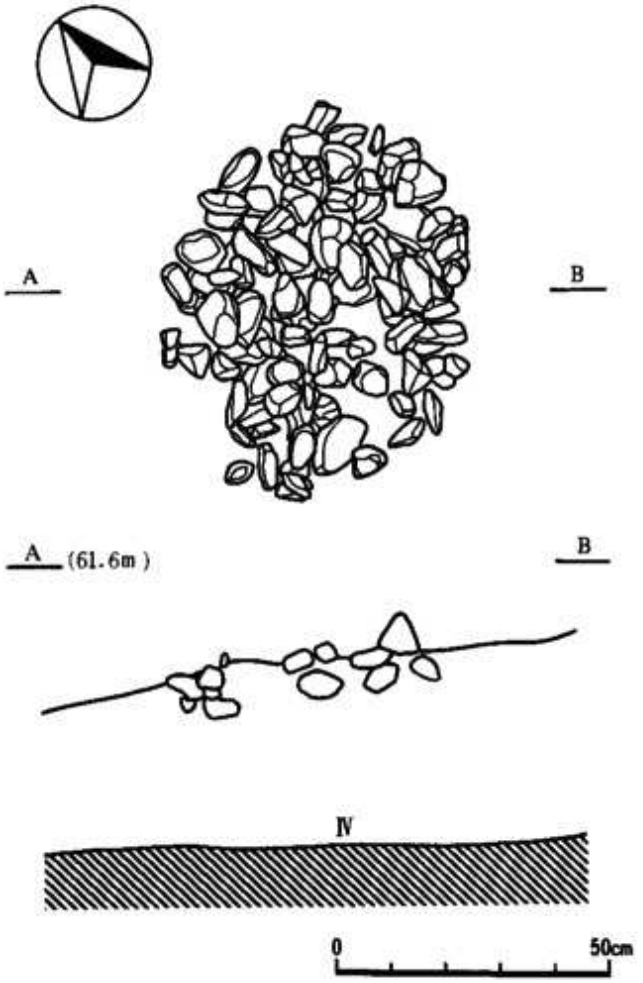
（形状と規模）

平面形は、長径約80cmのほぼ円形を示し、断面は、高さ約30cmのケルン状である。外縁と下部には、比較的大型の礫を配し、中央部にはやや小型のものを配している。礫はすべて、著しく火熱を受けているため赤褐色に変色し、非常にもろくなっていて、ひび割れの入っているものや破損しているものがある。

（遺構と遺物）

遺構は掘り方を持たず、遺構自体または周囲からも炭化物や焼土、灰等検出されなかった。遺物は出土しなかった。

（岡田　康博）



第16図　第５号焼石遺構

2．焼土遺構（第17・18図）

（位置と確認）

8基検出された。すべてE地区舌状地形に分布し、第1号焼土を除いては中央部の高いところに密集する。これらは、すべて第Ⅲ層上面で確認した。

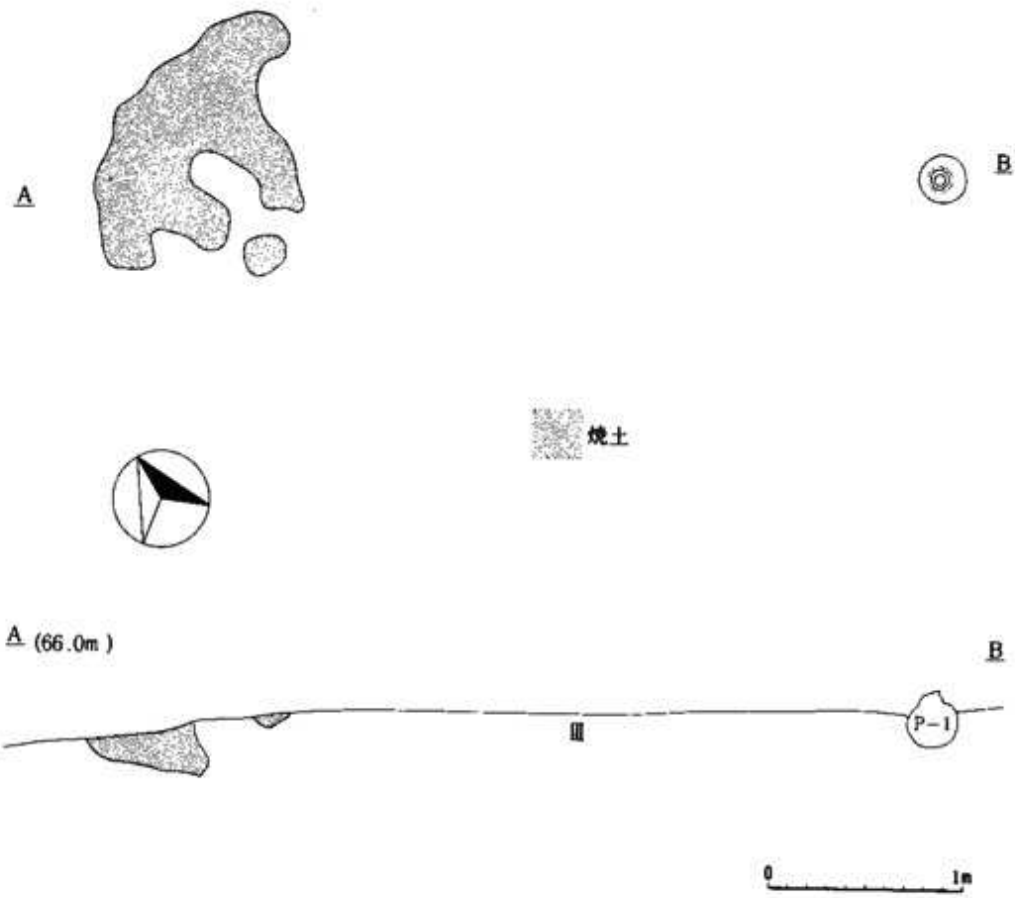
（形態と規模）

面積はほぼ一定であるが、形態はまちまちである。掘り方を持つものはない。すべて、中撤浮石層直上に構築され、浮石層の表面が火熱を受け赤褐色に変色しているが、焼土は非常に薄い。

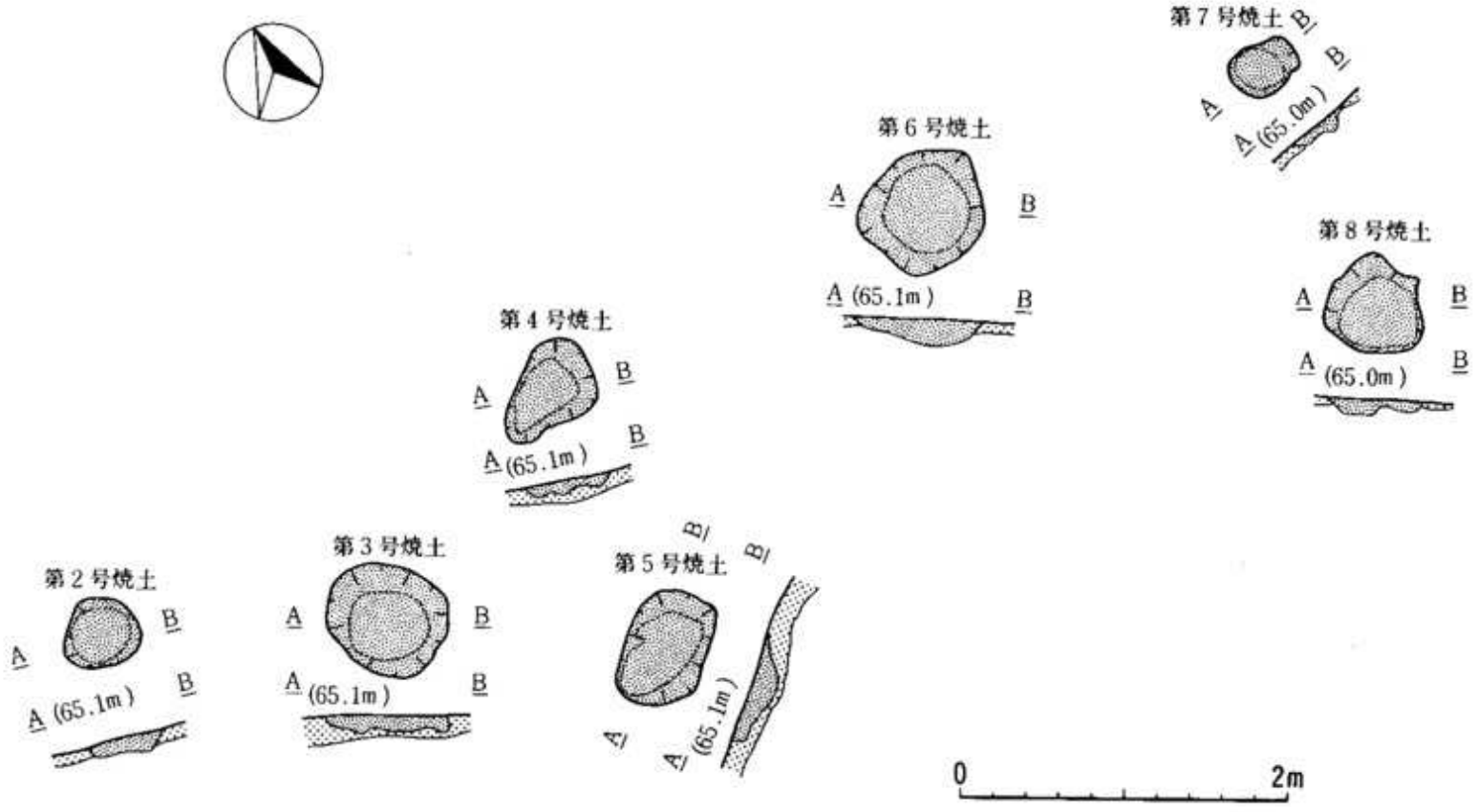
（出土遺物）

第1号焼土の傍らから晩期の壺型土器が直立した状態で出土したが、その他の焼土からは遺物が出土しなかった。また、これらの周囲からは、炭化物や灰等は一切検出されなかった。

（岡田　康博）



第17図　第1号焼土遺構



第18図　第2～8号焼土遺構

3．配石遺構（第19・20図）

（位置と確認）

E地区舌状地形の先端部、AM－6・7・8グリッド、AN－6・7・8・9グリッド、AO－6・7・8グリッドに位置し、第Ⅳ層上面で礫を確認した。

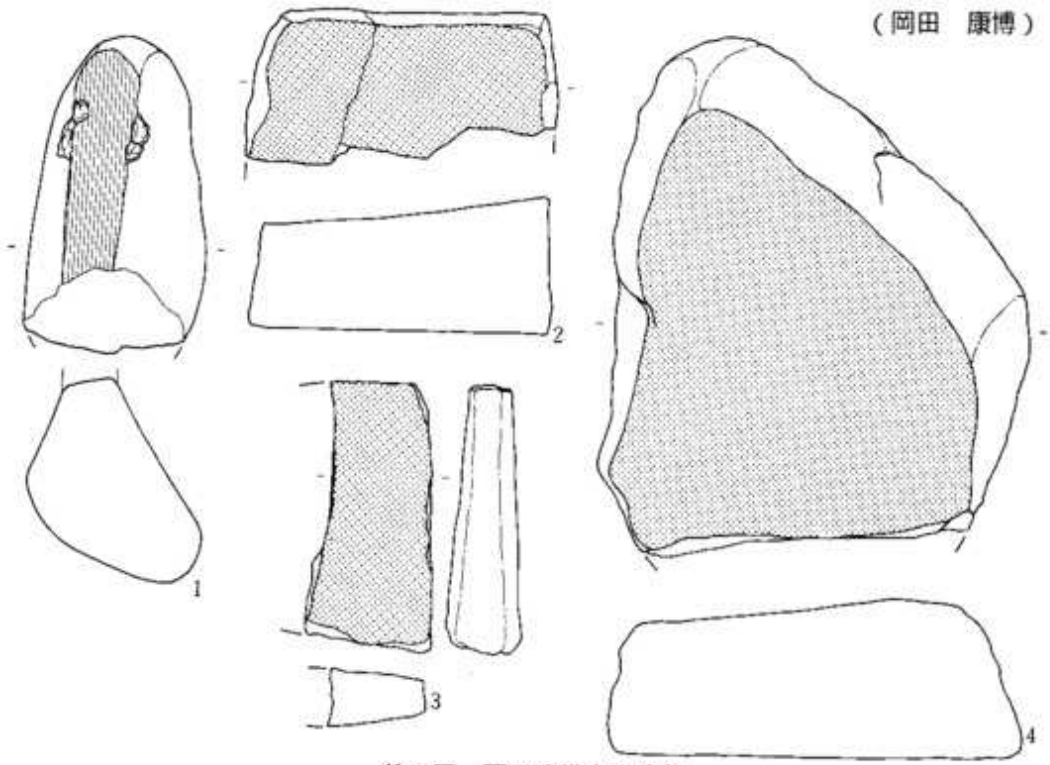
（形態と規模）

AN－7グリッドを中心に、東西100cm、南北900cmの広範囲にわたって約80点の大小の礫が散在し、その中央部には石皿が埋設されている。

（出土遺物）

散在している礫と同一レベルから土器片が約40点出土し、接合の結果、縄文を施文する尖底の深鉢と思われる土器を復原できたが、上部½ほどは欠損している。また、礫は焼けているものは見当らず、ほかに石皿が4点（埋設されているものを含む）、磨石が1点出土している。

（岡田　康博）



第19図　配石遺構出土遺物

第8表　配石遺構出土遺物計測表

No.		出土区・層位		長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
		E地区							
1	第19図－1	AO－6	Ⅳ	(121)	70	78	(682)	砂岩	三1面すり　半欠
2	第19図－2	AO－7	Ⅲ	247	114	92	4,520	安山岩	1面機能面　接合
		AO－7	Ⅱ						
3	第19図－3	AN－7	Ⅳ	206	98	58	1,540	〃	〃
4	第19図－4	AN－7	Ⅳ	400	333	121	10kg以上	〃	〃

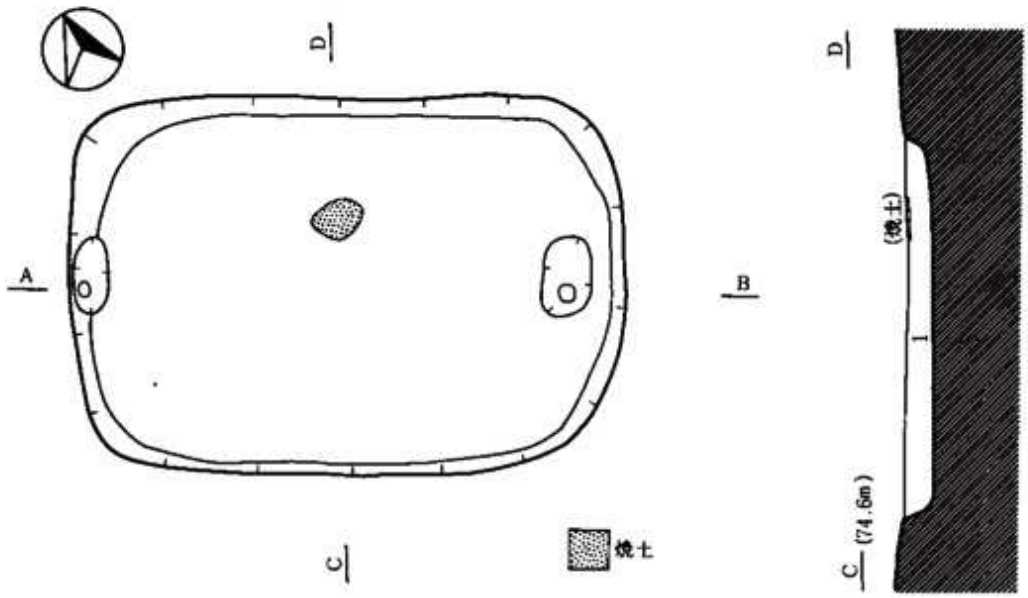
第20図　配 石 遺 構

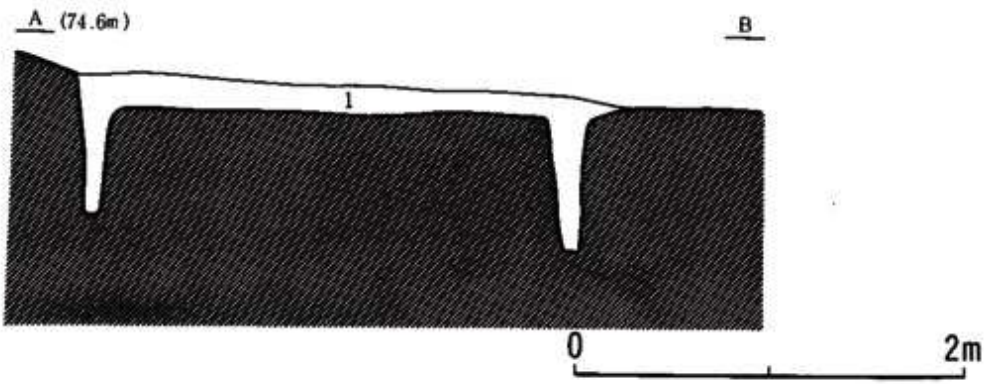
4．土　　壙

第１号土壙　（第21図）

（遺構の位置と確認）

台地斜面のＣ地区ＢＤ・ＢＥ－39・40の４グリッドにまたがって位置している。第Ⅱ層上面で黒色土の落ち込みと、焼土を確認した。





第１号土壙層注記
第１層　黒　色　浮石粒（0.2～0.5cm）を若干含み、根毛多少あり、炭化物が少量混入している、若干しまりあり。

第21図　第１号土壙

（平面形・規模）

平面形は、コーナー部が丸味をもつ隅丸長方形である。規模は、開口部が長軸286cm、短軸

193cm、壙底部は長軸265cm、短軸179cmである。最深部の深さは、確認面から19cmである。

（壁・底面）

壁は、北・西側壁が緩くたち上がるが、南・東側壁の面は軟弱で、たち上がりの区別がむずかしい。底面はほぼ平坦に構築されている。

（ピット）

東・西側壁中央部に各々1個検出した。規模は、P_1で長軸40cm、短軸18cmであり、P_2は長軸40cm、短軸25cmである。底面からのピットの深さは、P_1が56cm、P_2が61cmである。両ピット共に柱痕が確認できた。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。　　（中　島）

第2号土壙　（第22・23図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形の平坦な基部E地区、BB－11グリッドに位置している。第V層の黄褐色土で確認した。

（平面形・規模）

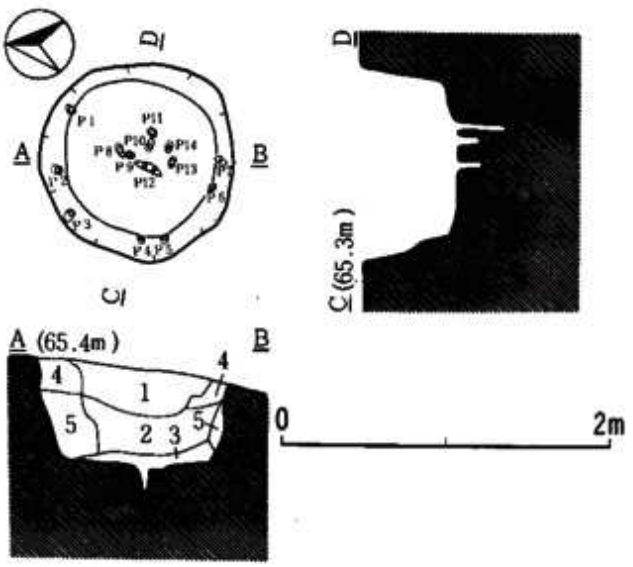
平面形は、ほぼ円形であり、規模は、開口部が長・短軸とも120cm、壙底部は長軸95cm、短軸90cmである。

（壁・底面）

壁は、東壁が緩やかに立ち上がっている。西壁は下部に段を有している。南・北側壁は壁の上部に段を有する。壁の残存状態はすべて良好である。底面は平坦でしまりがある。

（ピット）

14個検出した。P_1～P_7は、東側を除く底面の周縁に間隔をあけて位置しており、斜位方向に穿孔している。P_8～P_{14}は、底面の中央部に集中している。



第2号土壙土層注記
第1層　黒褐色　パミスやや多量、炭化物若干含む。ややしまりあり。
第2層　黒褐色　パミスを多量に含む。
第3層　黒褐色　パミスを含み、粘性、しまりあり。
第4層　暗褐色　若干砂粒を含み、しまりなし。
第5層　黄褐色　パミスを若干含み、黒褐色土ブロック状混入している。しまりなし。

第22図　第2号土壙

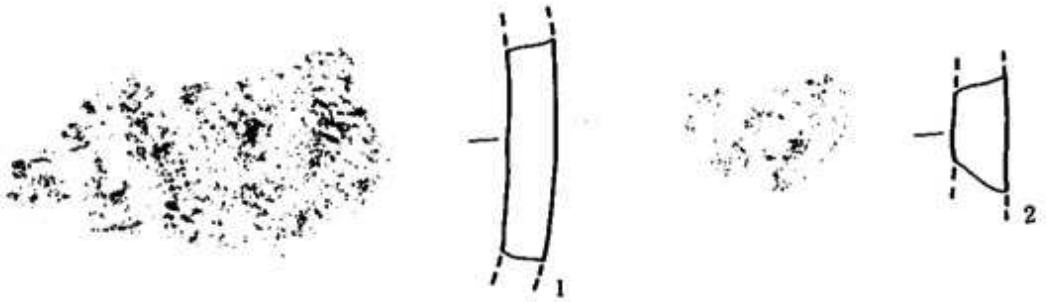
底面からのピットの深さは、次のとおりである。

P_1～P_7は2～3cm、P_8－32cm、P_9－15cm、P_{10}－15cm、P_{11}－31cm、P_{12}－16cm、P_{13}－27cm、

P14- 19cmである。

（出土遺物）

第Ⅱ群土器に比定される土器が2片出土した。これらは、覆土上位の第1層中から出土している。土壙内の堆積土が埋没する際に混入したと思われる。



第23図　第2号土坑出土遺物

第9表　第2号土坑出土遺物観察表

図	図版番号	層位	P番号	部位	外面施文	内面調整	備考
1	第23図－1	1層	P－1	胴部	縄文0段多条	斜位	
2	〃 －2	〃	P－2	〃	〃	横位	

第3号土壙　（第24図）

（遺構の位置と確認）

台地緩斜面のB地区BA- 30グリッドに位置している。第Ⅳa層の黒褐色土で確認した。

（平面形・規模）

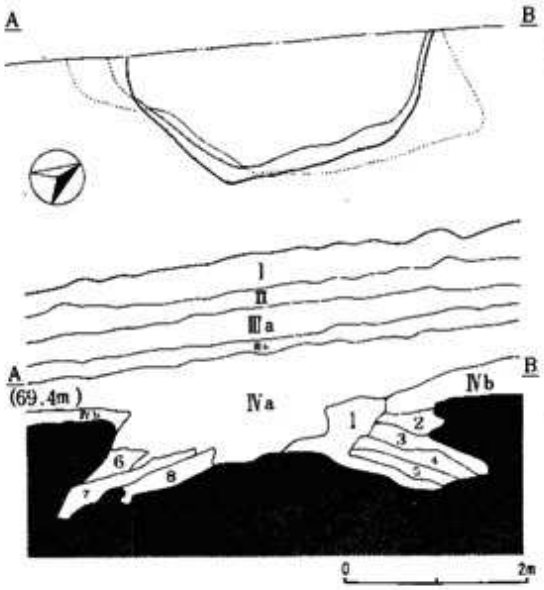
本遺構の東側部分は、道路のため完掘できなかったが、西側部分から判断して、円形と思われる。規模は、開口部が長軸336cm、短軸145cm、壙底部は、長軸415cm、短軸140cmである。

（壁・底面）

壁は、開口部から底面に向って極端に内傾する。底面は、中央部に向って盛り上がり、あげ底状であるが軟弱である。

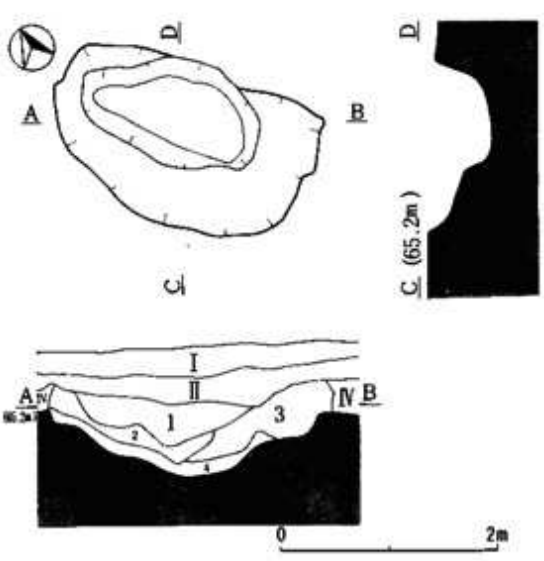
（出土遺物）

遺物は出土しなかった。



第3号土坑土層注記
第1層 黒褐色 パミス多量に含み、小黄褐色土、ブロックが混入している。
第2層 褐 色 パミス少量を含み、黒褐色土ブロックが混入。しまりあり。
第3層 暗褐色 パミスを多量に含み、黄褐色土小ブロックを混入している。
第4層 黒褐色 パミス多量、若干の砂粒を含む。
第5層 褐 色 黄褐色土が混入しているパミスを少量含み、ややしまりあり。
第6層 褐 色 パミスを少量含み、黄褐色土が混入している。しまりあり。
第7層 黄褐色 パミスを少量含み、黒褐色土が混入している。しまりなし。
第8層 黒褐色 パミスを多量に含み、黄褐色土小ブロックが混入している。しまりあり。

第24図　第３号土坑



第4号土坑土層注記
第1層 黒 色 黄褐色の浮石（0.2～2cm）を多量に含む。しまりなし。
第2層 褐 色 黄褐色の浮石（0.1～0.5cm）を多量に含み、下層部に浮石粒子多い黒色土が混入している。しまりなし。
第3層 黄褐色 上層の黒色土混入。黄褐色の浮石（0.1～0.3cm）を含み、ややしまりあり。
第4層 褐 色 褐色の浮石層、しまりなし。

第25図　第４号土坑

第４号土壙　（第25図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形の平坦面Ｅ地区ＡＸ・ＡＹ－ 11・12グリッドに位置している。第Ⅱ層中で黒褐色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、南・北側の壁が張り出す不整形である。規模は、開口部が長軸250cm、短軸152cm、壙底部は長軸146cm、短軸60cmである。最深部の探さは、確認面から50cmである。

（壁・底面）

壁は、北壁が垂直に立ち上がり、他の壁は中場で段を有する。底面は、鍋底状で軟弱である。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。

第５号土壙　（第26図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形の平坦部E地区AY－10・11グリッドに位置している。第Ⅳ層中で褐色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

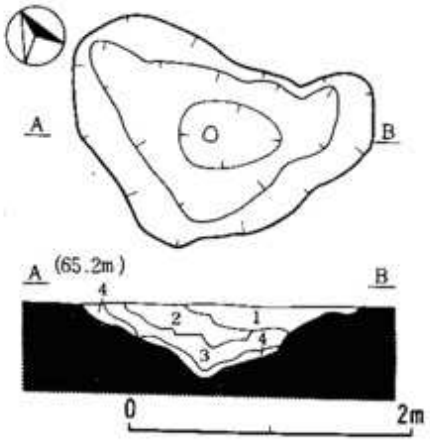
平面形は、北側から張り出す不整形である。規模は開口部が、長軸194cm、短軸123cm、壙底部は長軸73cm、短軸45cmである。最深部の深さは、確認面から53cmである。

（壁・底面）

壁はすべて緩やかに傾斜しており、断面形は三角形である。底面は、凹凸があり軟弱である。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。



第5号土壙土層注記
第1層　黒褐色　黄褐色の浮石（0.2～0.5cm）を多量に含む。しまりなし。
第2層　黒褐色　黄褐色の浮石（0.2～1cm）が多量に含む。ややしまりあり。
第3層　黒褐色　黄褐色の浮石（0.1～0.5cm）が多量に混入。しまりややあり。
第4層　黄褐色　黄褐色の浮石層。しまりなし。

第26図　第5号土坑

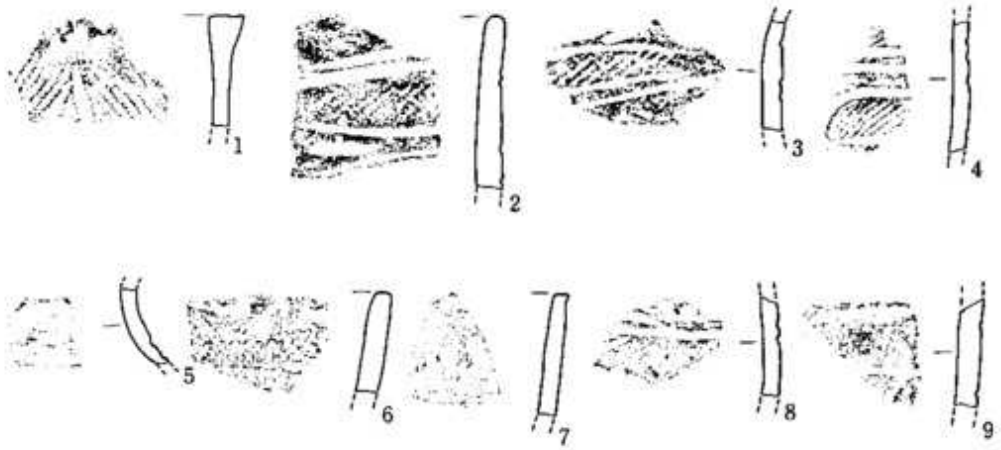
第6号土壙　（第27・28図）

（遺構の位置と確認）

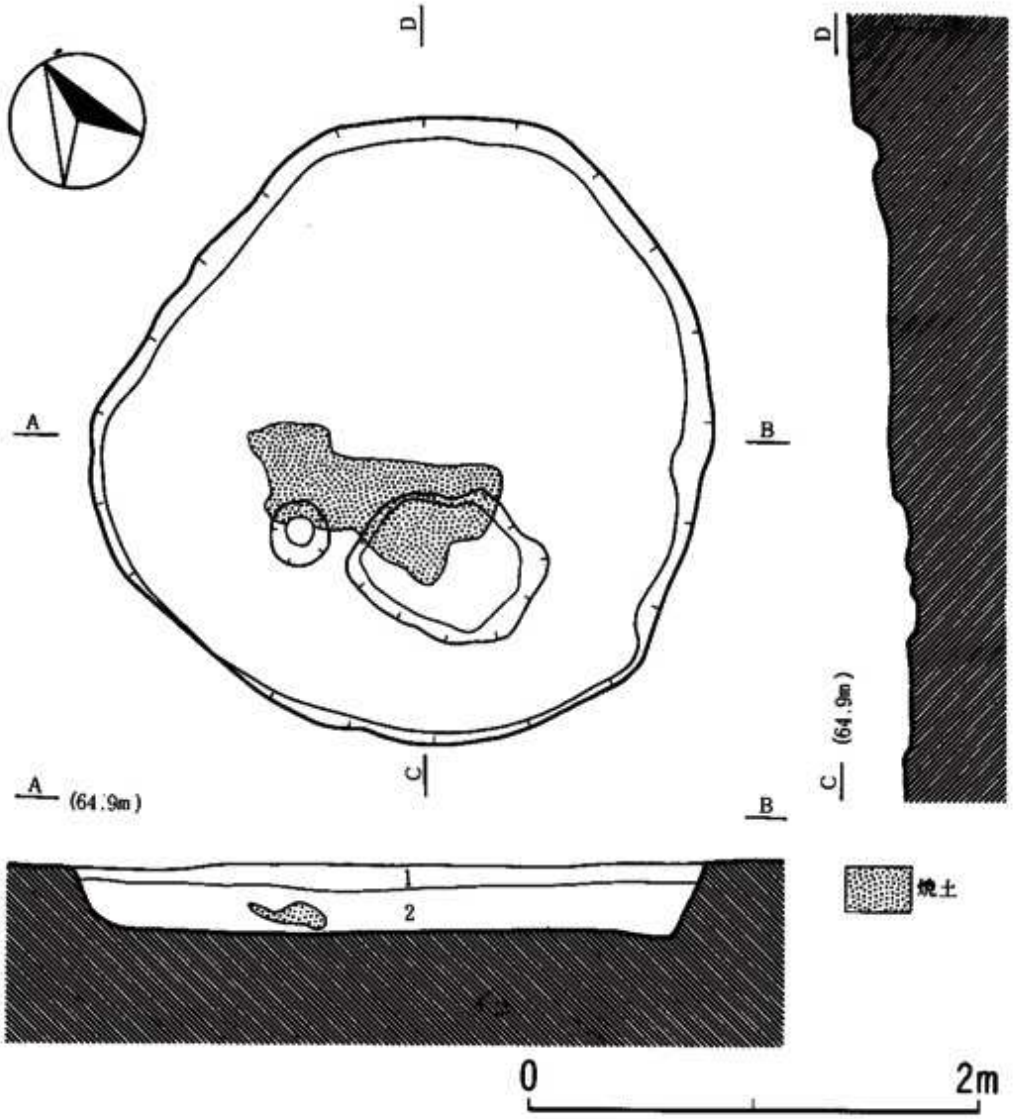
舌状に張り出した台地のほぼ中央E地区AS・AT－8・9グリッドに位置している。第Ⅰ層を若干掘り下げると、灰白色浮石を多量に含む円形のプランが確認され、また、ほぼ中央付近に、長軸100cm、短軸50cmの範囲で焼土が確認された。

（平面形・規模）

平面形は、東側が張り出す不整形である。規模は、開口部が長軸275cm、短軸270cm、壙底



第27図　第6号土坑出土遺物



第6号土坑土層注記
第1層　黒褐色　パミスを若干含む。
第2層　黒褐色　灰白色の浮石を全体に混入している。

第28図　第6号土坑

部は長軸265cm、短軸253cmである。最深部の探さは、確認面から31cmである。

（壁・底面）

壁は、すべて緩やかに傾斜し、しまりがなくもろい。底面は平坦である。

（出土遺物）

第Ⅳ群土器に比定される土器が9片出土した。土器は、覆土上位の第1層面から多く出土している。　（岩　田）

第10表　第６号土坑出土遺物観察表

図	図版番号	層位	P番号	部　位	外 面 施 文	内面調整	備　　考
1	第27図－1	1 層		口縁部	縄文単節(ＬＲ)	横　位	
2	〃　－2	〃	P－22	〃	縄文単節(ＬＲ)磨消縄文	縦　位	
3	〃　－3	〃		口頸部	〃	横　位	
4	〃　－4	〃	P－9	口縁部	〃	斜　位	
5	〃　－5	〃		〃	沈線(横位)	横　位	
6	〃　－6	〃	P－3	〃	縄文複節(ＲＬ)	〃	
7	〃　－7	〃		〃	無文	〃	器内外面にスス状炭化物付着
8	〃　－8	〃		口頸部	縄文単節(ＲＬ)沈線・刺突	〃	〃
9	〃　－9	〃	P－10	胴　部	縄文単節(ＬＲ)磨消縄文	縦　位	

第７号土壙　（第29図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形の斜面Ｅ地区ＡＴ－６グリッドに位置している。第Ⅳ層の面で黒褐色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

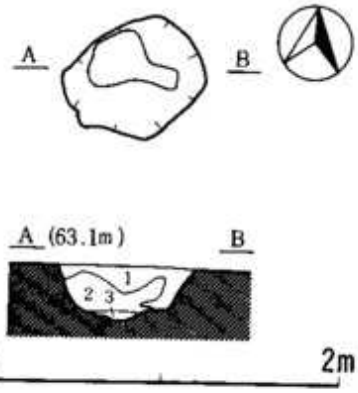
平面形は、不整楕円形である。規模は、開口部が長軸80cm、短軸65cm、壙底部は、長軸52cm、短軸38cmである。最深部の深さは、確認面から30cmである。

（壁・底面）

壁は、すべて垂直に立ち上がり軟弱である。底面は、凹凸で一定していない。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。



第７号土坑土層注記
第１層　暗褐色　ローム粒が全体に混入し、しまりがない。
第２層　黄褐色　ロームが多量に混入し、しまりなし。
第３層　暗褐色　２～３cm位のロームブロックが混入している、ややしまりあり。

第29図　第７号土坑

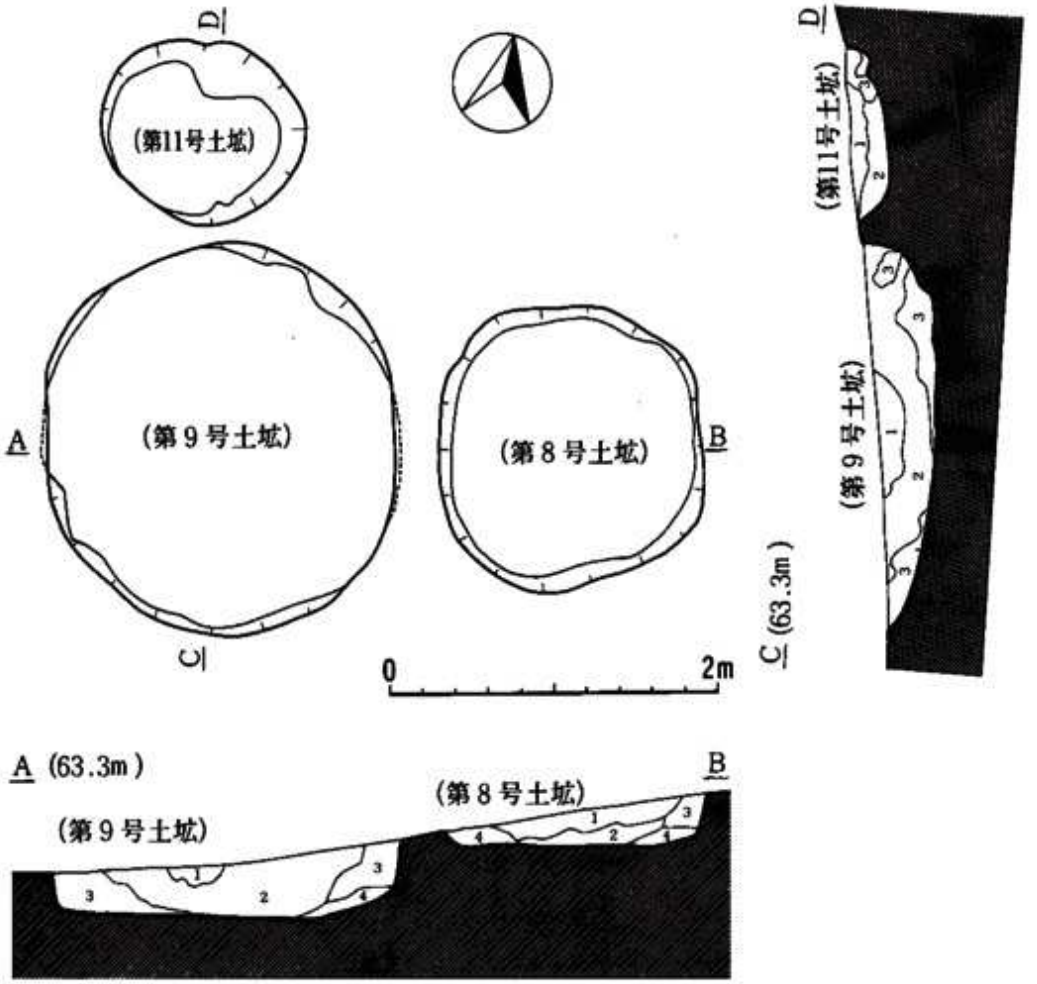
第８号土壙　（第30図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形の南側斜面のＥ地区ＡＳ・ＡＴ－６グリッドに位置している。第Ⅳ層の面で黒色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、ほぼ円形である。規模は、開口部が、長軸175cm、短軸173cm、壙底部は長軸164



第８号土坑土層注記

第１層	暗褐色	全体に若干のパミスを含む。しまりなし。
第２層	黒褐色	若干のパミスを含む。しまりなし。
第３層	暗褐色	ローム、パミスを含む。しまりなし。
第４層	茶褐色	全体にロームを含む。しまりなし。

第９号土坑土層注記

第１層	暗褐色	全体に若干のローム粒を含む。しまりなし。
第２層	暗褐色	全体にパミスを含む。しまりなし。
第３層	茶褐色	ローム、パミスを含む。（壁崩落土）
第４層	褐色土	

第11号土坑土層注記

第１層	暗褐色	全体に若干のパミスを含む。
第２層	茶褐色	全体に多量のローム粒を含む。
第３層	黄褐色	ローム
第４層	黒褐色	ブロック

第30図　第８・９・11号土坑

cm、短軸156cmである。最深部の深さは、確認面から25cmである。

（壁・底面）

壁は、すべてやや垂直気味に立ち上がる。底面は全般的に平坦でしまっている。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。

第９号土壙　（第30図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形斜面のＥ地区ＡＳ－５・６グリッドに位置している。第Ⅳ層の面で黒色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、ほぼ円形である。規模は、開口部が長軸234cm、短軸213cm、壙底部は、長軸225cm、短軸220cmである。最深部の深さは、確認面から38cmである。

（壁・底面）

壁は、南・北側の壁がほぼ垂直に立ち上がり、東・西壁は内傾している。底面は、平坦でしまっている。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。

第10号土壙　（第31・32図）

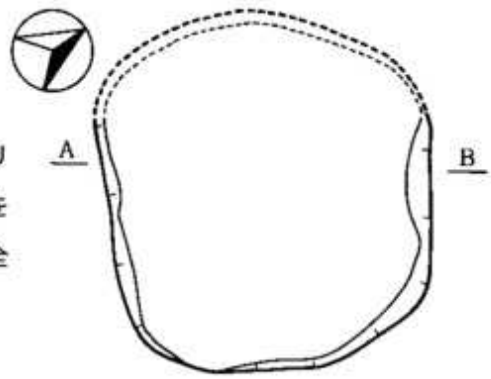
（遺構の位置と確認）

舌状地形のＥ地区ＡＲ・ＡＳ－６、ＡＲ－７グリッドに位置している。第Ⅳ層で褐色土の落ち込みを確認したが、西側は攪乱を受けており、プランの全容を確認することができなかった。

（平面形・規模）

平面形は、残存部から推定して方形と思われる。規模は、開口部が長軸185cm、短軸168cm、壙底部

第32図　第10号土坑出土遺物



第10号土坑土層注記
第1層　暗褐色　全体に微粒のパミスを含む。しまりがある。
第2層　黄褐色　ロームを多量に含んでいる。しまりあり。

第31図　第10号土坑

第11表　第10号土坑出土遺物観察表

図	図版番号	層位	P番号	部位	外面施文	内面調整	備考
1	第32図－1	1層	P－1	口縁部	縄文単節(LR)の縦位	横位	器外面にスス状炭化物付着

は長軸173cm、短軸148cmである。なお、長軸は推定である。

（壁・底面）

壁は、西壁が不明であるが、他の壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は、全般的に平坦であるが、一部に凹凸がある。

（出土遺物）

第1層の遺構確認面から、第Ⅳ群土器に比定される土器が1片出土した。

（成田・佐藤）

第11号土壙　（第30図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形の斜面E地区AR・AS－6グリッドに位置している。第Ⅳ層で暗褐色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

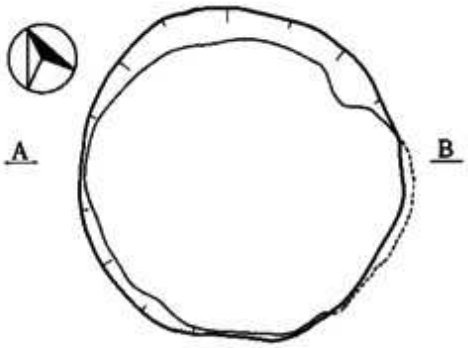
平面形は、不整楕円形である。規模は、開口部が長軸123cm、短軸108cm、壙底部は、長軸102cm、短軸85cmである。最深部の深さは、確認面から23cmである。

（壁・底面）

壁は、南壁がほぼ垂直に立ち上がるが、他の壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、一部に凹凸がみられる。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。



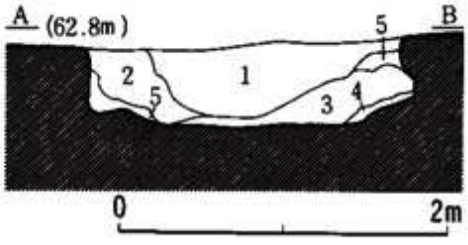
第12号土壙　（第33図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形の斜面E地区AR・AS－5グリッドに位置している。第Ⅳ層の暗褐色土で落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、ほぼ円形である。規模は、開口部が長軸200cm、短軸198cm、壙底部は長軸178cm、短軸175cmである。最深部の深さは、確認面から50cmである。



第12号土壙土層注記
第1層　暗褐色　全体に0.2cm前後の細かい浮石を含む。しまりがある。
第2層　暗褐色　0.3cm前後の浮石を若干含む。しまりが弱い。
第3層　黒褐色　0.5cm前後の浮石を若干含む。しまりがあり。
第4層　暗褐色　ローム粒を多量に含む。しまりがやや弱い。
第5層　黄褐色

第33図　第12号土壙

（壁・底面）

壁は、東壁が中場で段を有し内傾している。他の壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は、若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。　（成田・工藤）

第13号土壙　（第34図）

（遺構の位置と確認）

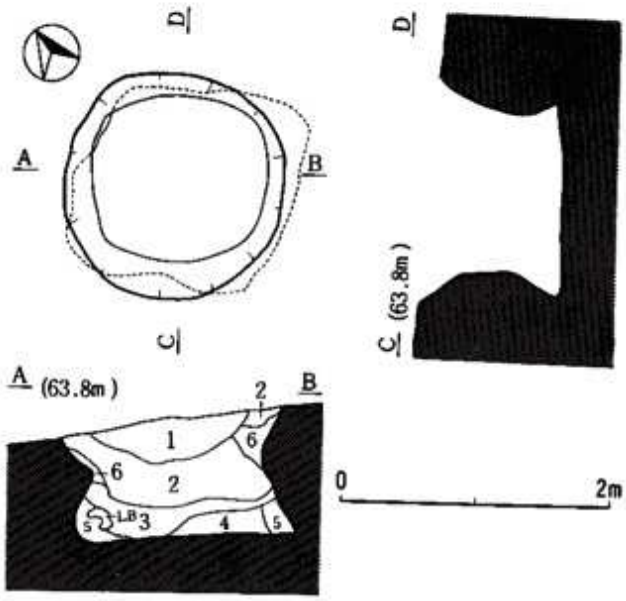
舌状地形北側の沢寄りＥ地区ＡＰ・ＡＱ－９・10グリッドに位置している。第Ⅲ層を掘り下げた後、黒褐色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、ほぼ円形で、壙底面は、不整の方形である。規模は、開口部が長軸166cm、短軸165cm、壙底部は、長軸165cm、短軸165cmである。最深部の深さは、確認面から110cmである。

（壁・底面）

壁は、開口部から緩やかに傾斜した後、上端から30cmのあたりでいったん段を有し、壙底面にかけて内傾している。断面形はフラスコ状である。底面は、湧水が激しく確認が困難であった。



第13号土壙土層注記
第1層　黒褐色　若干のパミス混入。しまりあり。
第2層　茶褐色　全体に若干のパミス・ローム混入。しまりあり。
第3層　茶褐色　4～5cm大の粘土ブロックを混入している。
第4層　黄褐色　青灰色粘土を多量に混入している。
第5層　茶褐色　粘土粒、細砂、0.5～1cm大のロームが混入している。
第6層　黄褐色　白色粘土ブロックを全体的に混入している。
LB　ロームブロック。

第34図　第13号土壙

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。　（岩　田）

第14号土壙　（第35図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形の平坦面Ｅ地区、ＡＹ－11グリッドに位置している。第Ⅳ層の褐色土中で落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、南側のプランは明瞭ではないが、ほぼ円形であると思われる。規模は、開口部が

長軸84cm、短軸84cm、壙底部は、長軸72cm、短軸62cmである。最深部は、確認面から31cmである。

（壁・底面）

壁は、北壁が壙底部から開口部に向って垂直に立ち上がり、他の壁は、緩やかに立ち上がっている。底面は、凹凸であり、軟弱である。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。

第15号土壙　（第36図）

（遺構の位置と確認）

台地平坦面D地区、ＢＩ－24・25グリッドに位置している。第Ⅳ層で、黒褐色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、北側が張り出す不整形である。規模は、開口部が長軸96cm、短軸72cm、壙底部は、長軸80cm、短軸65cmである。最深部の深さは、確認面から35cmである。

（壁・底面）

壁は、緩やかに傾斜しており、もろい。底面は、凹凸で軟弱である。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。

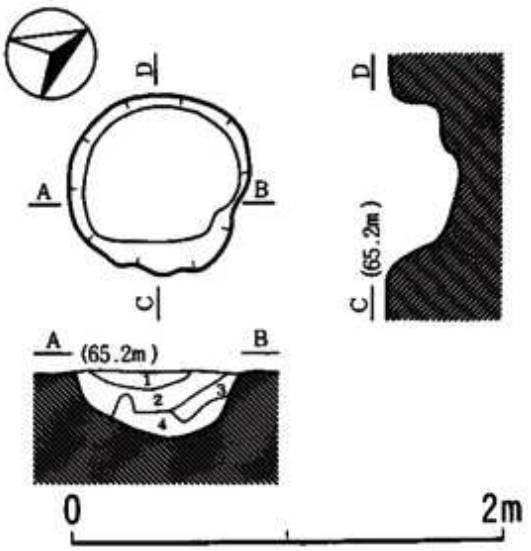
第16号土壙　（第37図）

（遺構の位置と確認）

台地平坦面のD地区ＢＢ・ＢＣ－19グリッドに位置している。

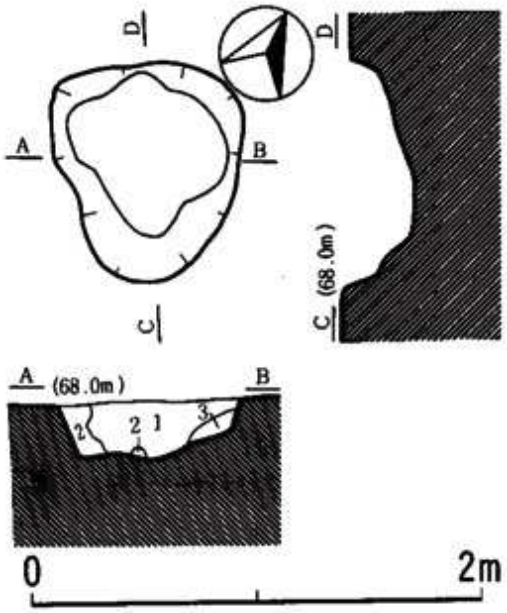
（平面形・規模）

平面形は、不整形である。規模は、開口部



第14号土壙土層注記
第1層　黒褐色　パミスを若干含む。しまりあり。
第2層　黒褐色　パミスやや多量に含む。しまりあり。
第3層　黄褐色　黒褐色土を混入し、砂粒若干含む。しまりあり。
第4層　黄褐色　砂粒を含む。しまりなし。

第35図　第14号土壙



第15号土壙土層注記
第1層　黒褐色　パミス（0.5～0.8cm）を多量に含む。黄褐色土若干混入。しまりあり。
第2層　黄褐色　砂粒、若干含む。ややしまりあり。
第3層　褐　色　黄褐色土が小ブロック状に混入。パミス若干含む。ややしまりあり。

第36図　第15号土壙

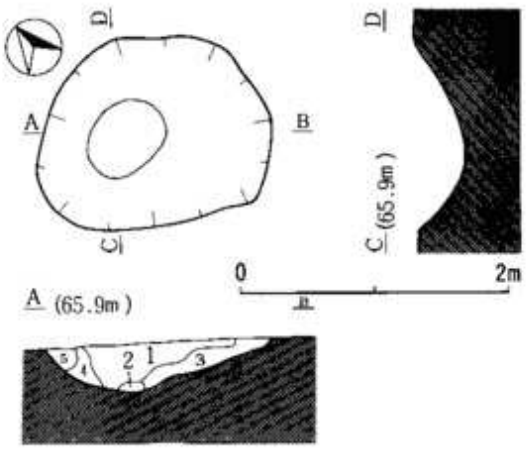
が、長軸168cm、短軸140cm、壙底部は、長軸65cm、短軸48cmである。最深部の探さは、確認面から35cmである。

（壁・底面）

壁は、すべて緩やかに立ち上がり軟弱である。断面形は、逆円錐形である。底面はほぼ平坦である。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。



第16号土坑土層注記
第1層　黒褐色　パミス多量、砂粒若干含む。しまりあり。
第2層　黄褐色　砂粒若干含む。粘性あり。しまりなし。
第3層　暗褐色　パミス若干、黒褐色土小ブロック含む。しまりあり。
第4層　黒褐色　パミスを少量含む。黄褐色土混入。しまりあり。
第5層　暗褐色　パミス少量含む。しまりあり。

第37図　第16号土坑

第17号土壙　（第38図）

（遺構の位置と確認）

台地平坦面のC地区、ＢＢ・ＢＣ－18の2グリッドにまたがって位置している。第Ⅴ層の黄褐色土で落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

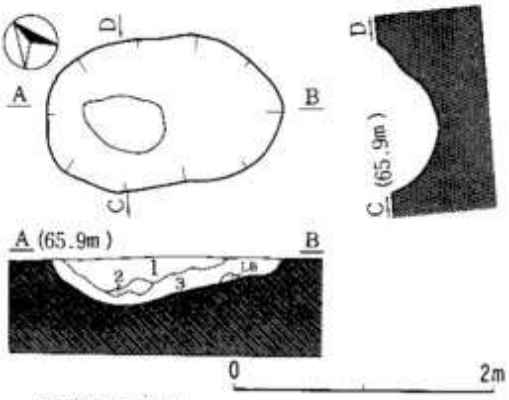
平面形は、全体が丸味を帯びた楕円形である。規模は、開口部が、長軸183cm、短軸113cm、壙底部は、長軸61cm、短軸41cmである。最深部の深さは、確認面から36cmである。

（壁・底面）

壁は、すべてなだらかに立ち上がっており、軟弱である。底面は、ほぼ平坦である。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。



第17号土坑土層注記
第1層　黒褐色　パミス（0.2～2cm）多量に含む。黄褐色小ブロックが混入し、しまりなし。
第2層　黒　色　パミス若干混入し、粘性あり。しまりなし。
第3層　暗褐色　パミス若干含む。黒褐色土が混入し、粘性あり。しまりあり。
L.B　ローム・ブロック。

第38図　第17号土坑

第18号土壙　（第39図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形の北側緩斜面Ｅ地区、ＡＳ－10・11グリッドに位置している。第Ⅳ層の褐色土を精査中に、暗褐色土の落ち込みを確認した。

（重　　複）

第2号風倒木と切り合っており、新旧関係は、本遺構が風倒木を切っており、新しい。

（平面形・規模）

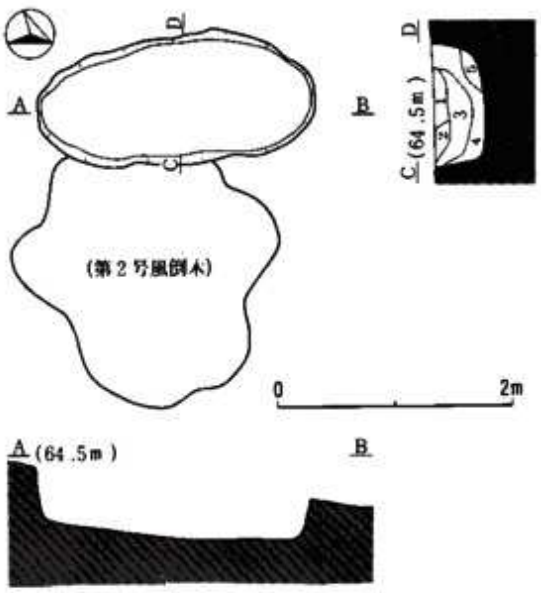
平面形は、両端部が丸味を帯びた長楕円形である。規模は、開口部が、長軸235cm、短軸105cm、壙底部は、長軸228cm、短軸95cmである。最深部の深さは、確認面から44cmである。

（壁・底面）

壁は、すべて壙底部から開口部に向ってやや垂直気味に立ち上がっている。底面は平坦で堅い。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。



第18号土坑土層注記
第1層　基本層序第Ⅳ層
第2層　暗褐色
第3層　暗褐色　黄褐色パミス（1cm）黄褐色ブロックを混入している。
第4層　明褐色　黄褐色ブロック（3～5cm）を多く含む砂質。
第5層　明褐色

第39図　第18号土坑

第19号土壙　（第40・41図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形先端部のＥ地区、ＡＭ・ＡＮ－７グリッドに位置している。第Ⅳ層の暗褐色土で落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

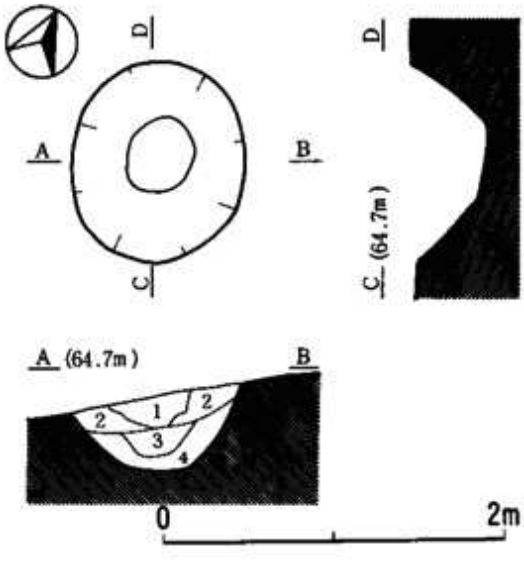
平面形は、全体的に丸味を帯びた円形である。規模は、開口部が、長軸118cm、短軸100cm、壙底部は、長軸45cm、短軸40cmである。最深部の深さは、確認面から45cmである。

（壁・底面）

壁は、すべてなだらかに立ち上がっており、断面形は、鍋底状である。底面はほぼ平坦である。壁・底面ともに軟弱である。

（出土遺物）

覆土上位の第１・２層中から第Ⅱ群土器に比定される土器が２片出土した。



第19号土壙土層注記
第1層　暗褐色　ローム粒（0.1～1cm）炭化物少量混入。しまりなし。
第2層　褐色土　ローム粒（0.5cm以下）若干混入。しまりなし。
第3層　黒褐色　ローム粒（0.1～1cm）炭化物若干混入。しまりなし。
第4層　ローム粒（0.5cm以下）ごく少量混入。しまりなし。

第40図　第19号土坑

第41図　第19号土坑出土遺物

第12表　第19号土坑出土遺物観察表

図	図版番号	層位	P番号	部　位	外面施文	内面調整	備　　考
1	第41図－1	1層	P－1	胴　部	縄文	横　位	
2	〃　－2	2層	P－4	〃	〃	〃	
3	〃　－3	3層	P－3	〃	〃	〃	

第20号土壙　（第42図）

（遺構の位置と確認）

台地北側の緩斜面のＢ地区ＡＹ・ＡＺ－28グリッドに位置している。第Ⅲ層上面で、黄褐色の中撤火山灰の落ち込みを確認した。

（重　　複）

第22号土壙と切り合っており、新旧関係は、本遺構が古い。

（平面形・規模）

平面形は、北側部分が道路のため明確ではないが、残存部から判断して楕円形と思われる。規模は、開口部が長軸330cm、短軸248cm、壙底部は、長軸302cm、短軸176cmである。最深部の深さは確認面から170cmである。

（壁・底面）

壁は、東壁が壙底部から開口部に向って緩やかに立ち上がり、西壁は、壙底部から中場にかけては垂直に立ち上がるが、中場から開口部にかけて傾斜している。西・北側の壁は不明である。底面は、凹凸で軟弱である。

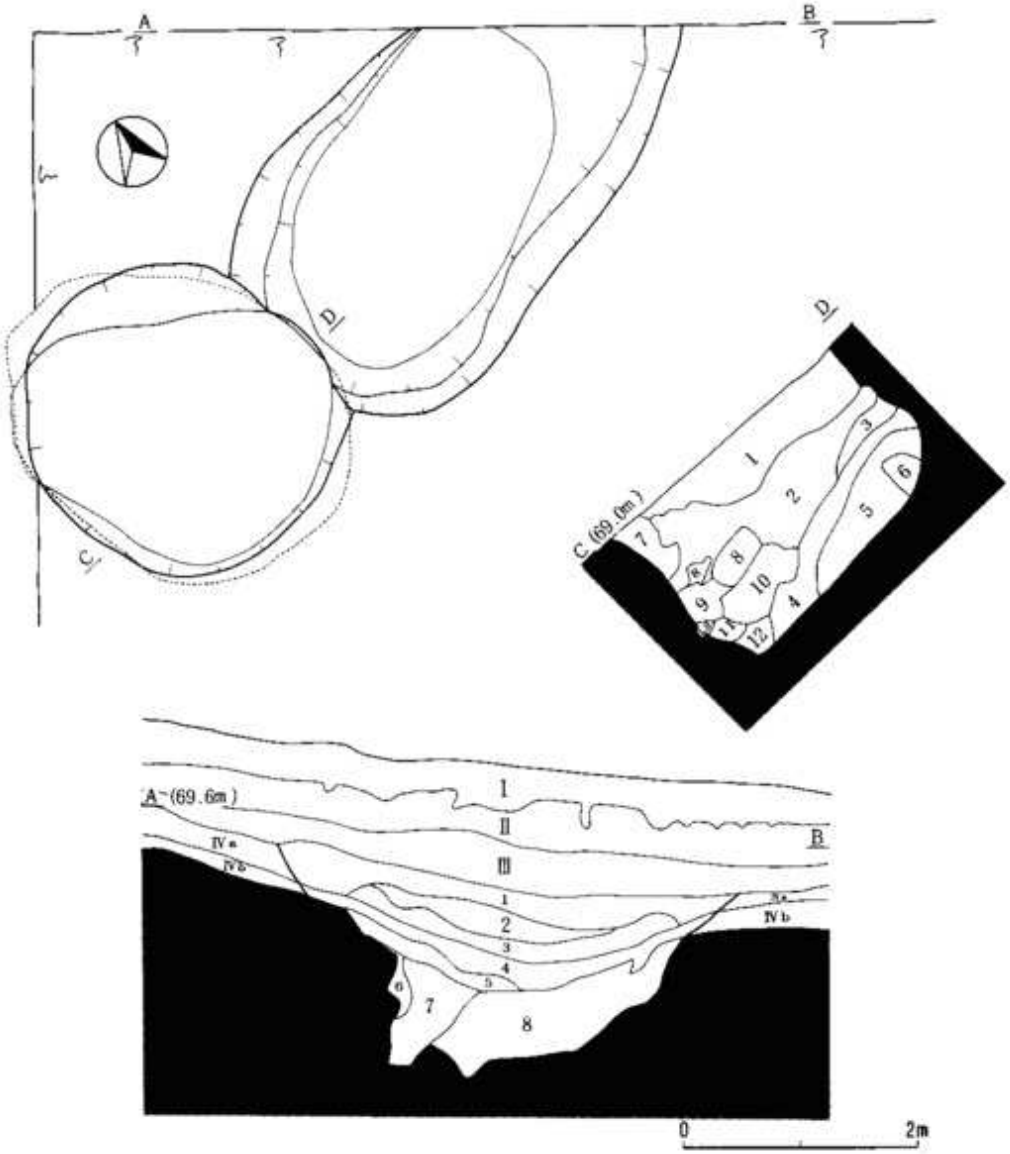
（出土遺物）

遺物は出土しなかった。

第21号土壙　（第43・44図）

（遺構の位置と確認）

台地先端部のＥ地区ＡＭ－７・８グリッドに位置している。第Ⅳ層の褐色土で落ち込みを確



第20号土坑土層注記

第1層	褐　色	アワズナの層であり、昔層の黒褐色土を多量にブロック状に含む。小パミス粒子を若干含む。しまりあり。
第2層	黄褐色	アワズナが多量に混入。しまりあり。
第3層	淡黄色	アワズナを多量に混入。しまりなし。
第4層	黒褐色	パミス粒子（1cm）を多量に含む。粘性あり。しまりよし。
第5層	暗褐色	小パミス粒子を多量に含む。細粒を少量含む。しまりよし。
第6層	灰褐色	粘性あり。パミスを若干含み、粗い砂を混入。しまりよし。
第7層	褐　色	パミス粒子を含むが第6層より多い。粘性あり。粗い砂を混入。
第8層	褐　色	パミス粒子（0.5cm～1cm）を多量に含む。若干細砂を含む。しまりあり。

第22号土坑土層注記

第1層	暗褐色	アワズナ混入。パミス若干含む。しまりなし。
第2層	暗褐色	アワズナが帯状に多量に混入砂質土。しまりなし。
第3層	黒褐色	アワズナがブロック状に混入。パミスやや多量に含む。しまりあり。
第4層	褐　色	黄褐色土がまだら状に混入。パミス若干含む。しまりあり。
第5層	黄褐色	小パミス少量混入。しまりなし。
第6層	黄褐色	砂粒若干含む。ザラザラしている。
第7層	暗褐色	黄褐色土ブロック状に混入。パミスやや多量に含む。アワズナも混入している。ややしまりあり。
第8層	黒褐色	パミス多量に含む。全体的に明るい粘性あり。しまりなし。
第9層	褐　色	黄褐色土小ブロック多量に混入。パミスややや多量に含む。ややしまりあり。
第10層	黒褐色	黄褐色土を含む。アワズナややや少量混入し、しまりなし。
第11層	黄褐色	アワズナ多量に含む。パミス含む。しまりなし。
第12層	黄褐色	砂粒を多量に含む。ややしまりあり。黒褐色土がまだら状に混入。

L.B.　ローム・ブロック。

第42図　第20・22号土坑

した。

（平面形・規模）

平面形は、やや西側から張り出す円形である。規模は、開口部が長軸168cm、短軸159cm、壙底部は、長軸165cm、短軸151cmである。最深部の深さは、確認面から80cmである。

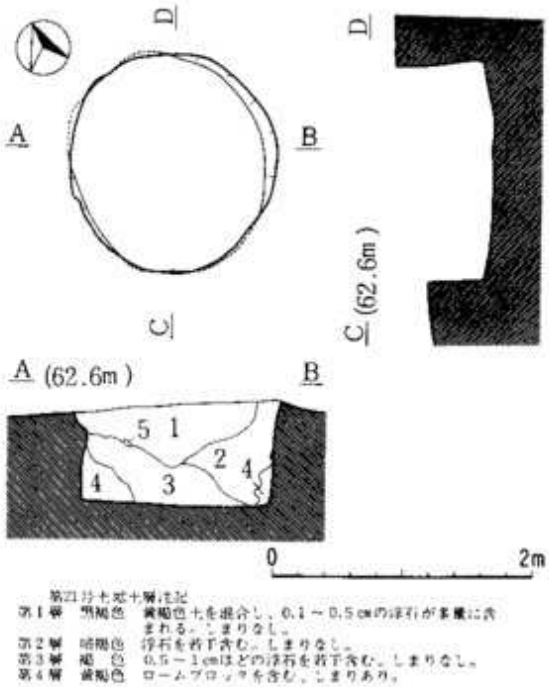
（壁・底面）

壁は、西壁が開口部寄りで段を有しており、他の壁は、垂直に立ち上がっている。底面は平坦で堅い。

（出土遺物）

覆土上位の第Ⅰ層から第Ⅱ群土器に比定される土器が１片出土した。

第44図　第21号土壙出土遺物



第43図　第21号土壙

第13表　第21号土壙出土遺物観察表

図	図版番号	層位	P番号	部位	外面施文	内面調整	備考
1	第44図－1	覆土		口縁部	無文	横位	

第22号土壙　（第42図）

（遺構の位置と確認）

台地北側の緩斜面Ｂ地区ＡＸ・ＡＹ－27・28グリッドに位置している。第Ⅲ層上面で、黄褐色の中撒火山灰の落ち込みを確認した。

（重複）

第20号土壙と切り合っており、新旧関係は、本遺構が新しい。

（平面形・規模）

平面形は、ほぼ円形である。規模は、開口部が長軸260cm、短軸245cm、壙底部は、長軸300cm、短軸230cmである。最深部の深さは、確認面から148cmである。

（壁・底面）

壁は、中場が奥に入り込むフラスコ状に近い。底面は平坦で軟弱である。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。

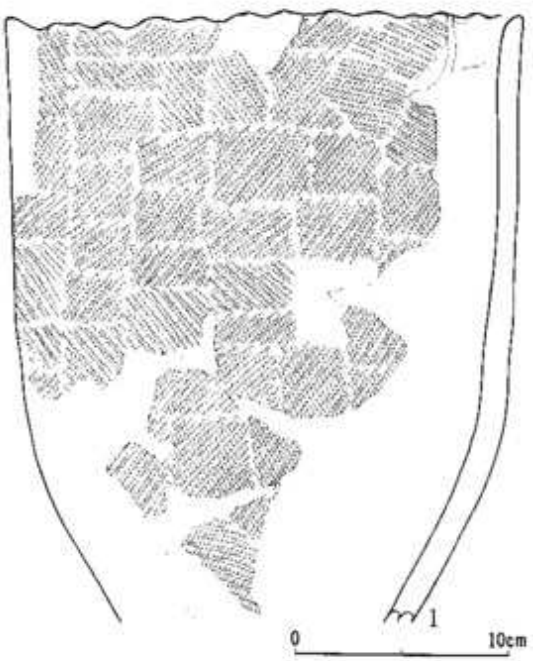
第23号土壙　（第45・46図）

（遺構の位置と確認）

台地緩斜面のＢ地区ＢＣ・ＢＤ・ＢＥ－31・32・33グリッドに位置している。第Ⅲ層の中撤浮石層中で円形のプランを確認し、トレンチを入れ精査したところ、黒褐色の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、不整形である。規模は、開口部が、長軸835cm、短軸806cm、壙底部は、長軸300cm、短軸205cmで、検出した土壙の中では最大のものである。深さは、湧水が激しいためボーリング探査を行ったところ、確認面から250cmである。



第45図　第23号土坑出土遺物

（壁・底面）

壁は、底面からほぼ垂直に立ち上がり、中場から緩やかに立ち上がる。また、湿性が強く、粘土質で軟弱である。確認面から１mほど掘り下げたところから湧水が始まった。

底面は、はっきり確認できなかった。

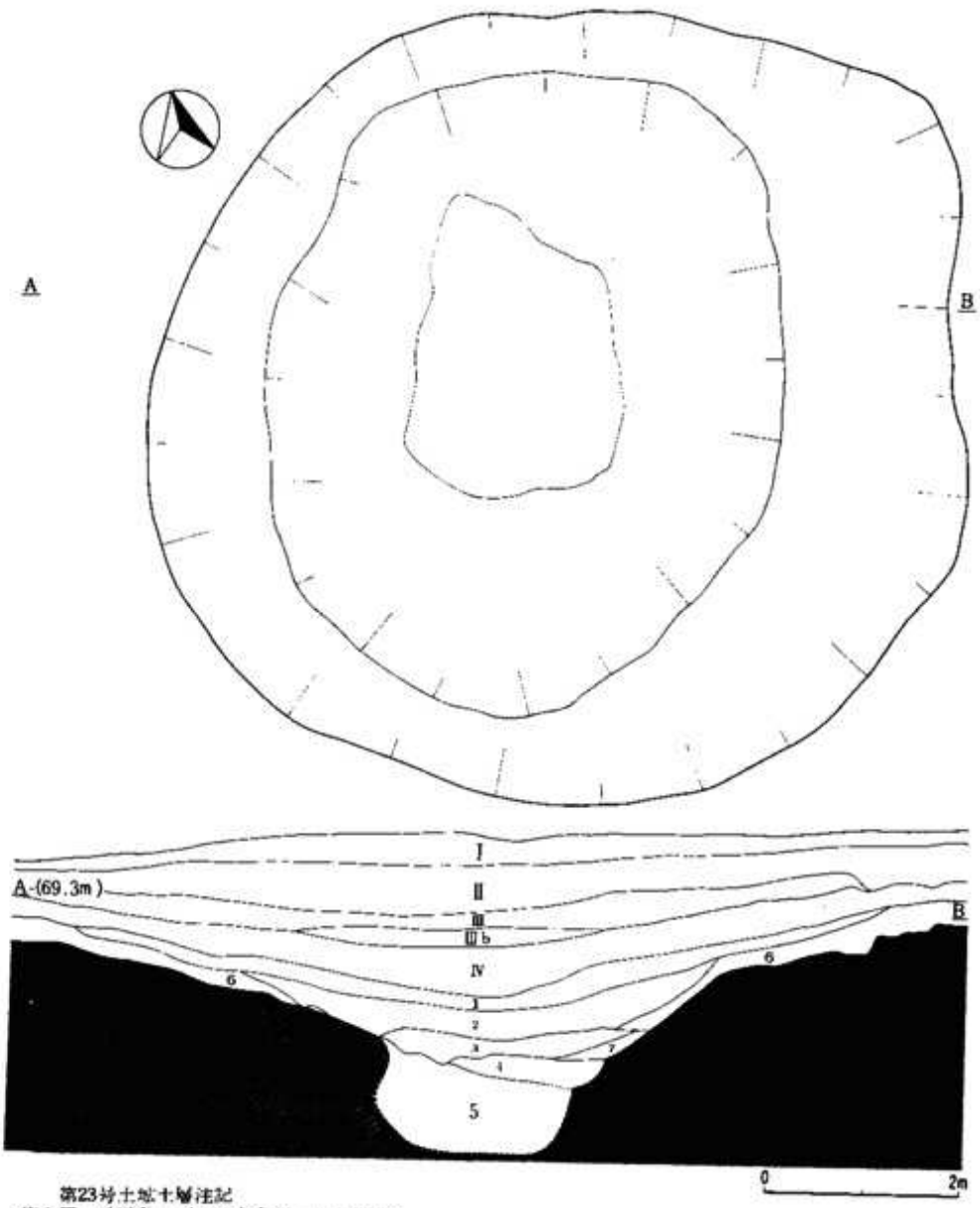
（出土遺物）

覆土の第Ⅰ層中から第Ⅱ群土器に比定される深鉢形土器が、横位につぶされた状態で出土した。

（岩　田）

第14表　第23号土坑出土遺物観察表

図	図版番号	層位	P番号	部　位	外面施文	内面調整	備　考
1	第45図－1	Ⅳ層		底部欠	縄文0段多条(LR)・羽状縄文	横　位	器内外面にスス状炭化物付着



第23号土坑土層注記
第1層　暗褐色　パミスを含む。しまりあり。
第2層　暗褐色　上層に類似するが、全体的に砂を含む。
第3層　茶褐色　酸化した砂が帯状に散在し、全体的に多量のパミスを混入。
第4層　黒褐色　粗砂、パミス、粘土を含む。
第5層　黒褐色多量の粗砂、若干の粘土を含む。
第6層　灰褐色　粗砂、細砂、粘土を多量に含む。
第7層　茶褐色　ロームを多量に含む。
IIIb層　中部浮石層

第46図　第23号土坑

5．溝状ピット

第１号溝状ピット　（第47図）

（遺構の位置と確認）

台地斜面のＡ地区ＡＳ・ＡＴ－ 18グリッドに位置している。第Ⅳ層の褐色土を精査中に、暗褐色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

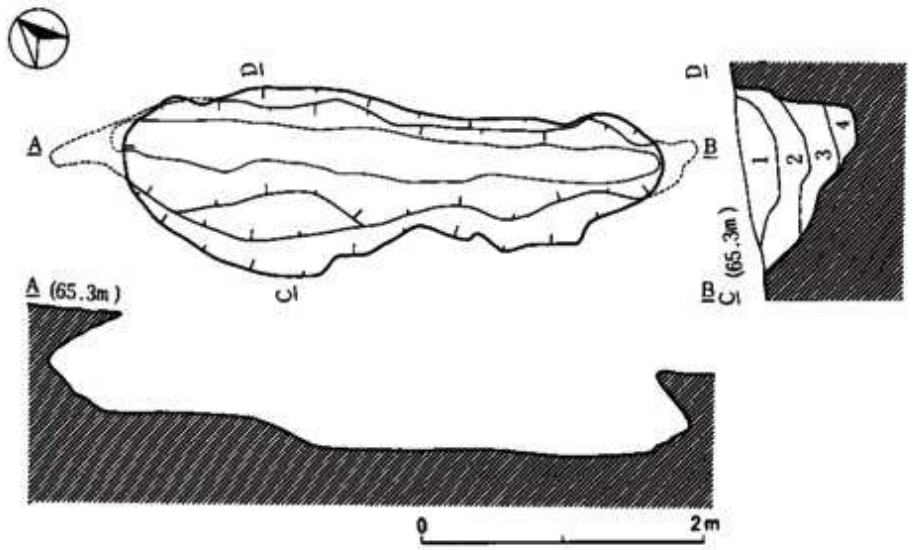
平面形は、側縁部が不鮮明であるが、両端部は丸味を帯びた溝状形である。規模は、開口部が長軸344cm、短軸110cm、壌底部は、長軸379cm、短軸30cmである。最深部の深さは確認面から84cmである。方位はＮ－ 37°－ Ｗを指す。

（壁・底面）

側縁部の北壁が緩やかに立ち上がり、南壁が中場で段を有する。両端部は内傾している。底面は凹凸している。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。　（成　田）



第１号溝状ピット土層注記
第１層　暗褐色　黒色のブロック（４cm大）を多量に含み、黄褐色のパミス（１cm）を若干含む。
第２層　暗褐色　黄褐色の浮石を多量に含み、黒色のブロック（２cm位）を若干含む。
第３層　暗褐色　黄褐色粘土質のブロック（３cm）を多量に含む。
第４層　灰褐色粘土質層　白色粘土質のブロック（３cm大）を多量に含む。

第47図　第１号溝状ピット

第２号溝状ピット　（第48図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形のD地区ＡＹ・ＡＺ－11グリッドに位置している。北側約１mには、第５号溝状ピットが存在する。第Ⅳ層の褐色土を精査中に、黒褐色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

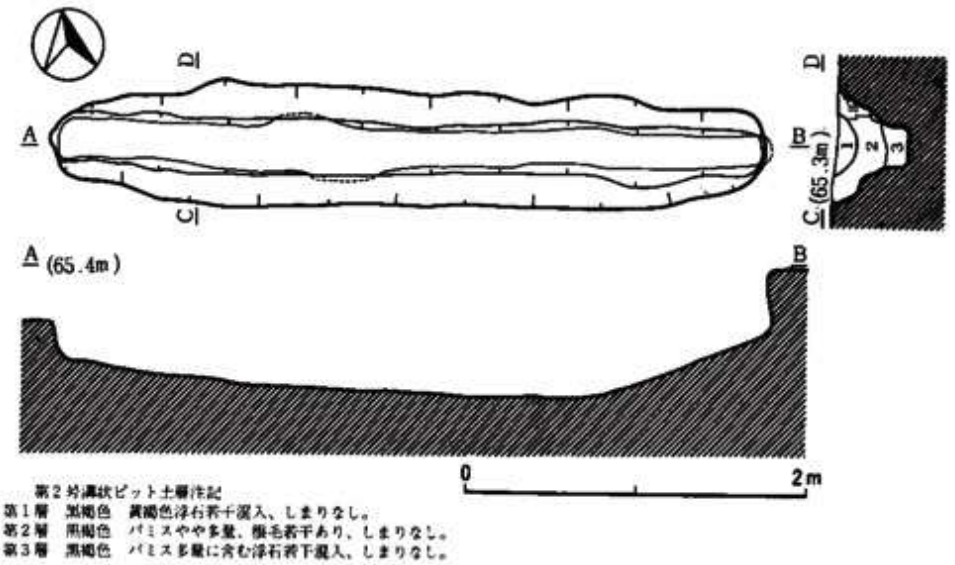
平面形は、側縁部が直線で、両端部が丸味を帯びた溝状形である。規模は、開口部が、長軸422cm、短軸68cm、壌底部は、長軸412cm、短軸21cmである。最深部の深さは、確認面から66cmであり、浅い。方位はN－82°－Wを指す。

（壁・底面）

側縁部の東・西側の壁は、底面から中場にかけて垂直に立ち上がり、開口部に向かって広がっている。端部の南壁は内傾し、北壁はなだらかである。底面は、中央部から南側にかけて緩やかに傾斜し、平坦で堅い。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。　　（成　田）



第48図　第２号溝状ピット

第３号溝状ピット　（第49図）

（遺構の位置と確認）

台地斜面Ａ地区ＡＨ－18・19グリッドに位置している。南側約４mには、第４号溝状ピットが存在する。第Ⅳ層の褐色土を精査中に、黒褐色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、側縁部及び両端部が丸味を帯びた長楕円形である。規模は、開口部が、長軸385cm、

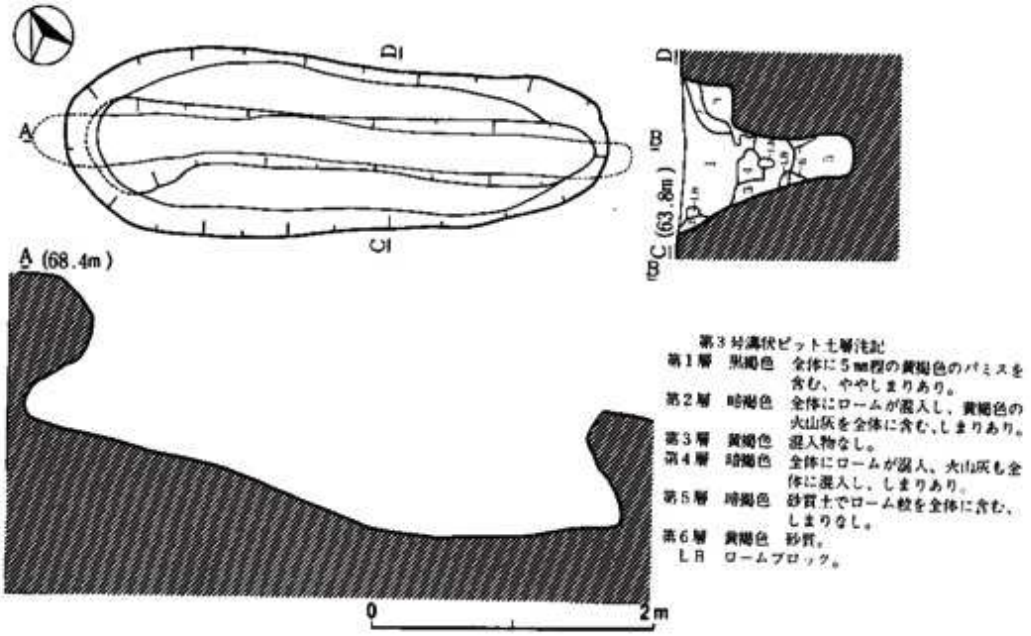
短軸126cm、壙底部は、長軸423cm、短軸24cmである。最深部の深さは、確認面から125cmである。方位はN－62°－Wを指す。

（壁・底面）

壁は、側縁部が壙底部から開口部に向かって緩やかに立ち上がり、両端部が奥に内傾している。底面は、西側が高く、東側に向かって傾斜する。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。　　（成　田）



第49図　第３号溝状ピット

第４号溝状ピット　（第50図）

（遺構の位置と確認）

台地の北斜面Ａ地区ＡＧ－15・16グリッドに位置している。第Ⅴ層面で、黒褐色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

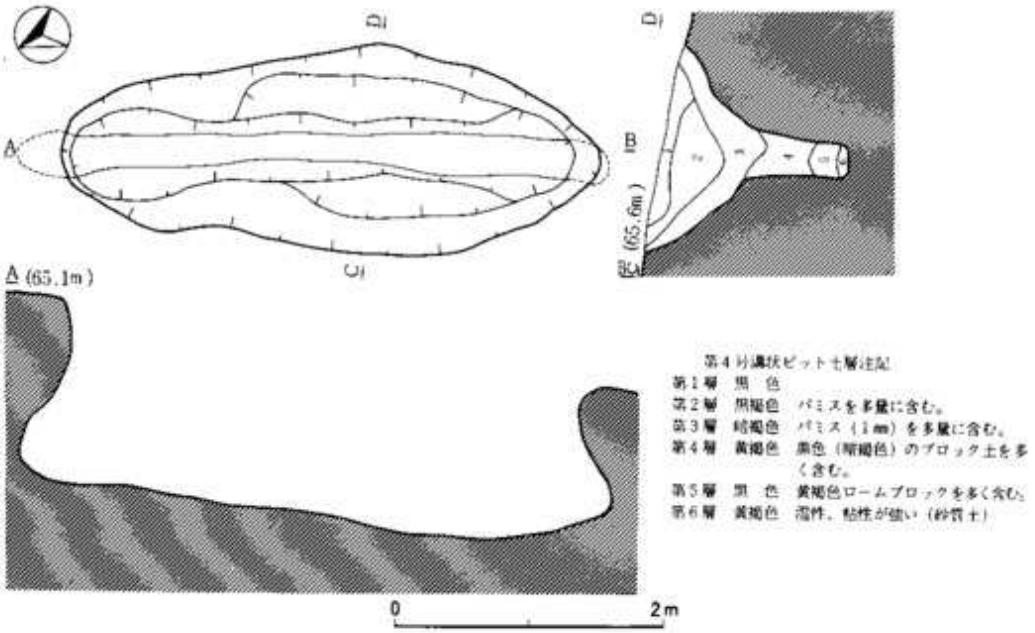
開口部は、側縁部及び両端部が丸味を帯びた葉巻状で、壙底部は、両端部が丸味を帯びた棒状形である。開口部の短軸は、通常の溝状ピットに較べると極端に広い。規模は、開口部が長軸400cm、短軸150cm、壙底部は、長軸438cm、短軸22cmである。最深部の深さは、確認面から35cmである。方位はＮ－31°－Ｅを指す。

（壁・底面）

壁は、側縁部が底面から中場にかけて垂直に立ち上がり、開口部に向かって緩やかに傾斜し、両端部は内傾する。また、壁面は、しまりがなく崩落が目立つ。底面は、中央部が平坦で両端部が盛り上がっている。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。　　（岩　田）



第50図　第4号溝状ピット

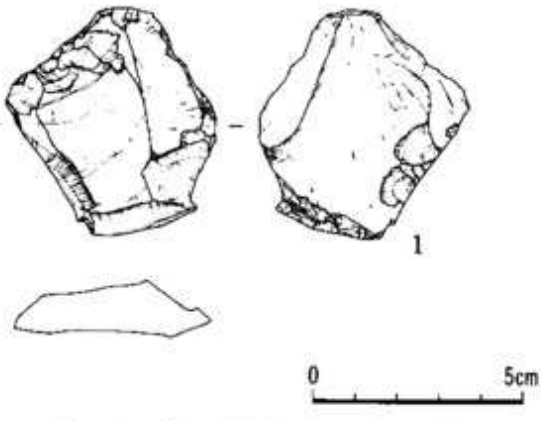
第5号溝状ピット　（第51・52図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形のD地区AY・AZ－12グリッドに位置している。第Ⅳa層の褐色土を精査中に、黒褐色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、側縁部が直線で、両端部が丸味を帯びた溝状形である。規模は、開口



第51図　第5号溝状ピット出土遺物

第15表　第5号溝状ピット出土遺物

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材	備　　考
1	第51図－1	AZ－12　覆土	53	50	1.3	30.3	頁　岩	

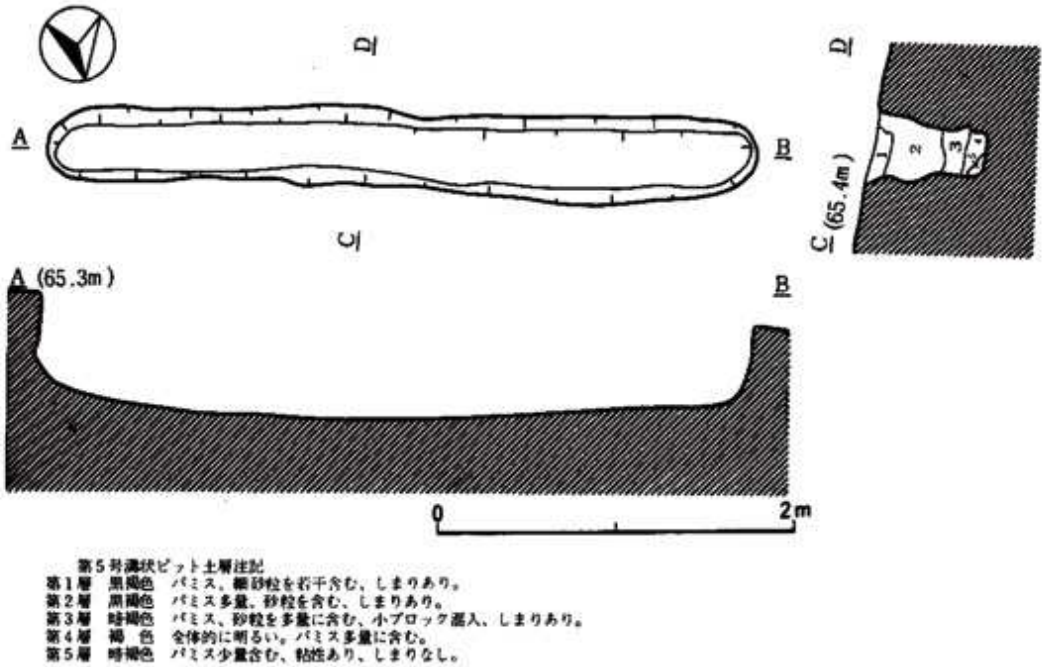
部が、長軸394cm、短軸44cm、壙底部は、長軸424cm、短軸30cmである。最深部の深さは、確認面から64cmで浅い。方位は、N－82°－Wを指す。

（壁・底面）

東壁は、段を有しており、他の壁は、底面から開口部に向かって緩やかに立ち上がる。

（出土遺物）

覆土から、スクレイパー1片が出土している。　　（成　田）



第5号溝状ピット土層注記
第1層　黒褐色　パミス、細砂粒を若干含む、しまりあり。
第2層　黒褐色　パミス多量、砂粒を含む、しまりあり。
第3層　暗褐色　パミス、砂粒を多量に含む、小ブロック混入、しまりあり。
第4層　褐　色　全体的に明るい。パミス多量に含む。
第5層　暗褐色　パミス少量含む、粘性あり、しまりなし。

第52図　第5号溝状ピット

第6号溝状ピット　（第53図）

（遺構の位置と確認）

台地西側の端で、谷に近いA地区ＡＢ・ＡＣ－11グリッドに位置している。第Ⅴ層面で、黒褐色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

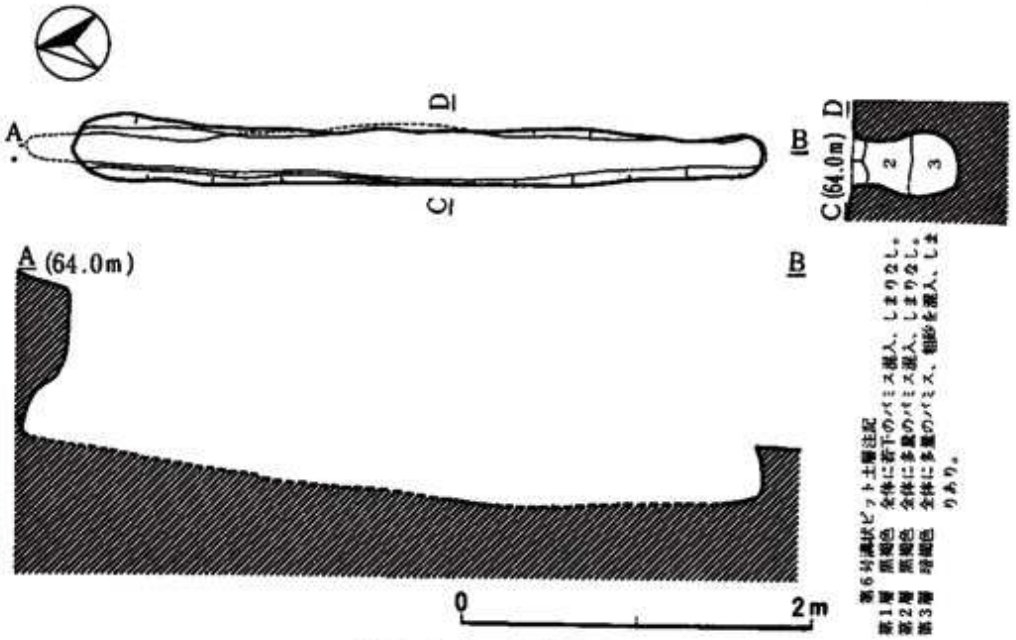
平面形は、側縁部が直線で、両端部が若干の丸味を帯びた溝状形である。規模は、開口部が、長軸383cm、短軸30cm、壙底部は、長軸421cm、短軸27cmである。最深部の深さは、確認面から86cmである。方位は、N－6°－Eを指す。

（壁・底面）

壁は、側縁部及び両端とも、しまりがあり、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は、「Ｕ」字状で、両端部が内傾している。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。　（岩　田）



第53図　第６号溝状ピット

第７号溝状ピット　（第54図）

（遺構の位置と確認）

台地斜面のＡ地区ＡＨ－ 14・15、ＡＩ－ 14の３グリッドにまたがり、第４号溝状ピットから約６m南寄りに位置する。本遺構の直上には、木根による攪乱が認められ、縄文時代中期末と思われる土器片が散布していた。第Ⅲ層を掘り下げた面で、黒褐色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

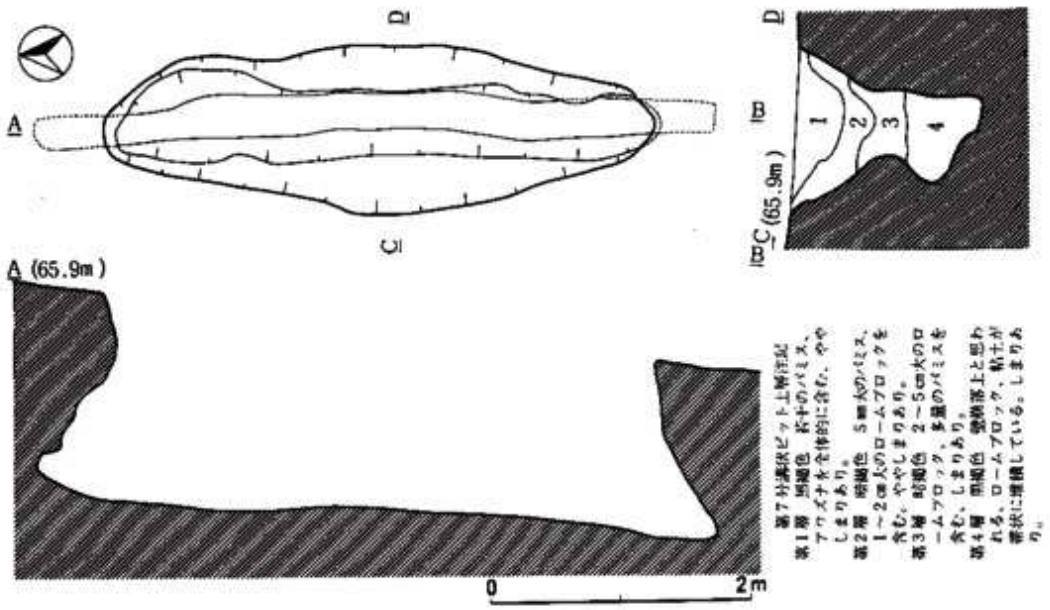
平面形は、側縁部及び両端部がともに丸味を帯びた葉巻状形である。開口部の短軸は、第４号溝状ピット同様、かなり幅広である。規模は、開口部が、長軸423cm、短軸128cm、壙底部は、長軸523cm、短軸28cmである。最深部の深さは、確認面から158cmである。方位は、Ｎ－ ２°－Ｅとほぼ真北を指す。

（壁・底面）

側縁部及び両端部の壁はしまりがなく、崩落が激しい。底面はほぼ平坦で、両端部が内傾する。

（出土遺物）

遺物は出土しなかった。　（岩　田）



第54図　第７号溝状ピット

6．風　倒　木

第１号風倒木　（第55図）

（遺構の位置と確認）

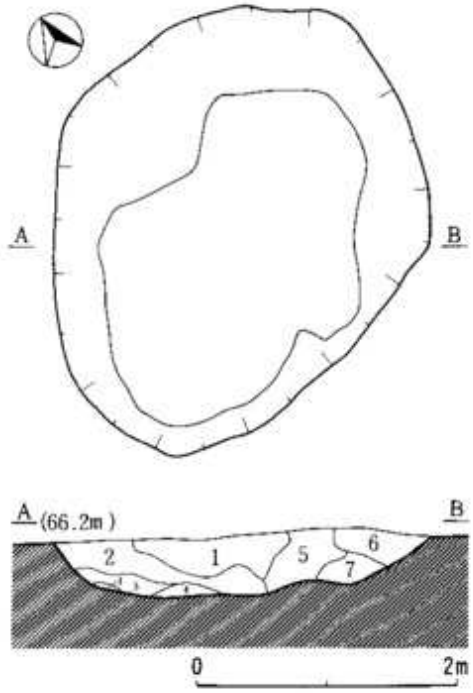
舌状地形の基部Ｅ地区、ＢＢ・ＢＣ－11・12グリッドに位置している。第Ⅴ層で落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、西側が大きく張り出す不整形である。規模は、開口部が、長軸360cm、短軸273cm、壙底部は、長軸273cm、短軸205cmである。最深部の深さは、確認面から43cmである。

（壁・底面）

壁は、すべて緩やかに立ち上がり、軟弱である。底面は起伏がある。



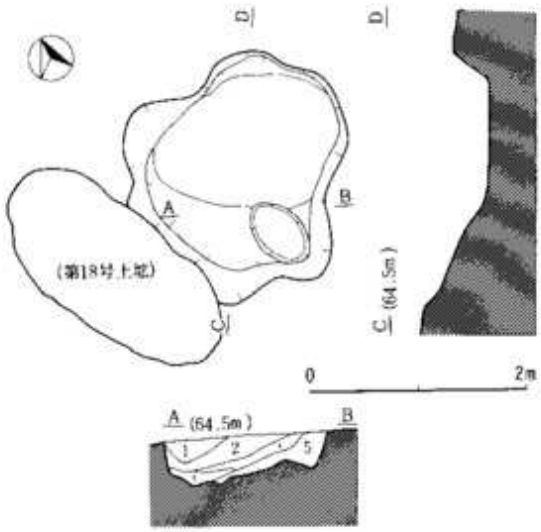
第１号風倒木土層注記
第１層　黄褐色　多量のパミスを含む。黒褐色土がブロック状に混入。しまりなし。
第２層　黒褐色　パミス、軽石を含む。しまりなし。
第３層　黒褐色　パミスを少量含む。ややしまりあり。
第４層　黄褐色　パミスを多量に含む。しまりなし。
第５層　暗褐色　黄褐色土がブロック状に混入。しまりあり。
第６層　暗褐色　パミス多量、細砂粒少量含む。しまりあり。
第７層　暗褐色　黄褐色土ブロックが混入している。しまりあり。

第55図　第１号風倒木

第２号風倒木　（第56・57図）

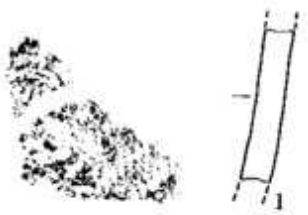
（遺構の位置と確認）

舌状地形の先端部寄りのＥ地区、ＡＵ・ＡＴ－11・12グリッドに位置している。第Ⅴ層で落ち込みを確認した。



第２号風倒木土層注記
第１層　黒褐色　基本層序第Ⅳ層。
第２層　暗褐色　白色のパミス（0.2cm）多量、炭化物を若干含む。
第３層　灰白色粘土質　白色のパミス（1cm）を多量に含む。
第４層　暗褐色砂質土　白色のパミスを多量に含む。
第５層　黒　色　黄褐色のブロック（3～5cm）白色パミスを多量に含む。

第56図　第２号風倒木



第57図　第２号風倒木出土遺物

（重　　複）

第18号土壙と切り合っており、本遺構が古い。

（平面形・規模）

平面形は、プランが一定していない不整形を示している。規模は、開口部が、長軸230cm、短軸210cm、壙底部は、長軸185cm、短軸170cmである。最深部の深さは、確認面から44cmである。

（壁・底面）

壁は、南壁が緩やかに立ち上がっており、他の壁は、やや傾斜している。底面は、凹凸をなし、軟弱である。

（出土遺物）

覆土上位の第1層から、土器片が一片出土した。　（成　田）

図	図版番号	層位	P番号	部　位	外面施文	内面調整	備　考
1	第57図－1	1層	P－1	胴　部	縄文0段多条(RL)	横　位	裏面に縄文あり

第16表　第2号風土木出土遺物観察表

第3号風倒木　（第58図）

（遺構の位置と確認）

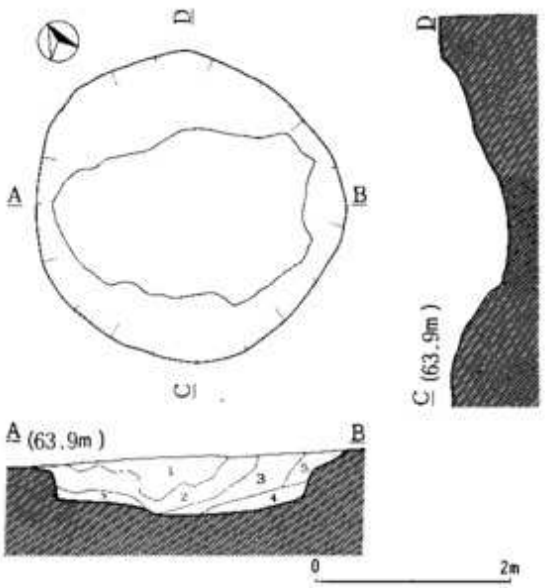
舌状地形の平坦部E地区、AS－7・8グリッドに位置している。第Ⅳ層上面で、黒色土の落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、ほぼ円形である。規模は、開口部が、長軸315cm、短軸256cm、壙底部は、長軸310cm、短軸170cmである。最深部の深さは、確認面から60cmである。

（壁・底面）

南・北側壁は、東・西側壁に較べ、かなり緩やかに立ち上がる。底面は凹凸している。



第3号風倒木土層注記
第1層　黒　色　浮石粒（0.2～1cm）多量に混入している。しまりなし。
第2層　褐　色　若干浮石粒を含む。しまりが若干みられる。
第3層　淡褐色　若干の浮石粒ロームブロックを含む。しまりがある。
第4層　暗褐色　ローム粒、浮石（0.2～2cm）を多量に含む。しまりなし。
第5層　褐　色　第2層に類似しているが若干浮石の量が多い。

第58図　第3号風倒木

第4号風倒木　（第59図）

（遺構の位置を確認）

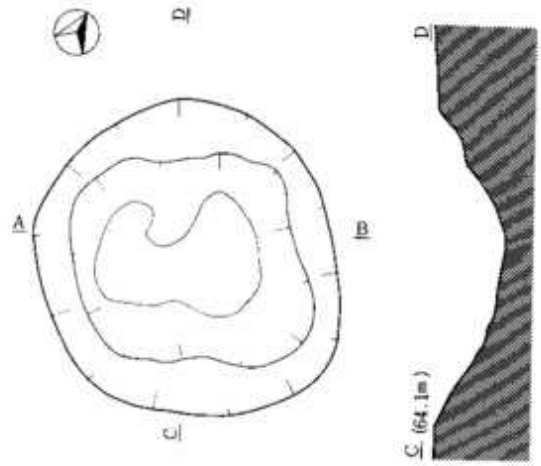
舌状地形の平坦部E地区、AT－8・9グリッドに位置している。第Ⅳ層上面で、黄褐色のローム質土を囲むような黒色土の落ち込みを確認した。

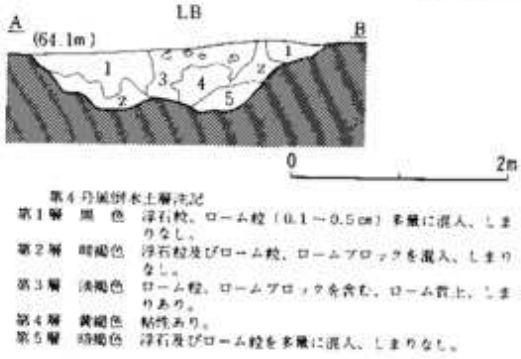
（平面形・規模）

平面形は、ほぼ円形である。規模は、開口部が、長軸300cm、短軸270cm、壙底部は、長軸205cm、短軸156cmである。最深部の深さは、確認面から47cmである。

（壁・底面）

壁は、すべて緩やかに立ち上がっている。底面は、中央部がやや盛り上がり、他は、凹凸がみられる。





第4号風倒木土層注記
第1層　黒　色　浮石粒、ローム粒（0.1～0.5cm）多量に混入、しまりなし。
第2層　暗褐色　浮石粒及びローム粒、ローム・ブロックを混入、しまりなし。
第3層　淡褐色　ローム粒、ローム・ブロックを含む、ローム質土、しまりあり。
第4層　黄褐色　粘性あり。
第5層　暗褐色　浮石及びローム粒を多量に混入、しまりなし。

第59図　第4号風倒木

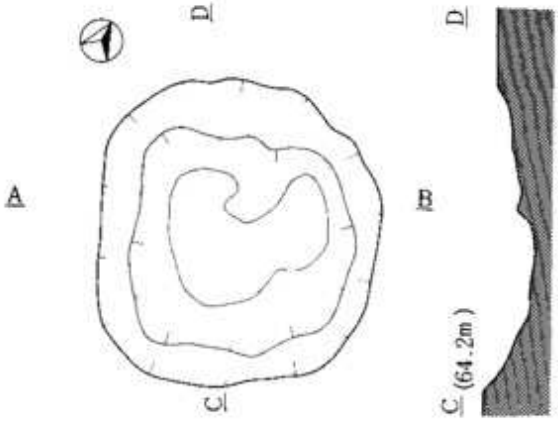
第5号風倒木　（第60図）

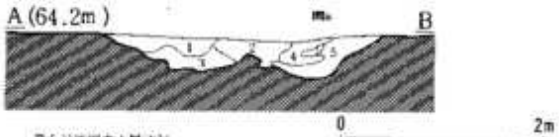
（遺構の位置と確認）

舌状地形の平坦部E地区、AU・AW－9グリッドに位置している。第Ⅳ層上面で、第4号風倒木と同じように、黄褐色のローム質土と、黒褐色土の落ち込みを確認した。

（平坦面・規模）

平坦面は、ほぼ円形である。規模は、開口部が、長軸290cm、短軸277cm、壙底部は、長軸157cm、短軸55cmである。最深部の深さは、確認面から62cmである。





第5号風倒木土層注記
第1層　黒　色　浮石粒（0.2～1cm）多量に含む、しまりなし。
第2層　暗褐色　浮石粒を若干含む、しまりなし。
第3層　褐　色　浮石粒及びローム粒、ローム・ブロックを含む、しまりなし。
第4層　淡褐色　粘性のあるローム質土に浮石を多量に含んでいる。
第5層　黄褐色　暗褐色　浮石粒及びローム粒（0.2～1cm）を多量に含む、しまりなし。
附属a　暗褐色　黒色土を含むブロック土。

第60図　第5号風倒木

（壁・底面）

底面は、中央部がやや盛り上がり、全体的に凹凸がみられる。　（中　島）

第6号風倒木　（第61図）

（遺構の位置と確認）

台地斜面のA地区AB・AC－13グリッドに位置している。黄褐色土で落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、ほぼ円形である。規模は、開口部が、長軸293cm、短軸288cm、壙底部は、長軸

145cm、短軸124cmである。最深部の探さは、確認面から66cmである。

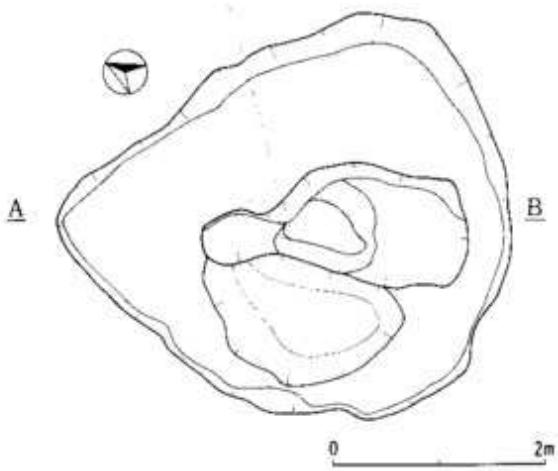
（壁・底面）

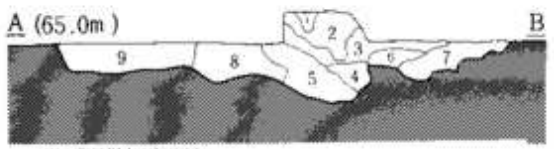
壁は、緩やかに立ち上がり、鍋底状である。底面は軟弱である。　（成田・佐藤）

第７号風倒木　（第62図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形の平坦部Ｅ地区ＡＹ・ＡＸ－11グリッドに位置している。黄褐色土上面で、ローム質土の盛り上がりを囲むような黒褐色土の落ち込みを確認した。

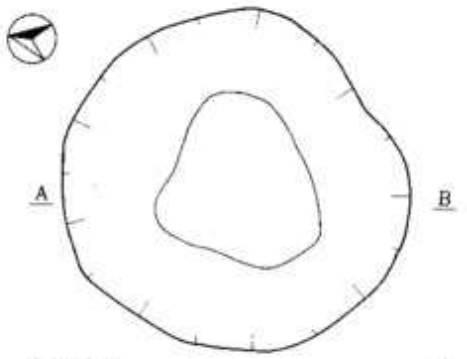




第７号風倒木土層注記

第１層	黒褐色	パミスを含み炭化物若干混入。しまりなし。
第２層	黄褐色	細砂粒を多量に含む。上層表面ザラザラ。しまりあり。
第３層	暗褐色	パミス多量黄褐色ブロック混入。しまりあり。
第４層	暗褐色	黄褐色ブロック、パミス多量に混入。しまりあり。
第５層	黒褐色	パミス多量黒褐色土粒混入。しまりあり。
第６層	黄褐色	黒褐色土混入。パミス多量に含む。しまりあり。
第７層	黒褐色	黄褐土ブロック混入。パミス多量に含む。
第８層	黄褐色	暗褐色土混入。パミス多量に含む。ややしまりあり。
第９層	暗褐色	パミス多量に含む。しまりなし。

第62図　第７号風倒木



第６号風倒木土層注記

第１層	黒　色	全体に0.2cm前後の白色パミスを混入、また黄褐色の0.5cm前後の火山灰を若干含む。しまりなし。
第２層	暗褐色	全体に0.3cm前後の黄褐色の火山灰を若干含む。しまりなし。
第３層	黒褐色	黄褐色の火山灰を若干含む。しまりなし。
第４層	暗褐色	黄褐色の火山灰が全体に混入。しまりあり。
第５層	暗褐色	黄褐色土が全体に混入。しまりなし。
第６層	黄褐色	
第７層	暗褐色	全体に黄褐色の火山灰を含む。ややしまりなし。

第61図　第６号風倒木

（平面形・規模）

平面形は、東側が張り出す不整楕円形である。底面の中央部には、不整形の小ピット２個を有する。規模は、開口部が、長軸425cm、短軸344cm、壙底部は、長軸414cm、短軸300cmである。最深部の探さは、確認面から90cmである。

（壁・底面）

壁は、すべて垂直気味に立ち上がる。底面は、凹凸して軟弱である。

第８号風倒木　（第63図）

（遺構の位置と確認）

台地斜面のD地区ＢＦ－21、ＢＥ・ＢＦ－22グリッドに位置している。第Ⅳ層の黒褐色土で落

落ち込みを確認した。

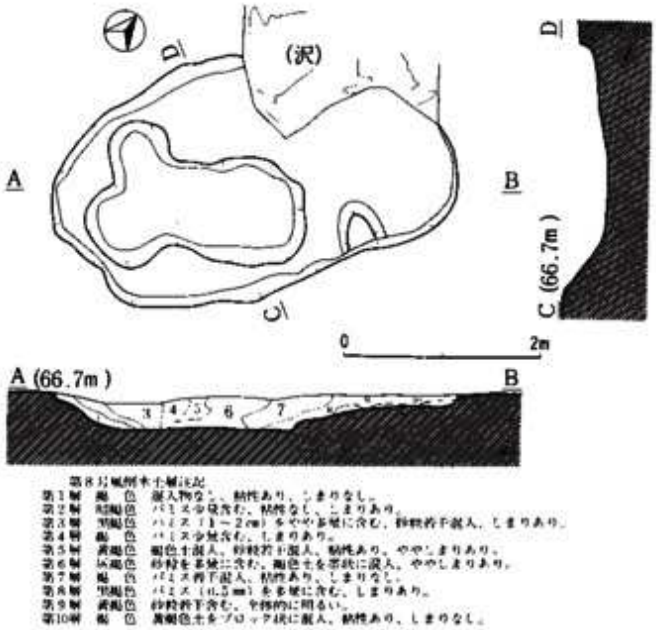
（平面形・規模）

平面形は、北側の一部が沢の侵食で不明であるが、北・南側が若干張り出す不整楕円形である。規模は、開口部が、長軸415cm、短軸245cm、壙底部は、長軸400cm、短軸214cmである。

最深部の深さは、確認面から32cmである。

（壁 ・ 底 面）

壁は、すべて垂直に立ち上がる。底面は、起伏があり軟弱である。



第63図　第８号風倒木

第９号風倒木　（第64図）

（遺構の位置と確認）

舌状地形の先端部寄りＥ地区ＡＲ－ ８ ・ ９グリッドに位置している。第Ⅲ層の黒褐色土で落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、不整形である。規模は、開口部が、長軸418cm、短軸352cm、壙底部は、長軸250cm、短軸232cmである。最深部の探さは、確認面から100cmである。

（壁 ・ 底 面）

壁は、中場で段を有し、軟弱である。底面は凹凸が激しい。

第10号風倒木　（第65・66図）

（遺構の位置と確認）

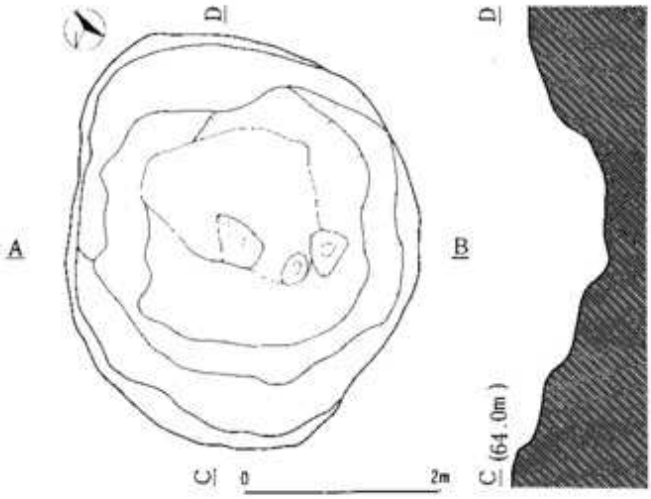
舌状地形の基部Ｅ地区ＢＡ・ＢＢ－ 10グリッドに位置している。第Ⅴ層の黄褐色土で落ち込みを確認した。

（平面形・規模）

平面形は、北側から張り出す不整形である。規模は、開口部が、長軸342cm、短軸258cm、壙底部は、長軸286cm、短軸203cmである。最深部の深さは、確認面から54cmである。

（壁 ・ 底 面）

壁は、すべて緩やかに立ち上がり、軟弱である。底面はほぼ平坦である。

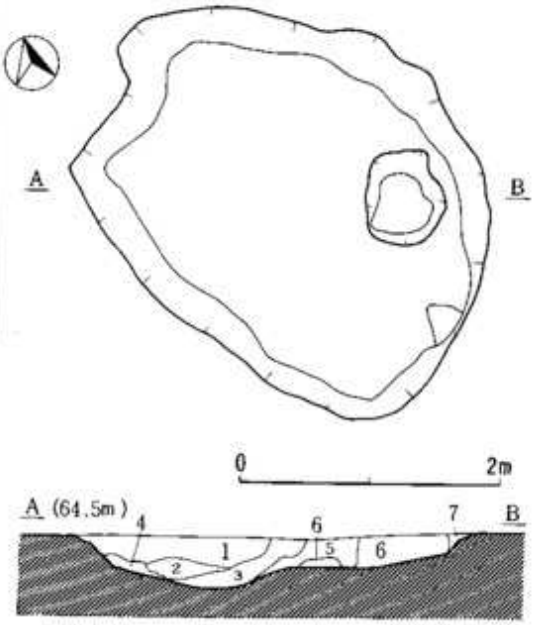


第9号風倒木土層注記
第1層　黒褐色　粘土まじりシルト質程（0.5～1cm）程度の褐色、浮石を少量含む。
第2層　淡黒褐色　粘土まじりシルト質、基層に漸移又はIV層からの浮石の混入をうける火山灰層との境では漸移する。
第3層　褐灰色(火山灰)　細粒砂質シルト質直径（0.5～1cm）程度の白色浮石を若干含む。0.5cm程度のラピリを含む。
第4層　淡黄褐色　浮石層。粒径（0.5～1.5mm）程度の浮石層。
第5層　青灰色　シルト質、火山灰層、ラピリを含む。

第64図　第9号風倒木

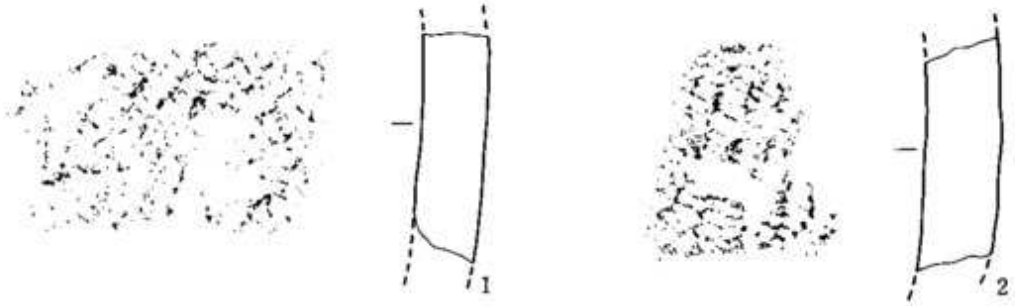
（出土遺物）

遺構確認面の第Ⅴ層から土器片が2片出土した。　（成　田）



第10号風倒木土層注記
第1層　黒褐色　小パミスを多量に含む、しまりあり。
第2層　黒褐色　パミス及び黒褐色土混入、ややしまりあり。
第3層　黒褐色　パミス及び黒褐色土がまだら状に混入、ややしまりあり。
第4層　黒褐色　全体的にパミスを含む、もろい。
第5層　黒褐色　暗褐色土混入、ロームがブロック状に含む、しまりあり。
第6層　黒褐色　若干砂粒を含む、しまりあり。
第7層　暗褐色　若干パミスを含む、しまりなし。

第66図　第10号風倒木



第65図　第10号風倒木出土遺物

図	図版番号	層位	P番号	部　位	外面施文	内面調整	備　考
1	第65図－1	5層		胴　部	縄文0段多条(LR)	横　位	胎土に多量の繊維を含む
2	〃　－2	〃		〃	〃	〃	〃

第17表　第10号風倒木出土遺物観察表

出　土　遺　物

1．遺物の出土状況（第67～69図）

縄文時代早期の貝殻・沈線文系土器は、調査区E地区の先端部及びA地区に面した沢沿いのみに分布し、すべて第Ⅳ層から出土したが復原できる資料はない。その他の縄文系土器も、調査区A・D・E地区の沢沿いに分布し、早期同様、第Ⅳ層から出土している。

縄文時代前期の土器は、調査区D・E地区の北東側斜面を中心として、小ブロック状に数ケ所密集する部分が見られ、ブロック内で接合するものもある。出土層位は第Ⅳ層である。

縄文時代中期の土器では、円筒系土器と大木系土器が出土している。これらの分布を比較すると、円筒系土器は、E地区舌状台地の平坦部及び先端部に集中して出土し、大木系土器は、A地区の台地斜面に小範囲（AH・AI－14グリッド）にまとまって出土している。

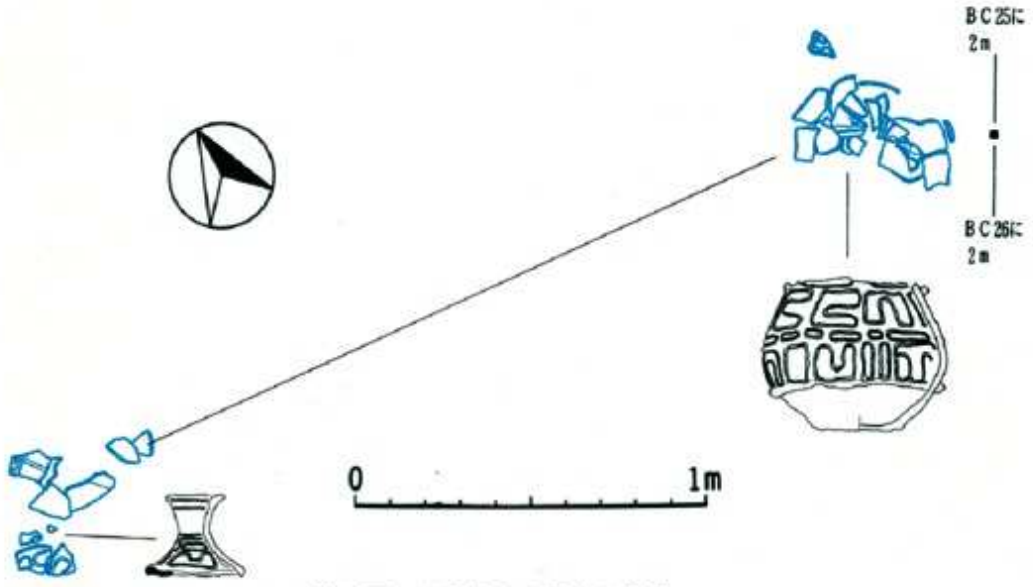
円筒系土器の接合関係は、第80図－2で、AN－7・AO－5・AQ－4の接合であり、接合間隔は、約8mである。

縄文時代後期の土器は、本遺跡で最も多く出土している。縄文時代後期前半に位置づけられる土器と、後期中葉の土器に分けて出土状態を記述する。

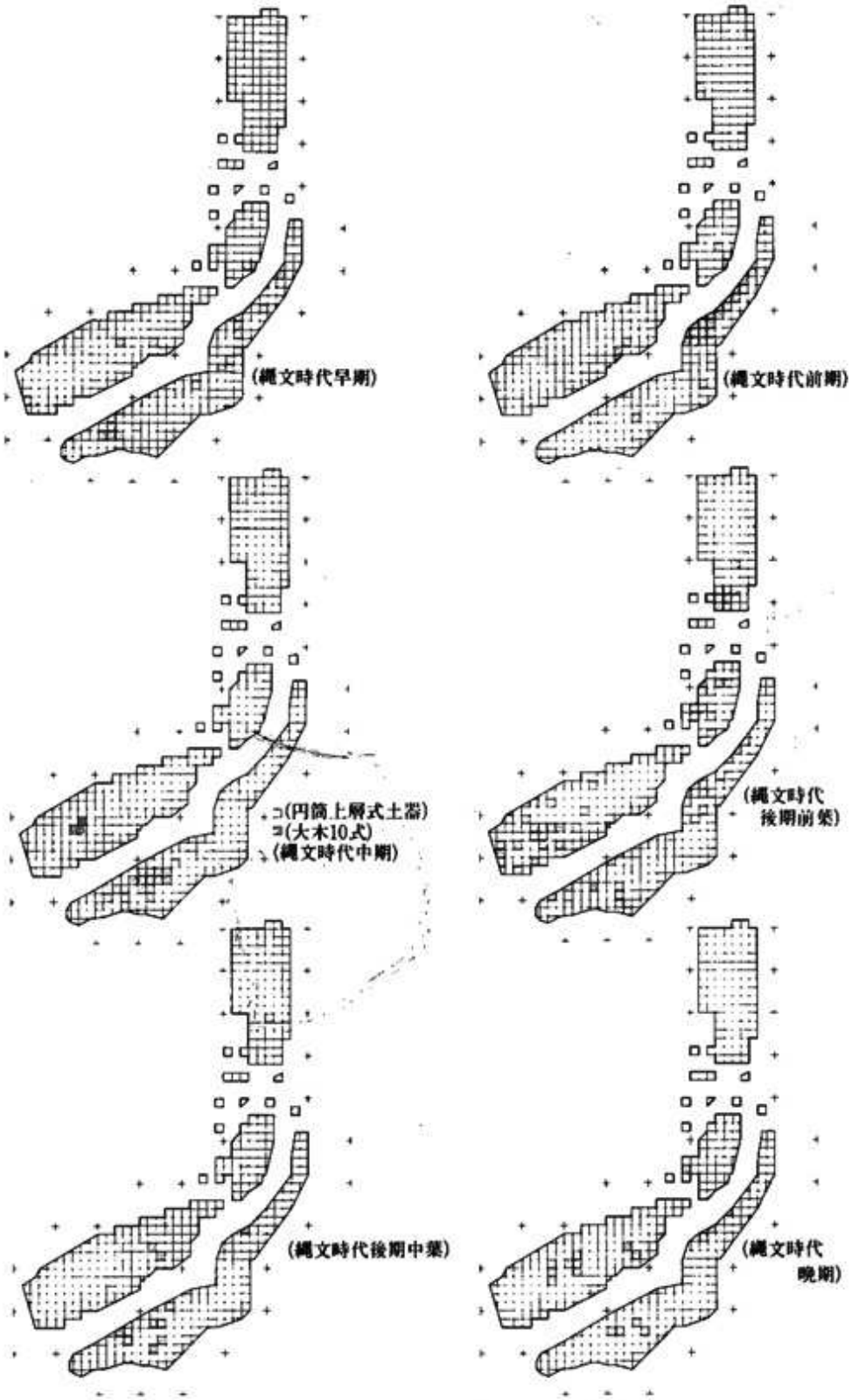
縄文時代後期前半の土器は、A～E地区に広範囲に分布しているが、E地区では少なく、B・C地区に集中している。

切断蓋付土器（第67図）は、胴部が直立し、蓋部は横位につぶれた状態で、胴部と蓋部は2m離れて出土した。掘り方などの施設はみられない。

撚糸文の分布は、A地区の西側と、C地区の一画でしか出土していない。また、磨消縄文は



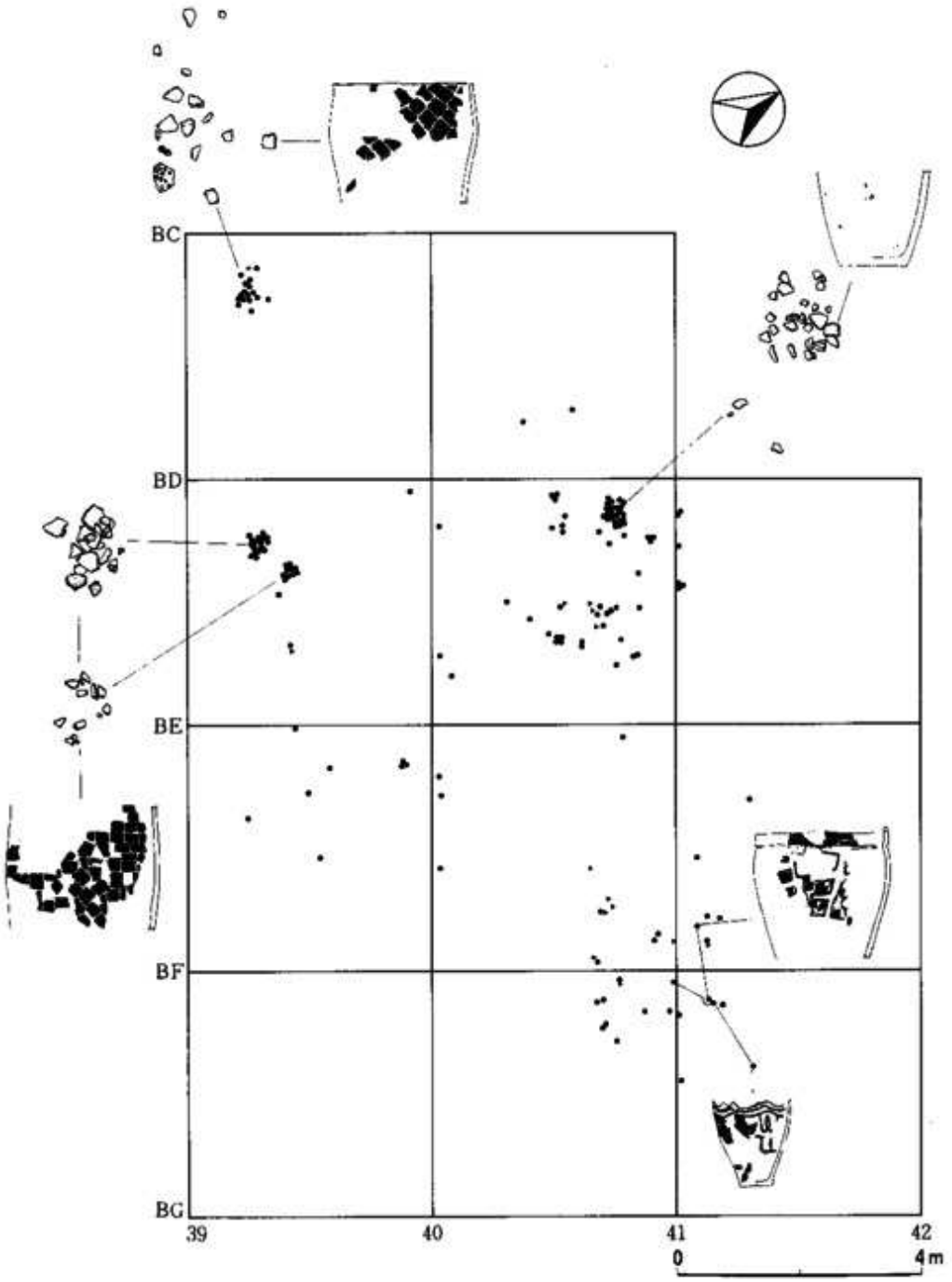
第67図　切断蓋付土器出土状態



第68図　縄文時代早期～晩期土器分布図

B・C地区にまとまって出土している。他の土器は、広範囲な散布状況を示している。

縄文時代後期中葉の土器は、A・C・D・E地区から出土しており、特に、E地区の舌状台地から先端部にかけての出土が多い。



第69図　第Ⅳ群土器出土状態（C地区第Ⅱ層）

縄文時代晩期の土器は、Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅ地区の第Ⅰ・Ⅱ層中から出土しており、特に、ＡＬ－４グリッドを中心としたＡ地区や、ＢＢ－18グリッドを中心とした沢寄りのＤ地区に小ブロック状で出土している。

ほかに、縄文時代の土偶や土製品は、広い範囲から出土している。また、中世陶磁器及び泥面子・古銭等は、Ａ～Ｃ地区の台地斜面上から多く出土した。　　（成田　滋彦）

２．土　　器

（縄文時代）

第Ⅰ群土器（縄文時代早期土器）第71・72・73図、第32・33図版

本遺跡出土の縄文時代早期の土器は、貝殻文・沈線文を施文する土器と、縄文を施文する土器に大別される。型式的には、早期中葉に位置づけられる吹切沢式、物見台式、ムシリⅠ式類似土器、早稲田Ⅴ類土器が含まれる。しかし、いずれも断片的な資料で、土器群の実体を十分に満たしておらず、また、層位的にもその上下関係を把握することが困難な出土状態であったために、ここでは概略的な説明にとどめる。施文文様の差異によって、以下のように分類した。

ａ類土器（貝殻押し引き文、貝殻条痕文を施文する土器）第71図１～４・14・15

小破片のため、全体の器形を判断することはできないが、胴部より口縁部が若干外反する尖底深鉢と思われる。器厚は、６～８㎜と薄手で、胎土には、繊維を含まず細砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は赤褐色である。口唇部は丸味を帯び、口唇部裏面は若干薄くなる。底部はいずれも尖底で鋭角なものと若干丸味を帯びるものがある。

文様は、器外面に３～４条の貝殻連続押し引き文を口縁に平行に施文し、その下部に、連続する山形の押し引き文を施文し、これらを数段、胴部半ばまで施文している。胴部下半から底部にかけては、無文ないしは縦位、斜位の貝殻条痕文が施文される。器外面は研磨され、裏面には横位の条痕文がみられる。

ｂ類土器（貝殻腹縁文、沈線を施文する土器）第71図５～10

小破片のため、全体の器形を判断することはできないが、口縁部が若干内湾する尖底深鉢と思われる。器厚は、10㎜前後とａ類に比べて厚く、胎土には、繊維を含まず細砂粒を若干含み、焼成は良好である。色調は暗褐色である。口唇部は丸味を帯び、口唇部裏側には工具による刻み目を施文する。

文様は、貝殻の先端の連続移動の刺突による沈線となるもの、沈線と貝殻腹縁文を施文するものなどがある。器外面は研磨され、内面にも縦位のナデがみられる。

c 類土器（刺突・沈線を施文する土器）第71図11～13

口縁部破片のみの出土であるため、全体の器形を判断することはできないが、口縁が胴部より直立する形状である。底部の形状は不明である。器厚は、6～8㎜で、胎土には繊維を含まず緻密で、焼成も良好である。色調は赤褐色である。口唇部は、丸味を帯びる部分が一部みられるものの、おおむね平坦である。

文様は、口縁部に平行な浅い2本の沈線を施し、それによって表出された隆起した部分に、一定の方向から工具による細かい刺突を連続している。これを口縁部文様帯とし、その直下に4～5条を1単位として浅い沈線（条痕）を斜位に施文する。裏面は横位のナデがみられる。

d 類土器（縄文を施文する土器）第70・72・73図

本類として一括する資料は、従来早稲田Ⅴ類土器として把握されてきた土器に比定されるもので、縄文時代早期末葉に位置する縄文－平底を基本とする－群である。

口縁部の形状は、胴部半ばより直立するものや外反するものがあるが、主体を占めるのは後者である。また、口唇部が外側につまみ出されたように外反するものもある。口唇部のほとんどが丸味をもち、指ナデにより割合滑らかに整形されているものが一般的であるが、中には、工具を用いて平坦に整形しているものもいくらかみられる。口唇部に文様を施文しないのが一般的であるが、中には原体の末端圧痕（刺突）を持つものがある。器厚は、10～12㎜と厚く、また、胎土に相当量の植物性繊維を混入しているのが一般的であり、そのためか、本類土器は全般にもろい感じを受ける。

器面には、原体を不規則な方向に回転させ、不整な縄文を施文するのが特徴である。縄文原体は0段多条のものが主体を占めるが、そのほかに、L$\left\{\begin{smallmatrix}R\\R\end{smallmatrix}\right.$、R$\left\{\begin{smallmatrix}L\\L\end{smallmatrix}\right.$の原体もみられる。また、本類土器にのみみられる特殊な原体として(1)右撚りと左撚りの原体を一緒に撚り合わせることによって、一方の原体に撚り戻しがみられるもので、回転施文した場合綾杉状に近い文様を表出するもの、(2)1本の軸縄に別な原体（通常は1段の撚り）を巻きつけてつくられる原体で、付加条縄文と呼ばれているものの2種がある。また、裏面は無文で指頭圧痕を顕著に残すものが主体を占め、その中には、部分的に粗くナデあげ平坦にしているものもいくつかみられるが器表面と同一の原体を用いて縄文を施文する方法が若干ある。その他、条痕によって内面調整をしているものもある。底部は1片のみの出土であるが、周囲が外に張り出す独特の形状をもっている。

第Ⅱ群土器（縄文時代前期土器）第70・74・75・76・77・78図、第33・34・35・36図版

本遺跡からは、縄文時代早期末葉に位置する早稲田Ⅴ類土器と前期初頭に位置付けられる長

七谷地Ⅲ群土器との間を埋めると想定される土器及び、長七谷地Ⅲ群に共伴あるいは後続する可能性のある土器が出土した。しかし、層位的にその上下関係を把握するまでには至らなかったため、ここでは、主として施文文様をもとに次のように分類した。

a類土器（早稲田Ⅴ類と長七谷地Ⅲ群の間に位置する土器）第70・74・75図

a－1類　口縁部に原体側面圧痕文による文様帯をもつもの

器形は、口縁部が若干外反する丸底深鉢土器と思われる。器厚は、10～15㎜で、胎土に繊維を相当量含み、焼成は、早稲田Ⅴ類に比べて良好である。色調は赤褐色を基調とする。（第70図－3）は口唇が薄く整形されているが、（第75図－1）は指頭により平坦に整形され、縄文を施文している。また、内面にも縄文を施文するものである。器面に、ナデが観察されるが、長七谷地Ⅲ群に比べて粗く、口縁部に、口唇直下より原体側面圧痕による幅約10㎝の文様帯をもつのが特徴である。口縁に平行な2条の圧痕文を施文し、文様帯の幅を定めた後、その間を、交差する連続山形文状に、または綾杉状に圧痕する。胴部には、撚りの整然とした0段多条の縄文を施文する。（第70図－3）は、2種の原体を用いて、縦位の羽状縄文を構成するものである。（第75図－1）は、隆帯をもち、その上に原体の末端圧痕（刺突）が施される。胴部には0段多条の縄文が施文されるが、羽状を構成するかどうかは不明である。

a－2類　器表面に縄文を施文するもの

以下、施文文様の種類、内面文様等の有無により細分した。（細分された資料の数はきわめて少ないが、今後、個々が一型式として止揚される可能性があるため、あえて分類した）

a－2A　器表のみに縄文を施文するもの

・条が横走するもの

器形は、口縁部が直立し、底部は丸底の深鉢と推定される。器厚10～12㎜と、早稲田Ⅴ類に比べ薄手で、胎土には相当量の繊維を含み、焼成は良好である。口唇部は、指頭により平坦に整形される。器面には、0段多条の原体による縄文が施文され、口縁～胴部下半までは条が横走し、それ以下は、条が交差する。内面は、工具による横位のナデが部分的にみられる。

・部分的に羽状を構成するもの

口縁部が波状の深鉢で、形状は口縁部が直立し、底部は丸底と推定される。器厚は、12～15㎜で、胎土には相当量の繊維を含み、焼成はやや不良である。口唇部は内傾し、工具により整形されている。器面には、0段多条の原体による縄文が施文され、1種の原体を用いて、施文回転方向を変えることにより部分的に羽状を構成している。内面には、横位のナデがみられる。

a－2B　器表面に縄文を施文し、器内面に文様を持つもの

・内面に条痕を持つもの

底部の形状が、丸底及び丸底気味の尖底深鉢である。器厚は、6～10㎜で、胎土には若干の繊維を含み、焼成は良好である。器面には、原体を層状的に回転した縄文が施文される。施文回転方向は横位である。

・器表面に縄文を施文し、内面にも縄文を施文するもの

器形は、口縁部が若干外反する尖底深鉢である。器厚は、6～10㎜前後で、胎土には若干繊維を含み、焼成は良好である。口唇部は工具により平坦に整形されており、縄文が施文されている。底部は尖底であるが、先端が若干平坦になっている。内面には、器表面と同一の原体を用いて縄文を施文している。

b類土器（長七谷地Ⅲ群土器）第76・77図

器面に羽状縄文を施文する丸底の土器群である。器厚は、8～12㎜で、胎土には相当量の繊維を含み、焼成は良好である。色調は、赤褐色を基調とする。口唇部は、工具によって平坦に整形され、文様をもたないものが一般的である。口縁部には、幅5㎝以下の文様帯が構成される。文様には、無文、原体の側面圧痕などがみられる。また、隆帯を持ち、その上に原体の末端の圧痕がみられるものがある。胴部には、2種の0段多条の原体の横位回転による整然とした羽状縄文が施文される。縄文の節が明瞭なものと、不明瞭なものがあり、中には意図的に節を磨消するものがある。

c類土器（長七谷地Ⅲ群土器に共伴あるいは後続すると思われる土器）第78図

c－1類土器　器表面に複節斜縄文を施文するもの

器厚は、8～10㎜で、胎土には若干の繊維を含み、焼成は良好である。口唇部は、工具により平坦に整形されている。全体の器形は不明である。

c－2類土器　器表面に結束の羽状縄文を施文するもの

器厚は、12～15㎜で、胎土には若干の繊維を含み、焼成は良好である。口唇部は若干丸味を帯びる。全体の器形は不明であるが、表面は平滑にナデられ、その上、丹念に研磨されているものである。　（岡田　康博）

第Ⅲ群土器（縄文時代中期土器）第80・81・91～93図、第37・40・41図版

本群土器は、文様施文の差異からa～c類と3類に分類した。

（a　類）

本類は、口縁部文様帯を有し、隆起帯及び撚糸庄痕を有するものであるが、撚糸圧痕の施文方法で、a_1・a_2・a_3と3種に細分を行った。

（ａ－ １類）第80図－ １、第91・92図－ １～８

器形は、深鉢形であり、口頸部が内湾し、胴部上半が張る形状である。

口縁は、大型の山形状突起をもつものが多く、二股に分かれた弁状突起（第80図－ １）をもつものもみられる。

口縁部文様帯は、粘土紐と撚糸圧痕の組み合わせで構成している。文様要素の一つである粘土紐の貼り付けは、口唇部寄りと口頸部の内湾部に、横位に巡らして口縁部文様帯を構成し、山形突起の頂部から下部にかけて縦位及び斜位（第91図－ 10）に粘土紐を貼り付けている。粘土紐の上面には、連続した短縄文を施文している。撚糸圧痕は、横位に圧痕するものが主体であるが、横位圧痕間に短縄文（第92図－ ３）を圧痕するものもみられる。圧痕の原体は、ＬＲとＲＬの２種が確認されるが、ＬＲが主体を占める。

胴部文様帯は、単節の斜縄文を施文しており、ＬＲが多い。第91図－ ６は、撚糸圧痕にＬＲ、胴部の縄文にＲＬを用い、２種の原体を使用しているが、一般には、口縁部及び胴部の原体は同一原体を用いている。

（ａ－ ２類）第92図－ ９～11

本類は、口縁部破片であり、器形は深鉢形と思われる。

口縁部文様帯は、横位の撚糸圧痕間に、３本を一単位とした鋸歯状の文様を連続して施文しており、縄文の原体は、単節のＬＲを用いている。

胴部文様帯には、単節ＬＲの斜縄文を施文し、口縁部文様と同一の原体を使用している。

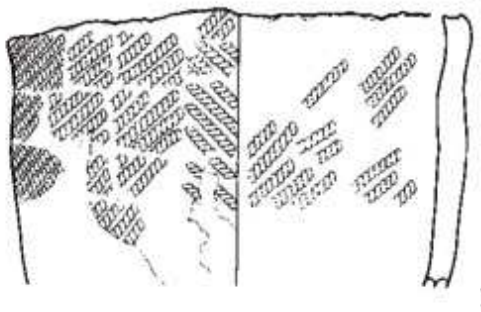
（ａ－ ３類）第92図－ 12・13

本類は、口縁部破片であり、器形は、口頭部が若干内湾する深鉢形と思われる。器厚は、６㎜と薄く、焼成は良好である。口縁部文様帯は、口頸部の下部に１条の粘土紐を巡らせて文様帯を構成している。文様帯の内部は、撚糸を用い、口唇部寄りと粘土紐の上部に３条を一単位として圧痕し、その間に、馬蹄形の圧痕を横位方向に施文している。また、口唇部及び粘土紐の上面には、連続の短縄文を圧痕している。胴部文様は、単節ＬＲを用いている。

（ｂ　類）第92図－ 14～20、第93図－ １～12

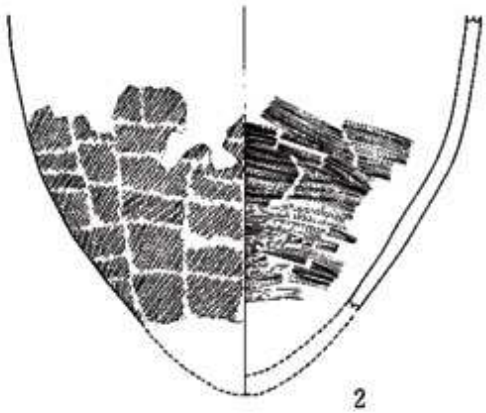
本類は、縄文・羽状縄文・綾絡文を施文しているものをｂ類とした。

斜縄文は、単節と複節があり、原体は、単節ＬＲと複節ＲＬＲを用いている。第92図－ 18～20は、折り返し口縁で、口唇部から胴部に至るまで複節を施文している。羽状縄文は、結節のある羽状縄文と、結節のない同一原体を用いて羽状縄文を構成するものがみられる。綾絡文は、結束第２種であり、単節の斜縄文を施文後に縦位に施文するものが多く、（第93図－ ９）は、横位に回転している例である。



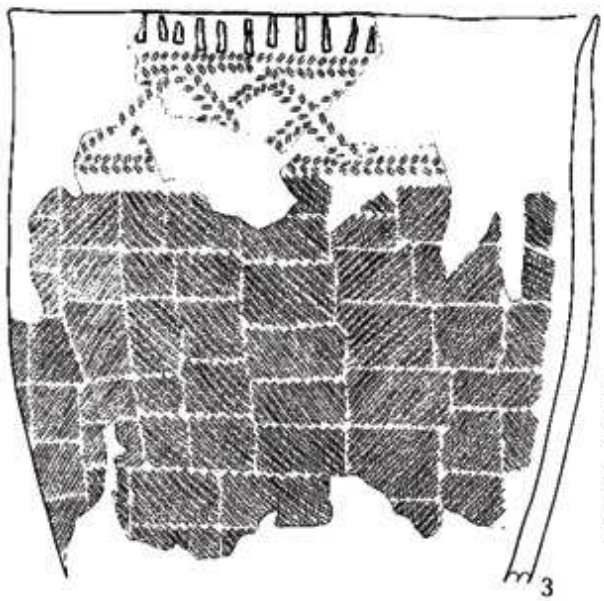
1

地区・層位　A地区　AS－17　Ⅳ層
分　　類　第Ⅰ群d類
外面文様　単節ＬＲ（横位同転）口体部に刺突
内面文様　単節ＬＲ（横位回転）
外面色調　赤　褐　色
内面色調　黒　褐　色
備　　考　炭化物付着
　　胎土には繊維を含む



2

地区・層位　E地区　AO－5　配石遺構
分　　類　第Ⅱ群a－2類
外面文様　単節ＬＲ（横位回転）
内面文様　条　痕
外面色調　赤　褐　色
内面色調　暗　褐　色
備　　考　胎土には繊維を含む

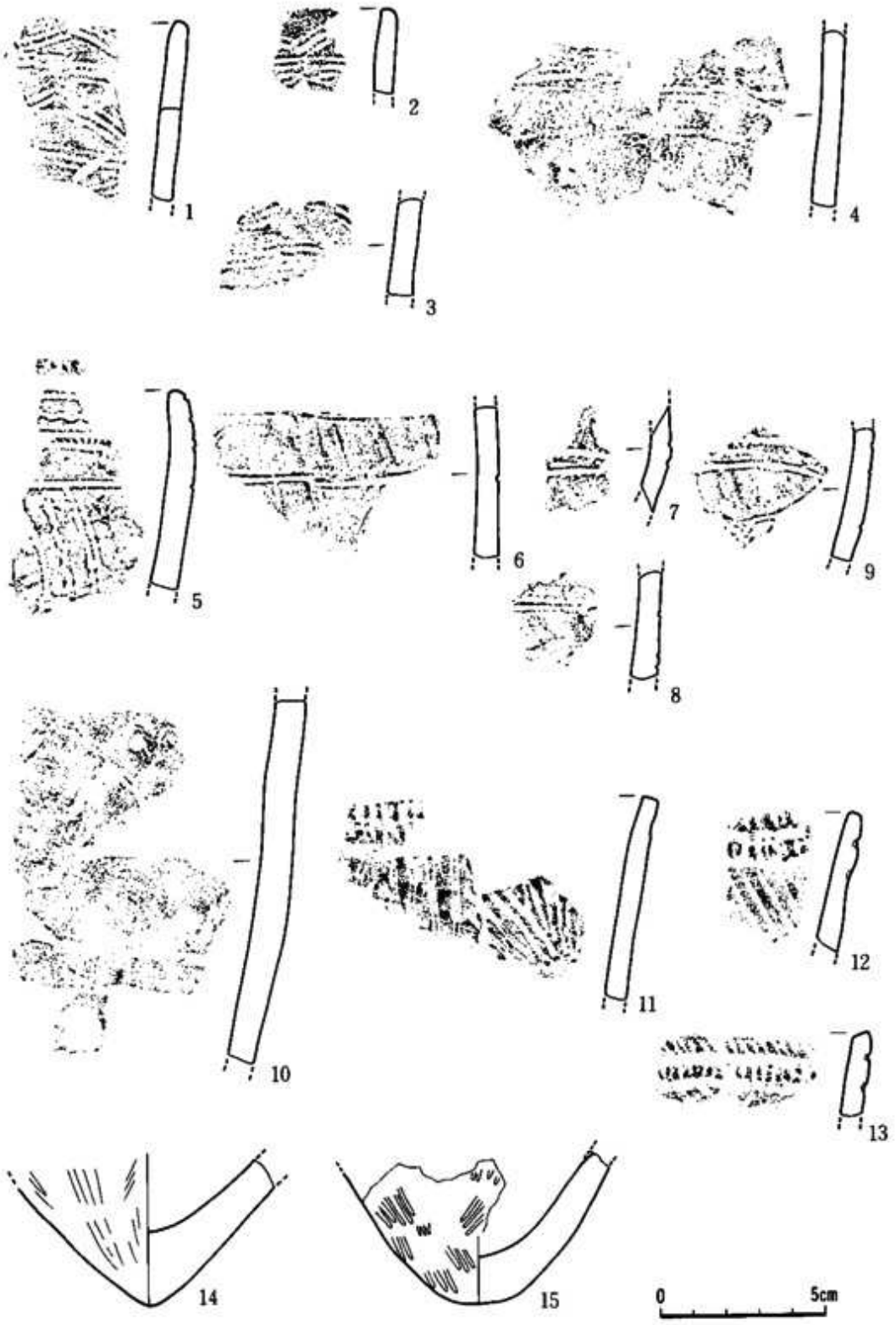


3

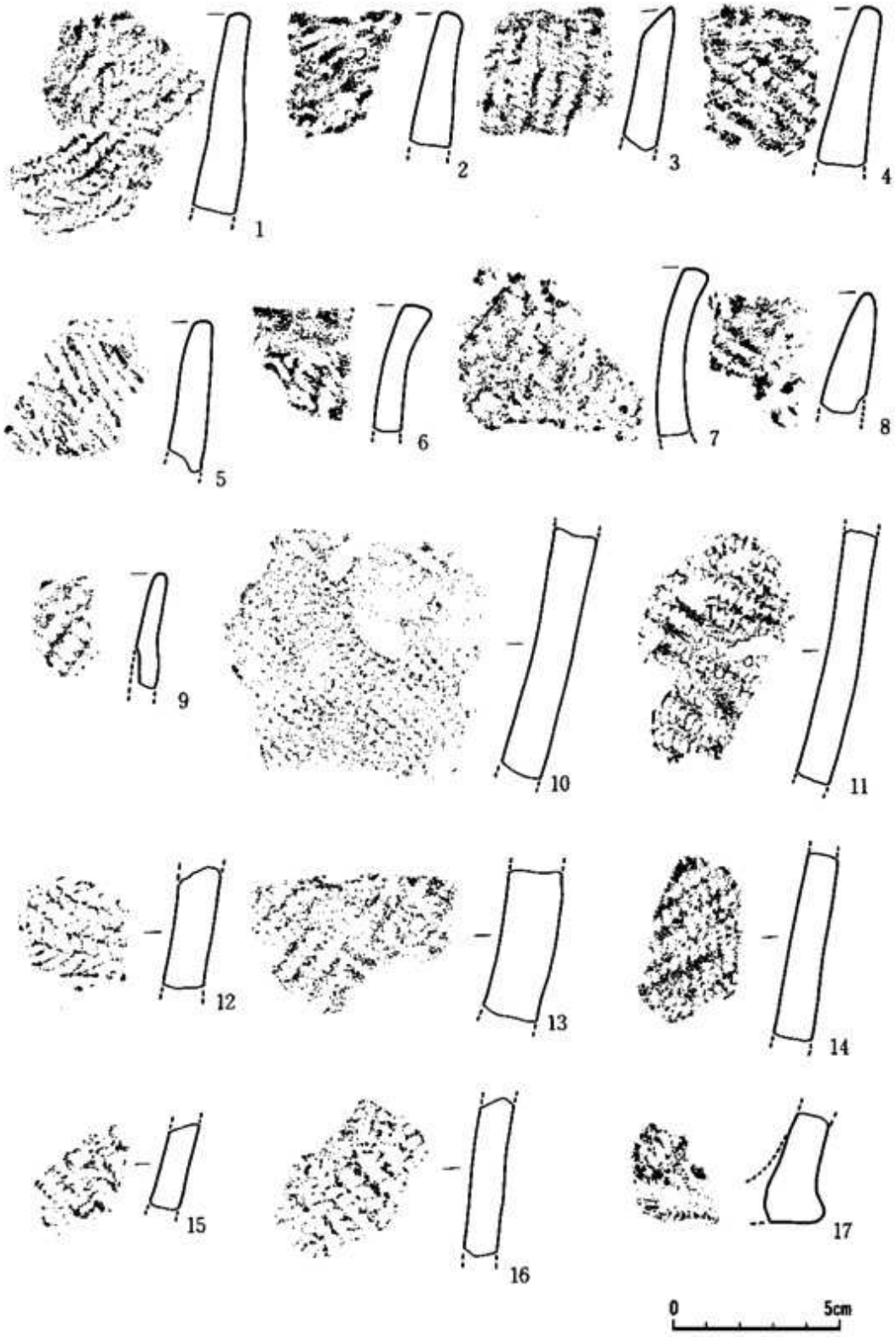
地区・層位　D地区　BI－27　Ⅳ層
分　　類　第Ⅱ群a－1類
外面文様　刺突、ＬＲ（0段多条）ＲＬ（0段多条）回転
　　（横位同転）側面圧痕
外面色調　赤　褐　色
内面色調　暗　褐　色
備　　考　胎土には繊維を含む

0　10cm

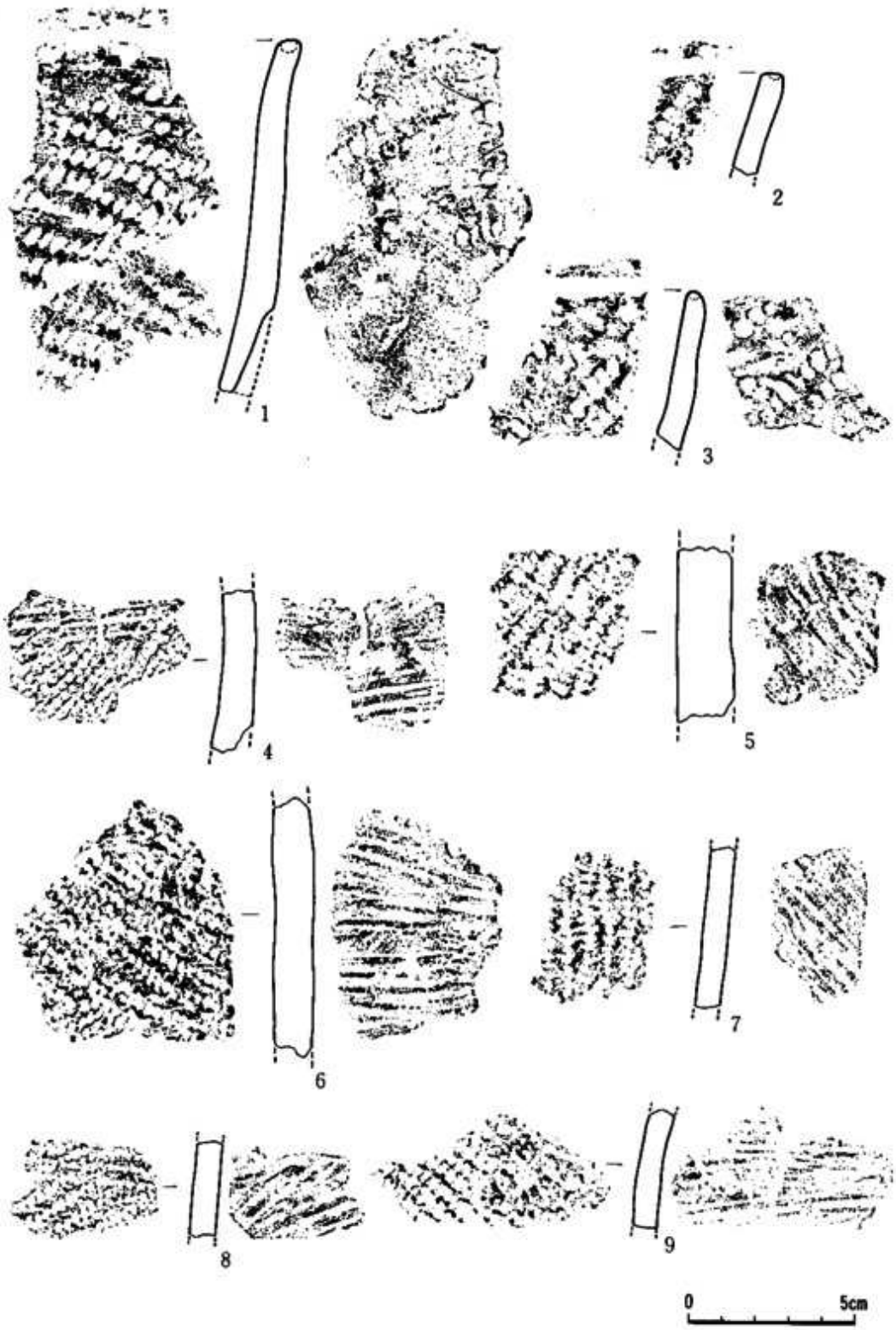
第70図　第Ⅰ・Ⅱ群土器実測図



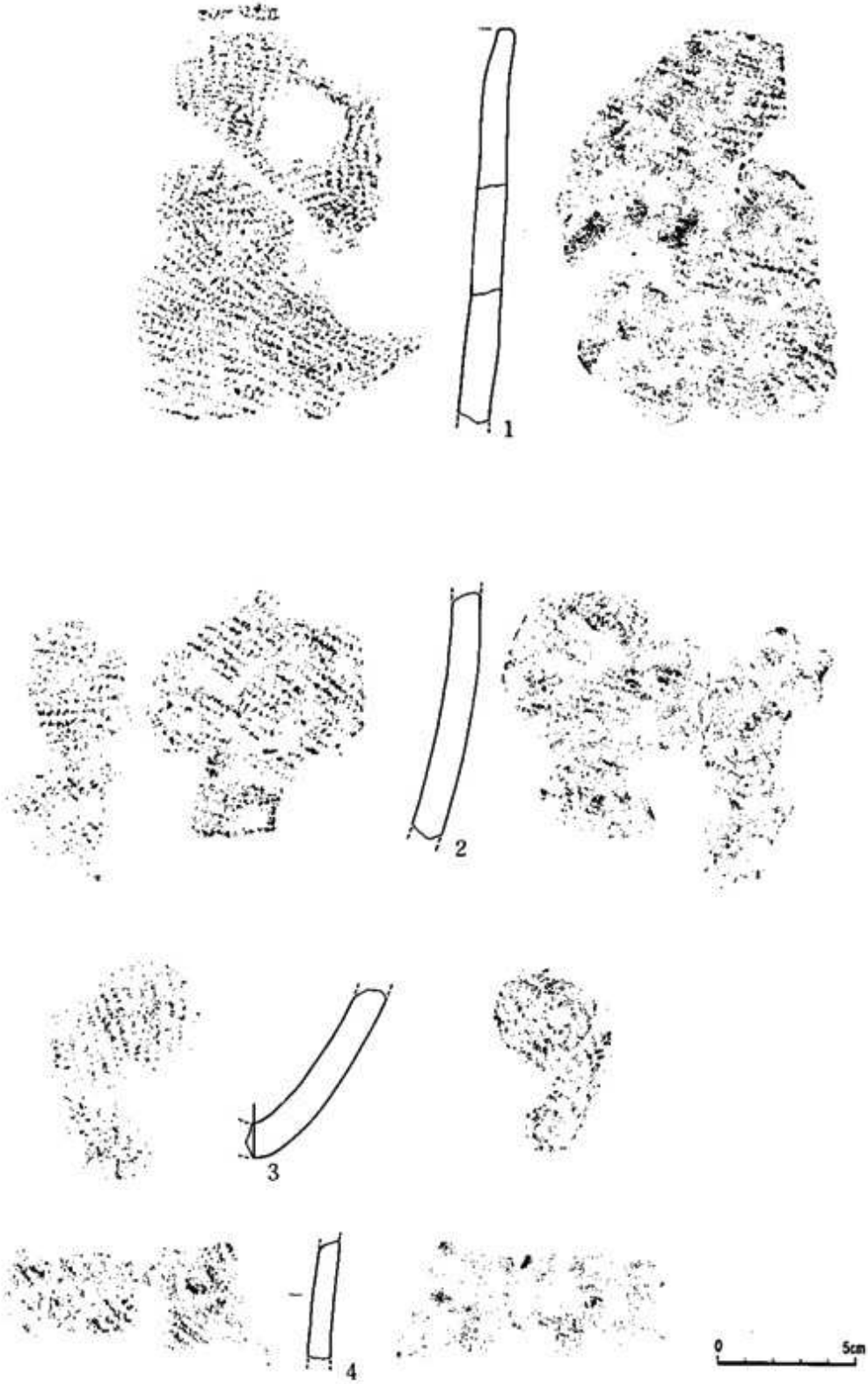
第71図　第Ⅰ群土器拓影図(1)



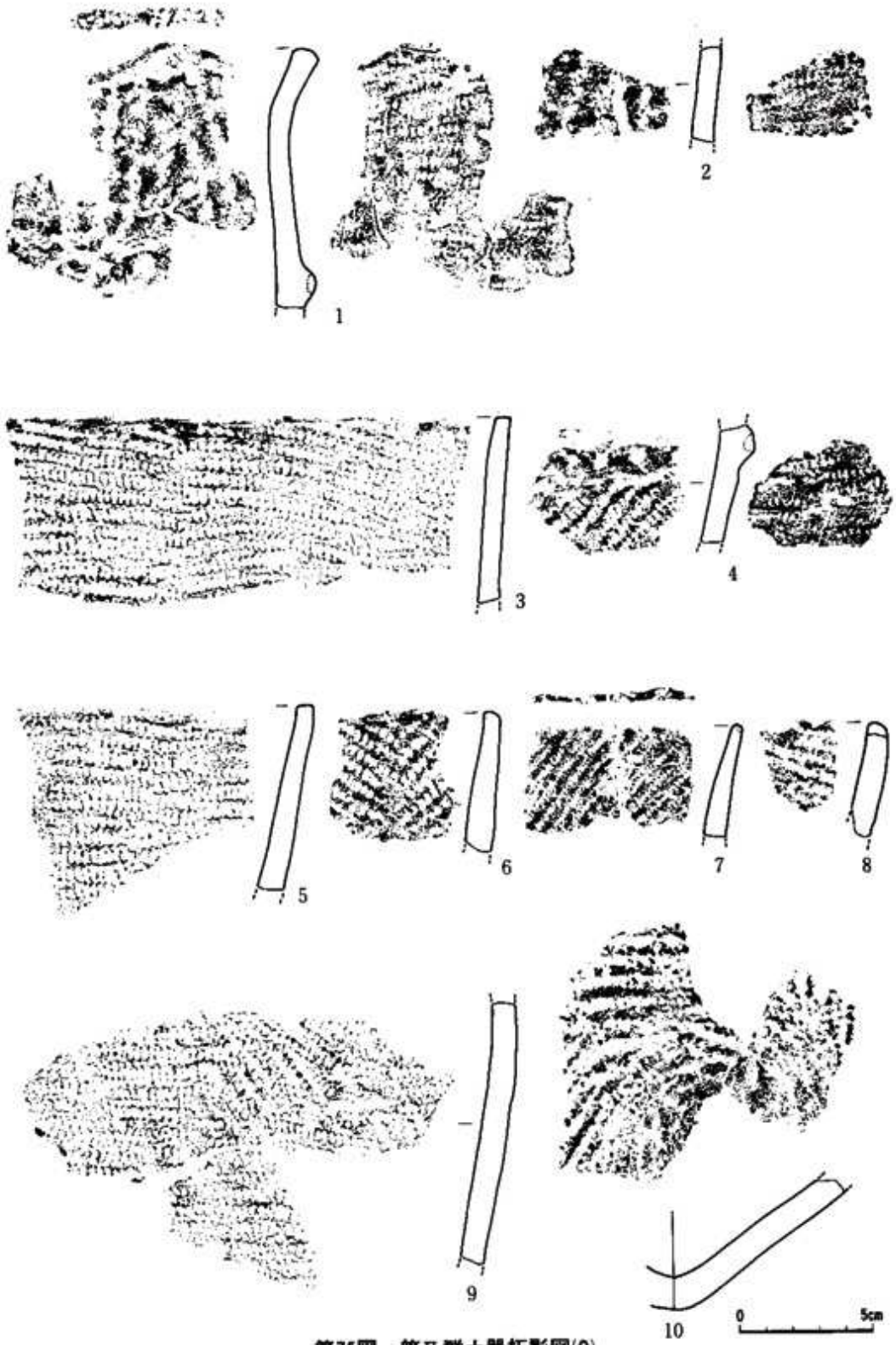
第72図　第Ⅰ群土器拓影図(2)



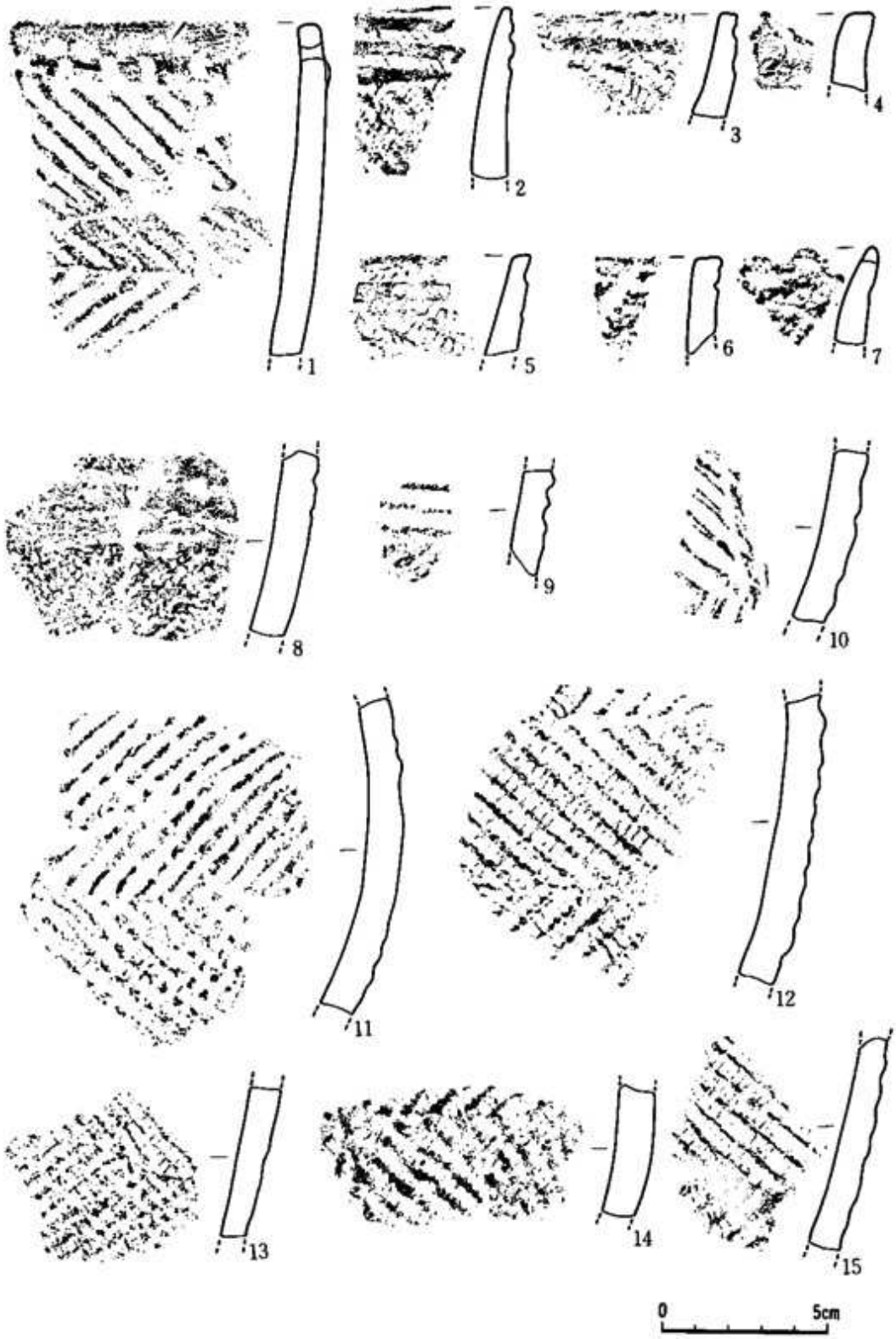
第73図　第Ⅰ群土器拓影図(3)



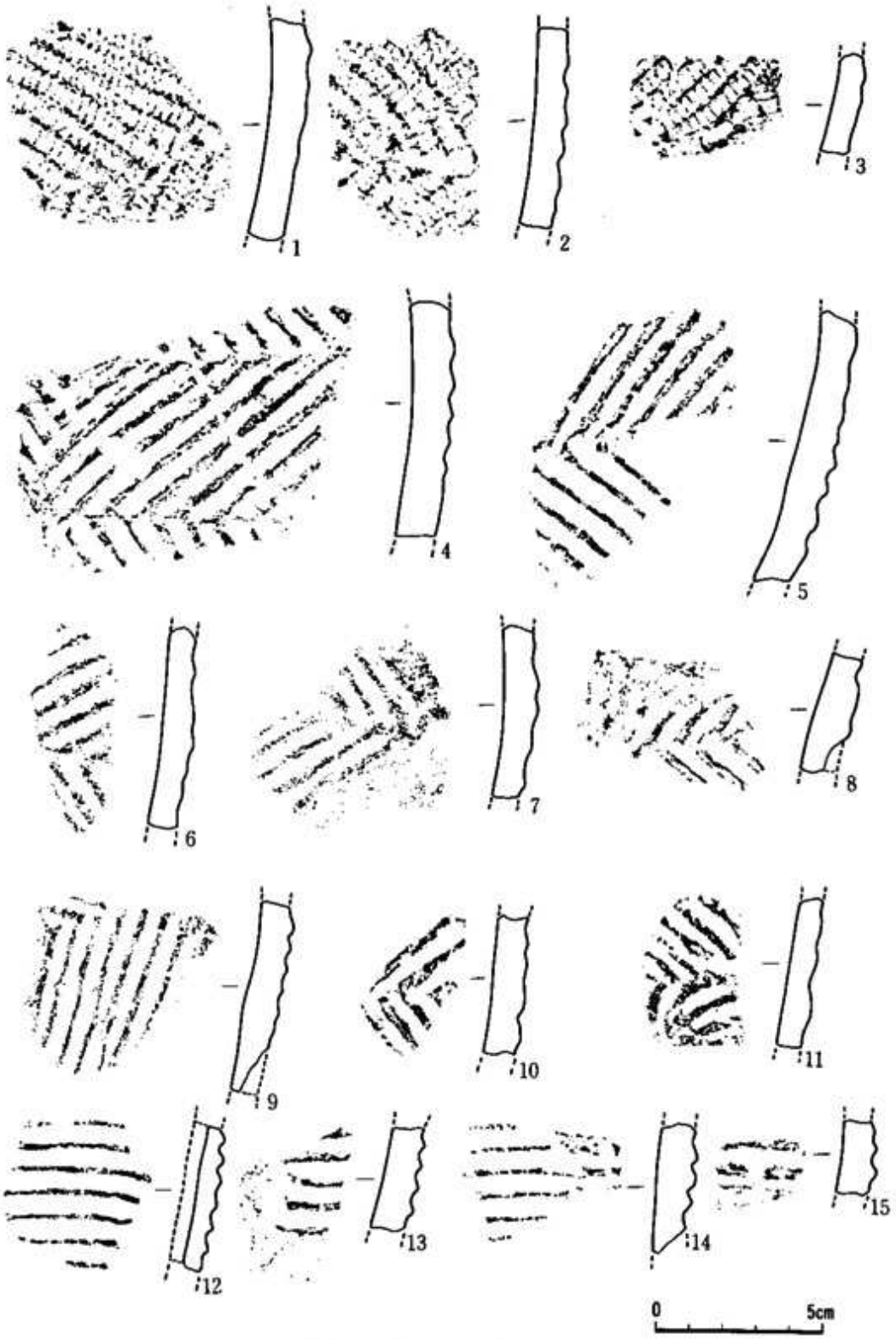
第74図　第Ⅱ群土器拓影図(1)



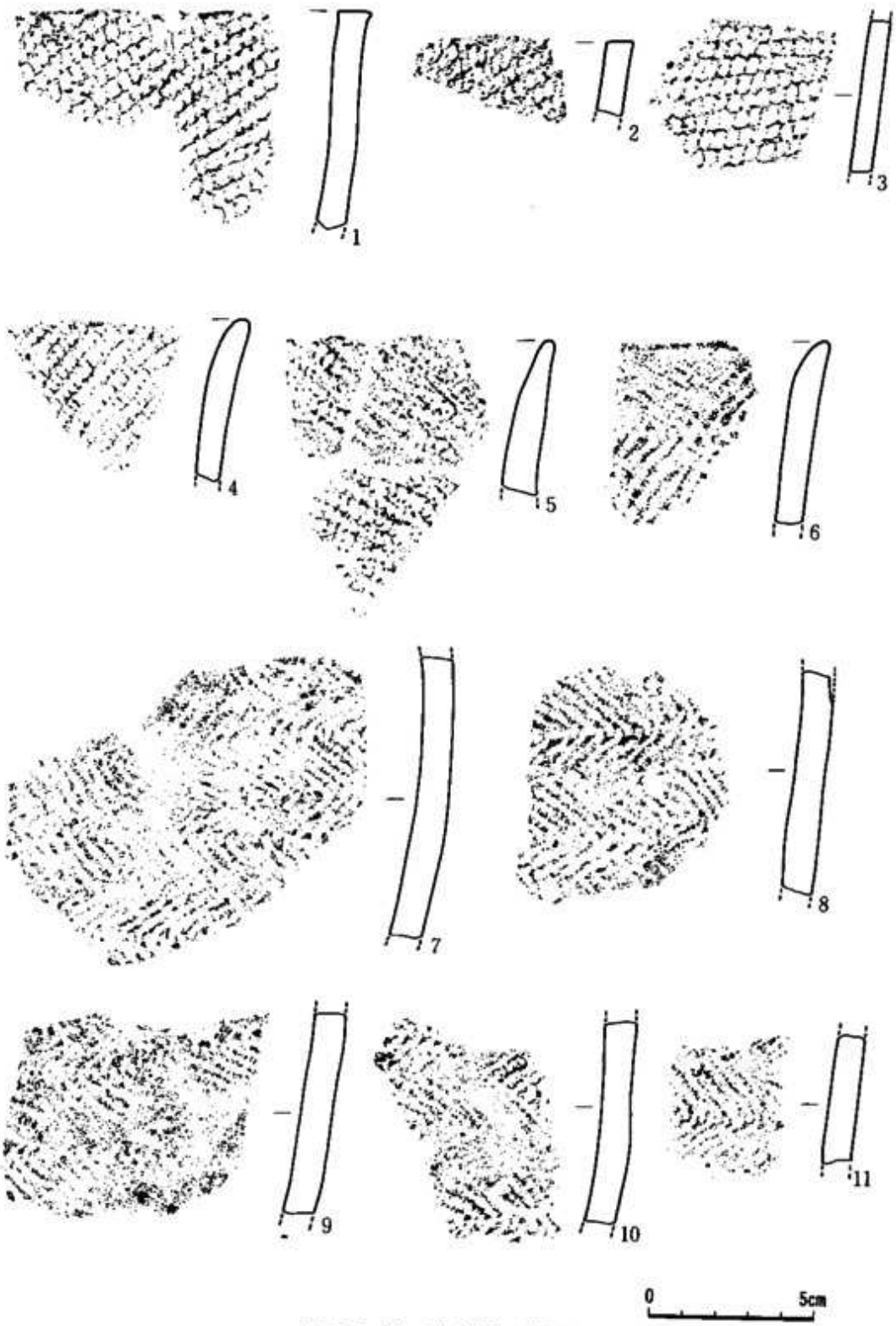
第75図　第Ⅱ群土器拓影図(2)



第76図　第Ⅱ群土器拓影図(3)



第77図　第Ⅱ群土器拓影図(4)



第78図　第Ⅱ群土器拓影図(5)

（ｃ　類）第80図－ 4、第81図、第93図－ 16～19

本類は、微隆起及び磨消縄文を施文するものである。

器形は、口頸部が若干内湾する深鉢形である。口縁は、波状口縁で、（第80図－ 4）は４個、（第81図－ 1）は頂端部が盛り上がった６個の小波突起を有する。

文様は、口唇部寄りを無文帯で形成しており、山形突起頂部から撚糸圧痕のみられるもの（第80図－ 4）と、鉈状突起（第81図－ 1）の土器がみられる。磨消縄文は、単節ＬＲを施文後に沈線でふちどりし、その後、磨り消している。し字状及び逆し字状文様を横位に展開している。磨消縄文の接点には、鉈状突起やボタン状突起（中心部に刺突）を付着させている。

第Ⅳ群土器（縄文時代後期土器）第82～88図・94～105、第42図～49図版

本群は、縄文時代後期前葉の土器を、文様構成から大きく２つに分類した。縄文及び沈線によって文様構成を行っているものをａ類とし、縄文及び撚糸文を用いて施文しているものをｂ類とした。ａ・ｂ類の中でも、文様要素の相異から更に細分を行った。また、縄文時代後期中葉に位置づけられる土器はｃ類として、ａ・ｂ類の土器と別個に取り扱った。

ａ－ １類（第83図－ 1、第94～96図）

地文縄文に沈線で施文するものを本類とした。

器形は、全体の形状を把握できるものはないが、口縁部破片から推定して、胴部下半から口唇部に向かって外反する深鉢形土器が主体と思われる。深鉢形以外の器種は見当たらない。

口唇部の形状は、∩形と冂形の２種がみられ、ヘラ状の工具を用いて整形しており、冂形が多い。また、折り返し口縁の土器もあり、折り返し口縁部には縄文を施文している。

文様構成は、地文縄文の施文後に沈線の文様を施文している。沈線の文様は、横位に展開する波状文・弧状・平行沈線の３種の文様であり、これらは、単独の文様で施文するのではなく、平行沈線と弧状というように組み合わせて文様構成をしている。

縄文原体は、単節が主体であり、ＬＲとＲＬの２種を用いているが、ＲＬの原体が主体を占める。また、複節ＬＲＬ（第96図－ 4）を用いている土器もみられるが、量的には少ない。施文方向は、横位に回転するのが基本であるが、斜位及び縦位方向に回転している土器もある。

焼成は、一般に不良であり、器外面にスス状炭化物の付着が多く認められる。

ａ－ ２類（第82図、第97・98図）

磨消縄文を用いて施文するものを本類とした。

器形は、深鉢形及び鉢形である。形状は、胴部から口唇部に向かって外反するもの、口唇部が内湾するもの、口頸部が内反するものの３種類が認められる。口縁は、口唇部に山形の小突

起を有する波状口縁が主体である。また、口唇部寄りに、粘土紐を１条巡らした折り返し口縁の土器もみられる。

文様構成は、鍵状の文様を主体とするもの（第82図－２）と、曲線状の文様を主体とするもの（第82図－１）に分かれる。鍵状の文様は、文様帯の幅が広い。文様は、横位方向に展開する文様帯である。縄文の原体には、単節のＬＲとＲＬを用いており、使用頻度はＬＲが多い。ほかには、無節Ｌ（第98図－８）もみられるが少ない。磨り消しの技法は、充填を用いるのが（第98図－７）１点で、他はすべて、縄文を施文後に沈線で縁取りをし磨消する技法を用いている。

焼成は、器外面でやや不良であるが、器内面では、ミガキ痕の調整痕の跡がみられ良好である。器外面には、スス状炭化物の付着が多く認められる。

ａ－３類（第84・99・100図）

貼り付け文及び沈線で施文するものを本類とした。

器形は、深鉢形が主体であるが、（第100図－15）のように壺形土器もある。また、第84図は、極端に胴部下半が張る切断蓋付土器である。貼り付けを施文する土器は、口頸部が若干張り出し口唇部が内湾する形状で、折り返し口縁の土器が多く、沈線文を施文する土器は、口頸部から口唇部にかけて外反する形状が多くみられる。

文様の構成は、口縁部の山形状突起から短かい１条を貼り付けるもの（第99図－１・２）とボタン状小突起を対に貼り付けるもの（第99図－４）がみられる。また、胴部には、区画帯を構成し、貼り付け上部に刻み及び刺突痕がみられる。

沈線の場合は、小破片のため全体の文様構成は不明であるが、渦巻を主体とするものと、平行沈線を主体とするものに２分される。

貼り付け文の縄文原体は、単節のＬＲである。（第99図－13）は、赤色顔料が付着しており、浮調技法例で文様を構成している。焼成は一般に不良であり、色調は、鈍い黄橙色で明るい。

ｂ－１類（第101・102図）

撚糸文及び撚糸網目状文を施文するものを本類とした。

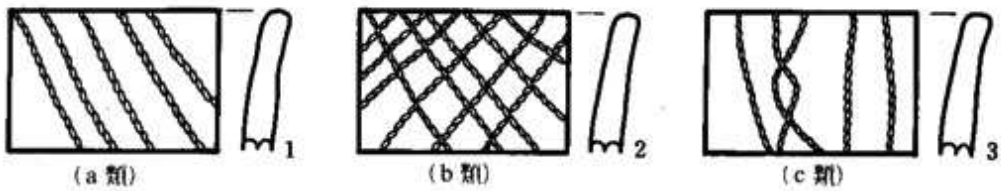
器形は、深鉢形である。形状は、口頸部が内湾し口唇部寄りが外反する。折り返し口縁の土器もみられる（第102図－13）。

撚糸文の施文方法には、３種類の方法が確認された。

ａ類（棒状工具に間隔を持って巻きつける）

ｂ類（棒状工具に交差状に巻きつける）

c類（棒状工具に不規則に巻きつける）



第79図　撚糸文模式図

上記の3種類では、b類の網目状文を施文するものが多い。

本類では、口縁部文様帯をもつものと、口縁部文様帯はなく、全面に撚糸文を施文するものの2種類が認められる。口縁部に文様帯を構成する土器は、口頸部に横位の沈線を巡らして区画帯を構成し、その内部に縄文を施文している。

b－2類（第85～88図、第103・104図）

縄文を施文しているものを本類とした。

器形は、深鉢形・鉢形があり、深鉢形が主体である。形状は、口唇部が内湾するもの、口唇部が外反するもの、口頸部が内湾するものの3種類が認められる。口縁は、平口縁であり、折り返し口縁の土器もみられる。口唇部は、□形や∩形があり、□形でヘラ状工具を用いて内傾させているものもあるが、∩形の丸味をもつものが多い。口唇部には、刺突具を用いて連続の刻みを有するものもみられる（第104図－13～16）。

縄文の原体は、単節のＬＲ・ＲＬを使用し、また、付加縄文（第103図－17）も使用している。縄文の回転方向は、横位・斜位・縦位と規則性がない。

（第104図－15・16）は、口頸部に補修孔があり、（第104図－8）は、口唇部寄りに1条の撚糸圧痕を施文している。

b－3類（第83図－3）

無文土器を本類とした。

器形は、鉢形であり形状は、底辺部から口唇部に向かって外反し、平底である。焼成は不良であり、胎土に細砂を多く含む。器外面の胴部下半から底辺部に向かって、縦位のケズリ痕がみられる。

c　類　縄文時代後期中葉から後葉にかけての土器を本類とした。(第105図)

本類は、文様施文及び器形の差異から、a_1～a_4の４種に細分した。

c－１類(第105図－１～５、７～９)

連続刺突文を施文するものを本類とした。

器形は、深鉢形・壺形・鉢形と器種の面でバラエティーに富んでいる。焼成は、一般に良好であり、器裏面にミガキ痕がみられる。

連続刺突文の施文方法は、横位の沈線で区画帯を構成し、その内部に施文するもの、区画帯を持たず連続に刺突するもの、粘土紐を横位に巡らした後に刺突を施文するものの３種類が認められる。連続刺突文の下部には、沈線を施文している土器もみられる(第13図－４)。

c－２類(第105図－６、10～12)

磨消縄文帯を構成するものを本類とした。

縄文原体には、単節ＬＲ・ＲＬ・０段多条を使用している。文様帯は、横位に展開する帯状の磨消帯であり、その内部には、羽状及び山形状に文様を施文している。

c－３類(第105図－14・15)

瘤状突起を有するものを本類とした。

器形は、壺形である。焼成は不良であり、胎土には粗砂が多く含まれる。縄文原体には、単節ＬＲを使用している。縄文を施文後に沈線で縁取りし、磨消縄文帯を構成している。文様構成は、口唇部寄りに横位、下部に縦位の文様帯を構成し、鍵状の文様である。

c－４類(第105図－15・16)

注口土器の注口部分であり、焼成は良好である。(第105図－15)は、注口の先端部の周囲に膨らみをもたせたものである。(第105図－16)は、注口の付け根部分に粘土紐を貼り付け、連続刺突を加えたものである。

第Ⅴ群土器(縄文時代後期土器)第89・106・107図

文様施文の差異により、a－１～a－３類に分類した。

a－１類(第106図)

本類は、磨消縄文・口縁部に小突起をもつものなどを一括して取り扱った。

(第106図－１・３・４)は、磨消縄文を施文する土器である。縄文原体には、単節ＬＲを使用し、構位に回転させている。磨消縄文には、縄文を施文後に沈線で縁取りをし磨消する

ものと、沈線を施文後に縄文を充填するものとの二とおりの磨消技法を用いている。

（第106図－ 5 ・ 6 ・ 8 ）は、口縁部に台状及び山形状の小突起を有するものである。小突起の面には、三角状の文様を施文しており、口唇部寄りに 1 条の粘土紐を巡らしている。（第106図－ 5 ）は、器表面に赤色顔料が塗布している。

（第106図－ 9 ~ 18 ）は、口縁部に横位沈線により狭い文様帯を構成し、区画帯の内部に横位方向の刺突を施文している。刺突の方向は、器表面に対して直角及び斜位である。器形は、鉢形・台付鉢形が多く、また、器表面にスス状炭化物の付着が多く認められる。

焼成は、（第106図－ 9~18 ）を除き良好であり、光沢がある。

a－ 2 類（第89図－ 2 、第107図－ 1 ~ 5 ）

本類は、文様が施文されない無文土器である。

器形は、胴部が丸味をもつ壺形である。（第10図－ 2 、第15図－ 5 ）他の土器は、胴部破片のために形状は不明である。焼成は、（第15図－ 5 ）を除き良好であり、器表面に、ミガキ痕が明瞭に残っている。

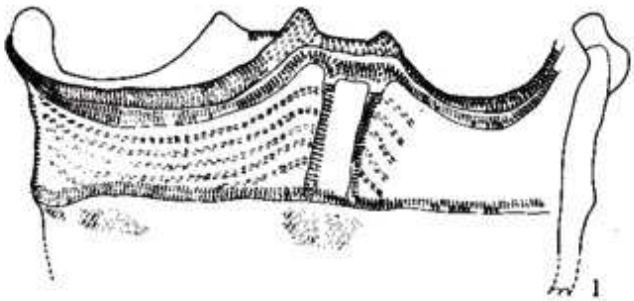
a－ 3 類（第107図－ 6 ~ 19 ）

本類は、縄文・条痕を施文するものと底部破片を本類とした。

器形は、口縁部破片から推定して、鉢形及び深鉢形と思われる。縄文原体は、単節ＬＲと 0 段多条を使用している。条痕のある土器は、縦位に施文具を用いて施文しており、条痕の幅は 1 ㎜である。器厚は一般に薄く、焼成は不良である。器外面には炭化物の付着が多い。

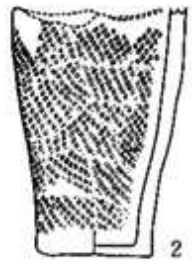
底部破片は、（第107図－ 17 ）が鉢形、（第107図－ 18・19 ）が台付鉢の台部である。鉢形土器は平底で、底辺部にまで縄文を施文している。台付鉢は、底辺部寄りに 1 条の沈線を巡らしている。

（成田　滋彦）



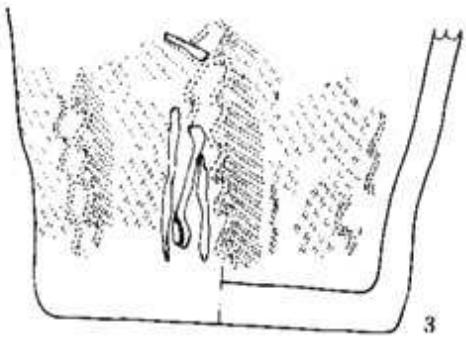
1

地区・層位　E地区、AQ・AT－9、Ⅱ層
外面施文　貼り付け、縄文、燃糸圧痕
内面調整　横位
外面色調　にぶい黄橙色(Hue 10YR 7/4)
内面色調
備　考　器内外面に黒斑有り



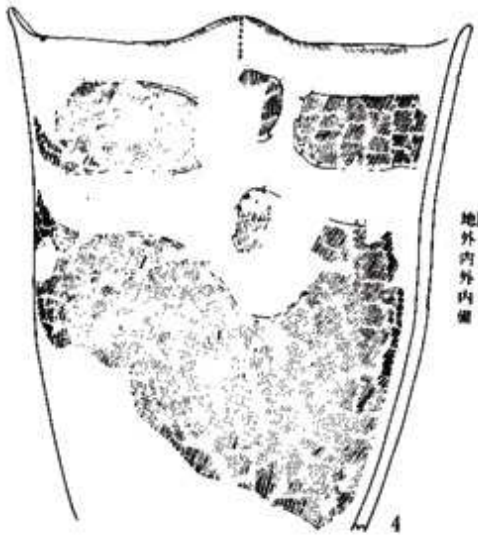
2

地区・層位　E地区、AS－9
外面施文　縄文(RLR)
内面調整　横位調整
外面色調　明黄褐色(Hue 10YR 7/6)
内面色調　黒褐色(Hue 10YR 3/1)
備　考　器外面スス状炭化物付着



3

地区・層位　E地区、AO－5 Ⅰ層
外面施文　縄文(RLR)、燃糸文・沈線
内面調整　横位調整
外面色調　にぶい橙色(Hue 5 YR 7/4)
内面色調　黒褐色(Hue 7.5YR 3/1)
備　考　器内外面にスス状炭化物付着

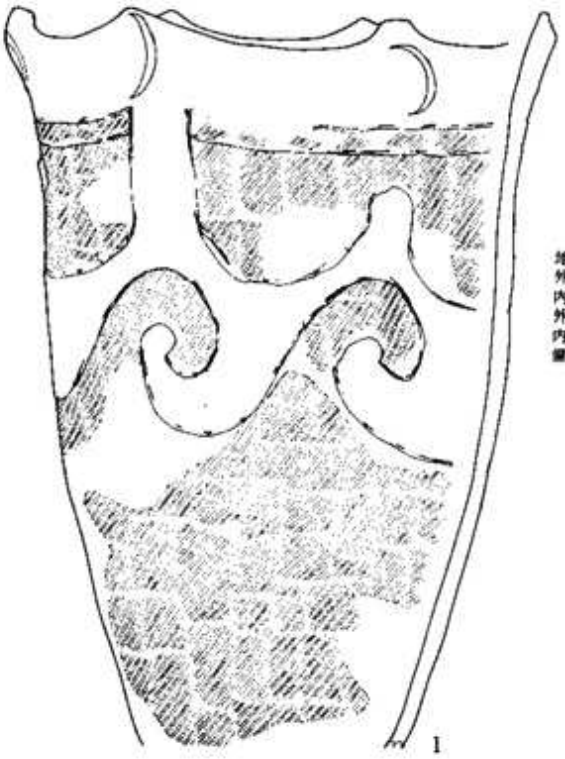


4

地区・層位　A地区、AH・AI－13・14、Ⅱ層
外面施文　沈線・縄文(LR)・磨消縄文、粘土粒、燃糸圧痕
内面調整　口縁(横位)、胴部(縦位)
外面色調　にぶい黄橙色(Hue 10YR 5/4)
内面色調　灰黄褐色(Hue 10YR 5/2)
備　考　器内外面に炭化物付着

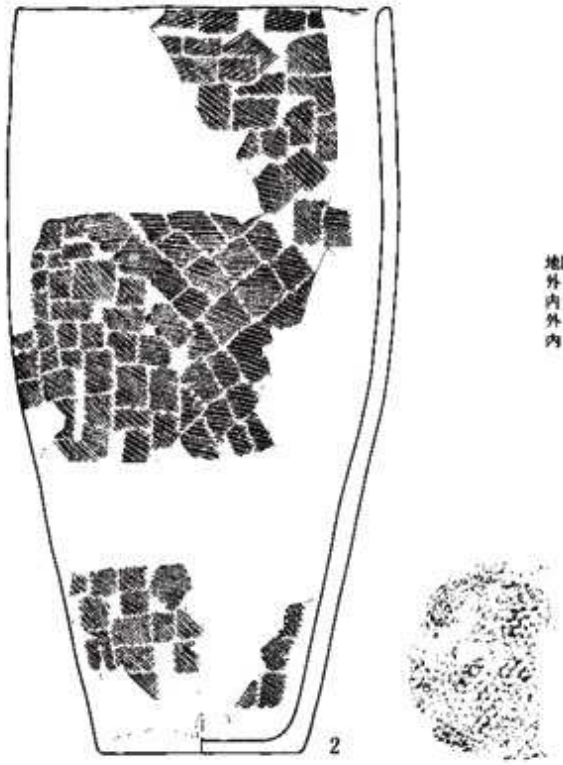
0　10cm

第80図　第Ⅲ群土器実測図(1)



地区・層位　A地区、AH・AI－13・14、Ⅱ層
外面施文　縄文(LR)貼り付け、沈線、擦消縄文
内面調整　口縁(横位)、胴部(縦位)
外面色調　にぶい黄橙色(Hue 10YR 7/4)
内面色調　橙色(Hue 7.5YR 6/6)
備　考　器内外面に炭化物付着

1

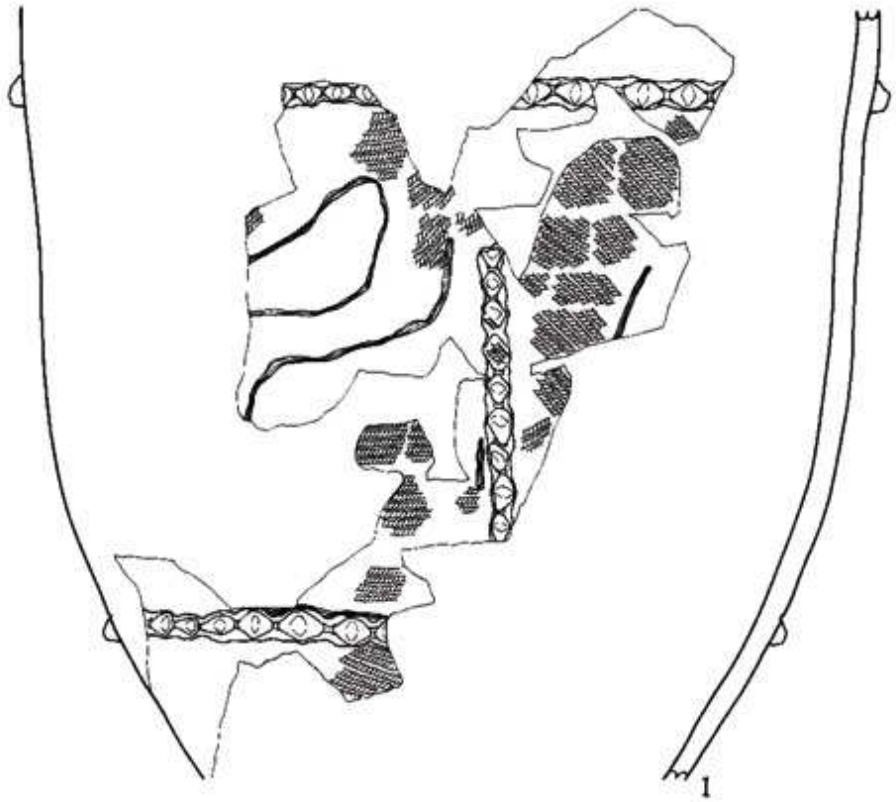


地区・層位　A地区、AH・AI－13・14、Ⅱ層
外面施文　縄文(LR)
内面調整　口縁(横位)、胴部(縦位)
外面色調　にぶい黄橙色(Hue 10YR 7/4)
内面色調　にぶい黄橙色(Hue 10YR 7/4)

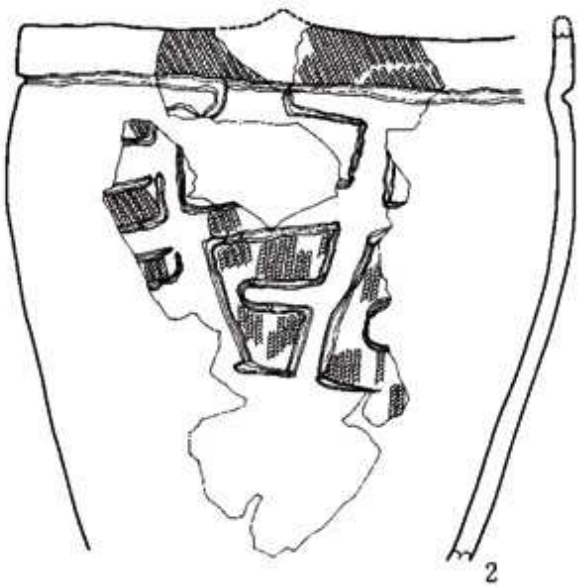
2

0　10cm

第81図　第Ⅲ群土器実測図(2)



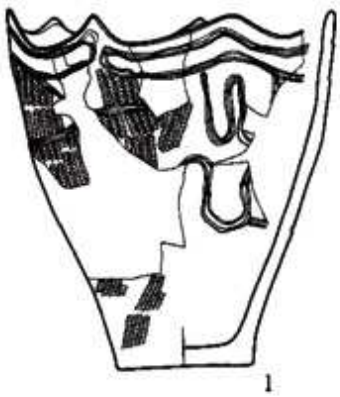
地区・層位　B地区、BB－29、Ⅱ層
外面施文　貼り付け、沈線・縄文(RL)・磨消縄文
内面調整　横位
外面色調　にぶい黄橙色(Hue 10YR 5/3)
内面色調　にぶい黄橙色(Hue 10YR 5/3)
備　考　器外面に黒斑有り



地区・層位　C地区、BF－41・42、Ⅱ層
外面施文　沈線・縄文(RL)・磨消縄文
内面調整　口縁(横位)、胴部(縦位)
外面色調　明赤褐色(Hue 2.5YR 5/6)
内面色調　橙色(Hue 5 YR 6/6)
備　考　器外面にスス状炭化物付着

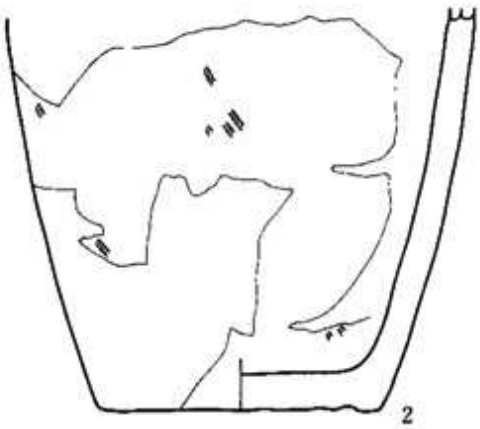
0　10cm

第82図　第Ⅳ群土器実測図(1)



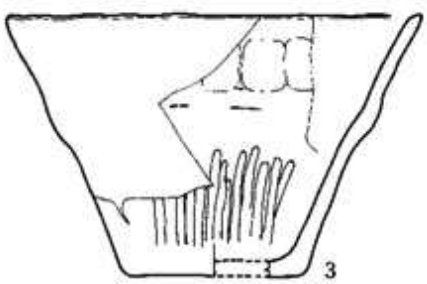
1

地区・層位　C地区、BF－41・42、Ⅱ層
外面施文　沈線・縄文(LR)
内面調整　口縁部から胴部下半(横位)、底辺(縦位)
外面色調　橙色(Hue 7.5YR ¾)
内面色調　橙色(Hue 7.5YR ¾)



2

地区・層位　C地区、BD－41、Ⅱ層
外面施文　縄文(RL)
内面調整　横位
外面色調　にぶい橙色(Hue 5 YR ¾)
内面色調　にぶい橙色(Hue 5 YR ¾)



3

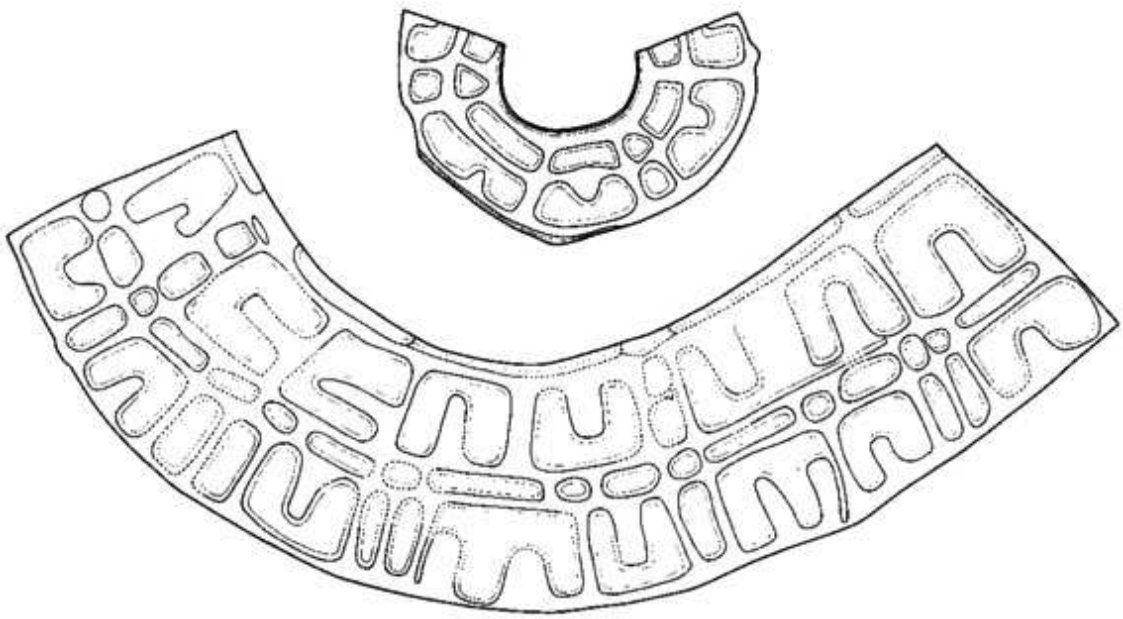
地区・層位　A地区、AJ－14、Ⅰ層
外面施文　縦位ケズリ痕
内面調整　縦位
外面色調　灰白色(Hue 10YR ⅔)
内面色調　灰白色(Hue 10YR ⅔)
備　　考　器外面にスス状炭化物付着

0　10cm

第83図　第Ⅳ群土器実測図(2)

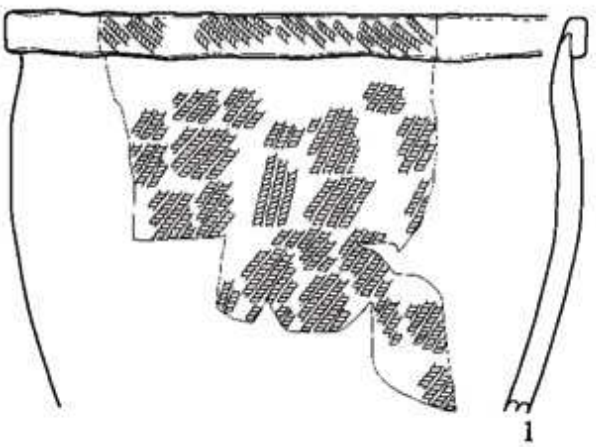
（頸部）
地区・層位　B地区、BB－26、Ⅱ層
外面施文　貼り付け、沈線
内面調整　横位
外面色調　浅黄橙色(Hue 10YR 8/4)
内面色調　浅黄橙色(Hue 10YR 8/4)

（体部）
地区・層位　B地区、BB－26、Ⅱ層
外面施文　貼り付け、沈線
内面調整　横位
外面色調　浅黄橙色(Hue 10YR 8/4)
内面色調　浅黄橙色(Hue 10YR 8/4)
備　　考　器外面に黒斑有り



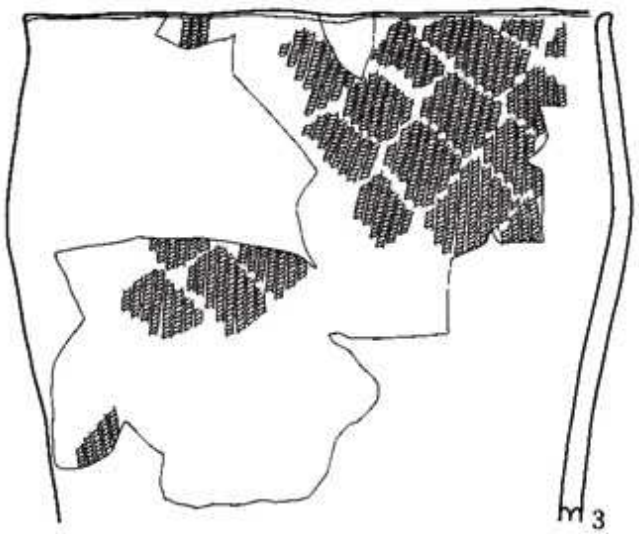
0　10cm

第84図　第Ⅳ群土器実測図(3)



地区・層位　B地区、BB－26、Ⅱ層
外面施文　縄文(LR)・折り返し口縁
内面調整　口縁(横位)、胴部(縦位)
外面色調　にぶい赤褐色(Hue 5 YR 5/3)
内面色調　明赤褐色(Hue 5 YR 5/6)
備　考　器外面に黒斑有り

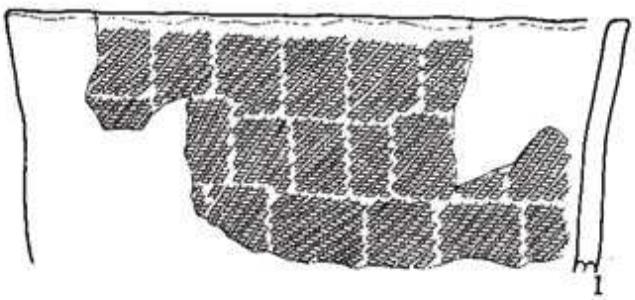
地区・層位　B地区、BC－28・29、Ⅱ層
外面施文　縄文(LR)・折り返し口縁
内面調整　横位
外面色調　にぶい橙色(Hue 7.5 YR 7/4)
内面色調　にぶい褐色(Hue 7.5 YR 5/3)
備　考　器外面に黒斑



地区・層位　C地区、BC－40、Ⅱ層
外面施文　縄文(LR)
内面調整　横位
外面色調　にぶい黄橙色(Hue 10 YR 7/3)
内面色調　にぶい黄橙色(Hue 10 YR 7/3)
備　考　器外面にスス状炭化物付着

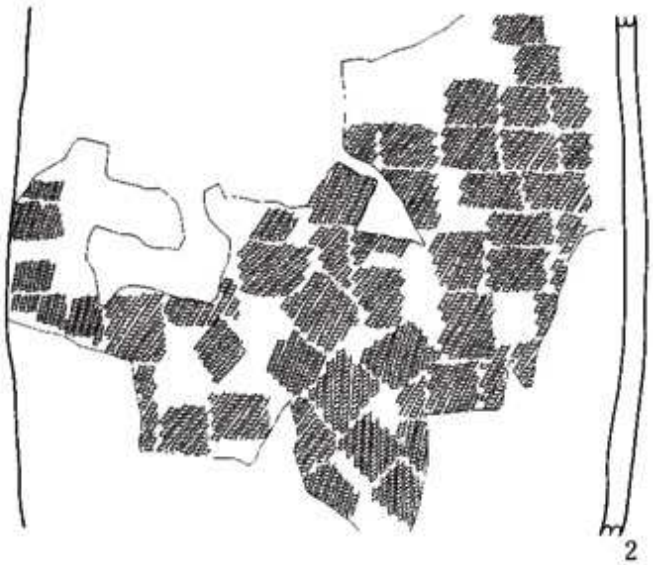
0　10cm

第85図　第Ⅳ群土器実測図(4)



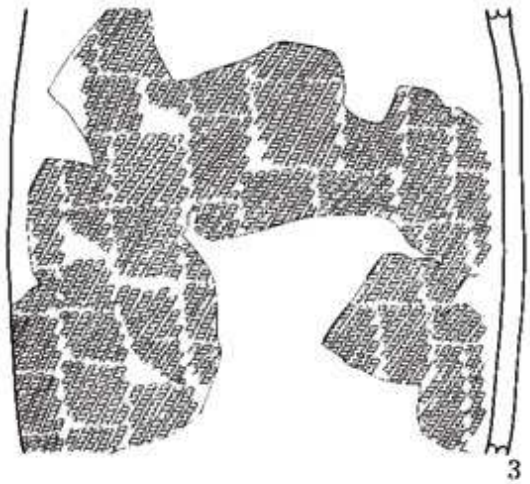
1

地区・層位　B地区、Bh－22、Ⅱ層
外面施文　縄文(LR)　LR)
内面調整　横位
外面色調　にぶい橙色(Hue 7.5YR 6/4)
内面色調　にぶい橙色(Hue 7.5YR 7/4)
備　考　器内外面にスス状炭化物付着



2

地区・層位　C地区、BD－40、Ⅱ層
外面施文　縄文(LR)
内面調整　横位
外面色調　褐色(Hue 7.5YR 5/4)
内面色調　にぶい黄橙色(Hue 10YR 7/3)
備　考　器外面にスス状炭化物付着

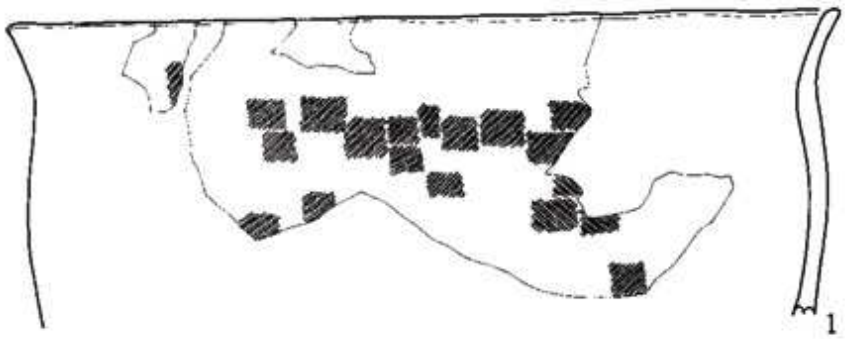


3

地区・層位　B地区、Bh－22、Ⅱ層
外面施文　縄文(LR)
内面調整　斜位
外面色調　にぶい橙色(Hue 7.5YR 6/4)
内面色調　にぶい橙色(Hue 7.5YR 6/4)
備　考　器外面にスス状炭化物付着

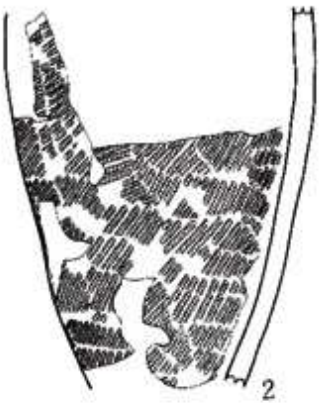
0　10cm

第86図　第Ⅳ群土器実測図(5)



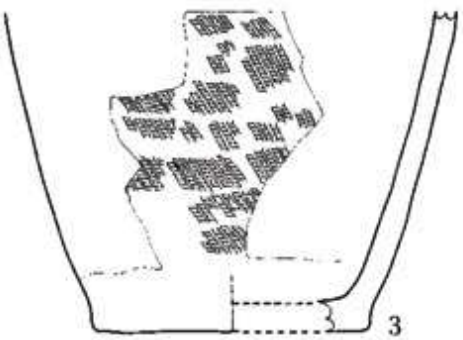
1

地区・層位　B地区、BC－26・27、Ⅱ層
外面施文　縄文(LR)
内面調整　横位
外面色調　灰白色(Hue 10YR 7/1)
内面色調　灰白色(Hue 10YR 7/1)



2

地区・層位　A地区、AR・AS－8、Ⅰ層
外面施文　縄文(LR)
内面調整　横位
外面色調　にぶい赤褐色(Hue 5 YR 5/3)
内面色調　灰褐色(Hue 7.5YR 5/2)
備　考　器外面にスス状炭化物付着

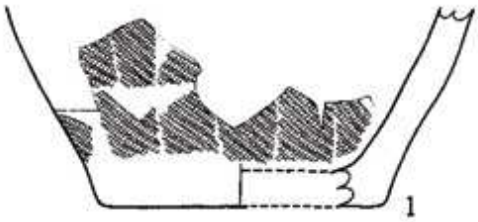


3

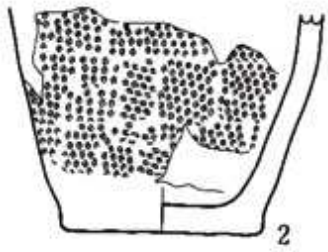
地区・層位　A地区、AI－14、Ⅰ層
外面施文　縄文(RL)
内面調整　横位
外面色調　浅黄橙色(Hue 10YR 8/3)
内面色調　浅黄橙色(Hue 10YR 8/3)
備　考　器内面にスス状炭化物付着

0　10cm

第87図　第Ⅳ群土器実測図(6)

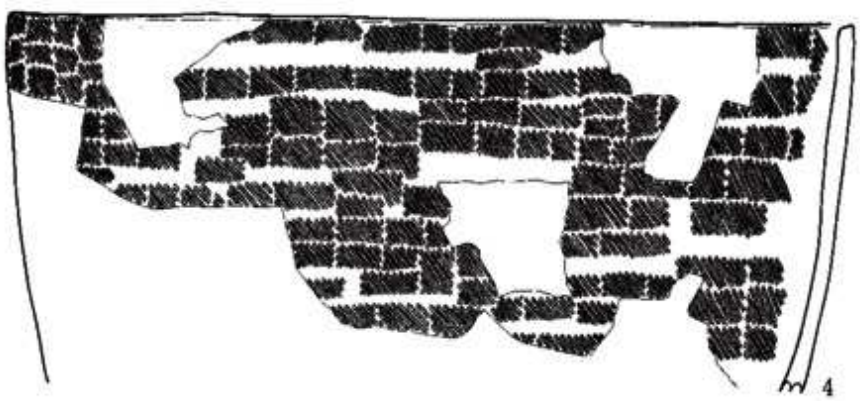


地区・層位　A地区、AL－9、Ⅰ層
外面施文　縄文(RL)
内面調整　横位
外面色調　にぶい赤褐色(Hue 5 YR 5/4)
内面色調　にぶい黄橙色(Hue 10YR 7/4)
備　考　器内外面に黒斑有り



地区・層位　A地区、AG－15、Ⅰ層
外面施文　縄文(LRL)
内面調整　横位
外面色調　にぶい黄橙色(Hue 10YR 7/3)
内面色調　灰黄褐色(Hue 10YR 5/2)
備　考　器内面にスス状炭化物付着

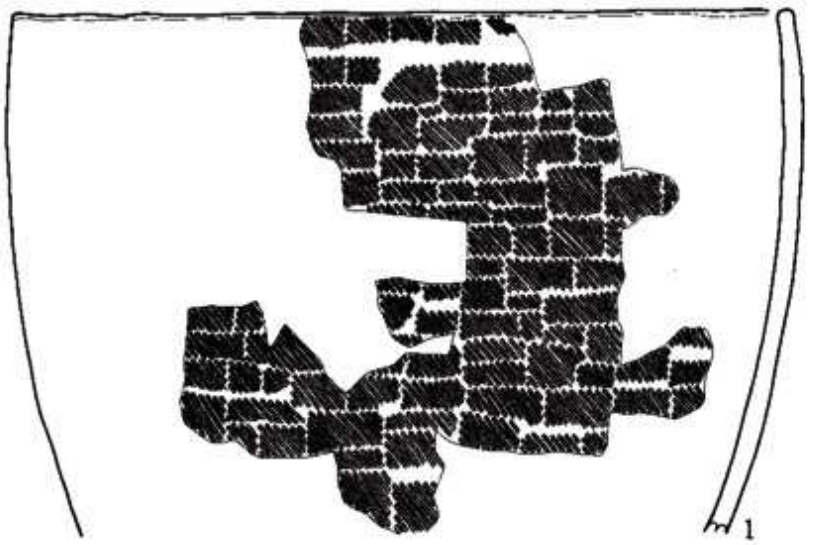
地区・層位　C地区、BE－56、Ⅰ層
外面施文　縄文(LR)
内面調整　横位
外面色調　にぶい橙色(Hue 7.5YR 6/4)
内面色調　にぶい黄橙色(Hue 10YR 7/3)
備　考　器外面に黒斑有り



地区・層位　B地区、BB－29・30、Ⅱ層
外面施文　縄文(RL)
内面調整　横位
外面色調　灰白色(Hue 10YR 8/2)
内面色調　灰白色(Hue 10YR 8/2)
備　考　器内外面に黒斑有り

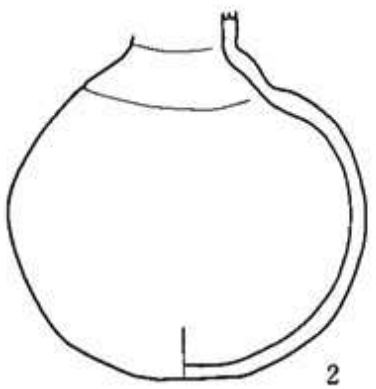
第88図　第Ⅳ・Ⅴ群土器実測図

0　10cm



1

地区・層位　B地区、88－29・30、Ⅱ層
外面施文　縄文(RL)
内面調整　横位
外面色調　にぶい黄橙色(Hue 10YR 7/4)
内面色調　にぶい黄橙色(Hue 10YR 7/4)
備　　考　器内外面に黒斑有り



2

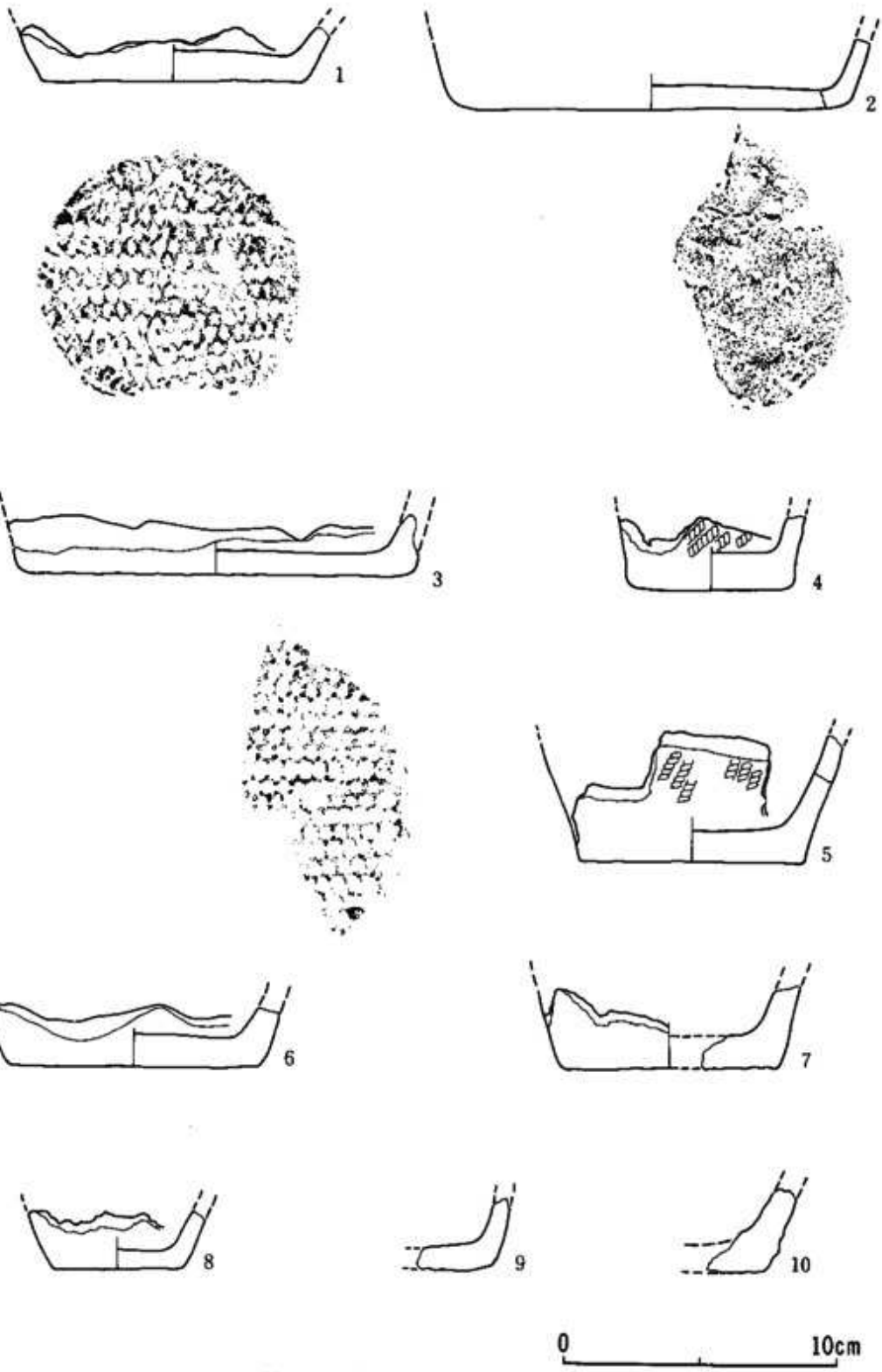
地区・層位　E地区、AQ－8、Ⅱ層
外面施文　沈線
内面調整　横位
外面色調　黒褐色(Hue 7.5YR 3/1)
内面色調　黒褐色(Hue 7.5YR 3/1)
備　　考　器内外面に赤色顔料付着

3

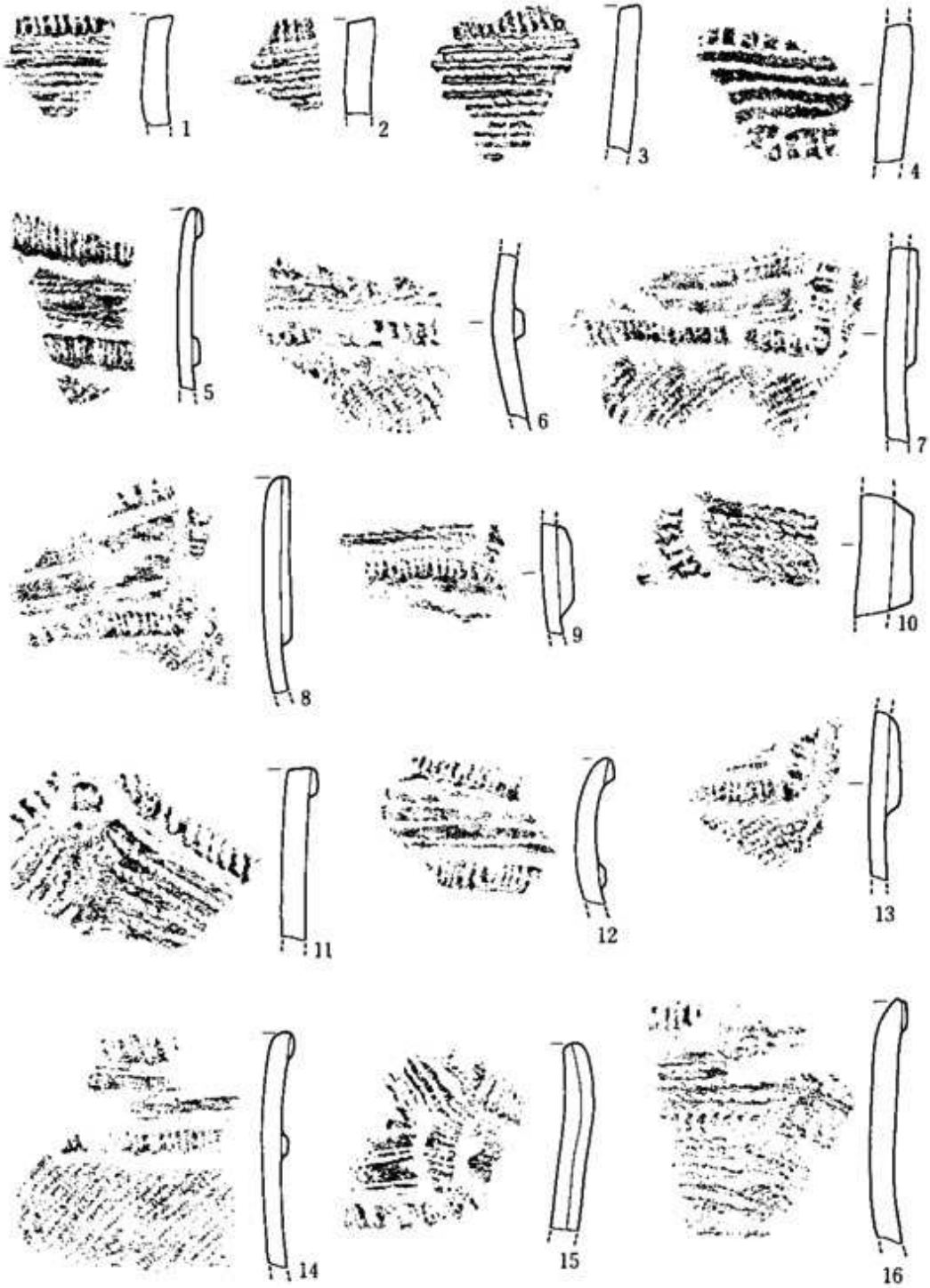
地区・層位　B地区、AY－28、Ⅰ層
外面施文　沈線、貼り付け
内面調整　横位
外面色調　にぶい橙色(Hue 7.5YR 7/4)
内面色調　褐灰色(Hue 7.5YR 5/1)
備　　考　器外面黒斑

0　　10cm

第89図　第Ⅴ群土器実測図

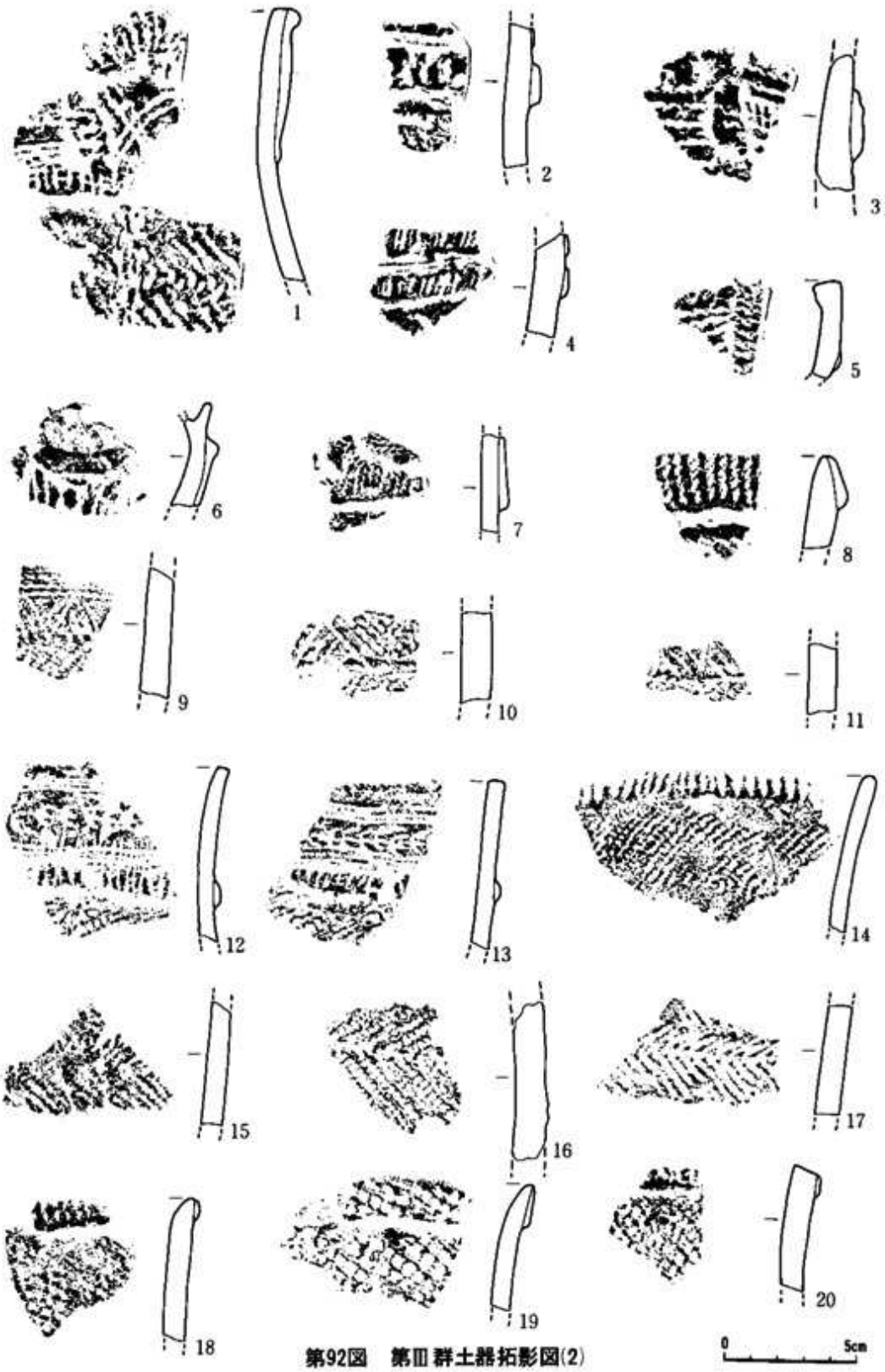


第90図　第Ⅲ～Ⅴ群土器底部実測図

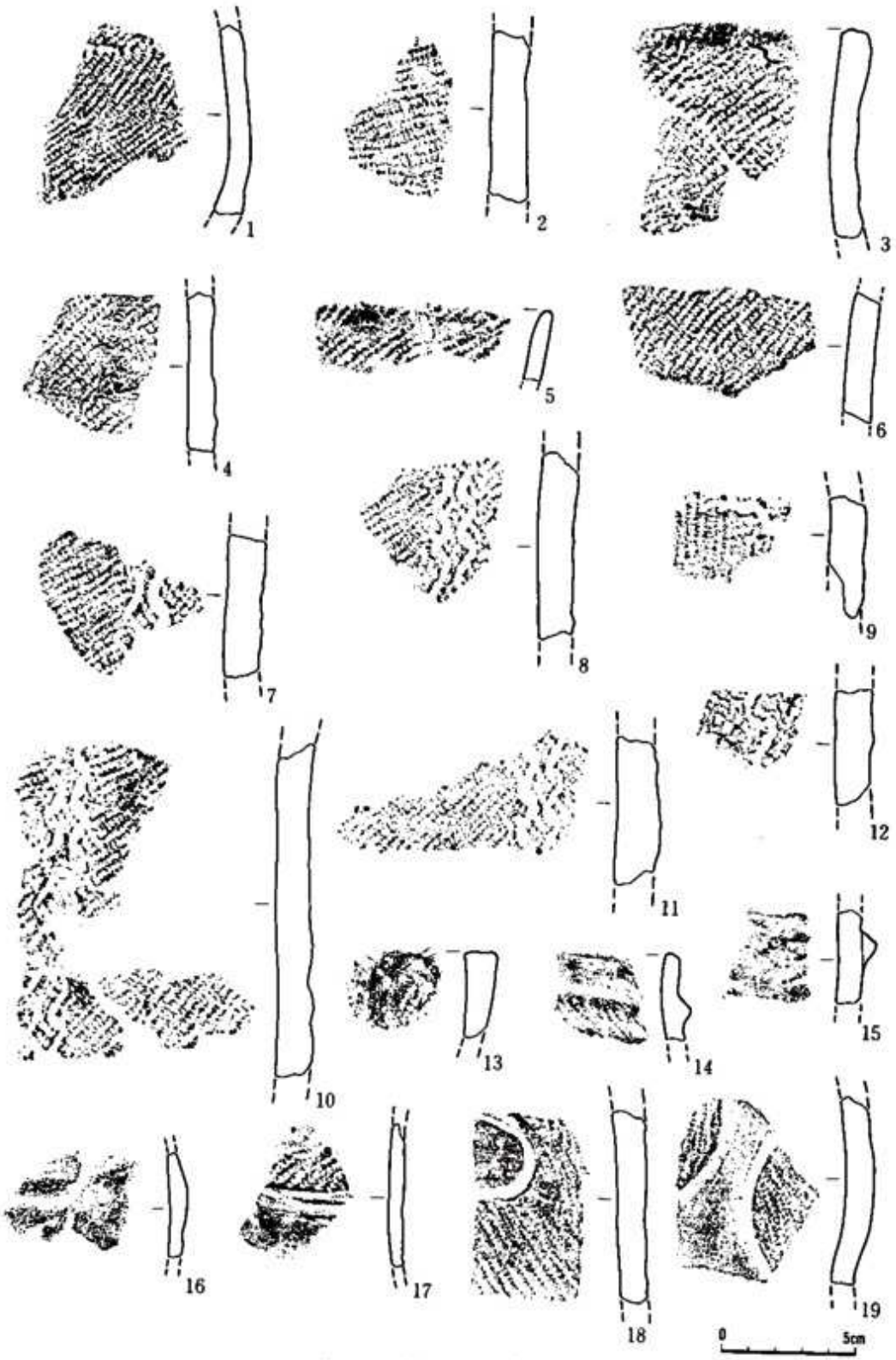


第91図　第Ⅲ群土器拓影図(1)

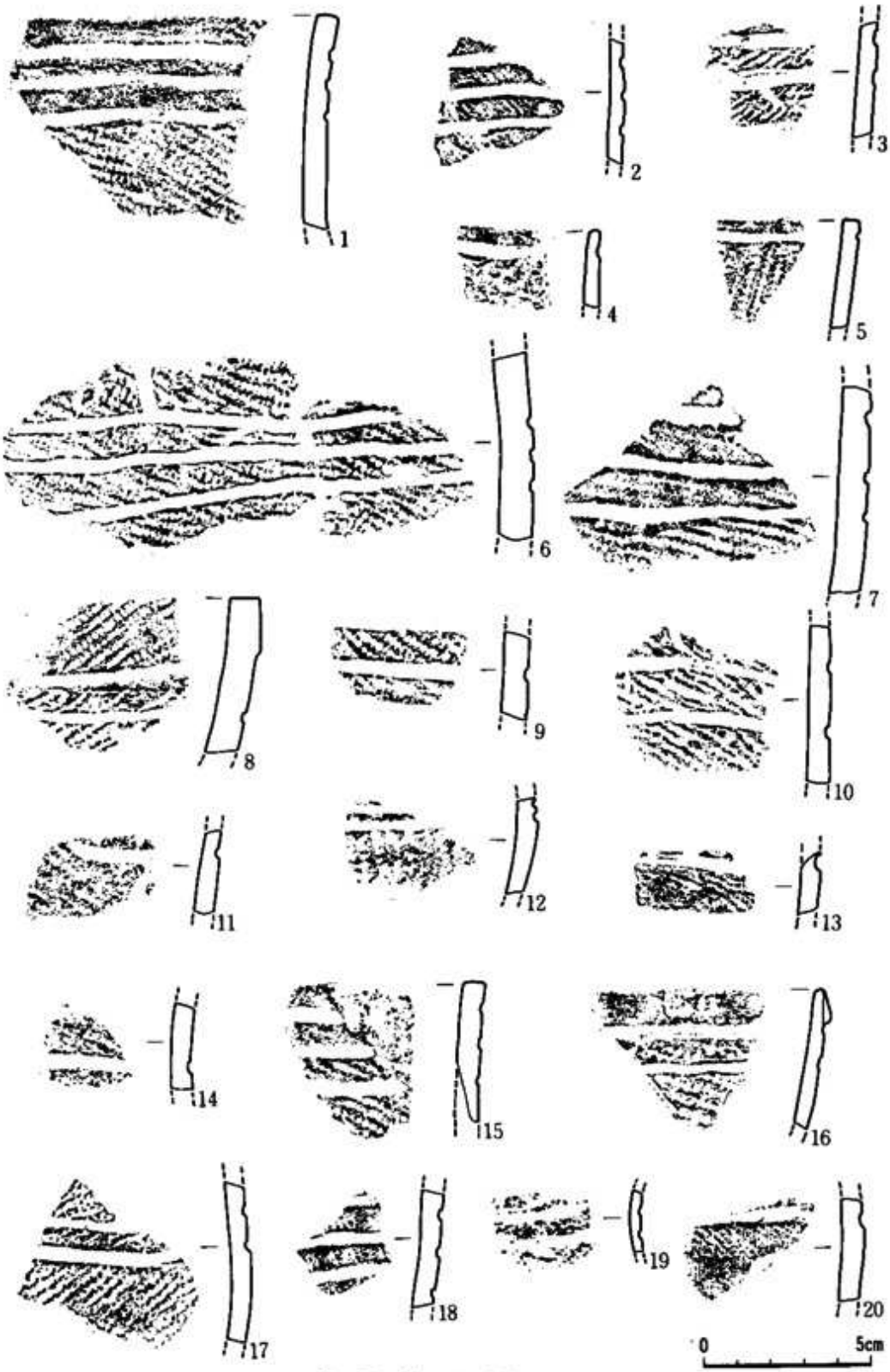
0　5cm



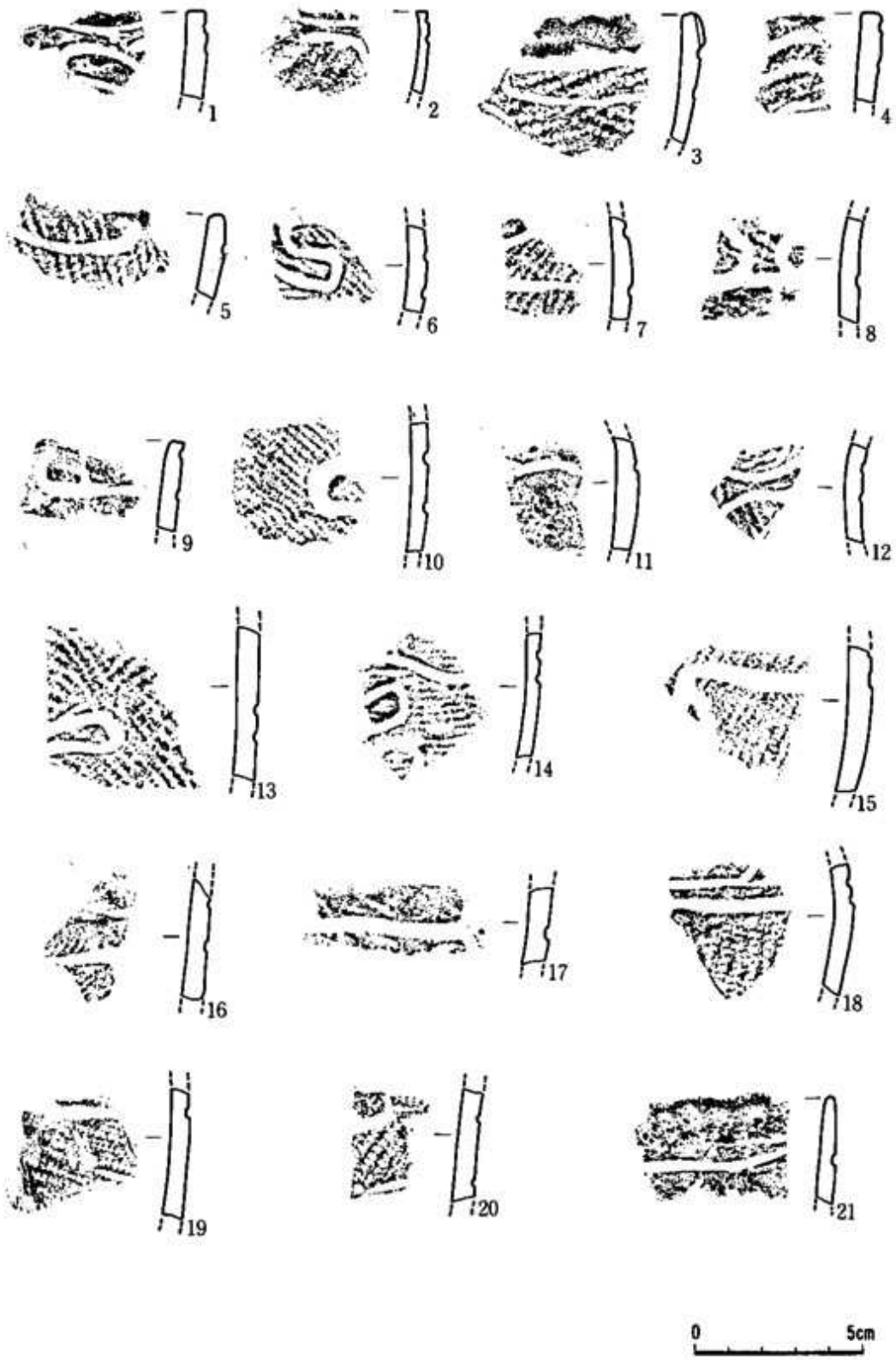
第92図　第Ⅲ群土器拓影図(2)



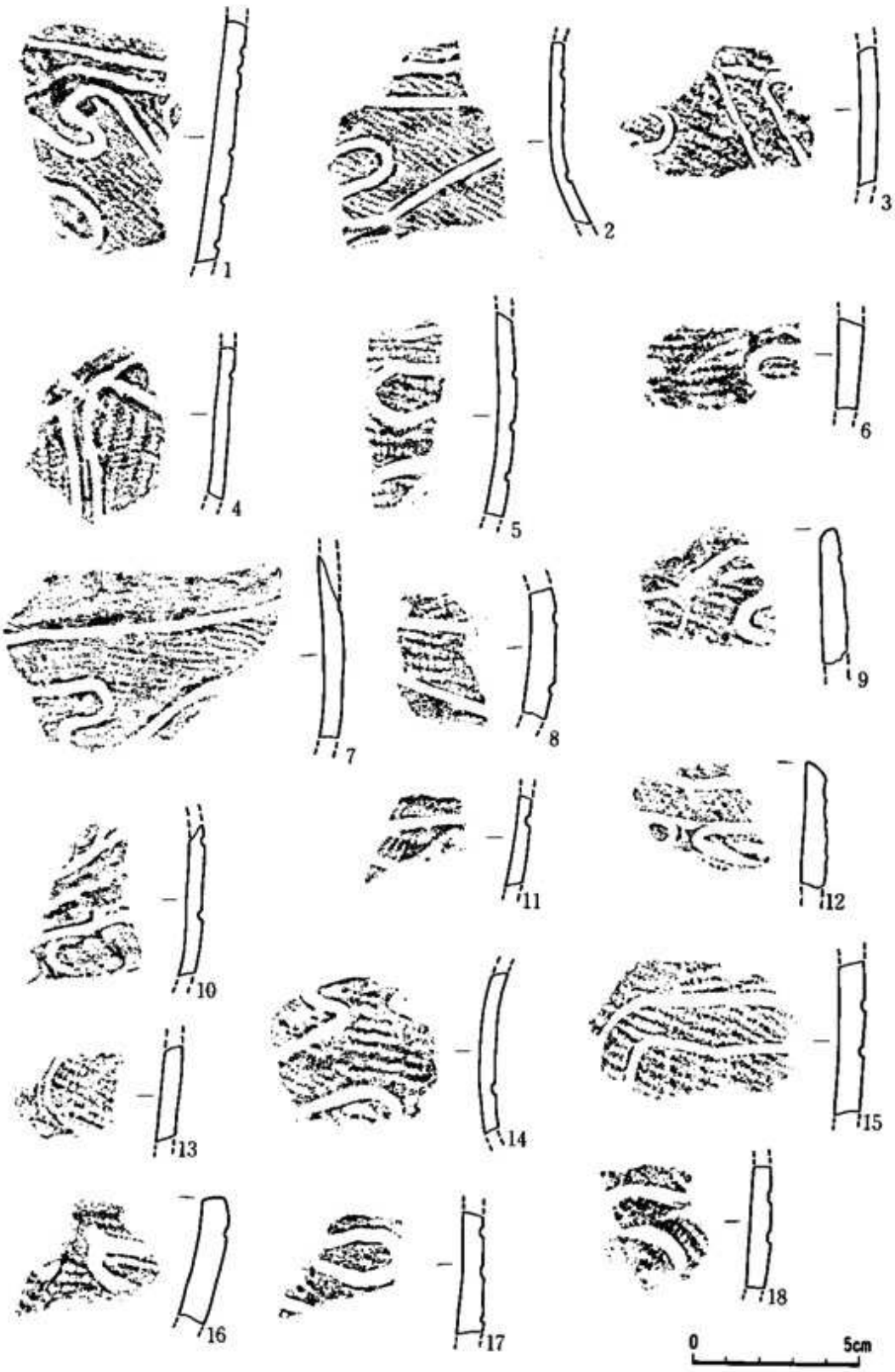
第93図　第Ⅲ群土器拓影図(3)



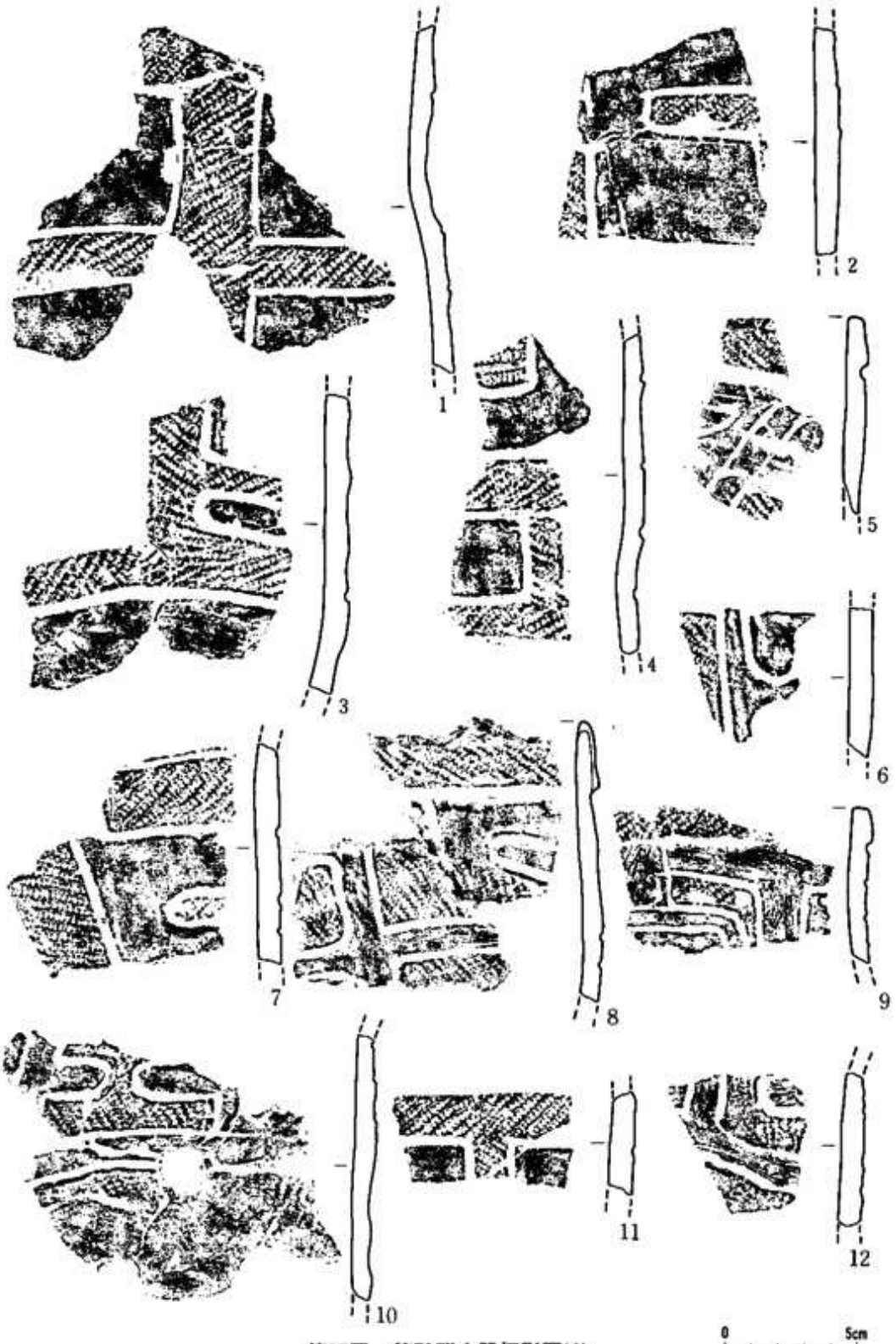
第94図　第Ⅳ群土器拓影図(1)



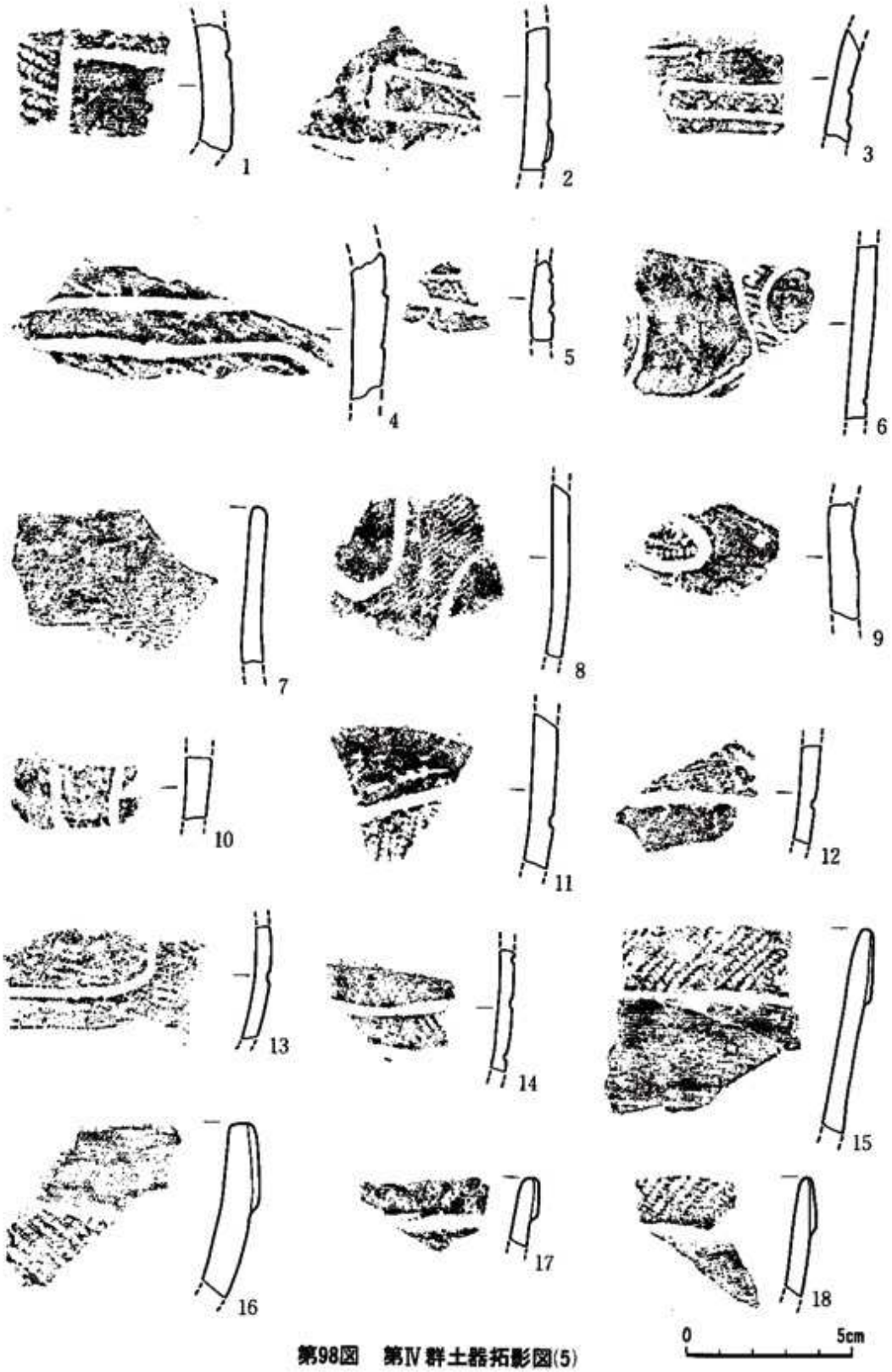
第95図　第Ⅳ群土器拓影図(2)



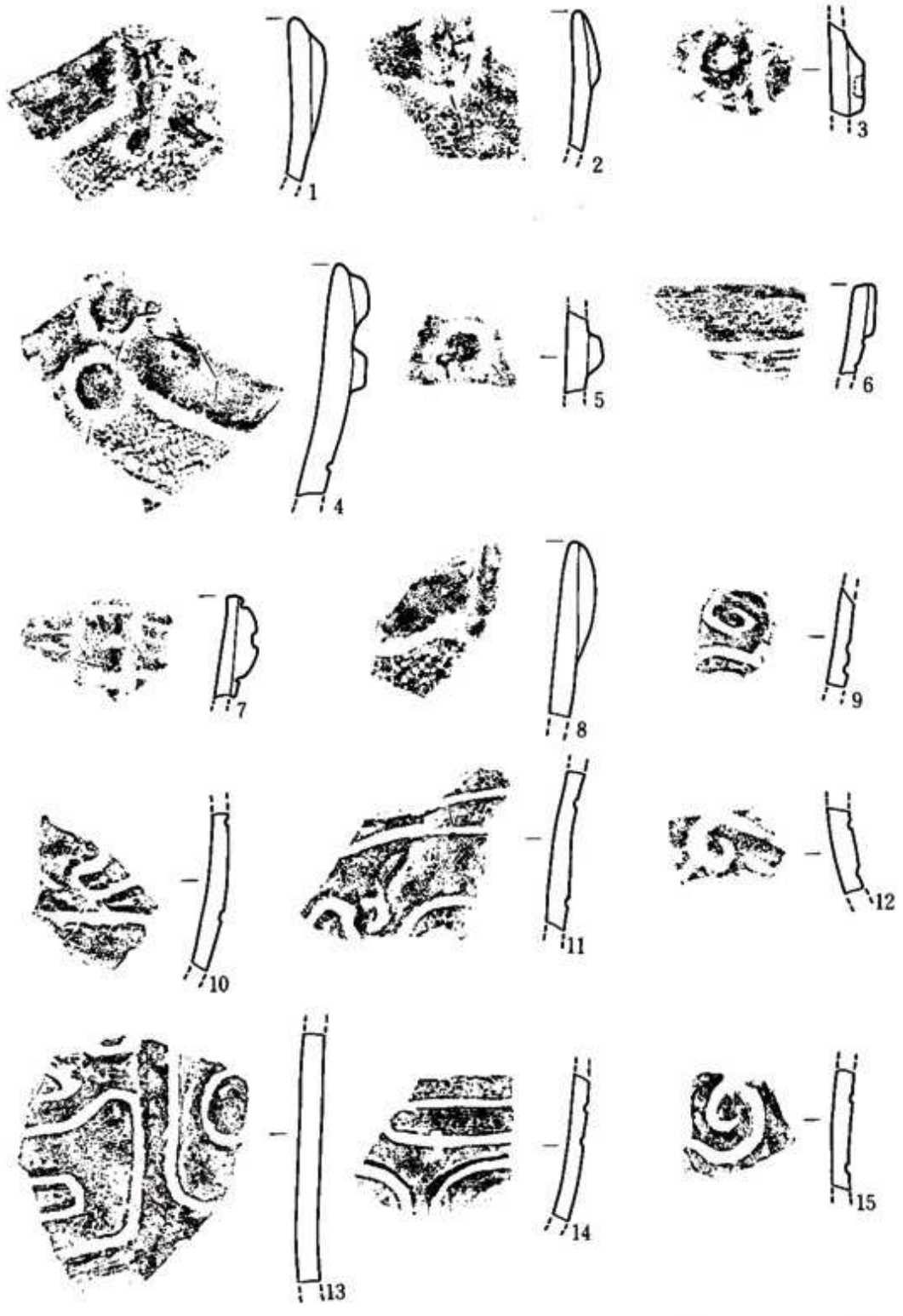
第96図　第Ⅳ群土器拓影図(3)



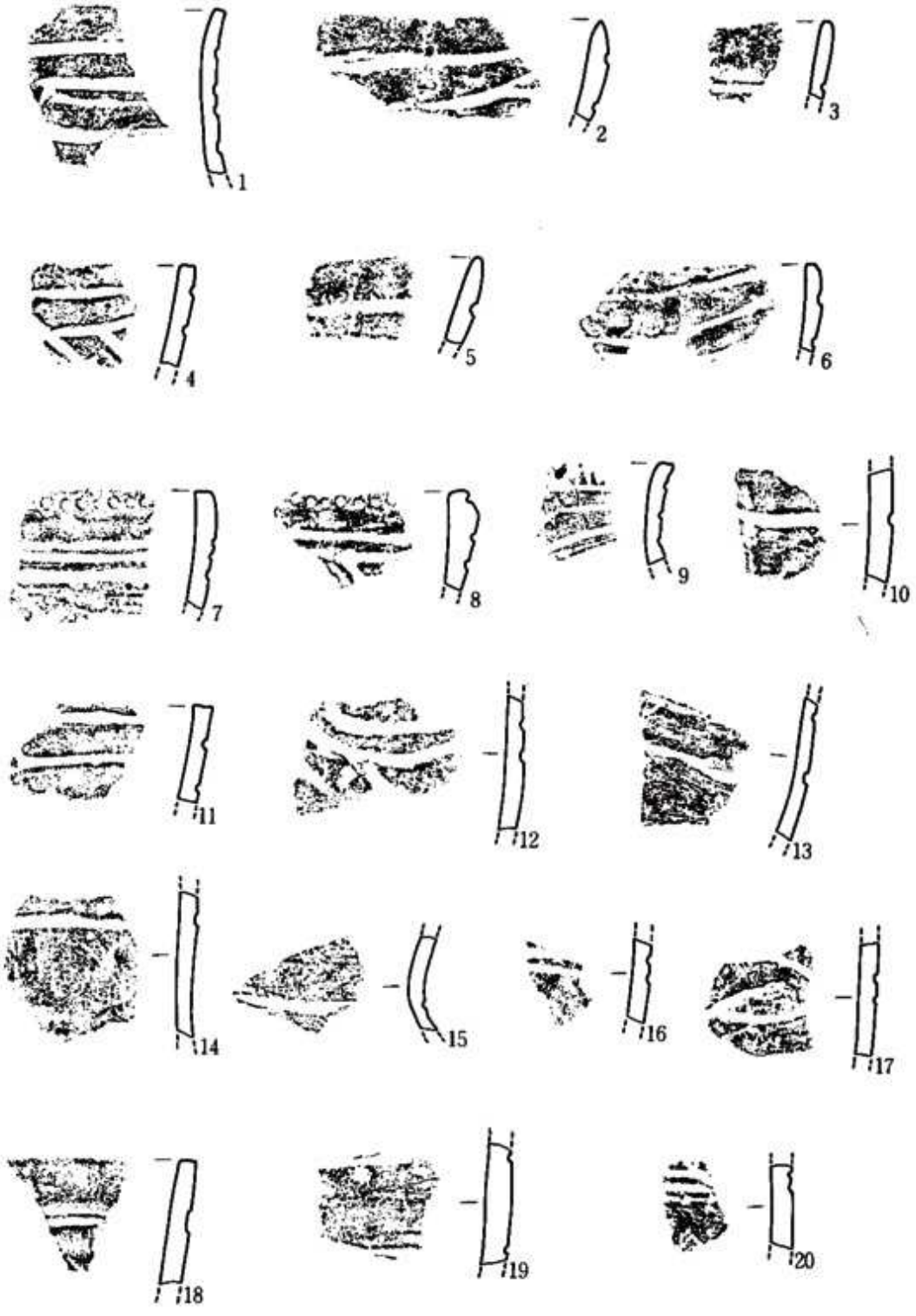
第97図　第Ⅳ群土器拓影図(4)



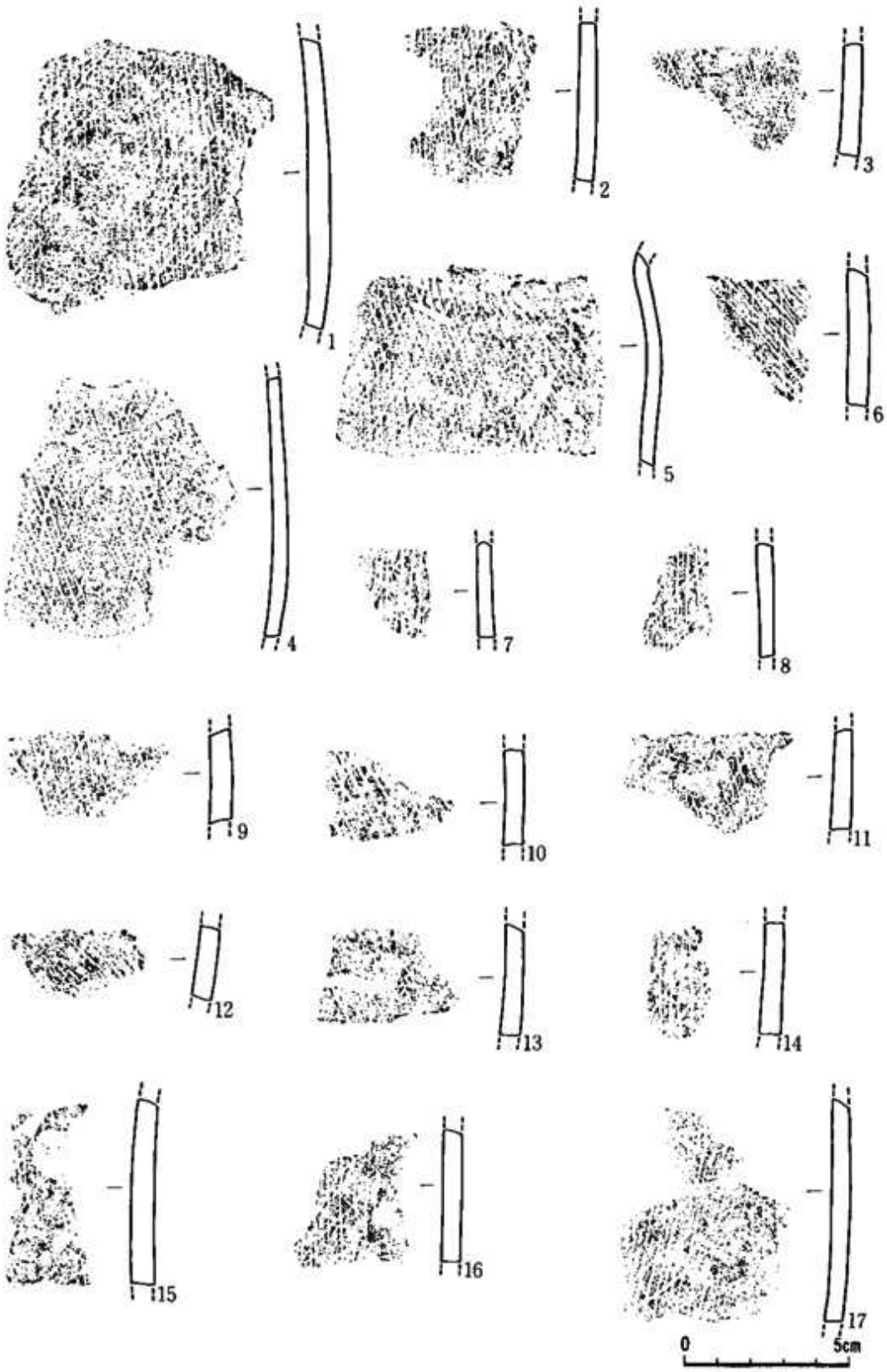
第98図　第Ⅳ群土器拓影図(5)



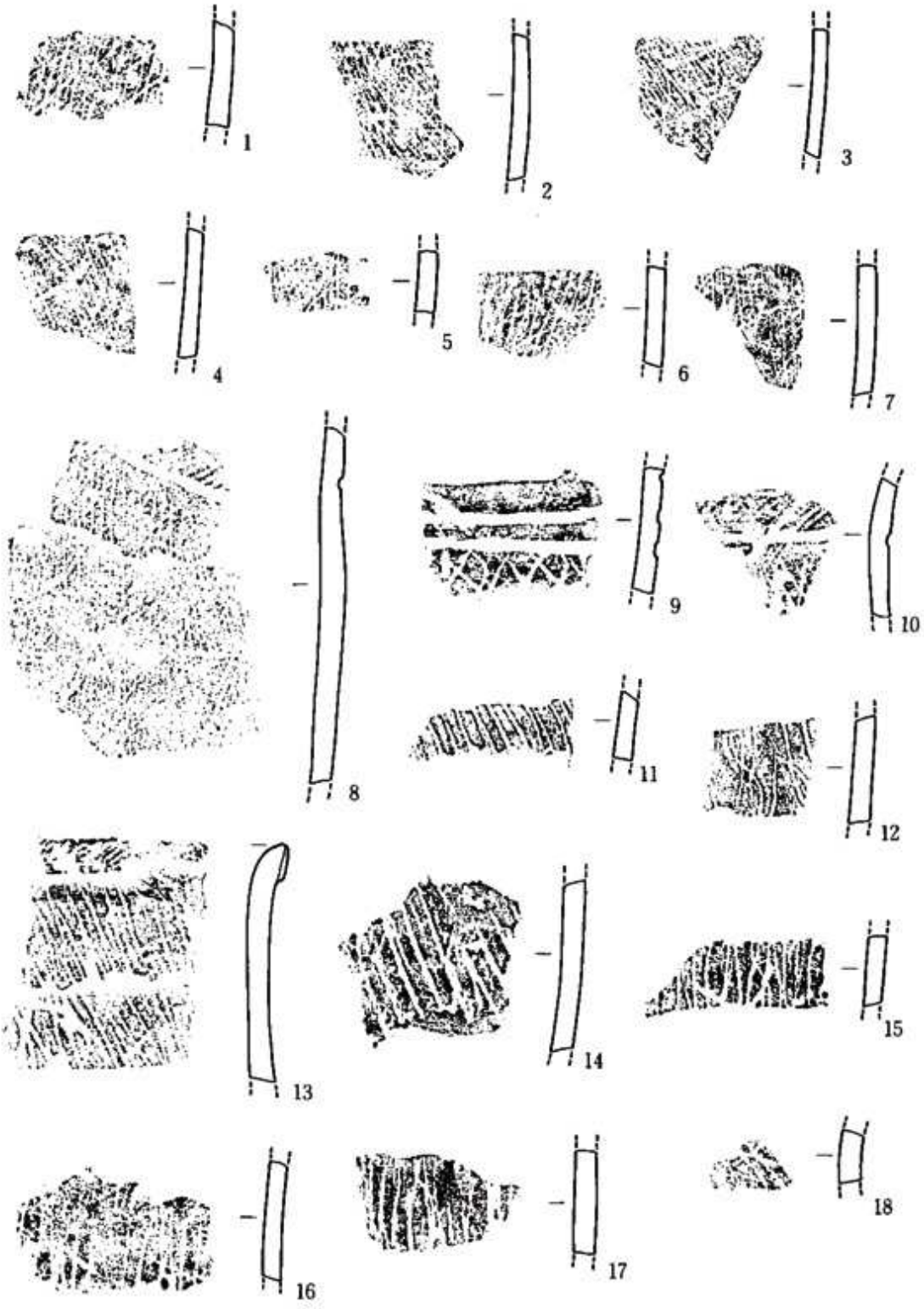
第99図　第Ⅳ群土器拓影図(6)



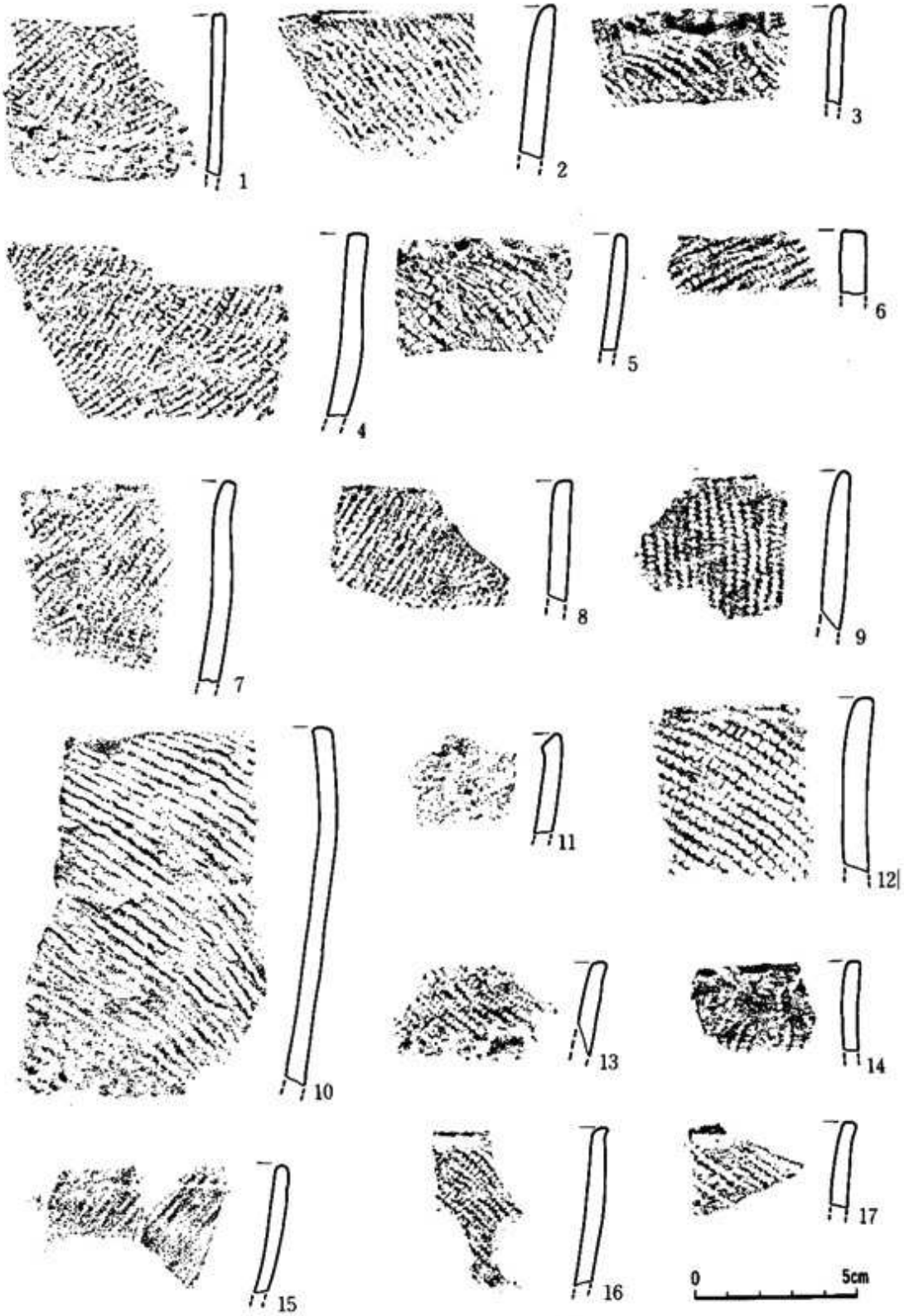
第100図　第Ⅳ群土器拓影図(7)



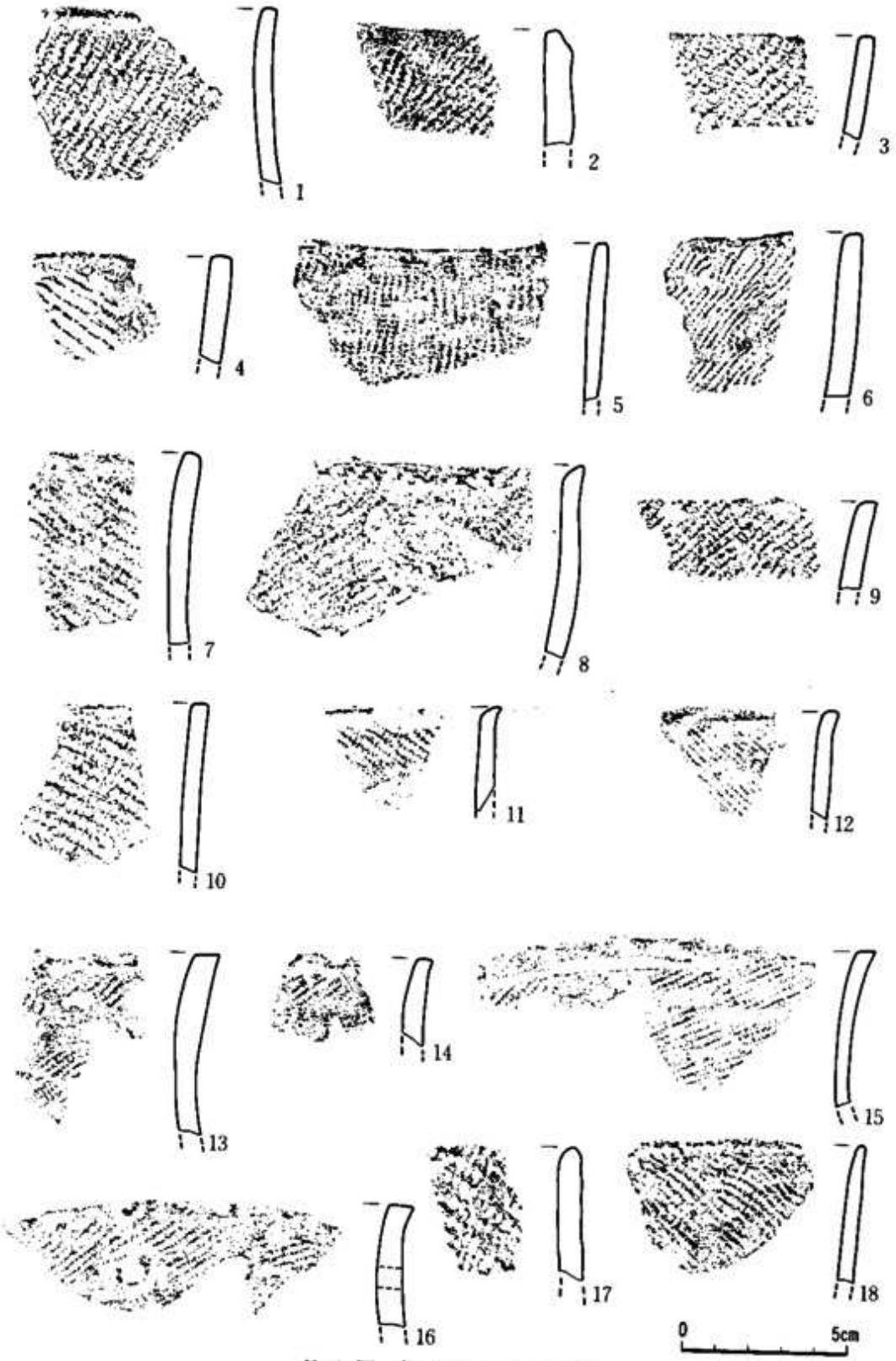
第101図　第Ⅳ群土器拓影図(8)



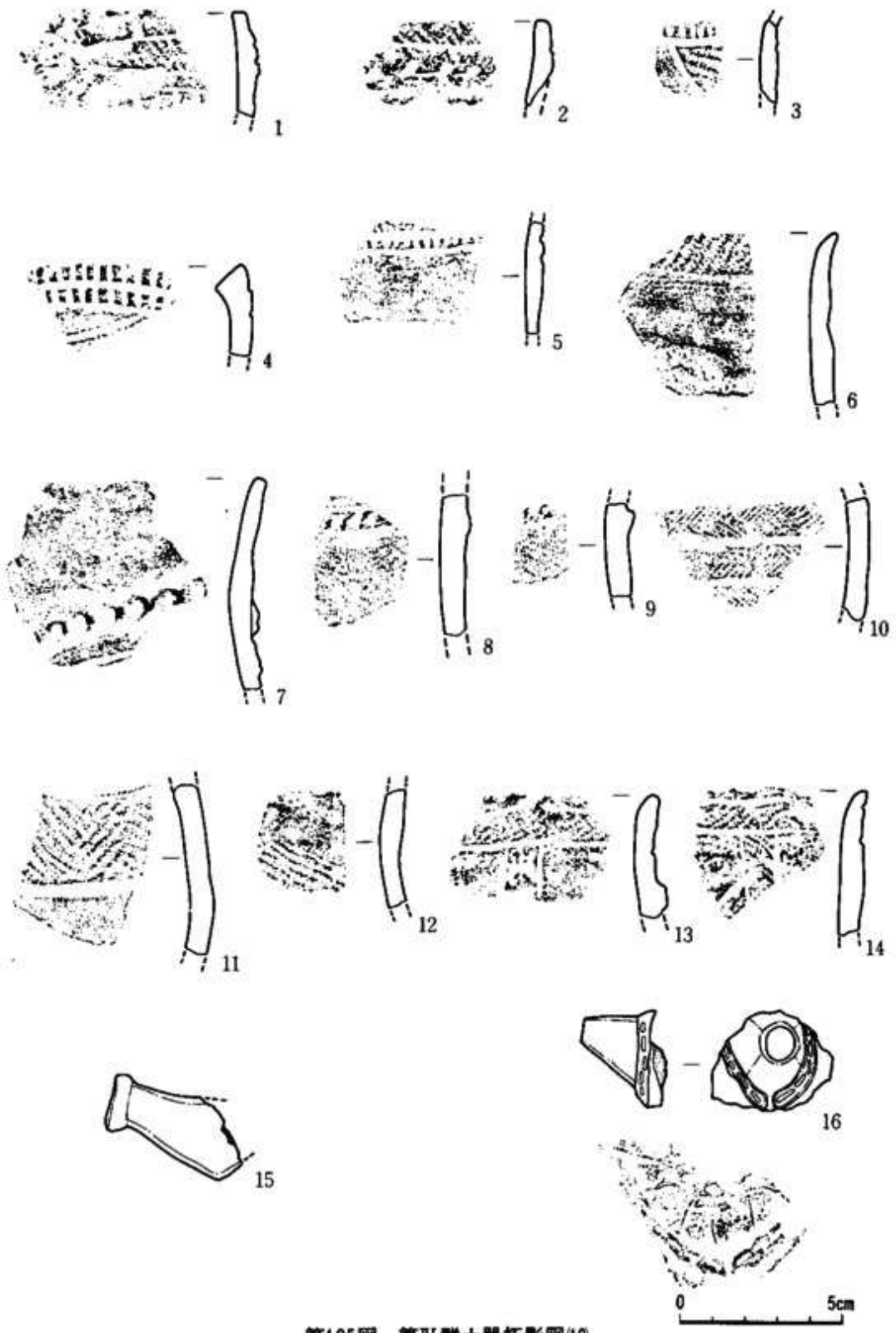
第102図　第Ⅳ群土器拓影図(9)



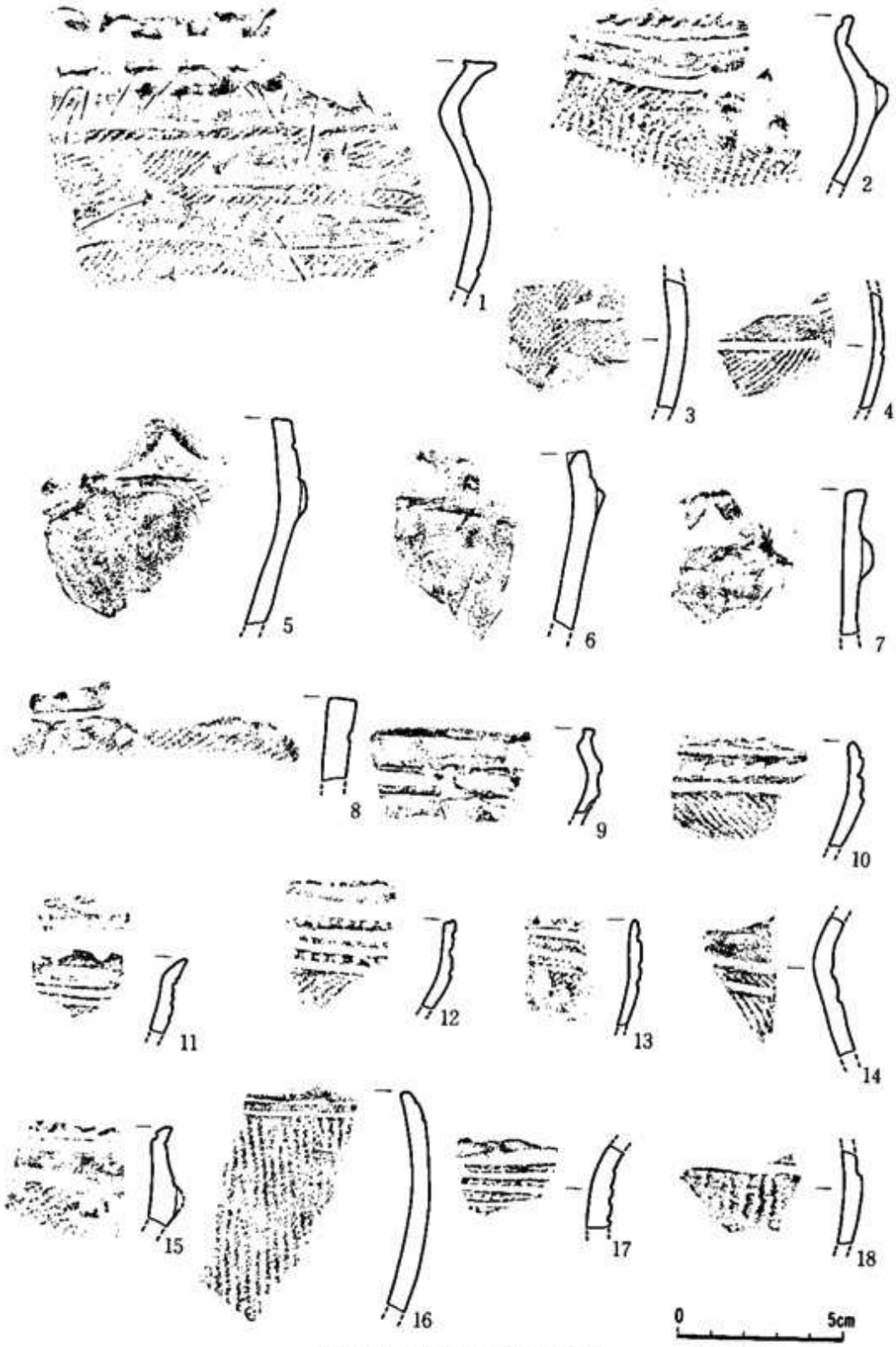
第103図　第Ⅳ群土器拓影図(10



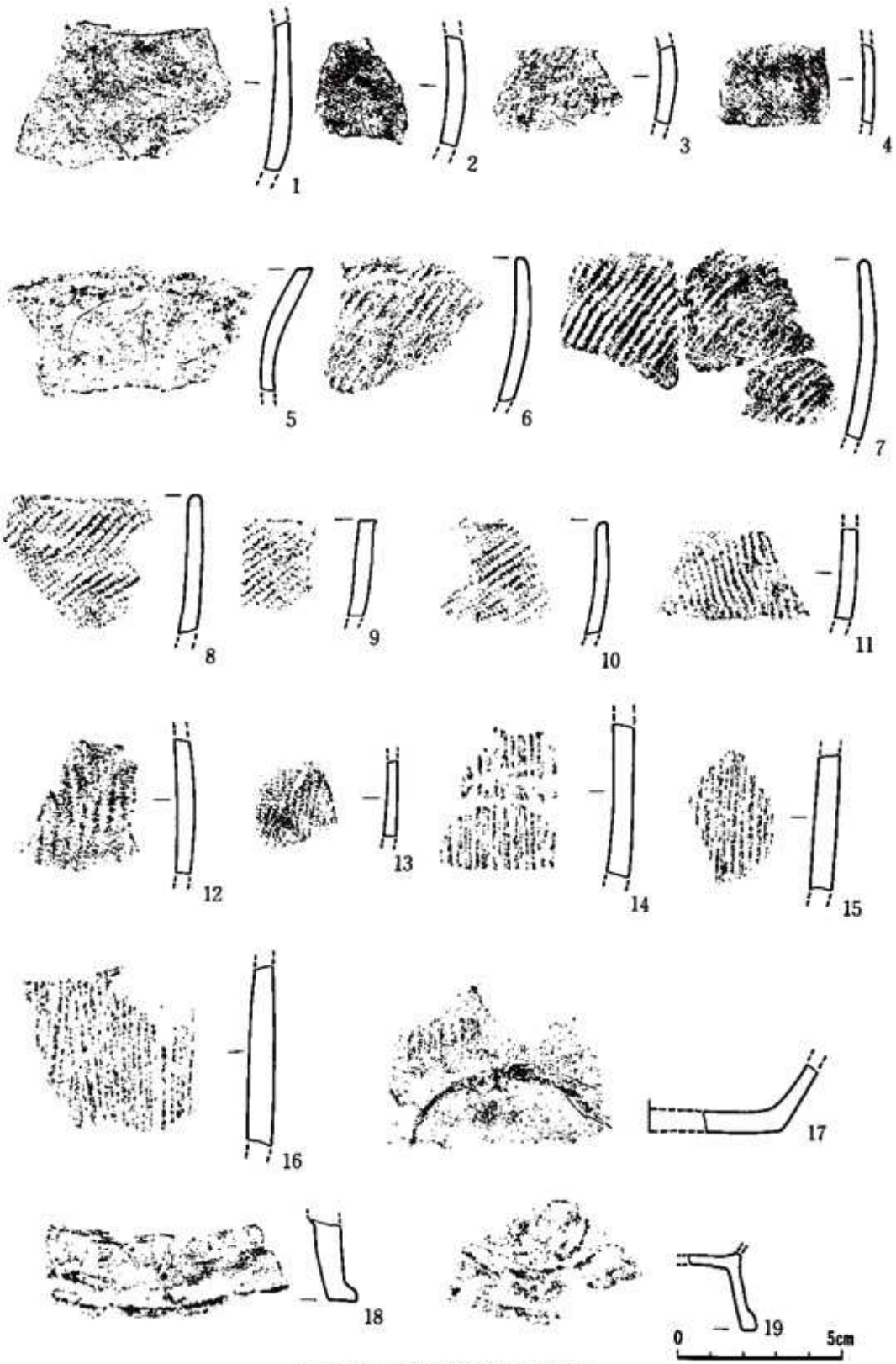
第104図　第Ⅳ群土器拓影図(1)



第105図　第Ⅳ群土器拓影図(12)



第106図　第Ⅴ群土器拓影図(1)



第107図　第Ⅴ群土器拓影図(2)

3．石　　器

本遺跡から出土した石器を次のように分類し、出土点数とともに表記する。

第18表　石器分類表

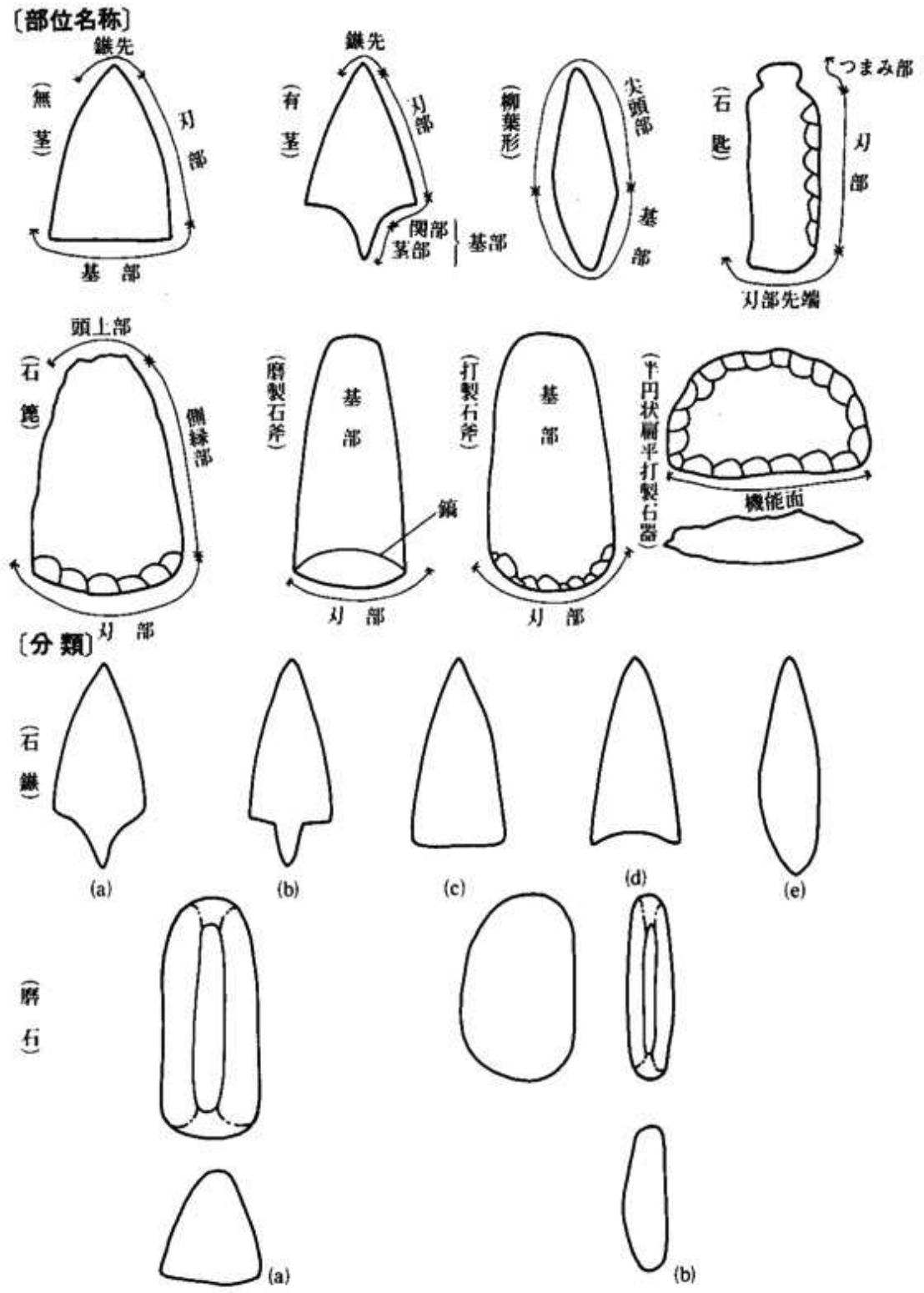
分類 ＼ 出土点数			A地区	B地区	C地区	D地区	E地区	計
石器	Ⅰ．剥片石器	A．石　　鏃	2	1	3	2		8
		B．石　　匙		1		1	1	3
		C．石　　篦	1	1				2
		D．不定形削器		1			3	4
		E．R．フレイク	3	1		1	7	12
	剥片石器の素材	石　　核		1		3		4
		剥　　片		4		8	2	14
	Ⅱ．磨製石器	A．磨製石斧				1	1	2
	Ⅲ．礫石器	A．磨　　石	9	10	1	26	16	62
		B．石　　皿				2	6	8
		C．打製石斧	1			1	1	3
		D．半円状扁平打製石器					1	1
		E．凹　　石				1		1
		F．砥　　石	1					1
		G．敲　　石	1			1		2

Ⅰ－Ａ　石　鏃（第110図１～８、第51図版）

８点出土した。完形品は１点のみで、その他はすべて欠損品である。残存状況は、鏃部を欠損しているものが３点、基部を欠損しているものが１点、残る１点は基部にガジリ[注]がみられるものである。

出土点数は８点と非常に少ないものの、平面形及び大きさにばらつきがみられる。長さは、小さいもので推定値2.1㎝、大きいもので５㎝をこえる。幅は、いずれも基部に最大幅をもち、1.1～2.2㎝である。重さは、軽いもので茎（なかご）の部分が欠損しているものではあるが0.4ｇ、重いもので５ｇである。

基部形態によって分類してみると、ａ．有茎で関（まち）の部分の抉りが浅くＹ字状のもの－Ｙ基有茎（第110図－１・３・４）ｂ．有茎で関と茎がＴ字状を呈するもの－Ｔ基有茎（第110図－２）ｃ．平基無茎のもの（第110図－６）ｄ．凹基無茎のもの（第110図－７・８）ｅ．柳葉形のもの－



第108図　石器の部位名称・分類

尖基無茎（第110図- 5）である。

また所属時期については、第110図- 1 ~ 4に関して言えば、形態および成形方法からみて縄文時代後期以後のものと考えられる。

注．ガジリとは、発掘の際スコップ等で破損した箇所をいう。

第19表　石鏃計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
1	第110図－1	AD－9 Ⅰ	(27)	11	4	(0.9)	珪質頁岩	基部欠損　尖頭部開き角＝27°
2	〃 －2	BA－18 Ⅰ	(16)	13	3	(0.4)	玉髄	〃　〃　＝40°
3	〃 －3	AI－14 Ⅰ	(37)	22	7	(4.0)	珪質頁岩	〃　〃　＝43°
4	〃 －4	BB－20 Ⅰ	(48)	15	8	(3.5)	〃	先端部欠損　〃　＝29°
5	〃 －5	BF－55 Ⅱ	45	13	4	2.3	〃	完形　〃　＝26°
6	〃 －6	BC－25 Ⅰ	(28)	14	4	(1.3)	〃	先端部欠損　〃　＝26°
7	〃 －7	AZ－38 Ⅲ	36	(18)	3	(2.2)	〃	基部ガジリ　〃　＝28°
8	〃 －8	BD－48 Ⅱ	(31)	19	4	(2.2)	〃	先端部欠損　〃　＝31°

注1．計測値の単位は、長さ・幅・厚さ(mm)・重さ(g)である。
2．(　)内の計測値は、現存値を示す。以下同様の表記である。

I－B　石　匙（第110図- 9 ~ 11、第51・52図版）

3点出土した。その内訳は完形品が2点、刃部先端欠損のものが1点である。

いずれも腹面に主要剥離面がみられ、片面加工の縦型石匙である。第110図- 9は、背両側縁ともにつまみ部から刃部先端の方向に剥離を施こし、腹面の右辺にはリタッチがみとめられる。第110図- 10・11は、背面の稜を境に緩傾斜側の縁辺に刃部を作出していることや、主要剥離面にみられる打撃方向も下方からのもの、横からのものなど通常の石匙の製作方法とは相違点がみとめられた。この種の製作技術は、縄文時代後期以後、特に、晩期にみられる現象である。第110図- 9は、リタッチなどにみられる製作方法から縄文時代早期末葉から前期初頭の所産とと考えられる。

第20表　石匙計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
1	第110図－9	AQ－5 Ⅳ	42	21	65	6.3	珪質頁岩	完形　縦形－小形　α＝50°
2	〃 －11	BB－20 Ⅰ	(72)	30	7	(13.3)	〃	欠損　〃　α＝42°
3	〃 －10	BB－29 Ⅱ	66	23	10	11.5	玉髄	完形　〃　α＝65°

注1．作業角は刃部の剥離を1剥離毎に計測し、その平均値を示したものである。

Ⅰ－Ｃ　石　箆（第111図－ 12・14、第52図版）

２点出土した。１点は完形品である。

平面形は、左右が、ほぼ対称で頭上部は狭く、刃部に向って直線的に、あるいはやや弧を描きながら広がり、刃部はゆるい弧状である。刃部の形態は片刃で、その角度は67°と69°とやや急傾斜をなす細部調整が施されている。

素材は、どちらも横長剥片を使用し、バルブの高まりを除去しようと背面、腹面に荒い剥離がみとめられるが除去しきれなかったようだ。

第21表　石箆計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材	備　　考	
1	第111図－12	ＡＦ－17　Ⅳ	(63)	36	16	(30.3)	珪質頁岩	頭上部欠損	α＝69°
2	〃　－14	ＢＢ－25　Ⅰ	51	32	13	19.0	〃	完形	α＝67°

Ⅰ－Ｄ　不定形削器（第111図－ 13・15～17、第52・53図版）

４点出土した。このうち完形品は３点である。フレイクの縁辺に施された調整剥離が刃部としての機能に耐えうるものを本類とした。

本石器は、腹面にいずれも主要剥離面を残し、雑な作りのものが多く、背面全体に調整剥離をしているものは第111図－ 16のみである。また、第111図－ 13は小型のものであるが、縁辺に凹状の刃部を作出している。

素材は、いずれも縦長の剥片を用いている。打面を残しているものは、第111図－ 13・15・17であるが、その打角は110°～115°である。

第22表　不定形削器計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材	備　　考	
1	第111図－13	ＡＶ－12　Ⅰ	43	24	6	6.1	珪質頁岩	完形　凹状刃部	α＝58°
2	〃　－15	ＡＵ－9　Ⅰ	82	38	8	23.0	〃	完形	α＝56°
3	〃　－16	ＡＰ－7　Ⅰ	82	(41)	9	38.1	〃	胴部欠損	α＝52°
4	〃　－17	ＢＣ－25　Ⅰ	39	26	10	11.0	玉　髄	完形	α＝59°

Ⅰ－Ｅ　Ｒ．フレイク（第112図－ 18～25、第113図－ 26～28、第53・54図版）

12点出土した。このうち1点は遺構内からの出土である。

フレイクの縁辺になんらかの調整剥離を施しているものを本類とした。なかには欠損品であるため用途不明のもの(第112図- 21・22)、刃部としての機能を果しえないもの(第112図- 23、第113図- 26)も含まれている。

素材は、いずれも縦長剥片を用いている。打面が残っているものは6点で、その打角は110°~119°である。すべて単打面、自然打面であり敢えて打面調整を施しているものはない。

第23表　R．フレイク計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材	備　　考
1	第112図－20	BA－19　Ⅰ	43	55	16	36.8	珪質頁岩	完形
2	〃　－19	AP－8　Ⅰ	32	30	8	8.1	〃	〃
3	第113図－28	AQ－8　Ⅳ	70	46	17	54.2	〃	〃
4	第112図－23	BA－28　Ⅱ	23	22	9	4.3	玉　髄	〃
5	第113図－26	AS－6　Ⅱ	89	41	12	31.2	珪質頁岩	〃
6	第112図－21	BD－27	(23)	41	10	(13.1)	〃	欠損
7	〃　－22	AP－6　Ⅰ	(34)	(37)	10	(10.8)	ホルンフェルス	〃
8	〃　－24	AH－17	46	40	10	12.7	珪質頁岩	完形
9	第113図－27	AE－15	33	29	11	9.5	〃	〃
10	第112図－25	AP－17　Ⅲ	45	36	12	12.2	〃	〃
11	〃　－18	AP－7　Ⅳ	60	30	13	21.5	〃	〃

剥片石器の素材(第113図- 29・30、第55図版)

本遺跡で出土した素材は、石核というより残核といったようなもので、この種のものは3点出土した。うち、1点は表面採集である。

剥ぎ取られた剥片は、横長の小剥片のものが多い。それぞれの剥離について観察してみると、器体中央部にヒンジフラクチャーや階段状の剥離がみられる。転移の仕方には、特に、規則性がみとめられるものはない。

剥片は、16点出土し、自然面を残すものが6点出土した。剥片としたものには、いわゆるチップと称されるようなものも含まれている。小型の横長剥片が多く、石匙などの大型の石器を製作できる大きさのものはほとんどない。

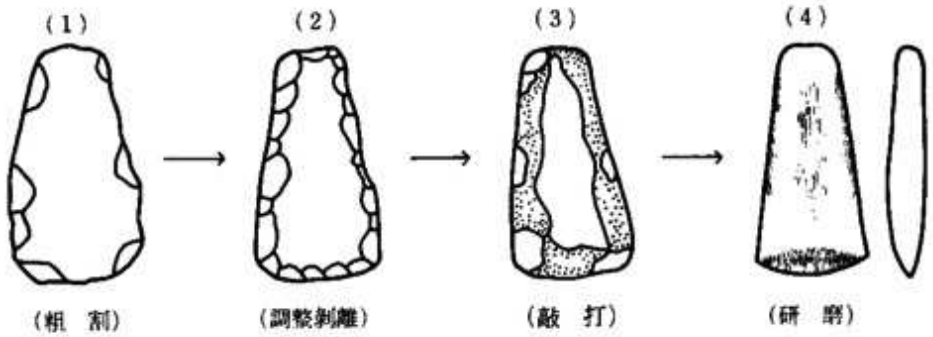
Ⅱ－A　磨製石斧(第113図- 31・32、第54図版)

2点出土した。1点は完形品である。

本遺跡から出土したものは、いわゆる定角式磨製石斧と称されるもので、擦切磨製石斧と区別される。平面形は撥状で、基部側縁に稜をつくり、その断面は、隅丸長方形である。刃部は、円刃のもの（第113図- 31）と扁刃の両刃のもの(第113図- 32)がある。第113図- 31は、主斧面、基部側縁に敲打痕を残しているものである。

下図は、磨製石斧の製作工程を示したものである。

第109図　磨製石斧の製作工程（模式図）



第24表　磨製石斧計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材	備　考
1	第113図－31	AQ－6　I	92	42	15	105	頁　岩	完形
2	〃　－32	AZ－16　I	(42)	36	21	(41)	珪質頁岩	基部欠損

Ⅲ- A　磨　石（第114～120図- 37～88、第56～59図版）

62点出土したが、うち10点は遺構内からの出土である。接合したものが5点あり、そのなかには直線で20mも離れて出土したものもある。本類は、各地区から出土しているが、とりわけ沢を狭んで南側のD地区・E地区に出土量が多くみられ、全体の約70%を占めている。

扁平磨石、球状磨石等にみられる主面や周縁に機能面をもつものとは区別され、自然礫の稜に明瞭な機能面を有するものを本類とした。素材とする自然礫の形態から、a、三角柱状の角柱を素材としているもの、b、扁平礫を素材とするものの二つに大別した。

第119図- 74・75は、周縁に荒い打ち欠きを施し、長軸の端部に磨擦痕のある抉りを設け、最終機能面は長軸側縁部に残った磨擦痕である。石錘の再利用品とも考えられる。

稜に残された機能面は、幅4～29mmで平均15.2mmである。平面形は、両端が膨むもの（第118図-68他）、中央部に膨みをもつもの（第114図- 38他）、ほぼ平行に走っているもの（第114図- 37他）

がある。移動面が均一になされたものはなく、片減りしたものが多い。なお、機能面の感触は石材の粒子にもよるであろうが、磨滅痕というよりざらざらしたものが多い。また、機能面の周辺には、敲打によって生じたと思われる剥離がみられるものもある。これらのことを鑑みると、機能面は長軸方向に沿って移動させる磨擦作業と上下運動による敲打作業の二つを併せもつものと考えられる。

時期は、中撤浮右層より下層から出土したものが多いこと、磨石の出土周辺から早稲田Ⅴ類の土器が出土していることから、縄文時代早期末葉～前期初頭のものと考えられる。

第25表　磨石計測表(1)

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考	
1	第114図－37	AR－18 Ⅳ	192	80	69	1,530	砂岩	完形 a	f_1
2	〃 －38	〃 〃	185	90	59	1,280	〃	〃 a	f_1
3	〃 －39	BA－24 Ⅰ	156	79	65	918	安山岩	〃 a	f_1
4	〃 －40	BB－25	154	71	64	890	チャート	〃 a	f_1
5	第115図－41	AR－16 Ⅳ	161	92	86	1,340	砂岩	〃 a	f_1
6	〃 －42	BA－28 Ⅰ	171	79	63	765	安山岩	接合完形 a	f_1
		BA－30 〃							
7	〃 －43	BA－18 Ⅳ	175	74	65	790	チャート	完形 a	f_1
8	〃 －44	BB－29 〃	163	80	63	836	流紋岩	〃 a	f_1
9	〃 －45	D地区	138	69	54	712	安山岩	接合完形 a	f_1
10	〃 －46	AQ－10 Ⅳ	170	65	64	937	〃	完形 a	f_2
11	〃 －47	AP－8 Ⅳ	136	(59)	44	(456)	砂岩	欠損 a	f_1
12	〃 －48	BA－19 Ⅳ	109	61	39	344	〃	完形 a	f_1
13	第116図－49	BB－29 Ⅰ	133	(45)	(55)	(448)	〃	欠損 a	(端) f_1
14	〃 －50	AR－18 Ⅳ	111	78	64	727	チャート	完形 a	f_1
15	〃 －51	BC－20 Ⅰ	(110)	70	59	(407)	砂岩	欠損 a	f_1
16	〃 －52	AR－18 Ⅳ	(104)	67	63	(586)	安山岩	〃 a	f_1
17	〃 －53	D地区	(65)	(61)	(45)	(168)	砂岩	〃 a	f_1
18	〃 －54	AZ－18 Ⅰ	(88)	72	59	(573)	安山岩	〃 a	f_1
19	〃 －55	D地区	(86)	74	56	(365)	砂岩	〃 a	f_1
20	〃 －56	BA－28	(67)	(54)	40	(191)	安山岩	〃 a	f_1
21	〃 －57	BD－20 Ⅱ	(52)	66	48	(236)	砂岩	〃 a	f_1
22	〃 －58	BE－21 Ⅳ	(61)	(75)	(75)	(234)	〃	〃 a	f_1
23	〃 －59	AX－13 Ⅰ	(65)	(51)	(37)	(187)	安山岩	〃 a	f_1
24	〃 －60	BC－19 Ⅳ	(93)	70	52	376	砂岩	〃 a	(端) f_1
25	第117図－61	AL－5 Ⅰ	165	74	61	1,000	〃	接合完形 a	f_1
		AM－6 Ⅰ							

第26表　磨石計測表(2)

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
26	第117図−62	BB−29	152	84	58	777	凝灰岩	完形 a f_1
27	〃 −63	AT−9 Ⅳ	(126)	77	(59)	(485)	砂岩	欠損 a f_1
28	〃 −64	BH−26 〃	154	71	51	721	凝灰岩	完形 a f_1
29	〃 −65	BD−28 〃	(97)	69	64	(467)	安山岩	欠損 a f_1
30	〃 −66	AQ−9 〃	143	65	59	610	砂岩	完形 a f_1
31	〃 −67	AL−6 Ⅰ	166	68	60	748	〃	接合完形 a f_2
		AT−10 Ⅳ						
32	第118図−68	AP−7 Ⅰ	142	49	45	497	砂岩	完形 a (端) f_2
33	〃 −69	BA−29 Ⅳ	159	59	50	650	〃	〃 a f_3
34	〃 −70	AI−9 〃	(95)	65	44	(379)	安山岩	欠損 a (端) f_1
35	〃 −71	BD−18 Ⅱ	(52)	66	48	(236)	砂岩	〃 a f_3
36	〃 −72	D地区	(125)	60	60	(440)	〃	〃 a (端) f_1
37	〃 −73	AR−10 Ⅳ	120	59	46	406	〃	完形 a f_3
38	第119図−74	AM−7 〃	(116)	70	31	(464)	輝緑岩	欠損 b 端一択 f_1
39	〃 −75	AQ−6 〃	(97)	63	39	(375)	砂岩	〃 b 〃 f_1
40	〃 −76	AL−5 Ⅰ	143	76	41	642	安山岩	完形 b f_1
41	〃 −77	BA−19 Ⅰ	(48)	(50)	(26)	(72)	砂岩	欠損 b f_1
42	〃 −78	AC−13	127	78	25	394	〃	完形 b (端) f_1
43	〃 −79	BA−19 Ⅳ	161	74	40	745	〃	接合完形 b f_1
		BC−19 〃						
44	〃 −80	E地区	(155)	87	43	832	砂岩	欠損 b f_1
45	〃 −81	BB−15 Ⅰ	106	68	46	510	凝灰岩	完形 b f_1
46	第120図−82	BG−23 Ⅱ	146	81	47	653	砂岩	〃 b f_1
47	〃 −83	AW−11 Ⅳ	145	86	41	825	安山岩	〃 b f_1
48	〃 −84	AU−19 Ⅳ	(94)	65	35	(317)	砂岩	欠損 b f_1
49	〃 −85	BF−41 Ⅱ	(113)	71	52	(585)	砂岩	〃 a f_1
50	〃 −86	BC−30 Ⅳ	167	67	56	1,025	砂岩	完形 a f_2

第27表　磨石計測表(3)

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	厚さ	石　材	備　　考
51	第120図－87	AR－10　Ⅳ	(88)	76	55	(631)	安山岩	欠損　a　f_1
52	〃　－88	AR－18　〃	134	70	53	622	砂　岩	〃　a　f_1

注1．表記中備考欄のaは角柱礫、bは扁平礫をあらわす。
注2．fは機能面をあらわし、f_1は機能面が1面使用のもの、f_2は2面使用、f_3は3面使用のものである。
注3．(端)は、端部に敲打痕が残っている例である。

Ⅲ－B　石　皿（第121図－91～95、第59図版）

8点出土したうち3点は遺構内からの出土である。完形品は第121図－94の1点のみである。接合したものが2点みとめられた。

素材には、比較的大型で肉厚な礫を選び、すべて1kg以上で10kgを越えるものが3点あった。大型の石皿は上面と下面が平行になっているものがなく、いわゆるすわりの悪いものが多いため、おそらくある程度土を掘って機能面が平行になるように埋めてから使用したものと考えられる。

機能面は、敲打作業を行ったと思われるざらざらした面(第121図－93・94)と、磨擦作業を行ったと思われる滑らかな面(第121図－91・92)をもつものがある。この機能面は出土した磨石の機能面と一致する。使用面は、1面使用のものと、2面使用のものがある。第121図－94はざらざらした機能面に小さな凹痕が13ケ所みとめられる。

第28表　石皿計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材	備　　考
1	第121図－91	BA－19　Ⅳ	(232)	160	100	5,190	安山岩	欠損　f_1
2	〃　－92	BD－19　Ⅳ	(374)	(304)	187	10kg以上	〃	〃　f_2
3	〃　－93	AQ－10　Ⅳ	(238)	300	134	10kg以上	〃	〃　f_1
4	〃　－94	E地区	149	121	43	7,540	〃	完形　f_1
5	〃　－95	〃	235	147	68	2,720	石英安山岩	欠損　f_1

Ⅲ－C　打製石斧（第114図－33～35、第56図版）

3点出土し、このうち完形品は2点である。

扁平な河原石に周辺から打撃を加え、全体を成形しながら下辺に刃部を作出している。両面

あるいは、片面に自然面を残している。平面形は、およそ撥状を示し、刃部形態は円刃のもの（第114図- 33・35）と扁刃のもの（第114図- 34）がある。いずれも断面形態は片刃で、その刃部角は60°～88°である。

第29表　打製石斧計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材	備　　考
1	第114図－33	AZ－11　I	104	51	26	118	安山岩	完形　　α＝67°
2	〃　－35	BA－18　Ⅳ	86	52	19	85	輝緑岩	〃　　α＝60°
3	〃　－34	AR－10　Ⅳ	(82)	76	32	(233)	安山岩	基部欠損　　α＝88°

Ⅲ- D　半円状扁平打製石器（第114図- 36、第56図版）

完形品が1点出土した。

前述した打製石斧に平面形が酷似しているが、刃部を作出しておらず、下辺に「あばた」状の磨擦痕が残っている点に相違点がみとめられる。

本来、半円状扁平打製石器は、縄文時代前期に位置づけられる円筒下層a・b式土器に伴って出土するものであるが、本遺跡ではこれらの土器が出土していない。1点のみの出土であり、詳細については不明である。

第30表　半円状扁平打製石器計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材	備　　考
1	第114図－36	AP－5　I	160	102	35	805	閃緑岩	完形

Ⅲ- E　凹　石（第120図- 90、第59図版）

1点出土した。

表面に3ケ所、裏面に7ケ所、凹痕がみとめられる。また、両端には抉りがもうけられている。凹痕の深さは1.5～5㎜である。凹痕周辺には剥落がみとめられる。大きさも6.1×6.7㎝と手ごろである。

第31表　凹石計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材	備　　考
1	第120図－90	D地区　表採	61	67	28	160	お茶ホルンフェルス	完形

Ⅲ- F　砥　石（第121図- 96、第59図版）

1点出土した。

作業面は4面みとめられた。稜および作業面の作出や使用痕は、金属器を使用したものであり、使用された時期は中世以後のものと思われる。

第32表　砥石計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材	備　　考
1	第121図－96	AT－17　Ⅰ	(69)	55	49	274	凝灰岩	欠損　f4

Ⅲ- G　敲　石（第120図- 89、第59図版）

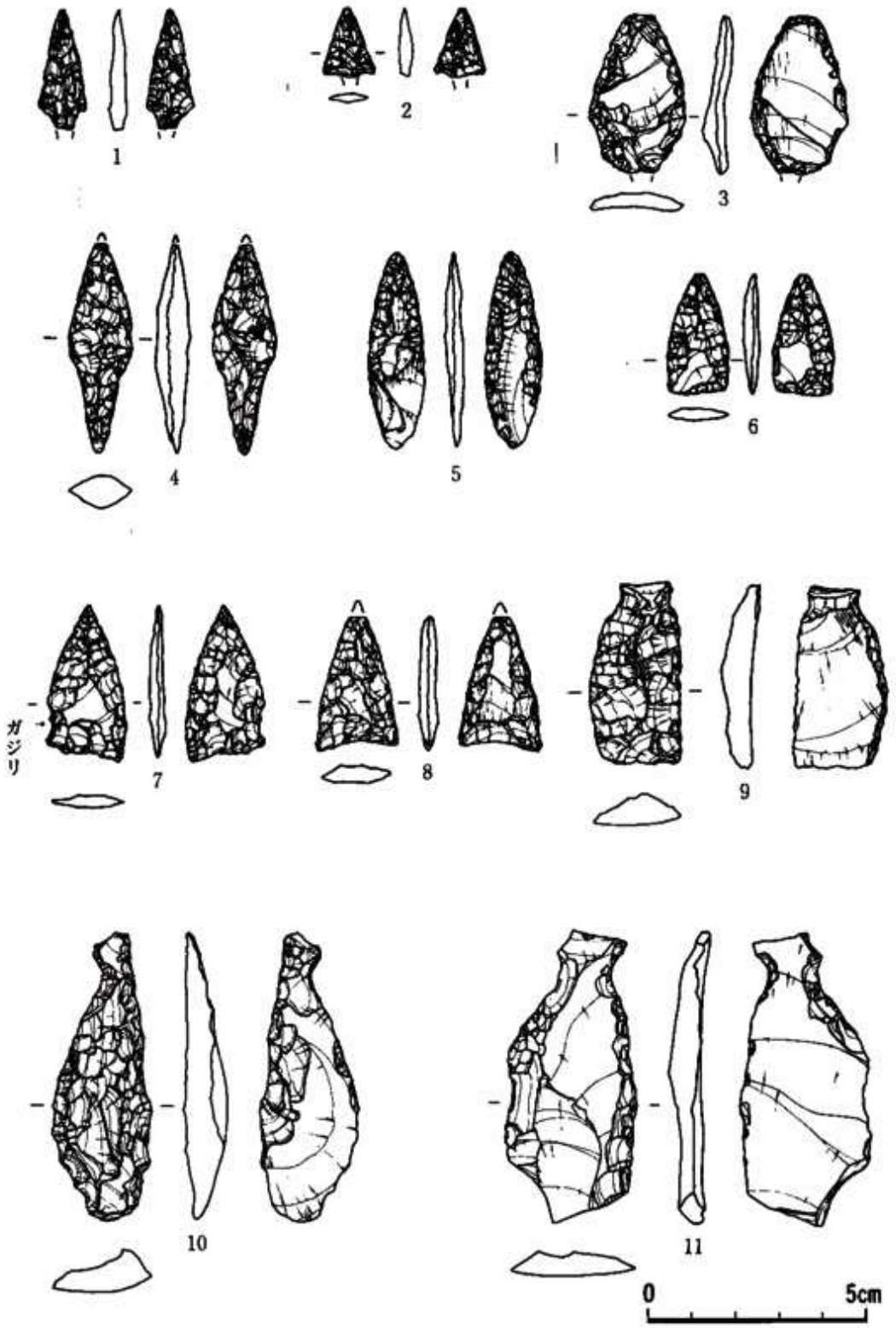
2点出土した。1点は遺構内からの出土である。

第120図- 89は、扁平礫の四角のうち三角に敲打痕がみとめられ、他の一角も敲打によって生じた欠損と考えられる。

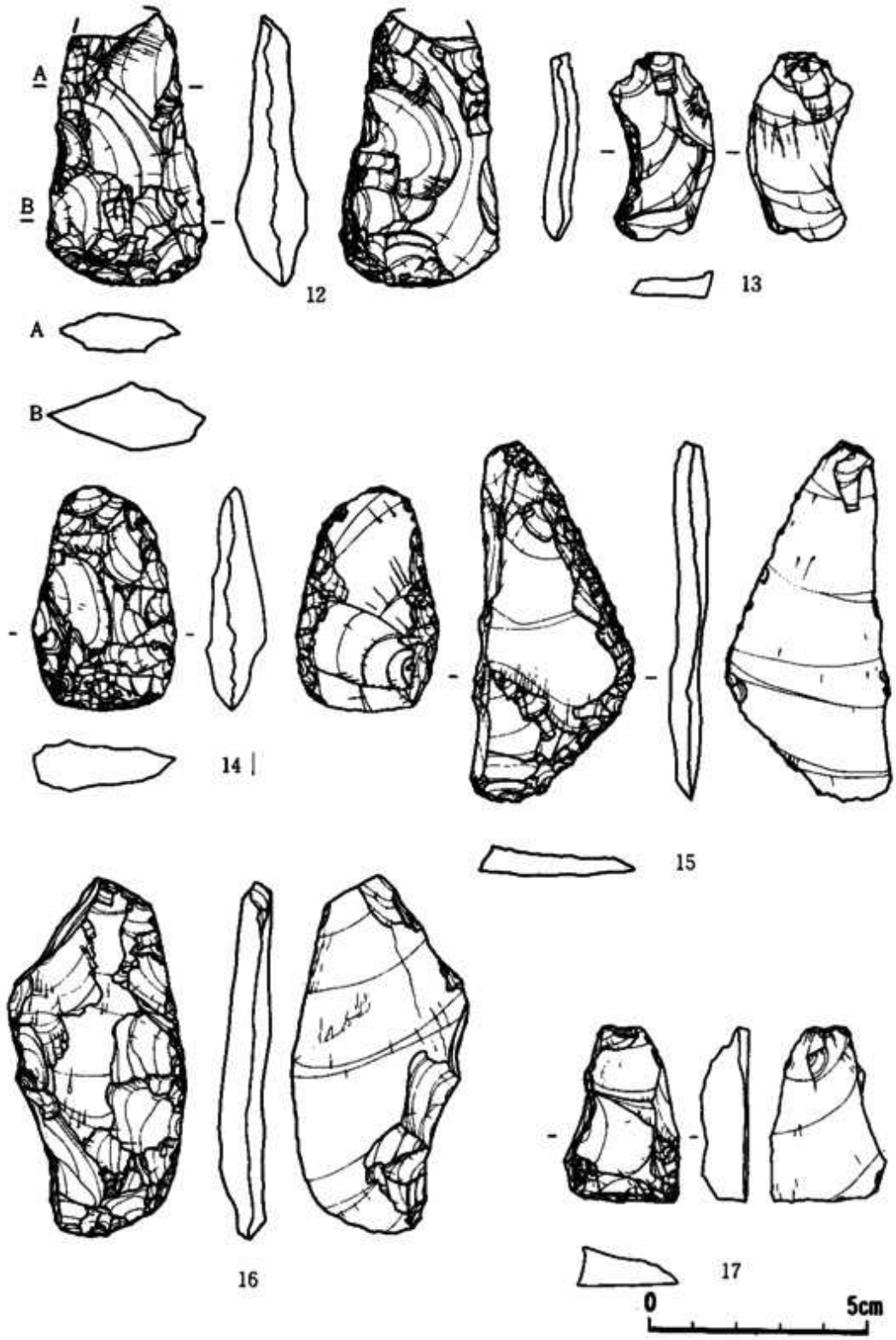
第33表　敲石計測表

No.	実測図番号	出土区・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石　材	備　　考
1	第120図－89	AS－18　Ⅰ	112	108	39	750	砂　岩	1端欠損

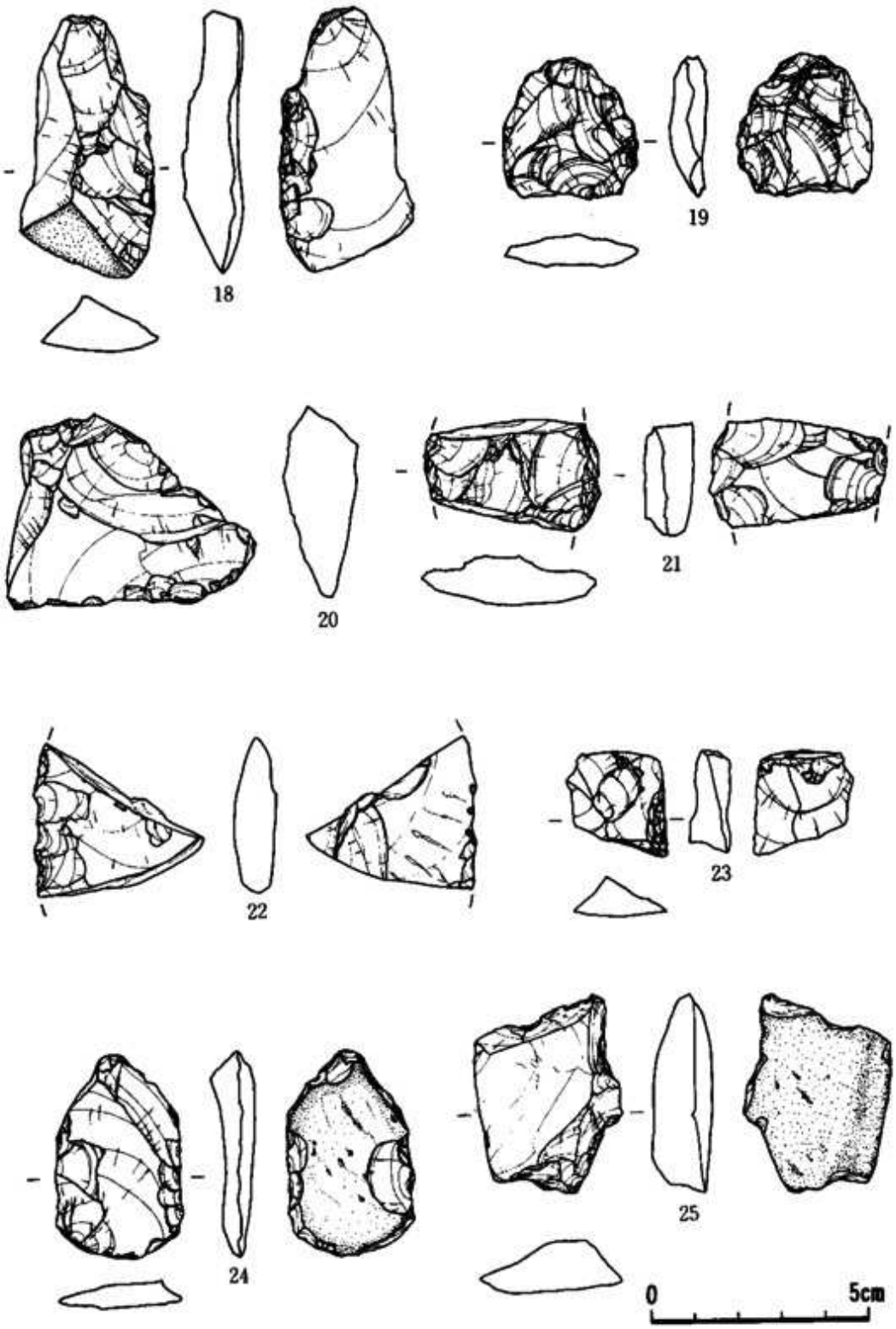
（岩田　　満）



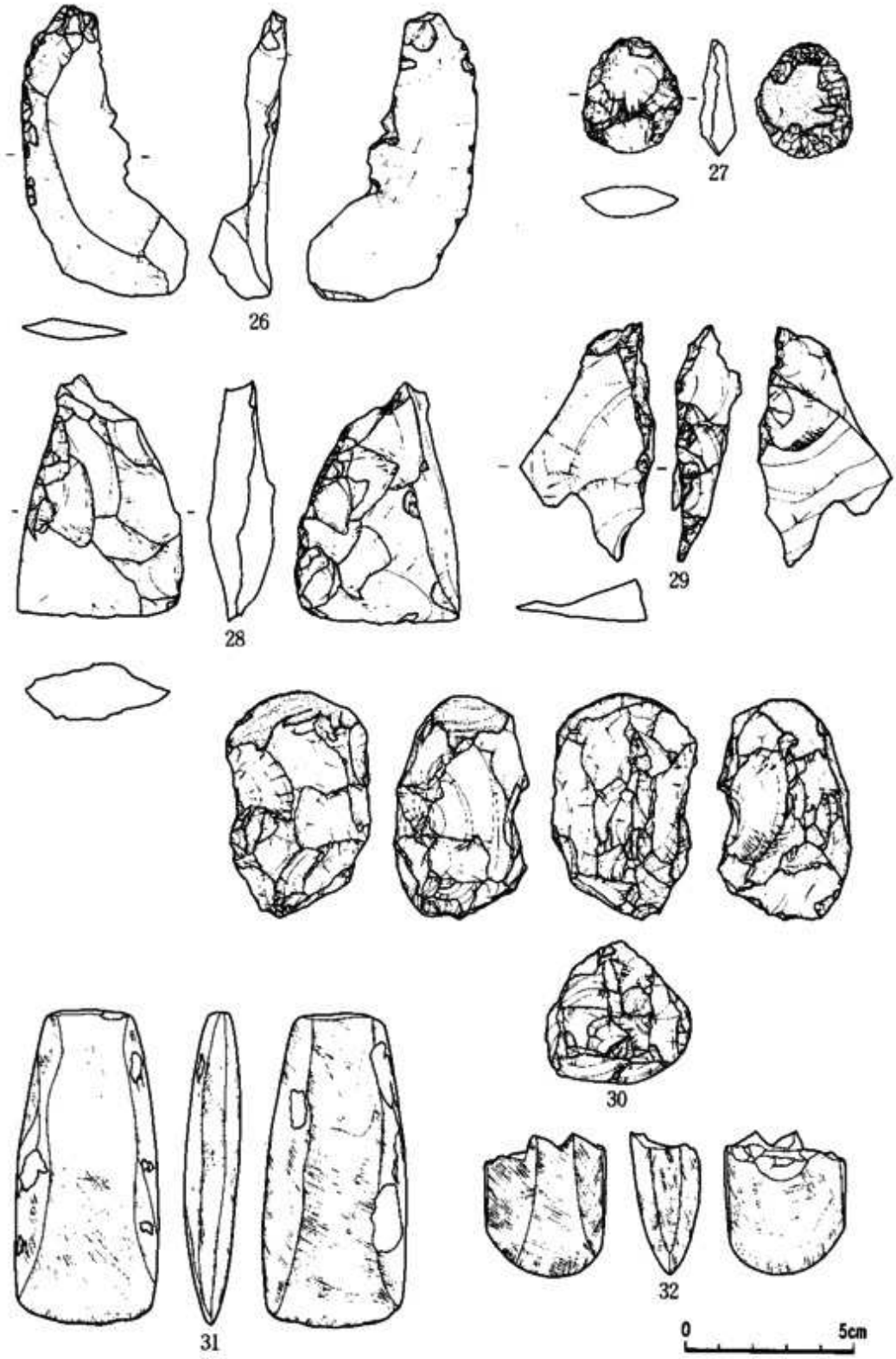
第110図　石器実測図(1)



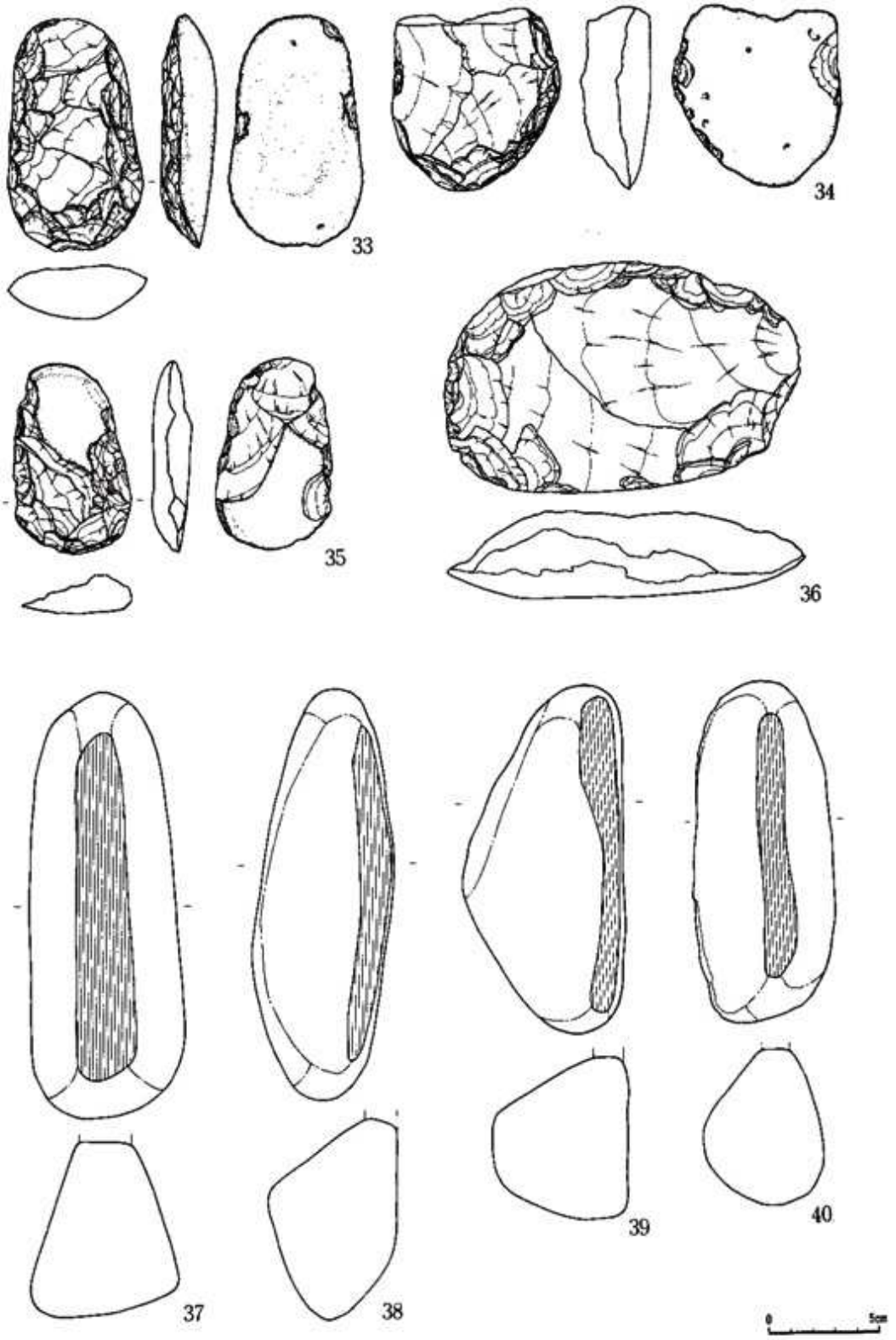
第111図　石器実測図(2)



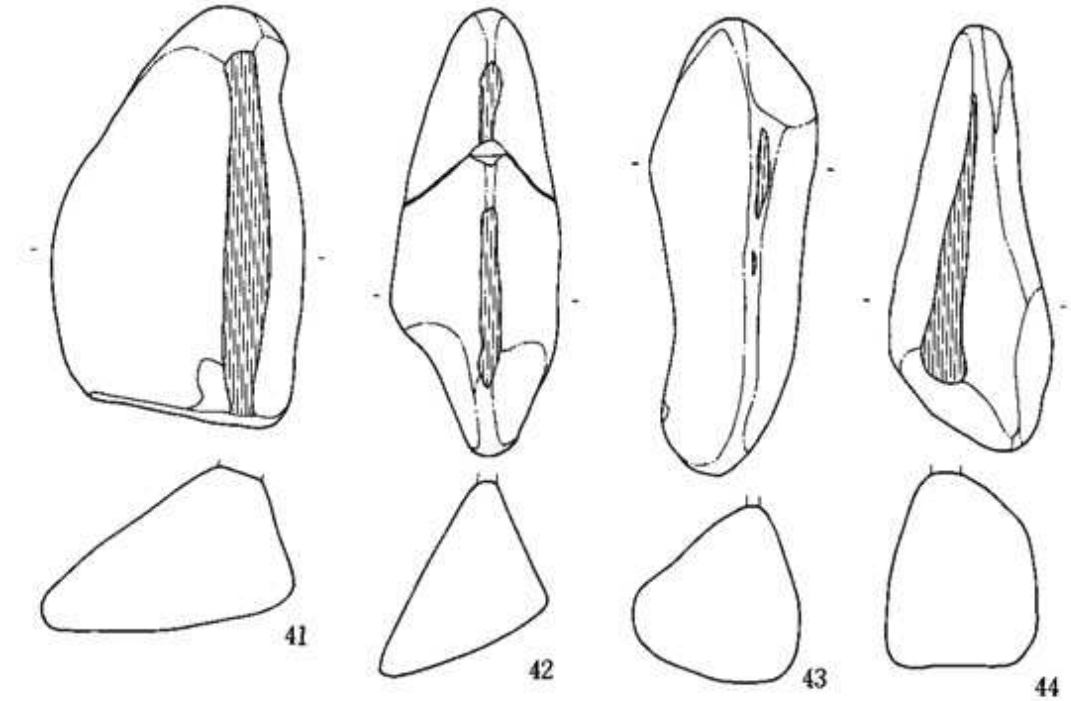
第112図　石器実測図(3)

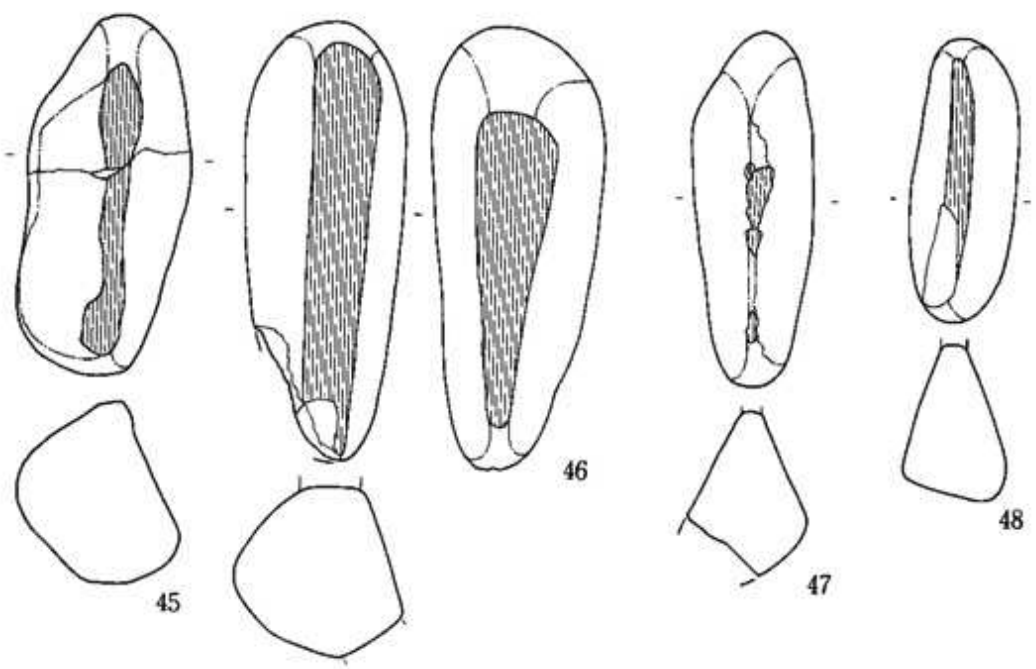


第113図　石器実測図(4)



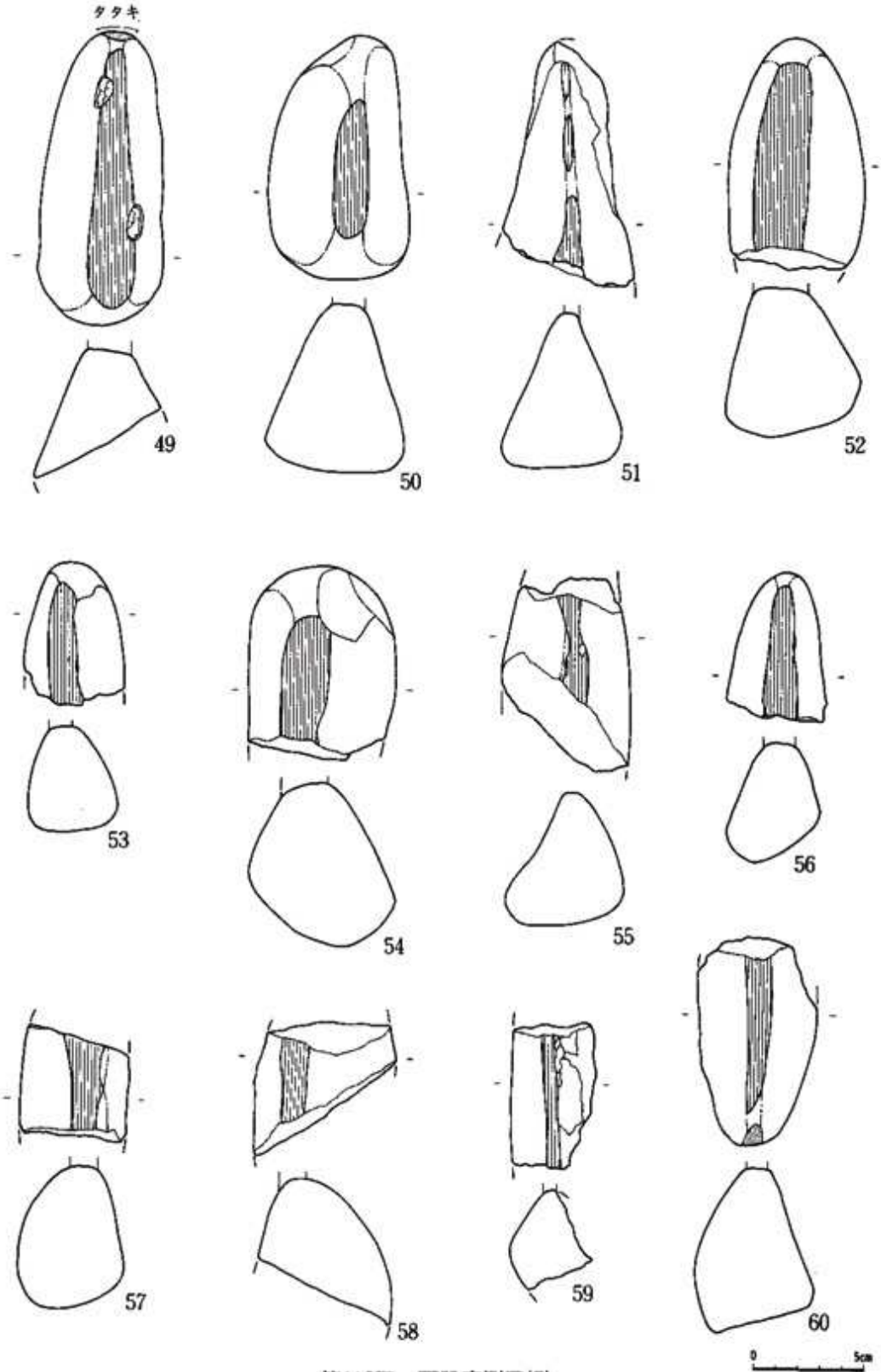
第114図　石器実測図(5)



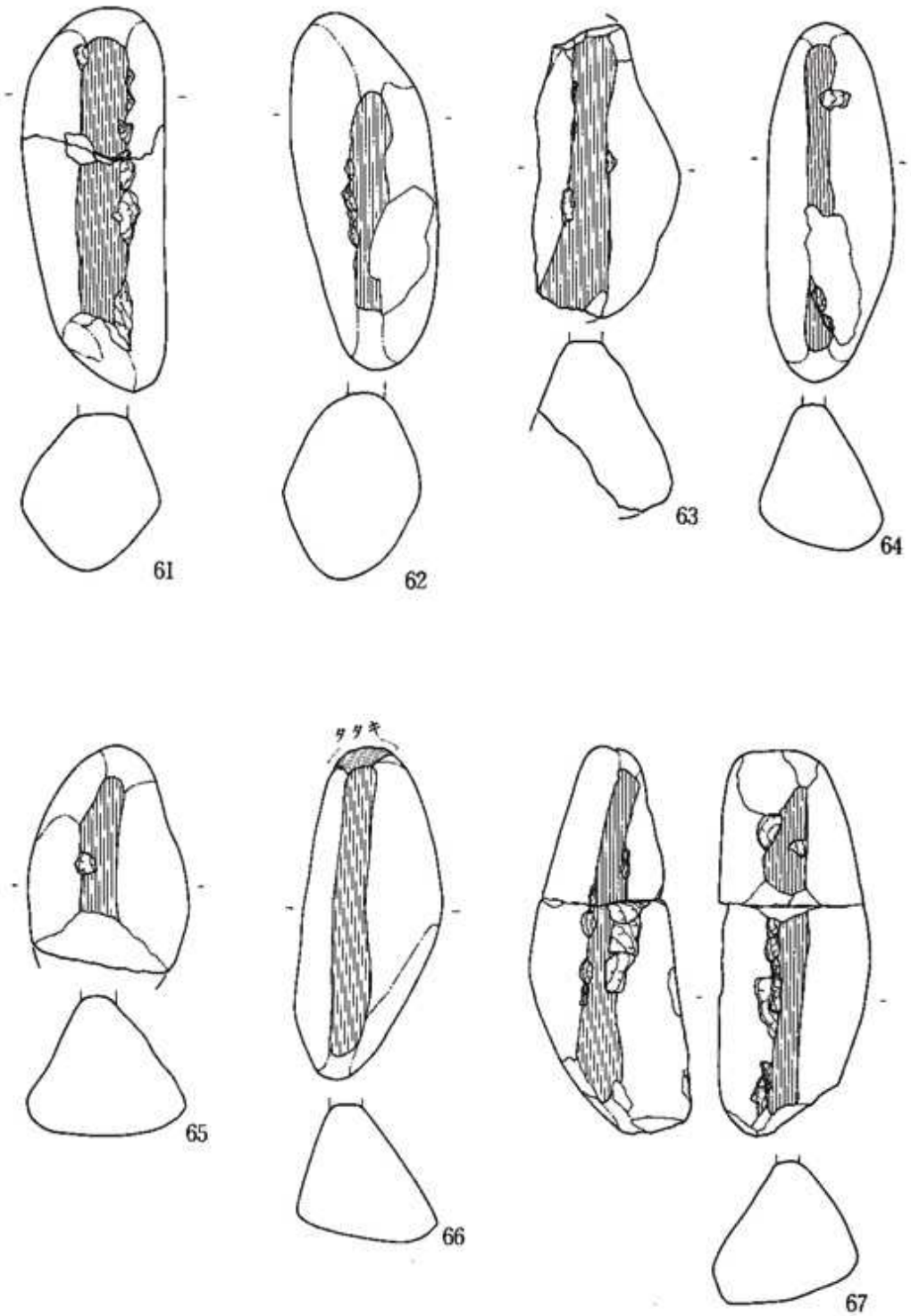


0 5cm

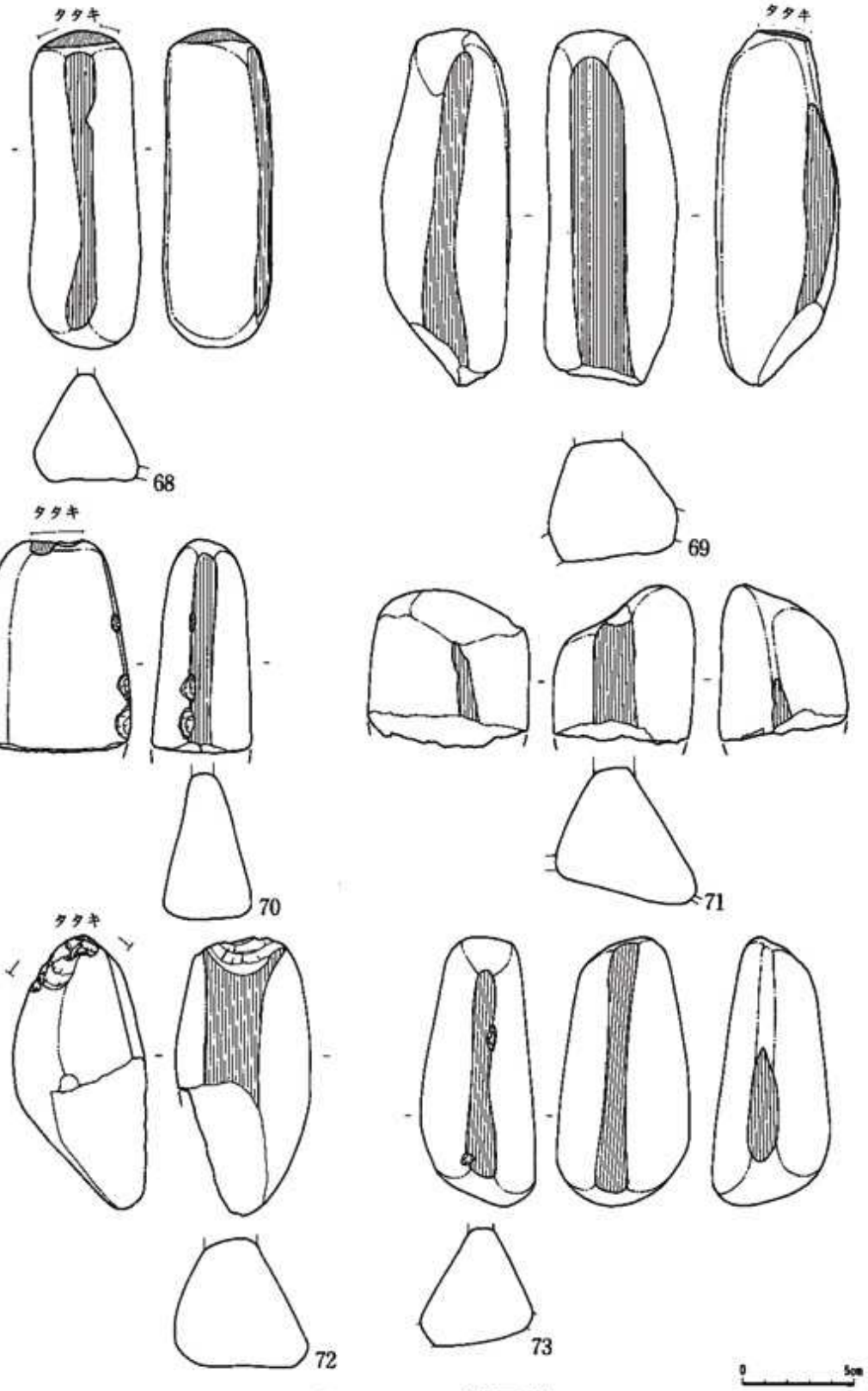
第115図　石器実測図(6)



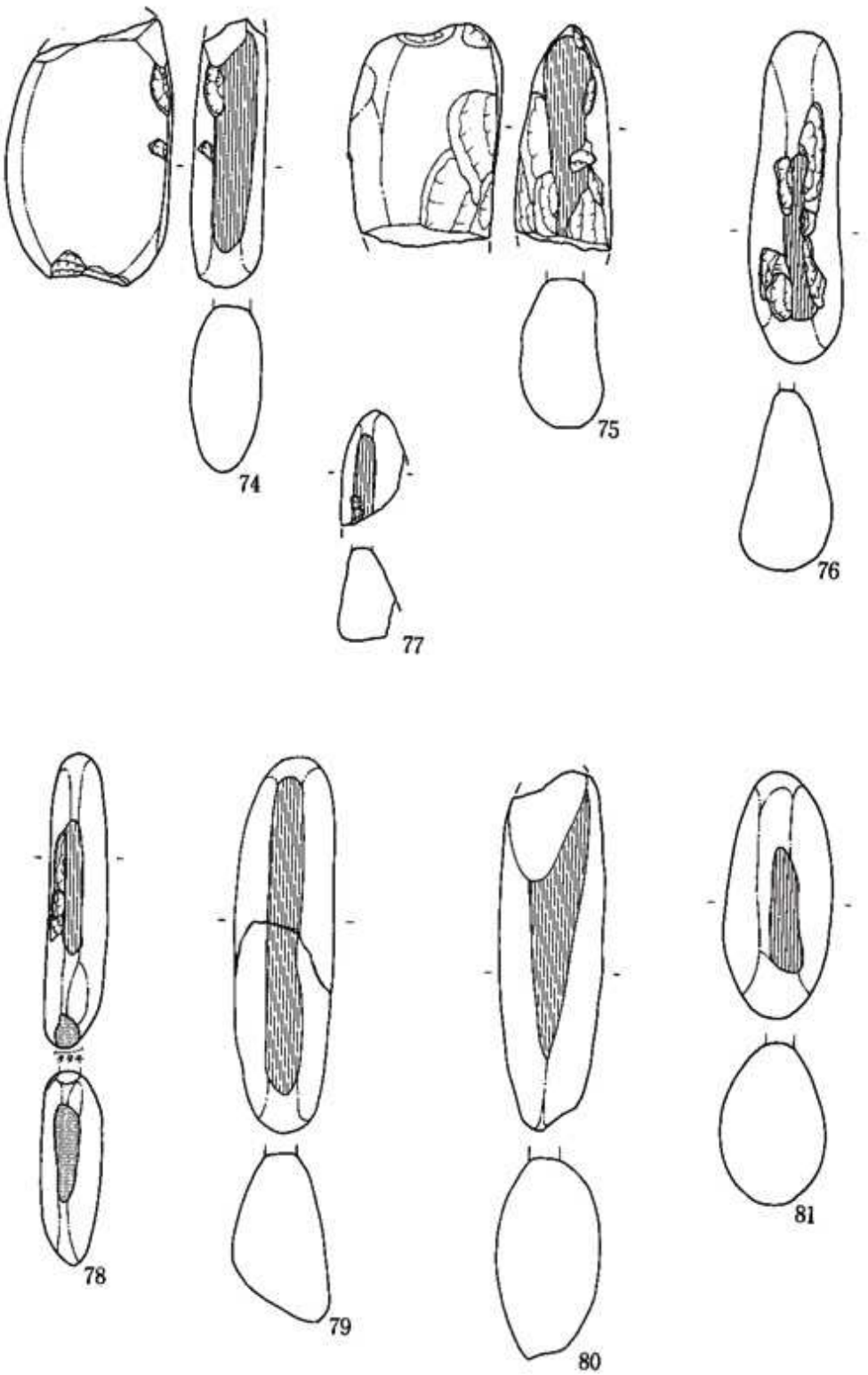
第116図　石器実測図(7)



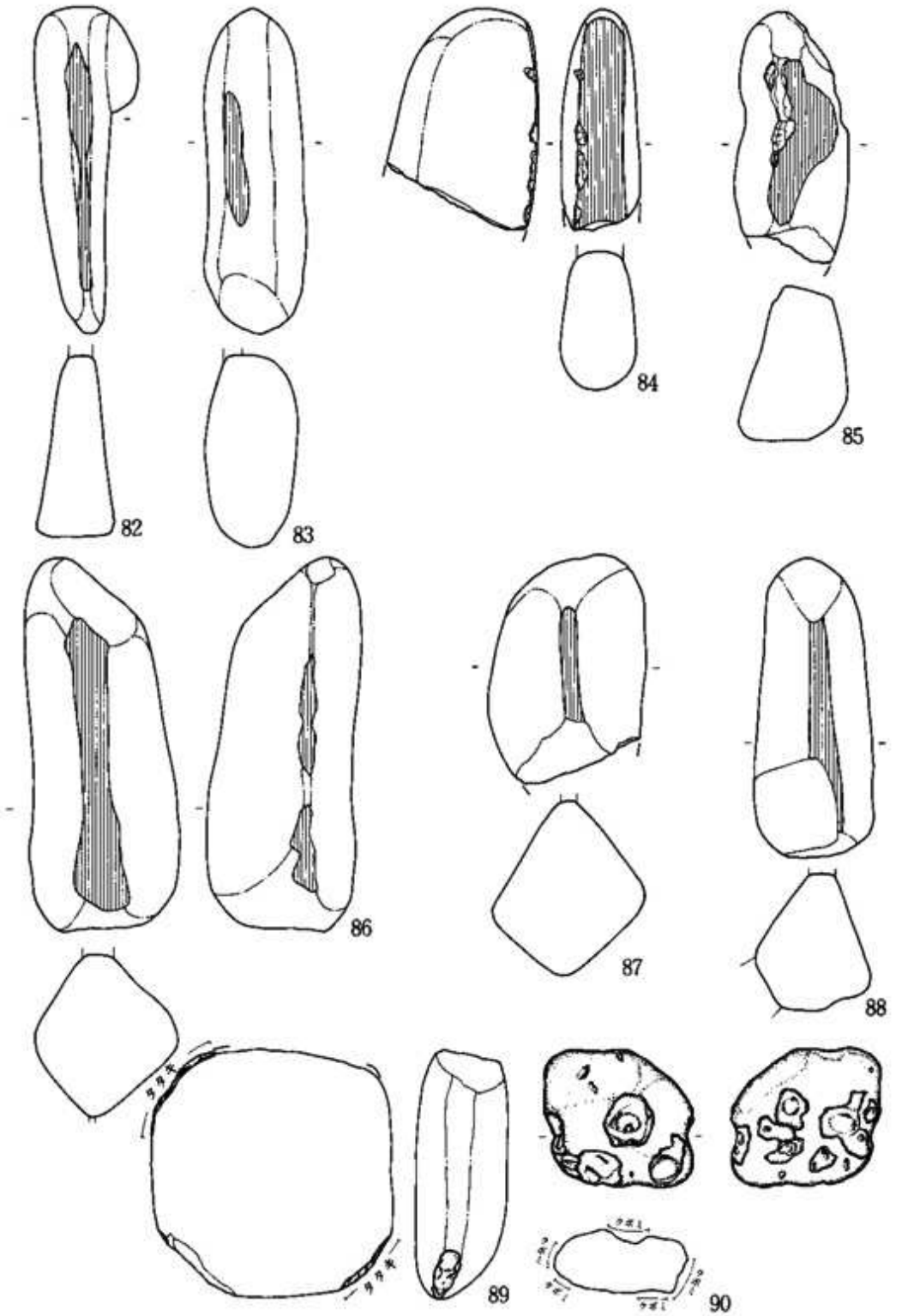
第117図　石器実測図(8)



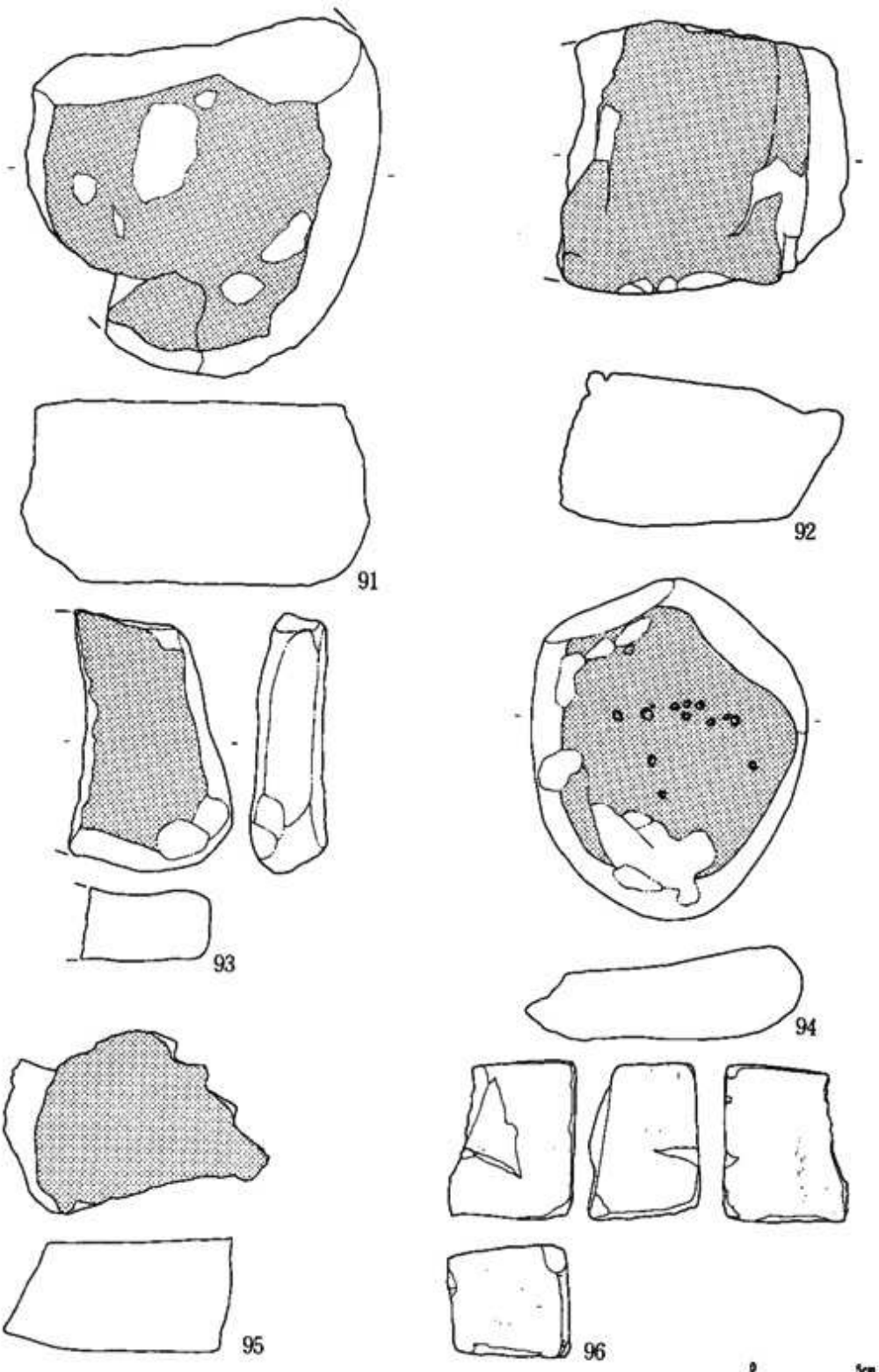
第118図　石器実測図(9)



第119図　石器実測図(10)



第120図　石器実測図(11)



1/6=91～95、1/3=96

第121図　石器実測図(12)

４．土偶・土製品

本遺跡からは、土偶２点、ミニチュア土器１点、円盤状土製品１点、滑車型耳飾り１点が出土した。

土　偶（第122図－１・２）

（第122図－１）出土した位置は、調査区Ａ地区で沢の斜面である。伴出遺物がなく、また、土偶を特別に設置した施設もみられず廃棄した状態で出土した。

形態は、首部・左・右手部を欠損しているが、下半部に向って器厚が厚くなる板状土偶である。

文様は、粘土粒と刺突具を用いて施文している。粘土粒は、乳部に２個、下半部に１個を貼り付けており、粘土粒の頂部には、刺突具を用いて刺突を行っている。刺突文様は、体部の中央にＹ字文様を施文し、側縁部に二条の連続刺突文を施文している。刺突の方向は、体部に対し直角または、斜位方向である。

（第122図－２）調査区Ｄ地区の沢寄り台地端から出土した。出土層位が、第Ⅰ層のために詳細については不明である。

残存部位は、首部のみで他は、欠損している。形態は、顔部の頂部にハート状の突起を有し、その前部に小突起を有する遮光器土偶である。

文様構成は、首部に等間隔の連続刺突文を施文しており、眼部は沈線で遮光器状に施文し、鼻及び口部を盛りあげ鼻部に刺突痕を施文している。

ミニチュア土器（第122図－３）

胴部下半から口縁部にかけて欠損している鉢形土器である。形状は、底面の周縁が盛りあがり、あげ底で、底辺部は若干内湾気味で、胴部中央部にかけて外反する。文様は、節の細かいＬＲの縄文原体を用い、斜縄文を構成している。

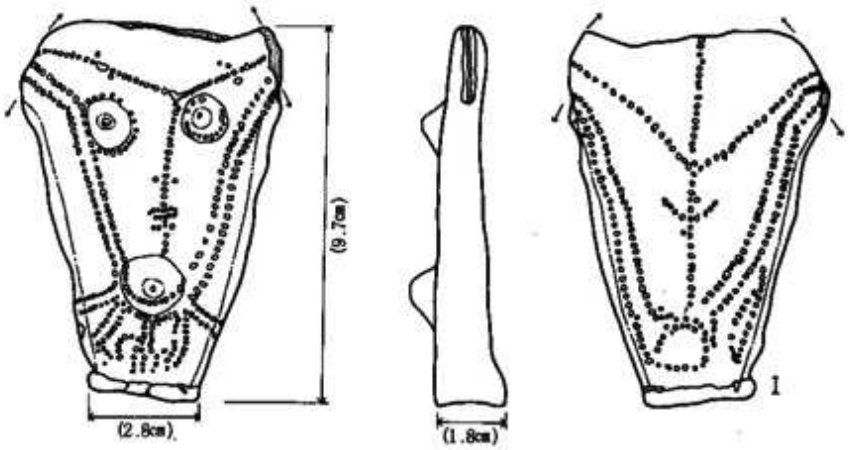
円盤状土製品（第122図－４）

形状は、ほぼ円形である。製作は、土器破片を再利用し、その後に周縁部を打ちかき、一部をすっている。文様は、器外面の全面に無節縄文を施文している。

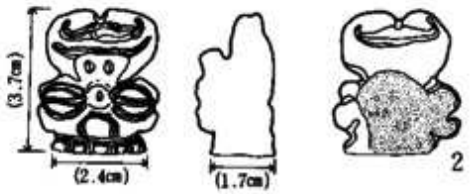
滑車型耳飾り（第122図－５）

形状は、両側縁の周縁部を盛りあげ、中央部が凹んでおり、その際指頭で調整した凹凸がみられる滑車型である。台地には、底面部から底辺部にかけて貫通孔がみられ、相対称して対になっている。

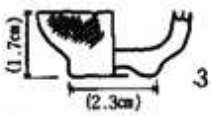
（成田　滋彦）



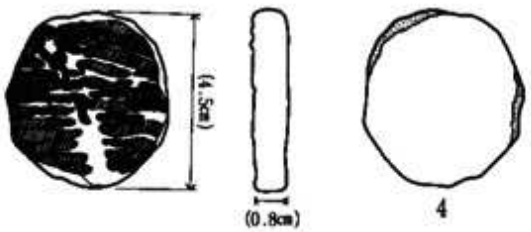
1．土偶
地区・層位　A地区、AP－13、Ⅱ層
焼　　成　良好
色調外面　にぶい黄橙色(Hue 10YR 7/4)
色調内面　にぶい黄橙色(Hue 10YR 7/4)
外面施文　沈線・刺突
内面調整
備　　考　肩部穿孔



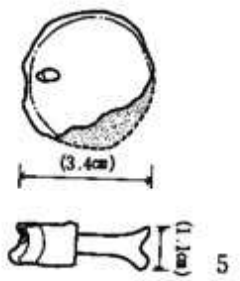
2．土偶
地区・層位　D地区、BA－18、Ⅰ層
焼　　成　良好
色調外面　にぶい橙色(Hue 7.5YR 7/4)
色調内面　黒褐色(Hue 7.5YR 3/1)
外面施文　沈線
内面調整
備　　考　頭部



3．ミニチュア土器
地区・層位　A地区、AQ－20、Ⅱ層
焼　　成　良好
色調外面　にぶい橙色(Hue 7.5YR 6/4)
色調内面　にぶい橙色(Hue 7.5YR 7/4)
外面施文　縄文
内面調整　横位
備　　考　器内面に黒班



4．円盤状土製品
地区・層位　C地区、BE49、Ⅰ層
焼　　成　不良
色調外面　黒褐色(Hue 10YR 3/1)
色調内面　褐色(Hue 10YR 5/6)
外面施文　縄文
内面調整　ケズリ後
備　　考　スス状炭化物の付着



5．滑車型耳飾り
地区・層位　D地区、BE－23、Ⅰ層
焼　　成　良好
色調外面　にぶい黄橙色(Hue 7.5YR 7/4)
色調内面　にぶい黄橙色(Hue 7.5YR 7/4)
外面施文
内面調整　横位
備　　考　側縁部に穿孔

0　5cm

第122図　土偶・土製品実測図

5．弥生時代の土器（第123・124図、第61図版）

弥生時代の土器は、調査区D・E地区の第Ⅱ層より少量出土した。いずれも断片的な土器片で土器群の実体を十分に把握できるものではなく、また、層位的な関係についても十分に把握することができなかったため、ここでは施文文様の差異により、以下のように分類した。

a類土器（変形工字文の施文される土器　第123図-1）

D地区の第Ⅱ層より出土した。これらは甕型土器の胴部破片である。器厚は約8㎜で、胎土は緻密で焼成は良好である。色調は、暗黒色である。文様は、口頸部と胴部に2～3条の平行沈線を施文し、その間に1～2段の変形工字文を施文するものである。その下部は、無文と思われる。変形工字文の頂点には粘土粒をもたない。器面は研磨されている。

b類土器（撚糸文・結節回転文を施文する土器　第124図-1～4）

D・E地区第Ⅱ層より出土した。破片のみの出土であるために器形は不明であるが、口頸部が大きく屈曲する壺ないしは甕と思われるが詳細については不明である。器厚は5㎜前後と薄く、胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は赤褐色・明褐色を基調とする。文様は結節回転文、撚糸文が、単独あるいは両者が組み合わせて施文される。

c類土器（縄文を施文する土器　第123図-2～8、第124図-5～16）

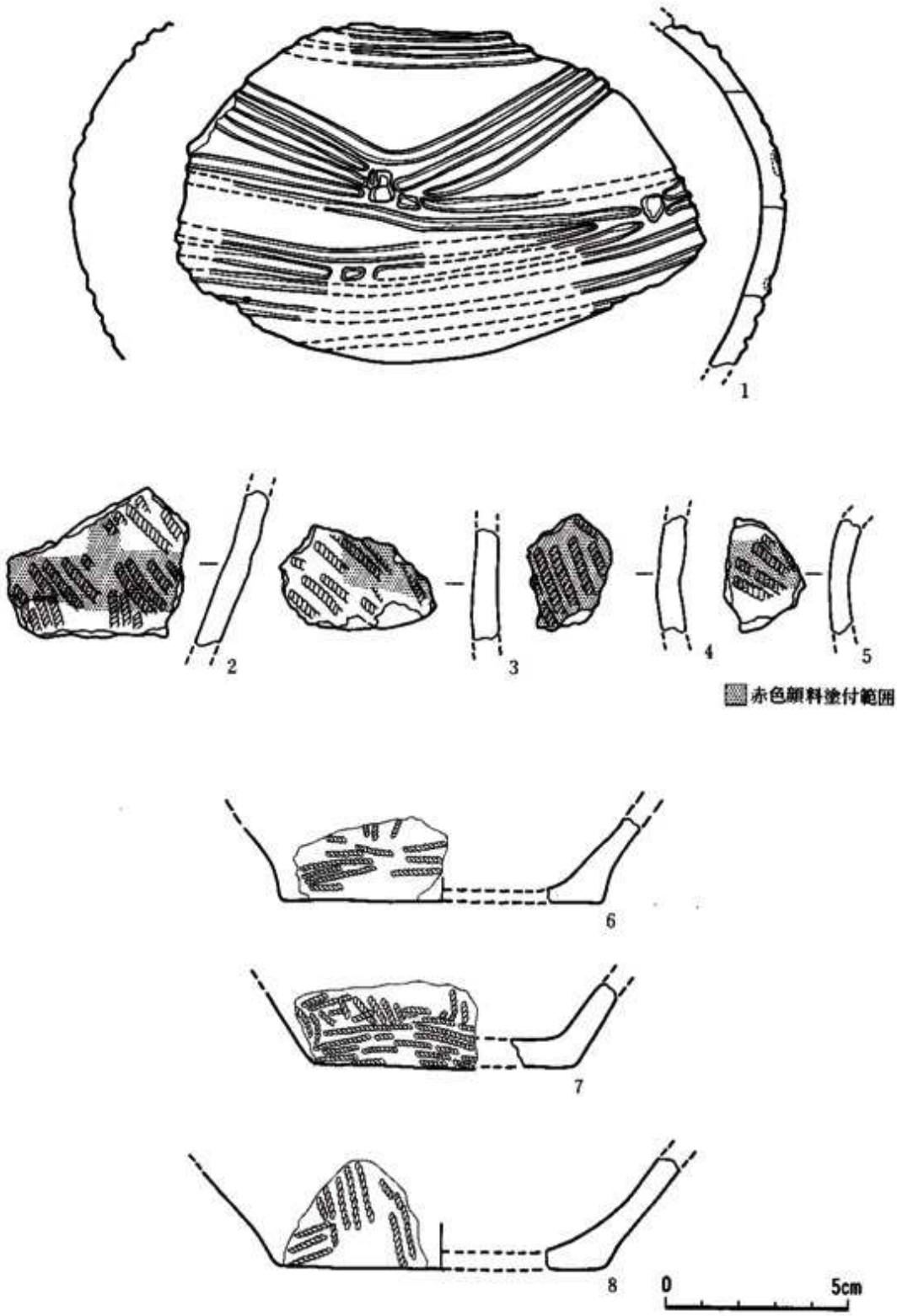
D・E地区第Ⅱ層より出土した。破片のみの出土であるため器形は不明である。胎土・焼成ともb類土器に極めて近似している。施文される縄文の原体は直前段多条のもので施文することを特徴とする。RLの撚りの原体を使用し、施文回転方向は縦位である。中には赤色顔料を帯状に塗付するものがみられる。底部破片が3点出土しており、底部周囲が若干外側に張り出すものと、そのまま立ち上がるものとがあり、底部付近で横位の縄文が施文される特徴を示す。また、同一破片に縄文と撚糸文が施文されるものもある。

d類土器（沈線文を施文する土器　第124図-17～19）

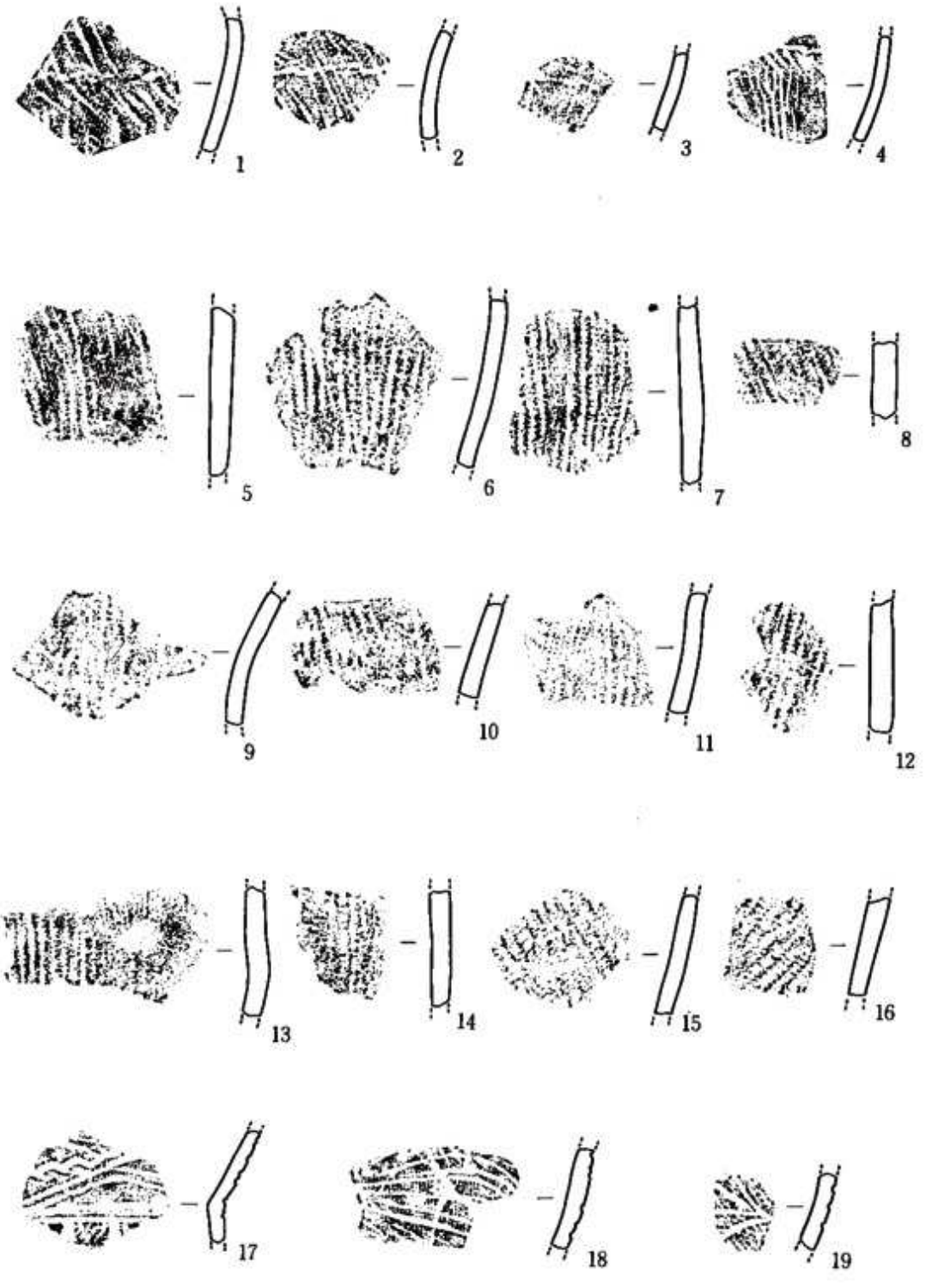
D・E地区第Ⅱ層より出土した。器形は破片のため不明であるが、いずれも口頸部のものと思われる。胎土・焼成・色調ともb・c類に近似する。沈線は連弧状のものと連続山形状のものがあり、いずれもその下に緻密な縄文が施文される。連続山形沈線が施文される土器には、縄文の上に刺突が施文される。

6．土　師　器（第125図-1～4・8、第62図版）

A・C地区の第Ⅰ層より破片が出土した。復原できる遺物はなく、器形を辛うじて知る程度である。器形は、坏、台付坏、甕で、いずれも桜井第二型式の中に含まれる。



第123図　弥生式土器実測図



第124図　弥生式土器拓影図

7．陶　磁　器（第125図、第62図版）

本遺跡からは多量の陶磁器が出土した。出土した陶磁器は、調査区全体に亘ってその分布がみられるが特に、調査区C地区に密集して出土した。また、これらはすべて第Ⅰ層からの出土である。

出土陶磁器は製作年代によって大きく中世のものと近世以降～現代のものに分けられ、ここでは主に中世陶磁のみについて述べる。

（1）青　磁（第125図- 5・6）

C地区第Ⅰ層より2片出土した。釉調・胎土より別個体のものであり、器形はいずれも碗である。口縁部破片は、くすんだ青緑色の釉調を示し、胎土は黒褐色で全体的に粗雑な印象を受ける。胴部破片は、底部に近い部分のものであり、釉調は淡い青緑色で光沢を有し、胎土は暗灰色である。

（2）美濃灰釉陶器（第125図- 7）

C地区第Ⅰ層より1片出土した。口縁部のみの出土であるが、器形は折縁の皿と思われる。釉調は淡い黄緑色を示し、胎土は明灰色で軟質な感じを受ける。

（3）産地不明で近世～現代にかけてと思われるもの（第125図- 9・10）

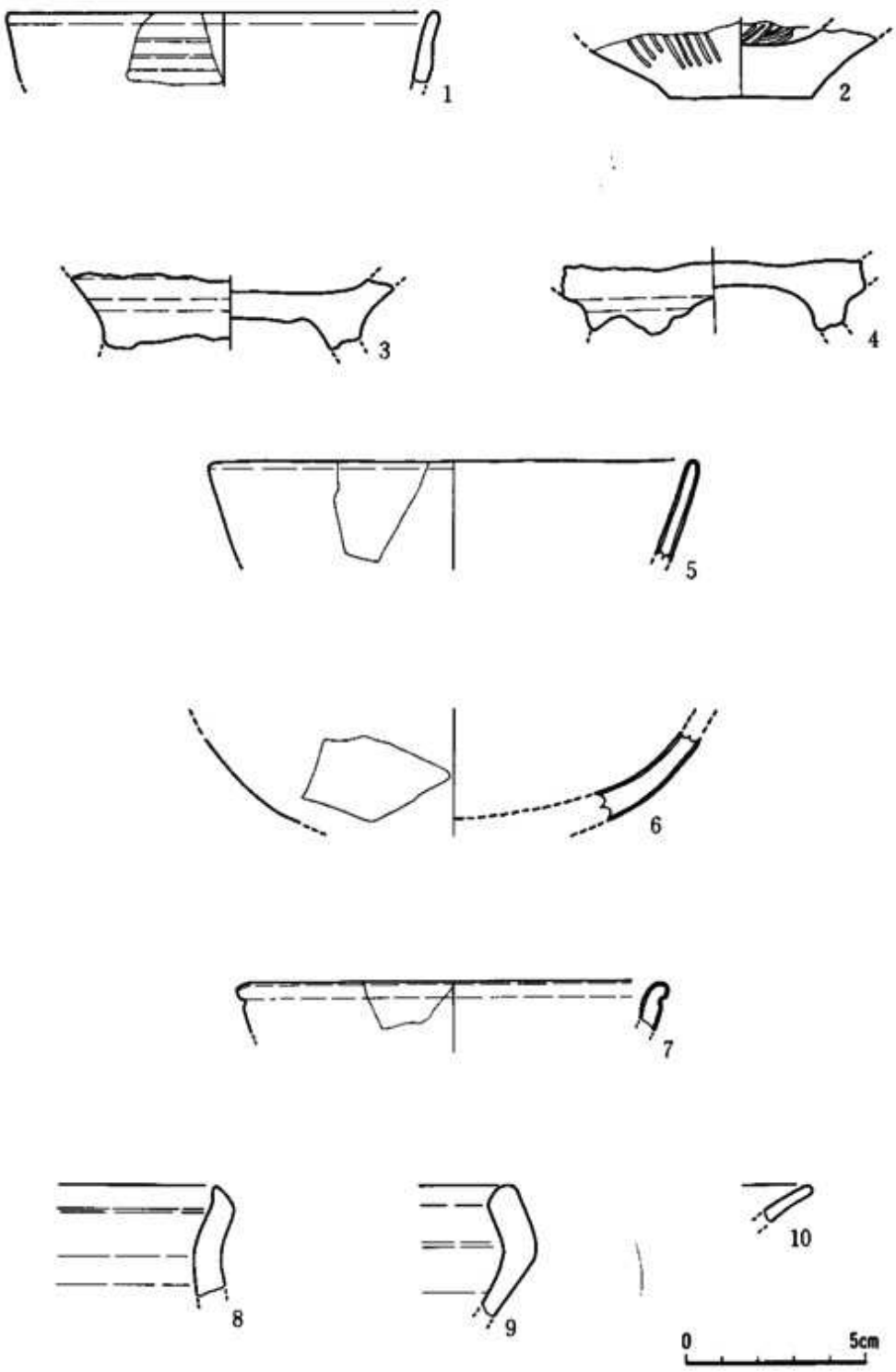
調査区全体から出土しているが、いずれも破片で復原でき得るものはない。概ね、明治以降のものが主体を占め、その他は時期不明である。

8．泥　面　子（どろめんこ）（第126図- 1～6、第62図版）

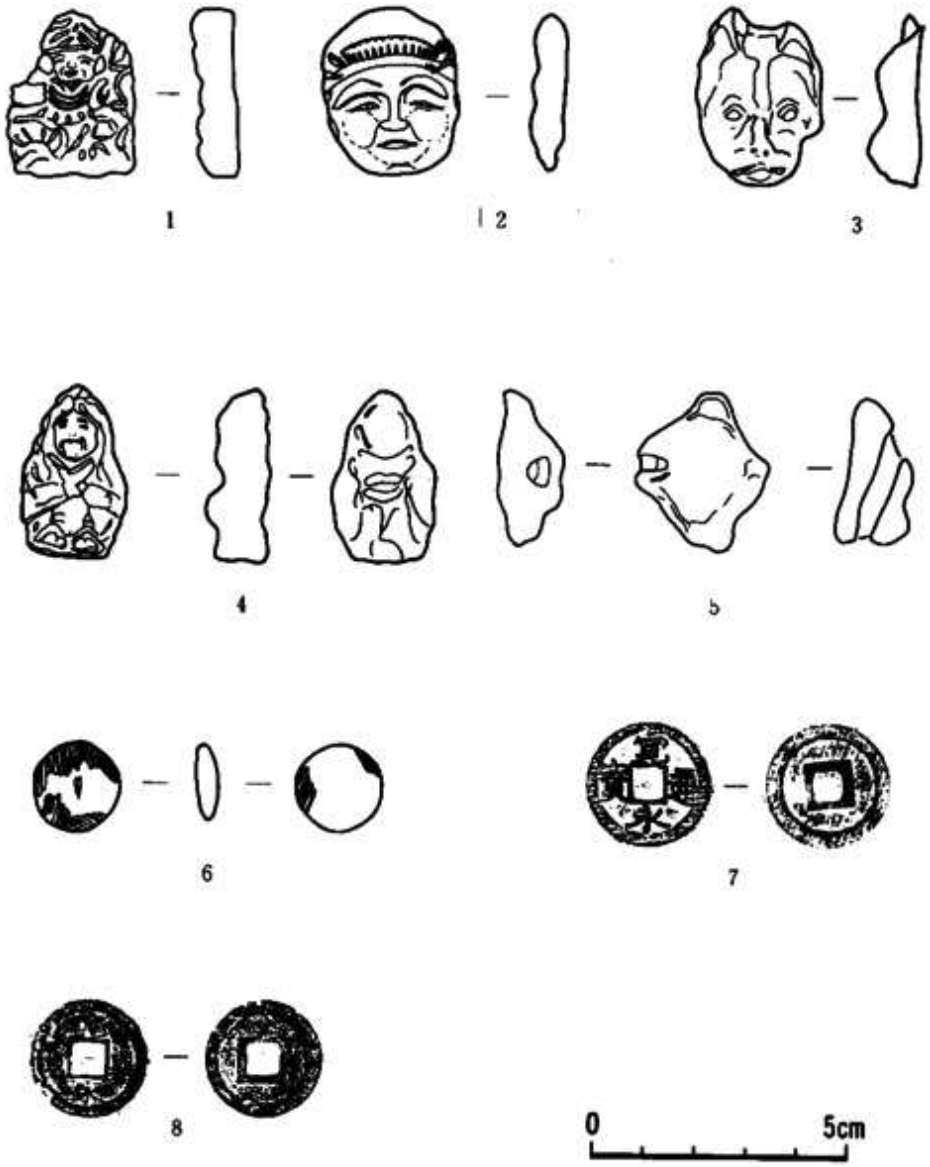
調査区のA・B地区第Ⅰ層より遺構を伴なわず6点出土した。1・2は、人物立像で恵比須・大黒を摸したもの、3・4・5は、顔（頭）もしくはお面、6は、碁石状（おはじき？）のものである。いずれも5㎝内外の大きさで、1・3・4は、片面から打ち抜かれたもの、2・5は、片面づつを張り合せたもので素焼きの焼きものである。

9．古　　銭（第126図- 7・8、第62図版）

C地区の第Ⅰ層より寛永通宝が2枚出土した。近世以降の陶磁器、泥面子等の遺物と共伴する可能性がある。　　（岡田　康博）



第125図　土師器及び陶磁器実測図



第126図　泥面子実測図及び古銭拓影図

第Ⅴ章　小　　結

１．遺　　構

(１)焼石池構について

焼石遺構は火熱を受けた挙大の自然礫によって形成されているもので、焼石遺構の他に配石遺構・配石群・焼石群・焼石炉とも呼ばれる。近年の発掘調査の増加に伴い、本遺構の検出例が増加しているものの、その構築年代・機能等については、不明な部分が多い。本遺跡で検出された遺構はこれらの問題を考えて行く上で良好な資料と思われるので若干の考察を加えてみたい。

本遺跡からは、５基の焼石遺構が検出されているが、５基とも出土層位・出土状態・形態等よりみて、ある特定の時期に構築・廃棄されたと考えられるので、考察にあたっては一括して資料分析を行った。まず、本遺跡検出のものについてその特徴を述べる。

１．確　認　状　況

１～５号ともすべて第Ⅲ層（中掷浮石層）の下、第Ⅳ層上面で最上部の礫が確認され、その基底となる当時の生活面については、出土状態より第Ⅳ層中に存在すると思われるが明確に把握することはできなかった。

２．形　　態

検出時の状態より以下のよう分類される。

１類－ケルン状に積み重ねたもの
- a．100個以上の焼石をもって構成するもの　４・５号
- b．10個未満の焼石をもって構成するもの　１・２号

２類－広範囲に亘って剥片状になった焼石が一面に散在するもの　３号

３．調査区内分布

いずれも調査区Ｄ・Ｅ地区の沢に面する西向き斜面に分布する。垂直分布は標高約65m位に集中している。沢沿いに位置していることは本遺構の機能と密接な関係を暗示するものといえる。

４．その他の遺構との関連について

本通構の周囲から多くの土壌が検出されているが、本遺構との関連を裏付ける証拠に欠ける。また、本遺構自体及び周辺からは焼土・灰・炭化物は検出されなかった。(僅かに第４号焼石遺構フク土より極めて微量の炭化物が検出されたのみである。)

５．焼石遺構自体の特徴

掘り方を持たず（土壌の中に形成されない）、当時の生活面上に直接構築されたものである。また、焼石以外には遺物を伴なわず焼土・灰・炭化物も検出されなかった。ただ第１号・３号

焼石遺構の焼石の中に磨石・敲石が含まれているが、一般に礫が火熱を受けると変性し破損しやすくなり、磨石・敲石もその本来的な機能を喪失するので、焼成のための石を選択する際には他の礫との区別はないと推定される。焼石の石質はほとんどがチャートで、他にも砂岩・安山岩・輝緑岩等もみられるが極めて少ない。

次にこれらの点に留意しながら、本遺構の構築年代・機能等の問題について考察する。

（焼石遺構の年代について）

南部浮石より上位の層、中掫浮石より下位で検出されたことから２枚の降下火山灰の間に構築・廃棄されているものである。（注１．中掫浮石の降下時期については従来縄文時代中期末から後期初頭にかけてとされてきたが、十和田市明戸遺跡において円筒下層ｄ１式期の土壙が中掫浮石層を切って構築され、また土器も中掫浮石直上より多数の円筒下層ｄ１式土器が出土している。この事例より中掫浮石の降下時期はさらに一考を要すると思われる。）本遺跡では、中掫浮石層下より縄文時代早・前期の遺物が出土しており、本遺構も早・前期の間に構築・廃棄されたものと考えられる。しかし、これ以上に時期の同定は共伴する遺物が出土していないので困難である。

注１．明戸遺跡1983　十和田市教育委員会

（焼石遺構の機能について）

文字通り礫が焼けていることが最大の特徴である。自然界においては何らかの自然条件によって礫が火熱を受けることは、極めてまれで本遺構の焼石は人間の行動の所産といって良い。当時の人間の食物は、食するもののすべてにおよび、味の善悪による選択の余裕はなく、狩猟・採集によって獲得した食物を様々な方法で調理し、味覚の変化を楽しんだことは想像に難くない。本遺構もその調理に利用されたものと考えられる。本遺跡出土の焼石の中には表面に炭化物の付着がみられるものがあり、煮沸に用いられた土器の口縁部から胴部にかけて付着している炭化出に酷似している。実験により、このような炭化物は肉類を調理した際の肉汁が炭化した場合にも同様の痕跡を残すことが報告されている（小薬、1979）。焼石を用いた調理方法については民族的事例より①ストーン・ボイリング[注2]　焼いた石を土器の中に入れることにより水を沸騰させ食物を煮る方法、②アース・オーブン[注3]　数多くの焼石を用いて食物を蒸焼きする方法、③ストーン・ベーキング[注4]　焼けた扁平な石の上で食物を焼く方法などが挙げられるが、今のところ本焼石遺構は②の可能性が強いとされる（小薬、1979）。本遺跡検出例の場合もアース・オーブンの可能性が強い。

（廃棄の問題について）

検出時の状態が、焼石遺構の本来的な状態（機能を果していた時の状態）をそのまま継続して保持しているとは限らない。本遺跡例では礫自体が火熱を受けているにもかかわらず遺構そのもの、また周囲からは火を焚いた痕跡は発見することはできなかった。これは礫が別の地点で火熱を受けた事を意味する。焼石は調理に利用された後、廃棄されたものと考えられる。廃

棄の理由としては、居住地の移動、焼石の劣化による機能の低下などが考えられる。(松山調査員より、本遺跡出土の焼石は幾度にも渡り火熱を受けた可能性があるとの御指適があった)。

(形態について)

本遺跡の焼石は、遺跡周辺から入手し易いチャートを用い、また土壌の中に構築されたものがないところから、簡便的な施設とも思われるが確証はない。

(その他の機能について)

調理施設の他に土器製作址、墓標などの説があるが、これらを積極的に証明する遺物、遺構は検出されなかった。

(注2)ストーン・ボイリング = Stone Boiling

(注3)アース・オーブン = Earth Oven

(注4)ストーン・ベーキング = Stone Baking

(2)焼土遺構について

調査区E地区舌状地形の先端及び中央部のより高くなっているところに分布し、特に中央部に密集する傾向を示す。掘り方をもつものはなく、当時の生活面上で直接、火を焚いたために焼土を形成したものと思われる。焼土は、すべて第Ⅲ層(中撫浮石層)の表面が火熱を受け、赤褐色に変色し、その上に第Ⅱ層が堆積する。つまり、中撫浮石と十和田b降下火山灰の2枚の降下火山灰の間で構築・廃棄されたものである。第Ⅱ層からは、縄文時代後・晩期・弥生時代の土器が出土している。また第1号焼土からは縄文時代晩期の土器が直立した状態で出土しており、両者は時間的関係が極めて近いと考えられる。その他の焼土からは、遺物は出土しなかったため時期に確証はないが層位的に観て、概ね同時期のものと推定される。

焼土は、火を焚くことによって形成されるが、その目的については調理・照明・土器製作・暖を取るなどが挙げられるが、いずれも決め手を欠き、今後の資料の増加を期待したい。

(3)配石遺構について

礫が規則的な配列を示さず、埋設されている石皿を中心に礫が散在しているものである。時期は、第Ⅳ層に構築されており南部浮石と中撫浮石の間のものといえる。さらに出土している土器より縄文時代前期初頭のものと推定される。配石遺構は主として祭祀的施設と理解され、その形態も変化に富み、周囲の環境(地形・自然環境)に帰因するものと思われる。本遺構は舌状地形の先端に位置することから、突出する前方の視界が西に開け、眺望も良い。しかし、具体的な構築の目的については、それを立証する根拠がないため、詳細については不明である。

(岡田　康博)

（４）土壙について

土壙を23基検出した。遺構内から遺物を出した土壙は、わずか６基である。遺構内の土器は、埋土の際の混入であり、埋土の土器から遺構を決定する時期にはなりえない。また、土壙の構築面も明瞭ではなく時期を決定する事は困難であった。

本章では、23基の土壙の中で特徴的な土壙について下記に列記したいと思う。

第１号土壙は、中撫浮石層を切っており土壙の両端に柱穴を有するものである。類例を探し出す事はできなかったが、要途として仮小屋的要素をもつ土壙と思われる。

Ｂ地区に位置する第３・20～23号土壙の５基は、第３号土壙が自然による営力で出来た土壙と思われるが、他の土壙については判断出来なかったものである。

第20～23号土壙の特徴は、覆土中に明瞭な中撫浮石層が堆積しており、これらの土壙が中撫浮石降下以前に存在していた事は確実である。特に直径15mを有し底面まで達しえなかった大土壙の第23号土壙などは、人為的な要素をもつ土壙なのか判断出来ず今後の課題としたい。

本遺跡の中で検出した土壙の中で、第２号土壙が落し穴の用途に用いた土壙ではないかと考えられる。長・短軸が120㎝で小形の円形の土壙であり、中央部と周壁に小ピットが位置する。周壁にみられる小ピットについては、竹石建二が壁にみられる小ピットも、中央部の小ピットと同様の機能を有すると考えている（竹石、1980）。

この様な形態を有する他の類例としては、外長根Ⅰ４遺跡（青森県、1981）で１基、長七谷地遺跡で３基（八戸市、1982）、鶉窪遺跡（青森県、1982）で16基検出しており、特に鶉窪遺跡では斜面上にくの字に配置されている。

時期は、長七谷地遺跡で遺物は出土しなかったが、土層面からみて縄文時代早期末葉の時期に比定し、鶉窪遺跡では、土壙上面に中撫浮石層が堆積している事から担当者は、縄文時代早期末葉～前期前葉に構築されていたと考えている。

落し穴は、霧ケ丘遺跡（今村、1973）の発掘調査から問題提起されて来たと言っても過言ではない。その後、これらを落し穴という機能を有するピットであるというのが定着されてきたが（宮沢・今井、1976）その反面、落し穴説に対して土壙内の規模という観点から否定的な意見もある（村田、1982）。

ところで、第２号土壙以外にE地区の舌状地形先端部に位置する第８～13・31号土壙は、中央部に小ピットを有していないが、第２号土壙と同様に落し穴の機能を有する土壙とも考えられる。今後、遺跡付から検出される土壙に留意していきたいと思う。

（５）　溝状ピットについて（第127図）

溝状ピットは７基検出された。溝状ピットに関しては、溝状ピットをＴピットとして把え

総合的にまとめた福田友之（福田、1981）の論考があり、また、瀬川司男もおとし穴状遺構という表現を用いて発表しており、論文中のA型が溝状ピットに概当すると思われる（瀬川、1981）。

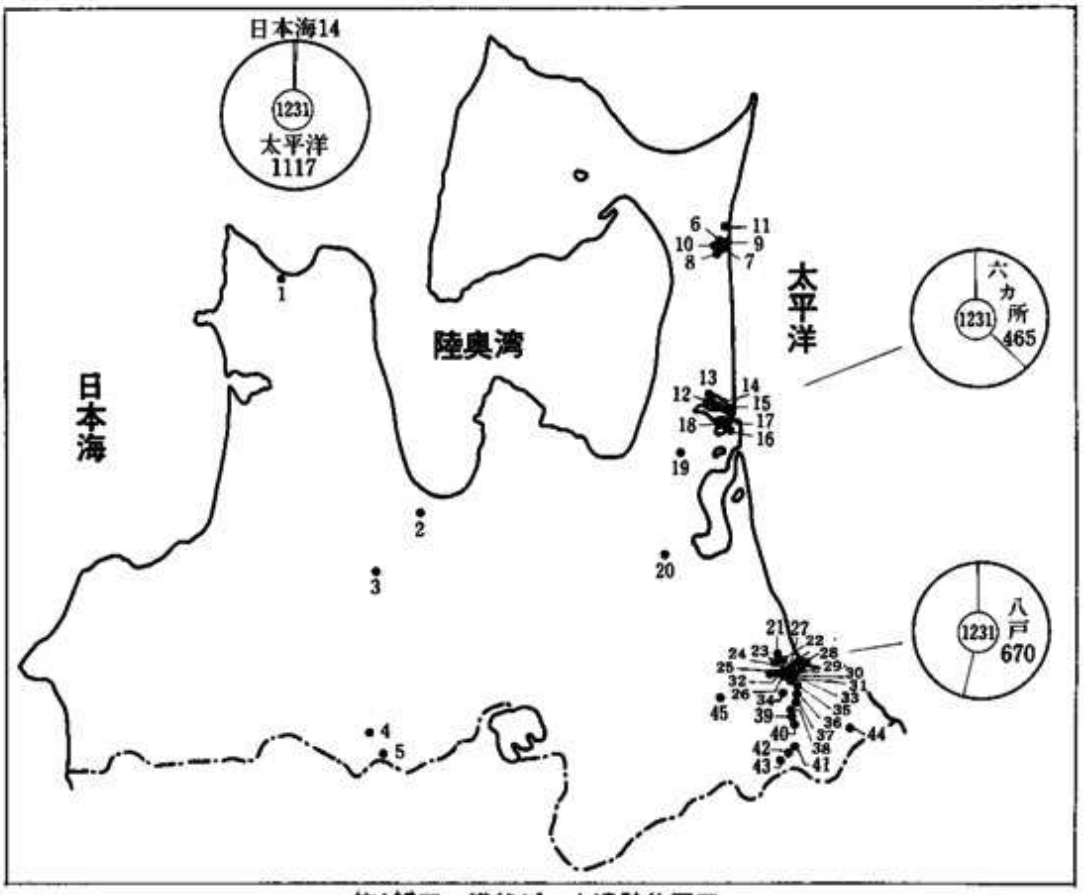
その一方、溝状ピットを落し穴の用途と考えるのに対して、石岡憲雄（石岡、1980）は、溝状ピットの開口部が狭い点やピット内の堆積土をとりあげ、落し穴説に否定的である。

溝状ピットを青森県内の分布地図からみると、太平洋岸に数多く位置し、六ヶ所、八戸周辺に集中している。日本海岸では、溝状ピットを検出する遺跡は少ない。

この事は、岩手・秋田両県の溝状ピットの検出例を比較しても、岩手県内の1遺跡で溝状ピットの検出例が100基を越えるのに対して、秋田県は、現在のところ確認した遺跡数をすべて加えても100基に達していないのが現状である。つまり、東北地方を縦断する奥羽山脈を境に太平洋岸と日本海岸では、大きな開きがみられるのである。

溝状ピットを縄文期に使われた落し穴として考えた場合に、奥羽山脈を境に動物相の分布が変化するとは考えられない。

また、本県の新納屋（青森県、1981）馬場瀬2（青森県、1982）三合山遺跡（青森県、1982）



第127図　溝状ピット遺跡位置図

の溝状ピットの検出例は、一基しか検出していない。この様に単独で位置する溝状ピットを、落し穴の用途として考えるには疑問である。いずれにしても数値と分布の面からも考え直す必要があると思われる。

第34表　溝状ピット検出遺跡一覧表（青森県）

番号	遺跡名	所在地	個数	文献
1	山崎	東津軽郡今別町大字山崎字山元	7	青森県 1982
2	近野	青森市大字安田	1	青森県 1977
3	源常平	南津軽郡浪岡町北中野字上沢田	4	青森県 1978
4	砂沢平	南津軽郡大鰐町大字長峰	1	青森県 1980
5	大面	南津軽郡碇ケ関村大字古懸	1	青森県 1980
6	前坂下(1)	下北郡東通村大字白糠字前坂下	7	青森県 1982
7	〃(3)	〃	13	〃
8	〃(5)	〃	5	〃
9	〃(6)	〃	1	〃
10	〃(7)	〃	1	〃
11	〃(13)	〃	29	青埋文 1982
12	弥栄平(3)	上北郡六ケ所村	1	注(1)
13	104号	上北郡六ケ所村大字尾駮字沖付	1	青森県 1979
14	発茶沢	上北郡六ケ所村大字鷹架	431	青森県 1982
15	表館	上北郡六ケ所村大字鷹架	15	青森県 1981
16	新納屋(1)	上北郡六ケ所村大字鷹架	3	青森県 1976
17	〃(2)	〃	1	青森県 1981
18	鷹架	上北郡六ケ所村大字鷹架	3	青森県 1981
19	千歳(13)	上北郡六ケ所村大字倉内	10	青森県 1976
20	松原	上北郡上北町新館	4	青埋文 1982
21	和野前山	八戸市市川町大字和野前山	115	〃
22	大タルミ	八戸市大字河原木	9	注2)
23	売場	八戸市大字河原木字寶子渡	56	注3)
24	長七谷地	八戸市大字市川町	101	青森県 1980
25	長七谷地1号	八戸市大字市川町	22	青森県 1980

番号	遺跡名	住所	個数	文献
26	〃 3号	〃	2	〃
27	〃 4号	〃	5	〃
28	〃 5号	〃	8	〃
29	〃 6号	〃	3	〃
30	〃 2号	〃	58	八戸市 1982
31	〃 7号	〃	108	〃
32	〃 8号	〃	25	〃
33	牛ケ沢 (3)	八戸市大字根城	9	注2)
34	鶉窪	八戸市大字田面木	11	青埋文 1982
35	白山平 (2)	八戸市大字根城	9	青埋文 1982 注4)
36	長者森	八戸市大字田面木	7	青埋文 1982
37	韮窪	八戸市大字田面木	5	注2)
38	昼巻沢	三戸郡福地村大字梨木	9	青埋文 1982 注4)
39	鴨平 (2)	八戸市大字是川	6	青埋文 1982
40	〃 (1)	三戸郡南郷村泥障作	2	〃
41	馬場瀬 (2)	三戸郡南郷村大字市野沢	1	青森県 1982
42	石ノ窪	三戸郡南郷村大字市野沢	6	青森県 1982
43	三合山	三戸郡南郷村大字市野沢	1	青森県 1982
44	田ノ上	三戸郡南郷村大字島守字田ノ上	1	青森県 1981
45	古街道長根	三戸郡五戸町字古街道長根	2	青森県 1976

注(1) 昭和57年度、青森県教育委員会文化課が試掘調査を実施した。

注(2) 昭和57年度、青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施し、昭和58年度報告書刊行の予定である。

注(3) 昭和56~58年の三次にわたって、青森県教育委員会が発掘調査を実施した。

注(4) 昭和56・57年度に青森県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施し、昭和58年報告書刊行の予定である。

一覧表の、青森県は青森県教育委員会・青埋文は青森県埋蔵文化財調査センター、八戸市は八戸市教育委員会の略称である。 (成田 滋彦)

２．土　　器

（１）第Ⅰ群土器について

出土した縄文時代早・前期の土器は、断片的な資料の出土であり、各土器群の実体を十分に満していない。また、層位的に各土器型式が整然と出土したわけではなく、その層位関係を十分に把握することができなかった。施文文様をもとに従来報告されているものと参照しながら若干の考察を加える。

第Ⅰ群ａ類土器は、吹切沢式土器に比定される土器である。口縁部から胴部にかけて貝殻の連続押し引き文を施文するのは吹切沢式土器の特徴と言える。

第Ⅰ群ｂ類土器は、物見台式土器に比定される土器である。貝殻腹縁文・沈線を施文し幾何学文様を構成するのを特徴とする。

第Ⅰ群ｃ類は、ムシリⅠ式土器に類似する土器である。口縁部に平行沈線を施文する土器は長七谷地遺跡で、また、口縁部に刺突を有する土器も売場遺跡より出土している。胎土・焼成も非常にムシリⅠ式土器のものと近似しており、本土器もムシリⅠ式の範ちゅうに含まれると考える。近年、本県においても好資料が得られ、その型式内容が明らかになってきている。

第Ⅰ群ｄ類土器は、早稲田Ⅴ類土器に比定され、平底－縄文で繊維を相当量含む土器である。本遺跡出土の土器は、器表面に撚糸圧痕文をもつものはみられず、内面に縄文・条痕をもつものが若干ある。また、唐貝地・早稲田貝塚例では、口縁部が内湾する器形を示すが本遺跡では外反するものが圧到的に多い。以上の傾向では下田代納屋Ｂ遺跡と同様な傾向を示す。

また、本遺跡例では、原体が無節・単節・撚り戻しとみられ、早稲田例と同様に、同一個体の中には同一原体を用いて施文するが、表館遺跡例では、２種の原体を用いて羽状縄文が施文される。

このように早稲田Ⅴ類土器は類例の増加とともに、その内容も豊富になり、遺跡間での出土資料に若干の差異を生じているため、今後、地域差とともに細分される可能性を十分に有するものと考えられる。

（２）第Ⅱ群土器について

前期初頭に位置付けられる長七谷地Ⅲ群土器と、それに先行すると思われる土器が出土した。ここでは、先行する土器第Ⅱ群ａ類土器を、早期末葉に位置づけられる早稲田Ⅴ類、前期初頭の長七谷地Ⅲ群と比較しながら、その編年的位置付けについて若干考察する。

（胎土・焼成・器厚）

第Ⅱ群ａ類土器は、早稲田Ⅴ類土器、長七谷地Ⅲ群土器と同様に相当量の繊維を含み、焼成は、ａ－１類は長七谷地Ⅲ群に、ａ－２類は早稲田Ⅴ類に近似する。器厚は、早稲田Ⅴ類12～17㎜、

第Ⅱ群ａ類８～15㎜、長七谷地Ⅲ群８～12㎜となり、第Ⅱ群ａ類は中間値を示す。

（口唇部形状・口唇部文様）

早稲田Ｖ類は、新納屋（２）遺跡と長七谷地貝塚の一部に、口唇部を平坦に整形したものがみられるが、主体は丸味を帯びるものであり、本遺跡出土の早稲田Ｖ類においても同様である。また長七谷地Ⅲ群は、ヘラ状工具により平坦に整形されるのが一般的である（中には丸味を帯びるものがあってもヘラ状工具により整形されているものである）。第Ⅱ群ａ類土器は、口唇部が平坦なものと内傾するものがあり、平坦なものは、ヘラ状工具を用いず指頭により整形されたものである。また、口唇部に施文するものは早稲田Ⅳ類で盛行し、Ｖ類では減少する傾向を示し、長七谷地Ⅲ群ではほとんど施文されなくなるが、第Ⅱ群ａ類では、２例のみ口唇部に施文されており、いずれも器表裏とも縄文を施文するものである。

（縄　　文）

早稲田Ｖ類においては、太めの０段多条の原体を用いるのが一般であるが、その他にも単節ＬＲ・ＲＬ、撚り戻し、附加条縄文、絡条体などを使用するが、長七谷地Ⅲ群においては、０段多条の原体に限定され、２種の撚りの違う原体を使用するのを特徴とする。２種の原体を用いる技法は早稲田Ｖ類に一部みられる。第Ⅱ群ａ類では、０段多条の原体と一般的な単節ＬＲ・ＲＬの両方の原体が使用される。

（口縁部文様帯の変遷）

早稲田Ｖ類には、口縁部文様帯を持つものが若干ある。一般に口縁部直下を無文化し、そこに原体の側面圧痕を施すものであり、文様モチーフも幾何学文様のもの、横位のものなどがある。長七谷地Ⅲ群では、同じく口縁部直下を無文化し、そこに原体の側面圧痕を施すもの、横走する縄文を施すものなどがあり、両者の連続性が考えられる。文様帯の幅は、早稲田Ｖ類土器と同様、あるいは狭くなる傾向を示す。第Ⅱ群ａ類土器の口縁部に原体の側面圧痕の文様帯を持つものは、その文様帯の幅は長七谷地Ⅲ群と比較して広い。圧痕文の文様モチーフは、早稲田Ｖ類に類似するものを見い出せる。文様の原体は１種の原体によるものと２種の原体によるものがある。（２種の原体をもつものは、早稲田Ｖ類の中にも一部見られる）

（器　　形）

早稲田Ｖ類は平縁であり、長七谷地Ⅲ群においても同様ながら、第Ⅱ群ａ類の一部に見られるような波状口縁のものが若干ある。また底部の形状は、早稲田Ｖ類は平底であるのに対して（早稲田例では丸底も存在するがきわめてまれである）、長七谷地Ⅲ群では丸底である。第Ⅱ群ａ類では、資料が少ないながらも丸底・尖底ともみられる。平底は出土していない。

（施 文 文 様）

早稲田Ｖ類では、口縁部文様帯を除いて器面に縄文を施文する。縄文は条が横走するもの、

羽状を構成するものなどが一部ある。長七谷地Ⅲ群は、羽状縄文以外には認められない。第Ⅱ群ａ類には特徴的なものとして、条が横走する縄文・部分的に羽状を構成するものが挙げられる。横走縄文は、早稲田Ｖ類と比較し、横走する範囲が広く、また節自体が大きいなど、北海道の網文式に類似する。また原体側面圧痕文と組み合わされる縄文は、２種の原体を用いた縦の羽状で文様効果は、長七谷地Ⅲ群に類似する。

（裏面文様・調整等について）

早稲田Ｖ類では、裏面に縄文・条痕などを施文する場合があるが、長七谷地Ⅲ群には内面に施文するものは見られない。また内面の調整は、早稲田Ｖ類においては指頭により粗く整形されるのが一般的であるのに対して、長七谷地ではヘラ状工具により平滑に整形されるが、第Ⅱ群ａ類土器では、原則として工具は用いられないものの早稲田Ｖ類に比べるとかなり平滑にナデられている。

以上、各項目ごとに早稲田Ｖ類、長七谷地Ⅲ群と比較を試みた。

第Ⅱ群ａ類土器は、胎土、及び胎土の繊維含有量・焼成は、早稲田Ｖ類、長七谷地Ⅲ群と類似し、３者は時間的関係が近い事を想起させ、器厚は両者の中間の値を示す。口唇部形状は、長七谷地Ⅲ群に近似するものの整形にはヘラ状工具等は用いられない。裏面の整形も同様である。口唇部文様・裏面文様は早稲田Ｖ類にはみられ、長七谷地Ⅲ群には認められず以後も希薄であることから、本類土器は、長七谷地Ⅲ群以前のものと考えられる。

器形は、口縁部が外傾するものは早稲田Ｖ類に、直立するものは長七谷地Ⅲ群に類似する。平底は、見受けられず、長七谷地Ⅲ群と関係を思わせる。波状口縁は、長七谷地Ⅲ群に一部見られる。（施文文様の違いはあるが、本類２－Ａと同一の形状を示すものが長七谷地Ⅲ群の中に見られ、長七谷地Ⅲ群との連続を思わせる。）

文様帯は、早稲田Ｖ類よりもさらに分化が顕著になり、幅も広く長七谷地Ⅲ群に連絡する。隆帯は、早稲田Ｖ類にはみられず長七谷地Ⅲ群には存在し、隆帯上に原体の末端刺突を施すことも同様である。

施文される縄文原体の回転方向は、早稲田Ｖ類ではその方向が多方向であるのに対して、本類土器では、横位の回転を基本とし、中には規則的、層状的に横位の回転をしているものがある。長七谷地Ⅲ群にみられる整然とした羽状縄文は、原体の回転方向が規則的に横位に回転することを前提とする。この意味において、本類土器は、その出自を考える上で示唆を与えるものである。長七谷地Ⅲ群の特徴である羽状縄文は、早稲田Ｖ類の一部にみられる同一原体の回転方向の変化により表出された稚拙なものとは異なり精練されたものである。本類にみられる縦位の羽状、部分的な羽状縄文は長七谷地Ⅲ群への過度期のものと理解する。また、横走する縄文は、早稲田Ｖ類の中にも一部見られるが本類のものが節が大きく、横走縄文の施文範囲も

胴下半まで見られ北海道の綱文式との関係が考えられる。

このように、本類土器は、早稲田Ⅴ類と長七谷地Ⅲ群の間を埋めるものと考えられよう。また本類土器はその内容が乏しいために、今後資料の増加とともに細分・再検討の余地を残すものである。（岡田　康博）

（３）第Ⅲ群土器について

本遺跡から出土した第Ⅲ群土器を大別すると、円筒系と大木系に区分することが出来る。

〔第Ⅲ群土器ａ・ｂ類〕

円筒上層式土器の研究は、山内（1929）・江坂（1970）・村越（1974）・三宅（1977）等の研究があり、ここでは、本遺跡の出土土器の特徴と、県南の出土土器の比較に止めたいと思う。

円筒上層式土器に概当するのは、ａ・ｂ類土器が考えられる。これらを江坂（1970）・村越（1974）の編年にあてはめると、横位の撚糸圧痕と、短い圧痕文を施文するａ類は、円筒上層a_1式（江坂、1970）・円筒上層ａ式（村越、1974）に、鋸歯文を施文するa_2類は、円筒上層a_2式（江坂、1970）・円筒上層ａ式（村越、1974）に比定され、馬蹄形圧痕文のa_3類は、円筒上層ｂ式に比定される。

次に、本遺跡の資料を比較検討したい。a_1類の撚糸圧痕間にみられる短縄文は、一条横位に展開しているが、村越氏は円筒土器文化の報文中で、『…口頸部文様帯に２段を最小とし、５段を最多とする縦位の撚糸短線圧痕文が主文様であり…』と述べているが、撚糸短線圧痕文の最小単位は、本遺跡の例や虚空蔵遺跡（名川町、1978）の出土土器等から１条が最小単位と考えられる。

a_3類に分類した円筒上層ｂ式土器の県南の出土例は少なく、八戸市一王寺遺跡から出土した土器があげられる（宮坂、1930）。一王寺出土土器は、扇状突起を有し、撚糸押圧とその間に爪形の撚糸圧痕を施文している土器であり、典型的な円筒上層ｂ式土器である。

ｂ類に分類した、縦位に施文した綾絡文は、綾絡文自体が円筒下層期に多様されており、円筒上層a_2式まで継続している。これは、円筒上層期に至って縦位に展開する傾向が強い。また、虚空蔵出土土器の底部寄りに無文帯を形成する技法などは、配石遺構周辺の出土土器と同様な技法を用いており、この事から、縦位の綾絡文を施文する土器は、円筒上層ａ式に比定すると思われる。

第92図－14は、土器製作および施文上の観点から、円筒上層ｅ式に比定され、他の斜・羽状縄文は、円筒上層ａ・ｂの型式に概当すると思われる。

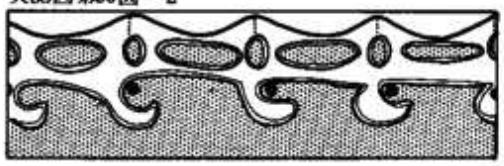
〔第Ⅲ群土器c類〕

本類の第91図－２・第92図の３点は、ＡＨ・ＡＩ－14グリッドの第Ⅲ層から一括して出土し

た土器であり、縄文時代中期末葉の大木10式に比定されると思われる。

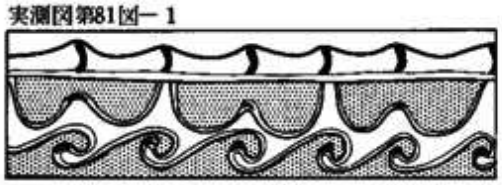
この土器の特徴としては、磨消縄文を有する土器と、縄文を施文している土器に分かれる。磨消縄文は、波状口縁を有し胴部上半から口頸部に文様が限定され、ａ・ｂの２つの文様帯に分離出来る。ａの文様帯は口唇部寄りの狭義の文様帯であり副次的な要素をもつ。ｂは、広義の文様帯で胴部張り出し部までの文様帯であり、「Ｌ」字文様が横位に展開される文様である。

実測図第80図－２



1

実測図第81図－１



2

第128図　第Ⅲ群土器展開模式図

磨消縄文土器の他に縄文のみ施文した粗製の深鉢形土器が共伴した。この様なセット関係で出土した遺跡は、井沢遺跡（平賀町、1976）・田ノ上遺跡（青森県、1981）出土の土器があげられる。井沢遺跡では、口頸部が内湾する土器であり、田ノ上遺跡では、口唇部が内反する土器が出土している。この時期の縄文のみ施文する粗製深鉢形土器には、形状にバラエティーがみられる。

大木10式の位置づけは、従来本県では不明な型式の一つであった。近年、大木10式に併行する泉山（青森県、1976）・井沢（平賀町、1976）・山崎（青森県、1982）・一本松（深浦町、1981）遺跡の発掘等で資料も増加し、徐々に、解明への糸口をつかんでいる状態である。

この様な一連の発掘調査で、井沢遺跡（平賀町、1976）では、最花式と大木10式が融合した土器型式として把え唐竹式を符しており、また、山崎遺跡（青森県、1982）では第Ⅰ～Ⅴ段階の過程を考え、一本松遺跡（深浦町、1981）ではａ～ｃ式と３期に区分を行なっている。

以上の様に本県での大木10式の細分は試みられているが、ここでは、大木10式を層位およびセット関係でおさえ、大木10式をⅠ～Ⅲ期と区分した丹羽茂（丹羽、1981）の編年に本遺跡の出土土器が位置づけられているのか検討してみたい。

第Ⅰ期の文様は、Ｕ・Ｓ字状文様を主体とする土器であり、掘合Ⅱ号遺跡の土器が、概当すると思われる。第Ⅰ期の文様を構成する土器は本県では少ない。

第Ⅱ期に至っては、類例が増加する好例として井沢遺跡（平賀町、1976）をあげたい。また、本遺跡の出土土器も第Ⅱ期に概当すると思われる。第Ⅲ期およびⅢ期以降に至ると本県の大木

10式土器の様相に変化がみられ、東北南半との間に文様施文上の変化がみられる。文様施文をとっても綾線の発達がみられず、また、地文縄文上に沈線で文様が施文される点など明らかに東北南半部との文様技法の相違点が指摘される。今後、本遺跡も含めた本県の大木10式土器の充分な比較検討と、道内におけるノダップⅡ・れんが台式（大沼、1981）等の影響も考えなければならないと思われる。

（４）第Ⅳ群土器について

〔第Ⅳ群ａ・ｂ類〕

縄文時代後期の編年は、磯崎正彦の十腰内遺跡の報告書（磯崎、1968）で後期の編年を発表してから、数多くの試みがなされてきた（葛西、1979・成田、1981）。しかし、その反面、縄文および撚糸文のみで施文されているいわゆる粗製土器についての研究は立ち遅れているのが現状である。

本遺跡で分類したａ類の土器は、文様施文等から判断すると、縄文時代後期前葉の蛍沢式・前十腰内Ⅰ式に位置づけられると思われるが、その一方ｂ類の土器は、多量に出土しながら所属時期が明瞭に判断出来ない資料である。

そこで、本報告書では、縄文時代中期末葉の大木10式から十腰内Ⅰ式に至るまでの粗製土器の変遷を、本遺跡の資料と県内の資料を加味しながら検討してみたいと思う。

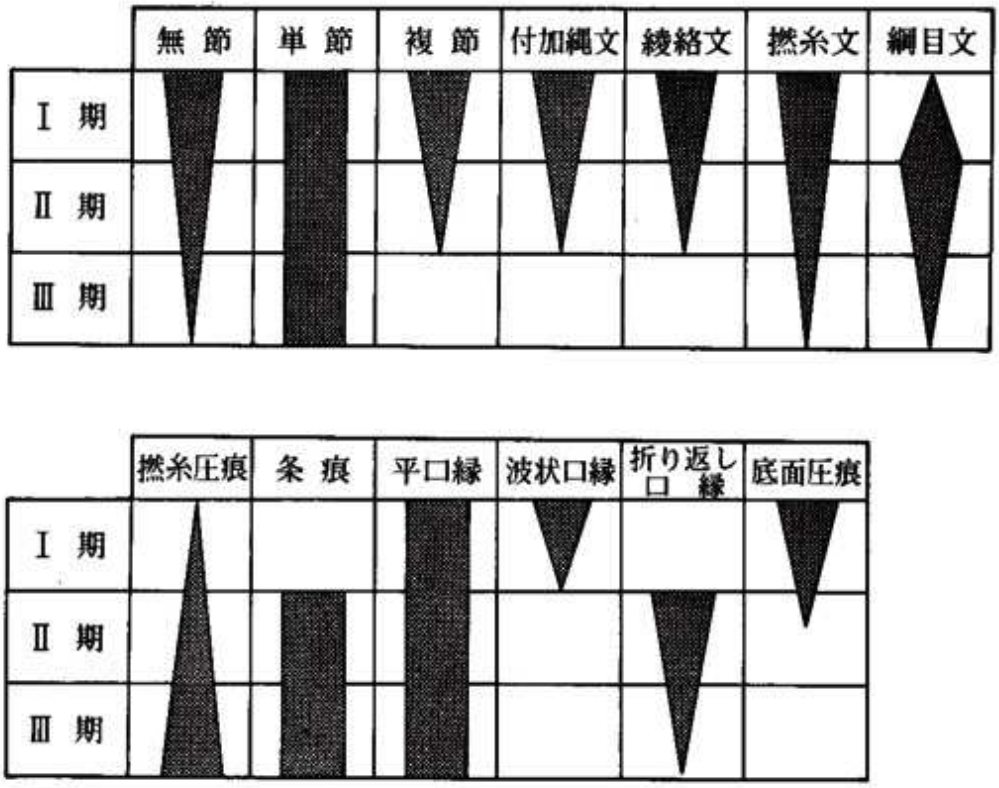
ここでは、各型式ごとの粗製土器の細分は困難であり、大きく大木10式を第Ⅰ期・蛍沢・前十腰内Ⅰ式を第Ⅱ期・十腰内Ⅰ式を第Ⅲ期に分類した。文様要素・形状の摘出は、縄文系（無節・単節・複節・綾絡文・付加縄文・撚糸圧痕）絡状体系（撚糸文・網目状撚糸文）形状（平口縁・波状口縁・抜り返し口縁）底面圧痕という項目をたて第129図に表わした。

（文様要素・形状）

縄文には、無節・単節・複節・付加縄文・綾絡文を使用している。その中で単節の使用が大きな位置を占める。単節の原体は、第Ⅰ期でＲＬが多く、第Ⅱ期ではＬＲとＲＬが半々・第Ⅲ期に至ってＬＲが多く用いられる。他の縄文原体は、副次的な要素であり、第Ⅰ期で多種類の原体を使用しながら、第Ⅱ期の段階で種類減少傾向がみられる。

綾絡文は、第Ⅰ期（青森県、1982）Ⅱ期（青森市、1979）に使用され、斜・縦位方向に回転しており、横位方向には回転しない。東北地方南半では、大木10式の中で綾絡文は消滅する（柳沢、1980）。無節および複節は、精製土器にも多く用いられる。付加縄文（第11図- 17）は、粗製土器の原体使用で極端に少ない原体である。

撚糸文の土器は、第Ⅰ期で多様され精製土器にも多くみられる。また、回転方向は、縦位方向という規則性を有する。



第129図　粗製土器変遷図

網目文は、第Ⅱ期で数多く使用される。磯崎正彦は、十腰内遺跡の報告書中で、網目文と縄文との関係にふれており、十腰内Ⅰ式の段階で網目文には単軸の１段ＬｒとＲｅの２種の原体がありながら、縄文にはＬＲしかないという点を問題提起している（磯崎、1968）。網目文は、第Ⅲ期に至って沈線の格子目文様へと変化するのではないかと考えられる。この事は、第Ⅲ期に相当する近野遺跡（青森県、1974）での網目状撚糸文と沈線格子目文様の出土比率を考えての事である。

撚糸圧痕は、第Ⅲ期にみられるが十腰内遺跡（磯崎、1968）ではみられず、大湯遺跡（秋田県、1975）、崎山弁天遺跡（大迫町、1982）の出土資料にみられる。また、第Ⅱ期では少ないが、本遺跡の（第12図－８）で１片出土している。しかし、縄文時代中期後葉に位置づけられる道南のノダップⅡ式（宮、1981）が撚糸圧痕を多様しており、中期からの撚糸圧痕も検討しなければならない。

条痕の沈線は、第Ⅱ期で無造作な縦位方向が主体であり、（青森市、1979）第Ⅲ期に至っては、精製土器にみられる沈線間の条痕に変化すると思われる。

器形の形状は、第Ⅰ～Ⅲ期の間で数多くの形状がみられる。その中で各時期の中で多く使用される形状は、第Ⅰ期で口唇部が内湾するタイプ・第Ⅱ期で口頸部が外反するタイプ・第Ⅲ期に至っては口頸部が内反するタイプがあげられるが、各時期における遺跡間に使用される形状に差異がみられ一定していない。

口縁は、第Ⅰ期の山崎遺跡（青森県、1982）で波状口縁の土器もみられるが、類例は少なく、第Ⅰ～Ⅲ期を通じて口縁部が平口縁を主体としている。また、当時の精製土器が第Ⅰ～Ⅲ期まで波状口縁が多いのに対して１つの特徴といえる。この事は、縄文時代後期の土器は、飾られる土器（精製土器）と、飾られない土器（粗製土器）の存在が指摘できる。

折り返し口縁の土器は、第Ⅱ期に多く、第Ⅱ期の特徴といっても過言ではない。道南の余市式土器は、粘土帯を多様しており、余市式土器の影響も考えられる。

底面の網代文および縄文の圧痕は、第Ⅰ期に多く使用される。（平賀、1976）

前記のごとく、粗製土器の文様・形状を概観したが、最後に第Ⅰ～Ⅲ期の粗製土器の特徴を記載したい。

（粗製土器第Ⅰ期の特徴）

1．器形は、深鉢形が主体であるが壺形・浅鉢形もみられる。

2．口縁は、平口縁が主体だが、波状口縁も若干出土している。

3．底面には、網代圧痕文をもつ物が大多数を占める。

4．縄文の原体は、無節・単節・複節・撚糸文・付加条文・綾絡文と多種類を用いている。

5．単節の原体は、ＬＲ・ＲＬを使用しているがＲＬが多い。

6．縄文原体の回転方向は、横位・斜位・縦位と一定しない土器が多い。

（粗製土器第Ⅱ期の特徴）

1．口縁は平口縁が主体である。また、折り返し口縁が出現し、折り返し口縁部に縄文を施文する。

2．沈線の条痕を施文する土器が出現する。

3．撚糸文・網目状撚糸文を多様する。

4．縄文の原体は、第Ⅰ期の原体を受けついでいる。しかし、使用頻度から単節を多く使用する。単節の原体は、ＬＲとＲＬを用いており、だいたい過半数である。

5．縄文の回転方向は、第Ⅰ期と同様に斜・縦位と不規則に回転する土器がみられる。

（粗製第Ⅲ期の特徴）

1．縄文の原体には、単節が主体であり、ＬＲを用いる。また、複節および綾絡文を使用しなくなる。

2．縄文の回転方向は、横位方向が基本であり、まれに縦・斜位の回転方向がみられる程度

である。

3．無文土器が多い。

4．口頸部には、撚糸圧痕がみられる。

5．粗製土器の占める割合が、第Ⅰ・Ⅱ期と比較して少ない。

以上の様に粗製土器の特徴を羅列したが、東北南半の大木10式土器の中でさえ、福島中道り・陸中・仙台湾の地域で粗製土器に差異がみられ、地域性が顕著である。（柳沢、1980）今後は、各時期のセット関係・層位関係をおさえ精製・粗製関係の把握をおさえていかなければならないと思われる。

〔第Ⅳ群ｃ類〕

ｃ－１・ｃ－２類は、縄文時代後期中葉の十腰内Ⅲ・Ⅳ式に比定されると思われる。十腰内遺跡で磯崎正彦氏が十腰内Ⅲ・Ⅳ群と分類しているが、（磯崎、1968）不明な部分が多く、ここでは、十腰内Ⅲ・Ⅳと区別せずに用いた。（第13図－１・２）の土器は、焼成が良好なので本類に分類したが、十腰内Ⅲ・Ⅳ式の刺突方法と若干の差異があり、十腰内Ⅲ・Ⅳ式の以前に位置づけられる事も考えられる。

ｃ－３類は、文様の瘤状突起・文様構成等の観点から十腰内Ⅴ式に比定される。ｃ－４類の注口土器は、前記ｃ－１～ｃ－３類のいづれかの型式に比定されると思われる。

（５）　第Ⅴ群土器について

第Ⅴ群土器は、縄文時代晩期の時期に比定される土器群である。本群ではａ－１～ａ－３類に３分類を行ったが、これらの編年的位置づけを検討してみたい。

ａ－１類は、（第14図－１・３・４）の磨消縄文は、大洞Ｃ$_1$式に比定される。（第14図－９）のコの字文を施文する土器は、大洞Ａ式に比定される。また、狭義の文様帯で横位沈線および刺突を施文するものは、大洞ＢＣ～Ｃ$_1$式の時期に概当すると思われる。

ａ－２類の無文土器は、型式を断定する事は困難だが、（第10図－２）の土器の形状から、縄文時代晩期前葉に位置づけられると思われる。

ａ－３類の縄文・条痕系の土器は、前記のａ－１類及びａ－２類のいづれかの型式に概当すると思われる。　（成田　滋彦）

3．石器について

出土した石器は、総数109点である。その種別は、第18表に示したように、製作・形態から13器種に分類した。これらの石器は、出土土器の様相からすべて同一時期の所産とは考えられない。しかしながら、遺物に共伴する検出遺構（焼石遺構・配石遺構）から、大局的にみて縄文時代早期末葉から前期初頭のグループと、縄文時代中期以後のグループに分けることができる。

第134図は、本遺跡から出土した石器の構成比を示したものである。ここで注目されるのは、石器総数の半数以上を占めている磨石の存在である。本小稿では、この磨石について若干の考察を行ってみたいと思う。

従来、本石器類は、「すり石」・「擦石」・「磨石」などと呼称され、汎縄文時代的分布を示している石器とされている。これらの石器は、上下面を磨いているもの、面に凹痕を残すもの、敲打痕をもつものを包括して報告されている場合が多い。しかし、「断面形状が三角形の細長くずんぐりした自然礫の稜に、一見擦り減ったかのような、ほぼ平坦な細長い面（機能面）をもつ石器」を「三角柱状磨石」（三宅、1981）と分類している例もある。さらに関東・中部地方では、ある一定の規則性のあるものを「特殊磨石」と名称し、縄文時代早期の押型文及び条痕文に共伴するものとされる。規則性については、「やや細長く、ずんぐりした転石の側縁部の断面でみると角ばった部分にのみ集中して、磨滅痕を残す。側縁部に角ばった部分がなければ磨いて作出する（八木、1976）と記述し、他時期のものと形態的な差異を示している。

本遺跡で出土した磨石は、「特殊磨石」とは形態的に同様であろうが、特殊たる所以がはっきりせず、「三角柱状磨石」の分類では、その規定外の四角柱状のもの、扁平状のものも出土していることから、ここでは単に磨石と称することにした。分類にあたっては、素材とする自然礫の形態から、三角柱状等の角柱礫を使用しているものをａ類、扁平礫・石餘状の礫を使用しているものをｂ類とし、いずれも断面形状で三角形や楕円形の鋭角な部分（いわゆる稜線）に狭長な機能面を形成している。使用面は、１面使用のものが55点と最も多いが、２～３面使用のものも10点出土し、少ない数ではない。また端部に敲打痕を有するものもあり、細長い素材が多いためか欠損しているものが多い。

磨石は県内でも出土例が多く、時期的に主な遺跡をみると、縄文時代早期の貝殻条痕文系（吹切沢式）を主体とする新納屋遺跡（２）131点、下田代納屋Ｂ遺跡（青森県郷、1976）７点、早期後葉の縄文系（赤御堂式）を主体とする赤御堂遺跡17点がある。縄文時代早期末葉～前期初頭の縄文系（早稲田５類、長七谷地Ⅲ群）を主体とする遺跡には、長七谷地貝塚655点、鷹架遺跡53点、発茶沢通跡17点があげられる。縄文時代前期以後では、円筒土器下層式に伴い、熊沢遺跡26点、大面遺跡27点、大平遺跡５点が出土しているが、全石器の構成比からみると、磨石

の占める割合は激減する。このように礫石器に関する限り、地域的な条件の違いもあるだろうが、貝殻条痕系に伴う石錘、円筒土器下層式に伴う半円状扁平打製石器が主体を占めるように、縄文時代早期末葉～前期初頭に伴って磨石の占める割合が高いことは注目されよう。

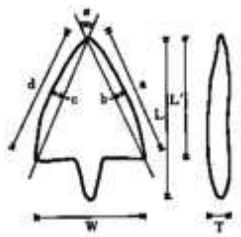
本遺跡の場合、62点のうち９点が焼石遺構に混って出土した。この焼石遺構は、中掫浮石層（アワズナ）より下位で、南部浮石層（ゴロタ）より上位で検出された。この２枚の火山灰に挟まれた層からは、縄文時代早・前期の遺物が出土し、したがって同遺構に伴う磨石についても同時期の所産と考えられる。

石材は、その地域における産出状況によってもかなりの相異を示すであろうが、そのような状況を考慮しても石材の使用には統一性がみとめられる。

前述の各遺跡の磨石の石材組成は、縄文時代早期中葉の下田代納屋Ｂ遺跡・新納屋遺跡（２）では、安山岩製が、縄文時代早期後葉の赤御堂遺跡では砂岩製と安山岩製が、縄文時代早期末葉～前期初頭の発茶沢遺跡・鷹架遺跡では安山岩製が、長七谷地貝塚では砂岩製・安山岩製が使用されている。本遺跡では第134図に示す通り砂岩と安山岩で全体の80%以上を示す。このように磨石の石材は安山岩・砂岩が用いられることが多い。これらの石材が磨石として最も適合した石材であることが言える。しかしながら、砂岩と安山岩は性格を異にする点が多い。砂岩は粒子がちみつで加工しやすく、安山岩は多孔質で粒子は粗く加工に適さない点である。このことは使用する際になんらかの使い分けが行われていたのかも知れない。力学的な実験を重ねて解明しなければならない問題であろう。

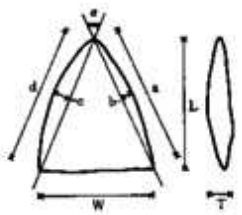
磨石の用途に関して代表的なものを列挙してみる。（１）植物質食糧の磨り潰し（澄田、1964他）やその他のもの例えば酸化鉄・石・貝殻などの製粉（八幡、1959他）（２）土器内面その他を磨く（中谷、1943他）（３）繊維の面を滑らかにする（柴田、1923）（４）獣皮の皮なめし工具などである。しかし、磨石の形態機能面の観察から、結局のところ坪井正五郎氏の「…是等の石器を用ゐて草木の実を潰し食用の粉を製りならん…」（坪井、1895）ということに集約されてしまうであろう。

（岩田　満）



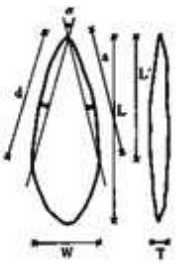
L：長さ　α＝尖頭部開き角
W：幅　½×10＝右側膨み度
T：厚さ　½×10＝左側膨み度

（有　茎）



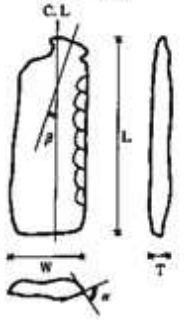
L：長さ　α＝尖頭部開き角
W：幅　½×10＝右側膨み度
T：厚さ　½×10＝左側膨み度

（無　茎）



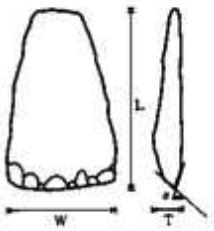
L：長さ　α＝尖頭部開き角
W：幅　½×10＝右側膨み度
T：厚さ　½×10＝左側膨み度

（柳葉形）



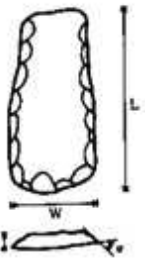
L：長さ　α＝刃部角度
W：幅　β＝つまみ部開き角
T：厚さ　C.L＝中央軸線

（石　匙）



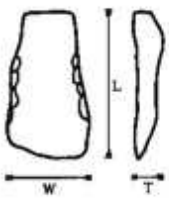
L：長さ　α＝刃部角度
W：幅
T：厚さ

（石　錐）

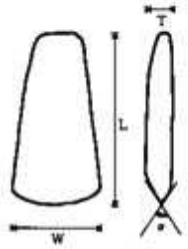


L：長さ　α＝刃部角度
W：幅
T：厚さ

（不定形削器）

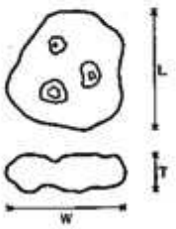


L：長さ
W：幅
T：厚さ　（R．フレイク）

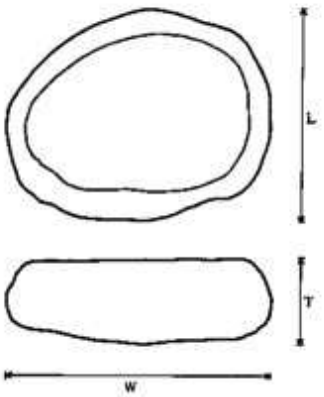


L：長さ　α＝刃部角度
W：幅
T：厚さ

（磨製石斧）

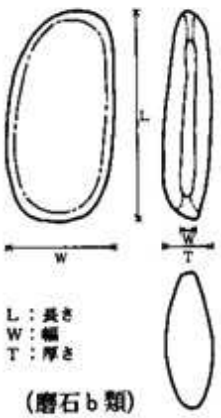


L：長さ
W：幅
T：厚さ　（凹　石）



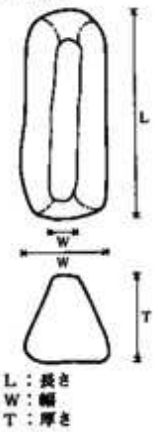
L：長さ　W：幅　T：厚さ

（石　皿）



L：長さ
W：幅
T：厚さ

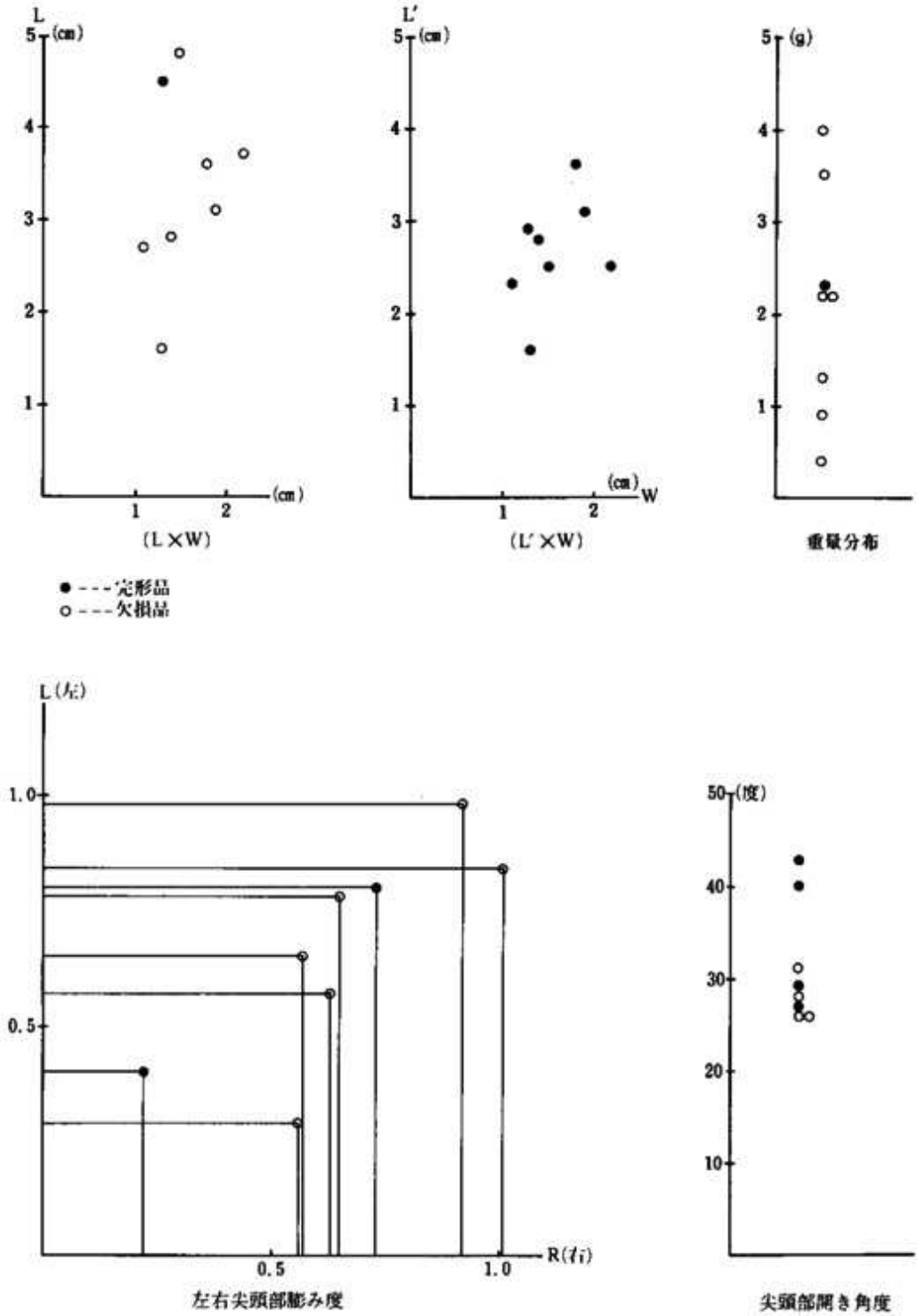
（磨石ｂ類）



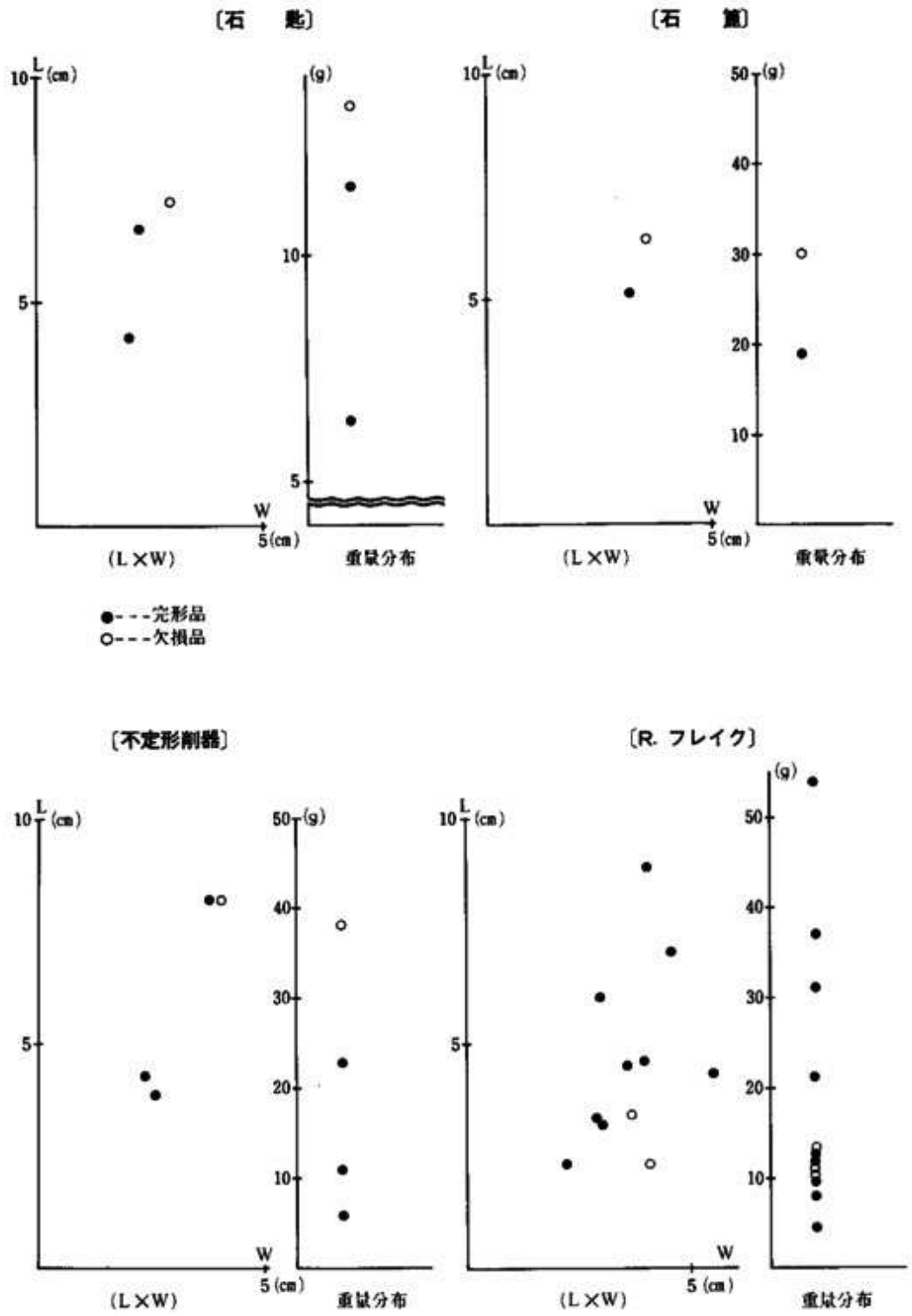
L：長さ
W：幅
T：厚さ

（磨石ａ類）

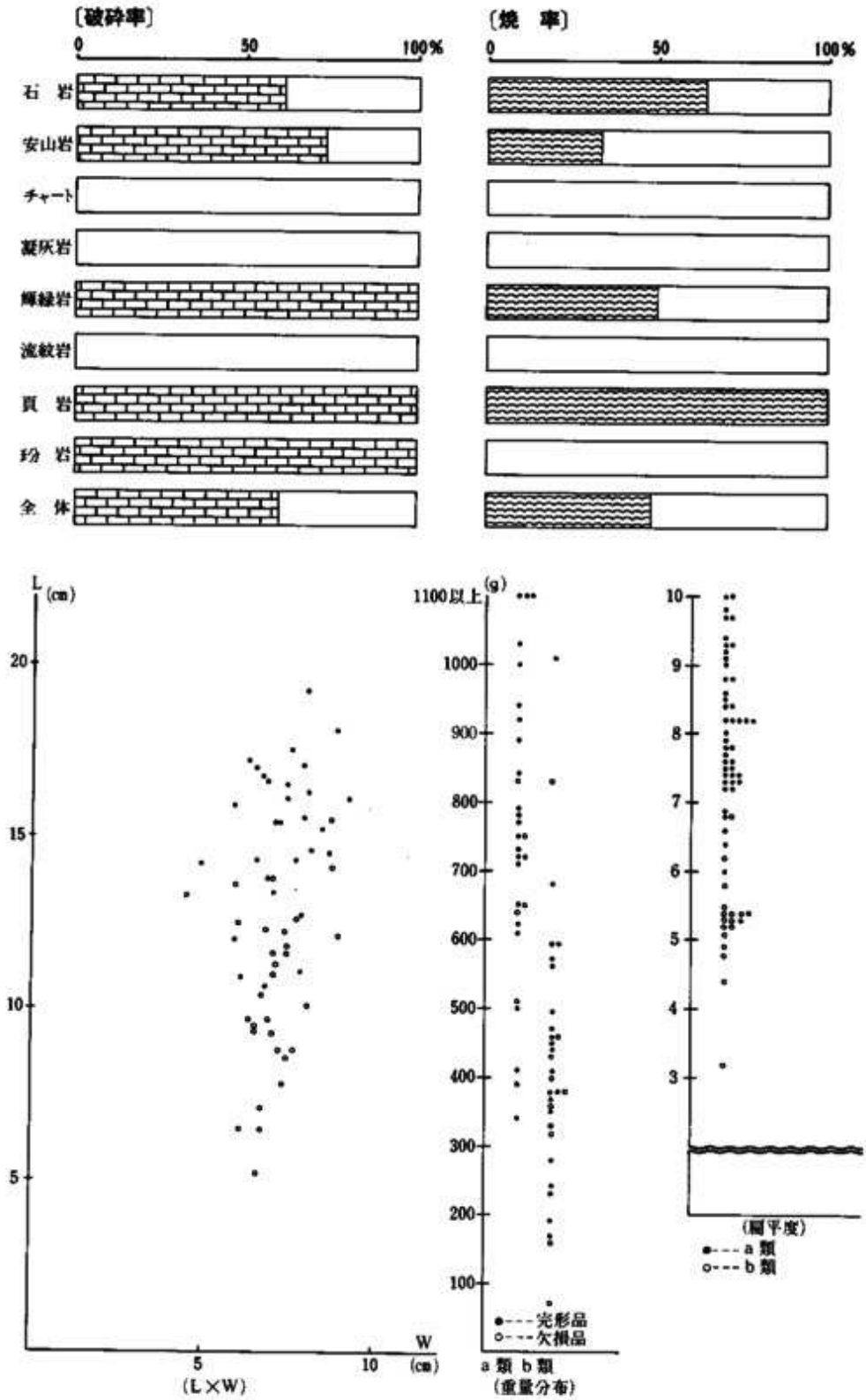
第130図　石器計測基準


L
5 (cm)
4
3
2
1
1
2
(cm)
(L×W)
L'
5 (cm)
4
3
2
1
1
2
(cm) W
(L'×W)
5 (g)
4
3
2
1
重量分布
●---完形品
○---欠損品
L(左)
1.0
0.5
0.5
1.0
R(右)
左右尖頭部膨み度
50 (度)
40
30
20
10
尖頭部開き角度

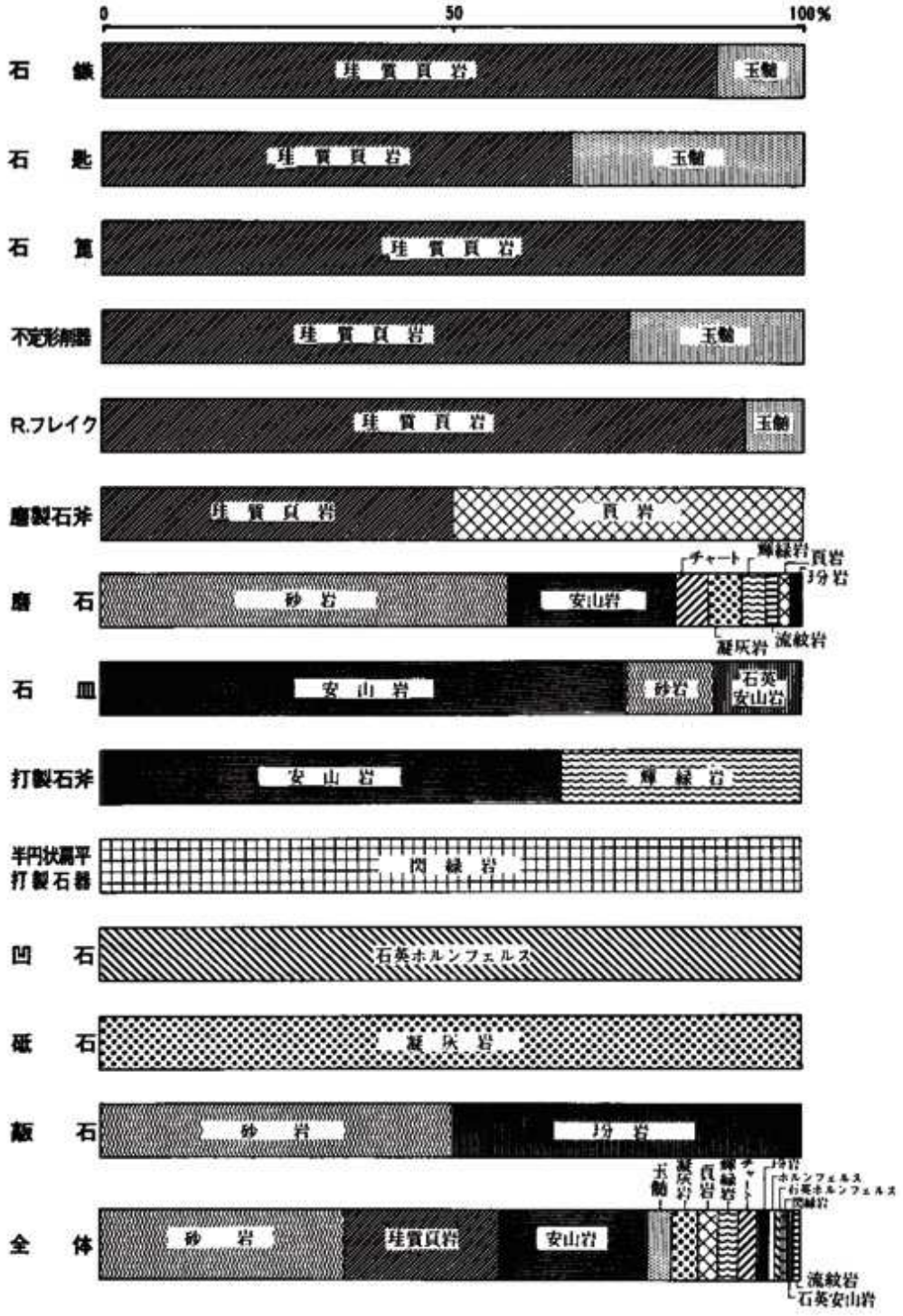
第131図　石鏃計測図



第132図　石器計測図


〔破砕率〕
0
50
100%
〔焼　率〕
0
50
100%
石　岩
安山岩
チャート
凝灰岩
輝緑岩
流紋岩
頁　岩
砂　岩
全　体
L (cm)
20
15
10
5
5
10
W (cm)
(L×W)
1100以上 (g)
1000
900
800
700
600
500
400
300
200
100
●---完形品
○---欠損品
a 類 b 類
(重量分布)
10
9
8
7
6
5
4
3
(扁平度)
●---a 類
○---b 類

第133図　磨石計測図



第134図　器種別石材構成比

4．土偶・土製品について

第122図－ 1 の土偶は、板状土偶を呈し、全面が刺突による文様で描かれているが、この様な文様手法を用いる他の土偶の類例としては、本県では、一本松遺跡（深浦町、1980）、千歳遺跡(13)（青森県、1976）があげられ、岩手県では、立石遺跡（大迫町、1979）、八天遺跡（北上市、1978）である。岩手県出土の土偶は、刺突施文の間隔を幅広くして施文している。

土偶の時期は、一本松遺跡で、大木 9・10式が共伴しており、縄文時代中期後葉に位置づけ、千歳遺跡(13)では、縄文時代後期初頭から十腰内Ⅰ式の時期に位置づけている。この様な土偶は、両腕部に貫通孔（紐通し）がみられる土偶が多く江坂輝弥氏は、縄文時代後期の時期に数多く存在する事を指摘している。（江坂、1982）

以上の観点から、本遺跡の土偶の位置づけは縄文時代中期後葉～後期前葉の時期に比定されると思われる。

第122図－ 2 の土偶は、中空土偶ではなく、遮光器状の目と結髪が特徴の土偶である。これらの特徴から、江坂輝弥氏が分類した第 1 類土偶（江坂、1960）に概当すると思われ、時期は縄文時代晩期前半に比定されると思われる。

ミニチュア土器は、縄文の節の細かさや製作等から判断すると縄文時代晩期の時期と思われる。

円盤状土製品は、本県で縄文時代中期後葉から後期中葉にかけて数多く出土するが、伴出遺物がないためその製作時期を決定する事はできなかった。滑車型耳飾りも同様に時期は不明である。

（成田　滋彦）

5．弥生時代の土器について

出土した弥生時代の土器は、すべて破片であり全体の器形を知り得るものはなく、また、文様構成についても不明な点が多い。ここでは、比較的良好な資料を用いて若干の考察を行いたい。

a類土器は変形工字文を施文する土器である。変形工字文は縄文時代晩期の大洞A′式のメルクマールとされているが、その変遷は弥生時代全体を通して脈絡と続くものである。本類土器は晩期のものとは違い、変形工字文の中に粘土粒を持たないことを特徴とする。当該時期で、粘土粒を持たない変形工字文として五所式が挙げられる（村越、1965）。しかし、五所式と比較して沈線が太く前段階の砂沢式に近似する（新谷、1978）。さらに技術的に五所式は、最初から粘土粒を持たないのに対して、本類土器は沈線を引くことにより余った粘土を変形工字文の頂点の部分と一緒に除去しており、このような手法は五所式には見られない。よって本類土器は沈線が太い点では砂沢式に近似し、胎土・焼成・粘土粒を有しない点では五所式に近似し、そ

の中間に位置するものと思われる。

b類土器は撚糸文、結節回転文を施文する土器で鳥海山遺跡出土資料と近似し、同類時期のものと思われる。鈴木克彦は鳥海山遺跡資料をもって鳥海山式土器を設定し、(鈴木、1978)弥生時代後期に位置付けている。しかし、鳥海山式土器はその内容が豊富なため複数の型式を内包している可能性が高く、今後、検討される余地があると思われる。

c類は直前段多条の原体による縄文を施文する土器である。同一破片に撚糸文・結節回転文・縄文が施文される例からb類と共伴すると思われる。

d類は多重の沈線文と幅の狭い連続山形文を施文する点より念仏間式に近似し弥生時代後期のものと思われる。

このように、弥生時代中・後期のものであるが資料が少ないために、その変遷について知る事はできない。今後の資料の増加に期待するものである。

6．中世陶磁器について

本遺跡からは多量の陶磁器が出土し、その製作年代によって①中世のもの、②近世以降と現代のものに大別した。ここでは中世陶磁器に限定し、若干の考察を加える。

本遺跡出土の中世陶磁器は生産地によって、①舶載陶磁器(その産地が中国に求められるもの)、②国産陶磁器(産地を東海地方に求められるもの)に2分される。舶載陶磁器は青磁が2片出土している。器形はいずれも碗である。2片とも別の個体のもので、胎土・釉調に差が認められる。詳しい産地は不明であるが、16世紀後半~17世紀にかけてのものと推定される。国産陶磁器は美濃灰釉陶器が1片出土した。器形は折縁の皿である。美濃の大窯期のものと思われ、16世紀後半のものと推定される。青磁・美濃灰釉陶器ともその製作年代により、共伴した可能性が高い。また唐津が本県に入ってくるのは17世紀前半と言われ、本遺跡では唐津が出土していないので、それ以前の時期のものと思われる。しかし陶磁器は伝世する場合もあり、その場合にも近世以降の陶磁器と一緒に使用されたものと考えられる。

本稿にあたり金沢大学助教授佐々木達夫氏より御指導・御助言を頂いた。

7．泥面子(どろめんこ)について

泥面子は元来、面模(めんがた)・面打(めんうち)とも呼ばれ(金剌、1974)、粘土(ねんど)を型に入れ打ち抜かれ600℃~800℃前後で焼成され、型(本)に対して同型の子が幾つも出来るために面子(めんこ)、さらに主として材料に泥(粘土)を用いるために泥面子と呼称されたものである。材料は他に板・金属・紙・ガラスなどを用いているが、材料の入手の易しさ、塑造性に富むなどの利点より泥を用いるの

が一般的と思われる。形態・文様とも様々で、円盤状で中に文様のあるもの、人・動物の立像、人・動物の顔もしくはお面、碁石等がある。

泥面子は江戸時代享保年間の頃から登場し、幕末にかけて全国的に流行し昭和初期まで続いたとされている。(金剌、1974・増子、1978)主として子供の玩具として用いられたが、その他にも五穀豊饒を祈願して畑地にまく、肥料に混入させる、副葬品とする、など民間信仰の際の使用も十分考えられる。今回の調査では当該時期の遺構は検出されなかったものの、泥面子の出土は遺跡周辺に近世~現代にかけての生活空間の存在を示唆するものと言える。

(岡田　康博)

第VI章　ま　と　め

長者森遺跡は、昭和57年４月から９月上旬までの発掘調査期間で下記の遺構・遺物等を検出した。

焼石遺構５基・焼土状遺構８基・配石遺構１基・土壙23基・溝状ピット７基・風倒木10基である。住居跡は検出する事が出来なかった。その中で、特に焼石遺構は、縄文時代早・前期の時期に調理用に用いられた焼石遺構である。本遺構は、関東・中部地域で多く検出されているが、東北地方では類例が少なく、今後、本地域における縄文時代の社会・生活を知るうえに貴重な遺構と思われる。

遺物は、ダンボール箱で約30箱と少なかったが、各時期にわたって出土している。

・縄文時代早期（物見台・吹切沢・ムシリ・早稲田Ⅴ）
・縄文時代前期（早稲田Ⅴから長七谷地Ⅲ群をつなぐ未命名の型式・長七谷Ⅲ）
・縄文時代中期（円筒土器上層ａ・ｂ・ｄ・大木10）
・縄文時代後期（蛍沢・前十腰内Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ）
・縄文時代晩期（大洞ＢＣ・C_1・Ａ）
・弥　生　時　代（弥生後期）
・土　　師　　器（桜井第Ⅱ型式）
・中世陶磁器（青磁（16C後半～17C）・灰釉）

次に、出土した土器の特徴点をあげてみたい。

第Ⅱ群土器のａ類と、セットで出土した第Ⅲ群ｃ類の土器は、いまだ不明な点が多い本県の縄文時代前期前葉・中期末葉の土器型式を検討する良好な資料と考えられる。

第Ⅳ群土器は、本遺跡の中で数多く出土した土器である。切断蓋付土器は、器高26cmと県内で出土した切断蓋付土器の中でも、最大の大きさを有する土器である。切断蓋付土器の用途は、現在のところ確定的なものはないが、遺跡内から出土する例が少ない点や、意識的に胴部と蓋部を切り離していることから特殊な用途に用いられたと考えられる。

弥生時代の土器では、赤色顔料を器表面に帯状に塗布している土器があげられる。石器は、種別が多いわりに他の縄文時代遺跡と比較すると量的に少なく、特に、種別の中で磨石が半数以上を占め多量の出土が目立つことと、剥片石器の素材が少ない点が指摘される。

土偶・土製品は、土偶・ミニチュア土器・円盤状土製品・滑車型耳飾りなどが出土したが、種類および数量等から他の遺跡と比較して少ない。

以上の様に長者森遺跡は、縄文時代早期から近世に至るまで長期間に営まれた複合遺跡である。

（成田・岡田・岩田）

〔引用・参考文献〕

ア．青森県教育委員会　1975　『近野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第22集
〃　1976　『千歳遺跡（13）』青森県埋蔵文化財調査報告書第27集
〃　1976　「新納屋（1）遺跡」『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』青森県埋蔵文化財調査報告書第28集
〃　1976　『古街道長根遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第29集
〃　1976　『泉山遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第31集
〃　1977　『近野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第33集
〃　1978　『遺跡地名表』
〃　1978　『熊沢遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第38集
〃　1978　『源常平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第39集
〃　1979　「104号遺跡」『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』青森県埋蔵文化財調査報告書第48集
〃　1979　『大平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第52集
〃　1980　『桔梗野工業団地造成に伴なう埋蔵文化財試掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第51集
〃　1980　『砂沢平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第53集
〃　1980　『大面遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第55集
〃　1980　『長七谷地貝塚』青森県埋蔵文化財調査報告書第57集
〃　1981　『表館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第61集
〃　1981　『新納屋遺跡（2）』青森県埋蔵文化財調査報告書第62集
〃　1981　『鷹架遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第63集
〃　1981　「外長根（4）遺跡」『国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』青森県埋蔵文化財調査報告書第64集
〃　1981　「田ノ上遺跡」『国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第65集
〃　1982　『発茶沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第67集
〃　1982　『山崎遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第68集
〃　1982　『右エ門次郎窪・三合山・石ノ窪遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第69集
〃　1982　『馬場瀬遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第70集
〃　1982　『下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第71集
青森県立郷土館　1976　『下田代納屋B遺跡発掘調査報告書』調査報告第1集
青森県埋蔵文化財調査センター　1982　「鶏窪遺跡」『青森県埋蔵文化財調査センター所報』第1号
青森市蛍沢遺跡調査団　1979　『蛍沢遺跡』
赤星直忠・岡本勇　1957　「茅山貝塚」『横須賀市博物館研究報告書』Ⅰ
秋田県教育委員会　1975　『大湯環状列石周辺遺跡分布調査概報』
石岡憲雄　1980　「所謂Tピットについて」『土曜考古』第2号
磯崎正彦他　1968　「十腰内遺跡」『岩木山』岩木山刊行会
今村啓爾他　1973　『霧ケ丘』霧ケ丘遺跡調査団
江坂輝弥　1960　『土偶』校倉書房
〃　1970　『石神遺跡』ニューサイエンス社
〃　1982　「円筒式土器に伴う土偶」『縄文土器文化研究序説』六興出版
大槌町教育委員会　1974　『崎山弁天遺跡』
大迫町教育委員会　1979　『立石遺跡』大迫町文化財報告第3集
大沼忠春　1981　「北海道中央部における縄文時代中期から後期の編年について」「考古学雑誌」第66巻4号
大沼忠春　1981　「道央部の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学』第17号

カ．葛西勵　1979　「十腰内Ⅰ式土器の編年的細分」『北奥古代文化』第11号
加藤孝　1951　「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院女子大研究論文集』

加藤邦雄 1982 「縄文尖底土器」『縄文文化の研究- 縄文土器Ⅰ』3
金剌伸吾 1974 「どろめんこの話」『どるめん』第3号
川崎市黒川東遺跡発掘調査団 1979 『黒川東遺跡』
北上市教育委員会 1978 『八天遺跡』北上市文化財調査報告書第24集
熊谷常正 1979 「岩手県東磐井郡の縄文時代前期土器群」『考古風土記』第4号
小薬一夫 1979 「縄文時代における焼石遺構」『小田原考古学研究会会報』第8号
小林康夫 1978 「縄文時代の磨石」『中部高地の考古学』

サ.佐々木達夫 1981 「日本海の陶磁貿易」『日本海文化』第8号
佐藤達夫・渡辺兼庸 1960 「六ヶ所村表館出土の土器」『上北考古学会誌』1
柴田常恵 1923 『日本考古学』
杉原荘介・芹沢長介 1957 「神奈川県夏島における縄文文化初頭の貝塚」『明治大学文学部研究報告』考古学第2冊
鈴木道之助 1981 『石器の基礎知識Ⅲ』柏書房
澄田正一 1964 「濃飛山地に分布する石皿の機能について」『名古屋大学文学部研究論集』32
瀬川司男 1981 「陥し穴状遺構について」『(財)岩手県埋蔵文化財センター紀要』1

タ.竹石健二 1980 「所謂土壙の機能についての一考察」『史叢』第25号　日本大学史学会
橋善光 1977 『下北の古代文化』
〃 1979 「入門講座　弥生土器　東北- 北東北4」『月刊考古学ジャーナル』第168号
〃 1982 「北東北地方の弥生式土器編年(試案)」『岩手県埋蔵文化財センター公開講座レジュメ』
勅坂遺跡調査会 1978 『勅坂遺跡』

ナ.中谷治宇二郎 1943 『日本石器時代提要』
名川町教育委員会 1978 『虚空蔵遺跡発掘調査報告書』
名久井文明 1974 「北日本縄文式早期編年に関する- 試行(Ⅰ)」『考古学雑誌』第60巻3号
〃 1979 「北日本縄文時代早期編年に関する- 試行(Ⅱ)」『考古学雑誌』第65巻1号
浪岡町教育委員会 1981 『浪岡城跡発掘調査報告書』Ⅳ
成田滋彦 1981 「青森県の土器」『縄文文化の研究- 縄文土器Ⅱ』4　雄山閣出版
二本柳正一・角鹿尚三 佐藤達夫 1957 「青森県上北郡早稲田貝塚」『考古学雑誌』第43巻2号
〃 1959 「青森県上北郡唐貝地貝塚」『日本考古学年報』8
丹羽茂 1981 「大木式土器」『縄文文化の研究- 縄文土器Ⅱ』4　雄山閣出版

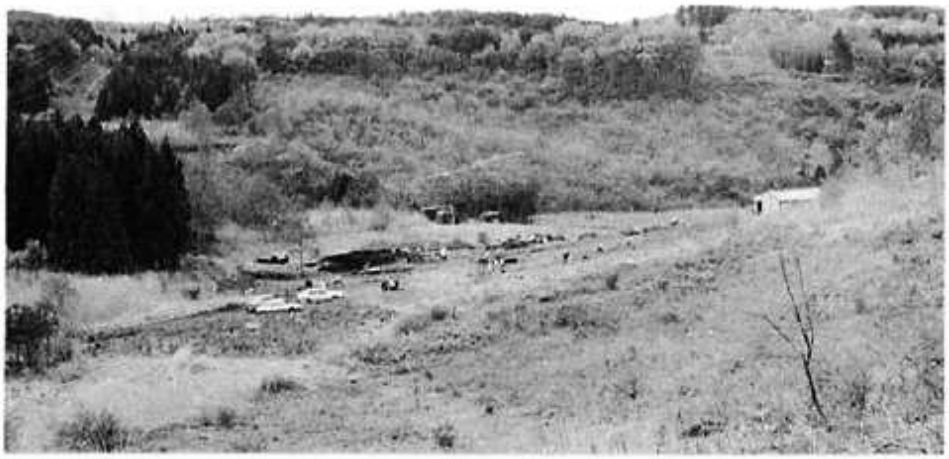
ハ.八戸市教育委員会 1975 『赤御堂遺跡発掘調査概要報告書』
〃 1982 『長七谷地遺跡発掘調査報告書』八戸市埋蔵文化財調査報告書第8集
林謙作 1965 「縄文文化の発展と地域性- 東北」『日本の考古学』Ⅱ
平賀町教育委員会 1976 『井沢遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第5集
深浦町教育委員会 1980 『深浦町一本松遺跡(第二次発掘調査報告書)』
〃 1981 『深浦町一本松遺跡(第三次発掘調査報告書)』
福田友之 1981 「溝状ピット研究に関する覚書」『弘前大学考古学研究』第1号

マ.増子陽子 1978 「どろめんこについての一考察」『日本考古学研究所集報』Ⅰ
三沢市教育委員会 1972 「天狗森遺跡発掘調査報告書」『考古風土記』第4号
宮坂光次 1930 「青森県是川村一王寺史前時代遺跡発掘調査報告」『史前学雑誌』第2巻6号　史前学会
宮沢寛・今井康博 1976 「縄文時代早期後半における土壙をめぐる諸問題」『調査研究集録』第1冊　港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
宮宏明 1981 「ノダップⅡ式土器の検討」『考古学研究』第28巻3号
三宅徹也 1977 「円筒土器の再検討」『調査研究年報』第3号　青森県立郷土館
村越潔 1965 「東北北部の縄文式に後続する土器」『弘前大学教育学部紀要』第14号

村　越　　潔　1974　「円筒土器文化」『考古学選集』10　雄山閣出版
村　田　文　夫　1982　「おとし穴」『季刊考古学』創刊号
百石町教育委員会　1973　『日ケ久保貝塚発掘調査報告書』百石町文化財調査報告書第１集

ヤ．八　木　光　則　1977　「いわゆる「特殊磨石」について」『信濃』第28巻４集
柳　沢　清　一　1980　「大木10式土器論」『古代探叢』早稲田大学出版部
山　内　清　男　1929　「関東北に於ける繊維土器」『史前学雑誌』第１巻２号　史前学会
〃　1979　『日本先史土器の縄文』
八　幡　一　郎　1959　「新石器文化とその先駆」『世界考古学大系』１

写真図版



第1図版　遺跡遠景

第2図版　遺跡近景

第3図版　遺跡基本層序

（第１～３号焼石遺構）

（第１号焼石遺構）

（第１号焼石遺構）

第４図版　第１～３号焼石遺構

（第２号焼石遺構）

（第３号焼石遺構）

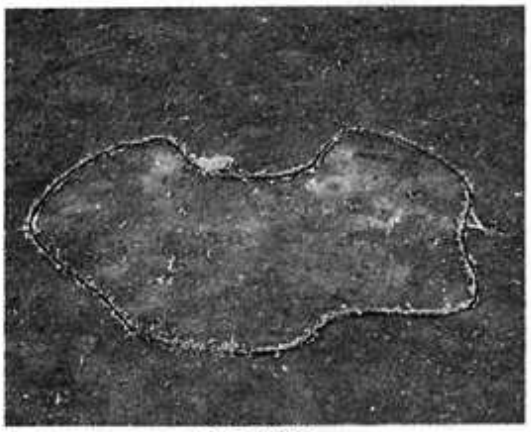
第５図版　第２・３号焼石遺構

第6図版　第4号焼石遺構

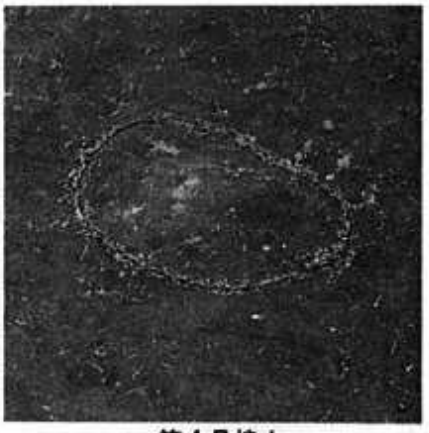
第7図版　第5号焼石遺構

第1号焼土

第2号焼土



第3号焼土



第4号焼土

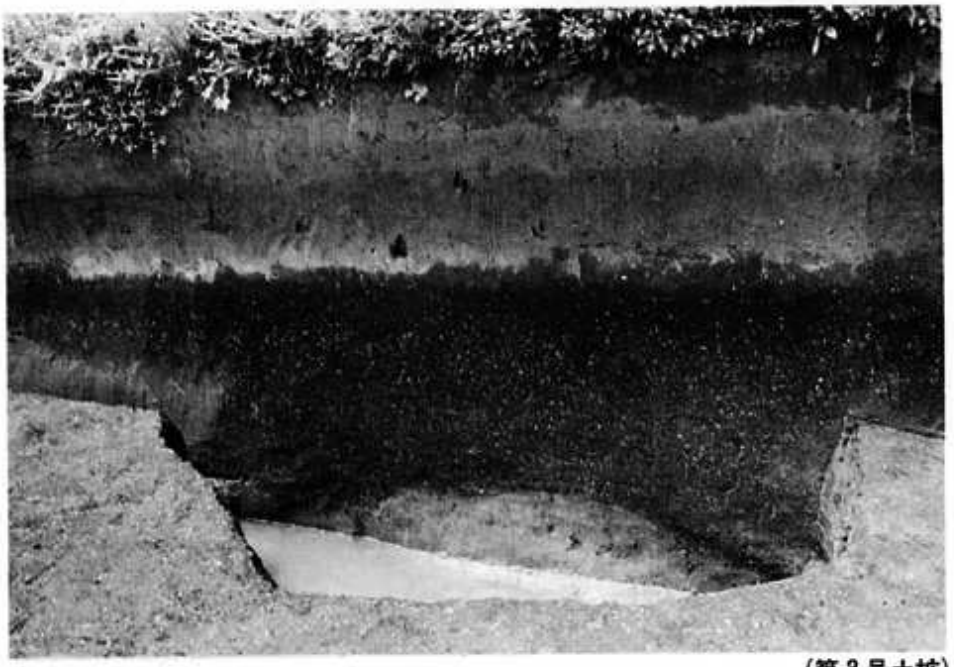
第5号焼土

第6号焼土

第8図版　第1～6号焼土確認

第9図版　配石遺構

(第1号土坑)



(第3号土坑)

(第4号土坑)

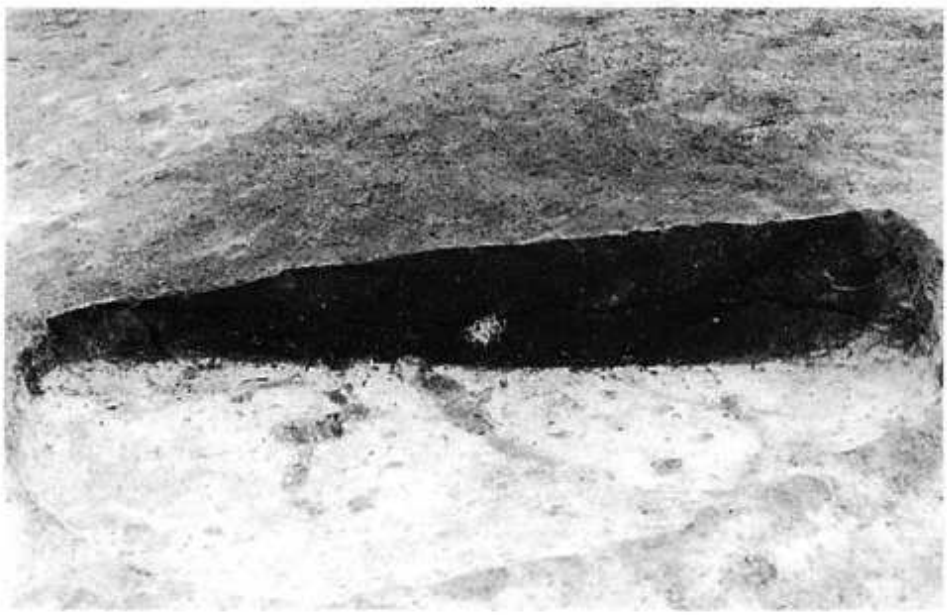
第10図版　第1・3・4号土坑

第11図版　第２号土坑

(第５号土坑)

(第６号土坑)

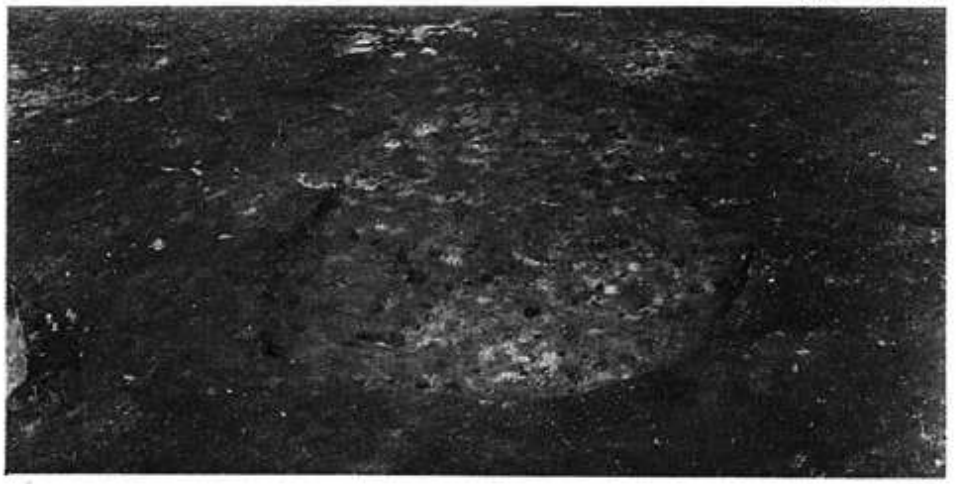
第12図版　第５・６号土坑



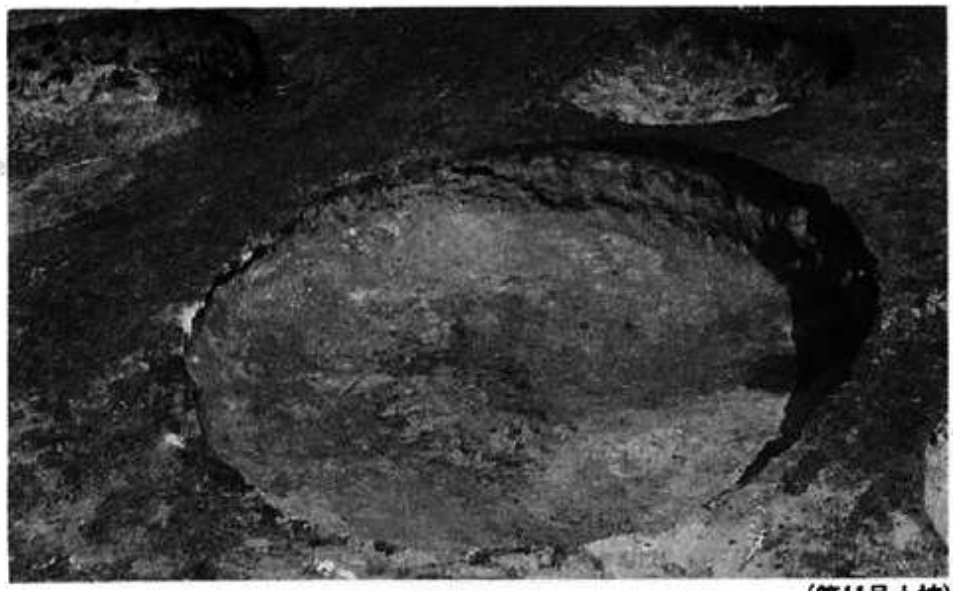
第13図版　第８号土坑

(第９号土坑)

(第９号土坑)



第14図版　第９・10号土坑　　(第10号土坑)



(第11号土坑)

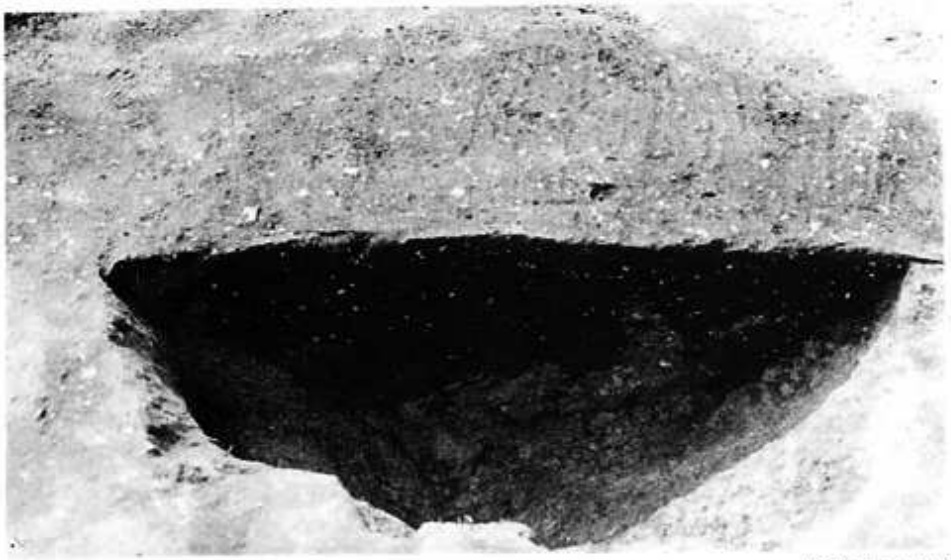
(第12号土坑)

(第12号土坑)

第15図版　第11・12号土坑

(第13号土坑)

(第13号土坑)

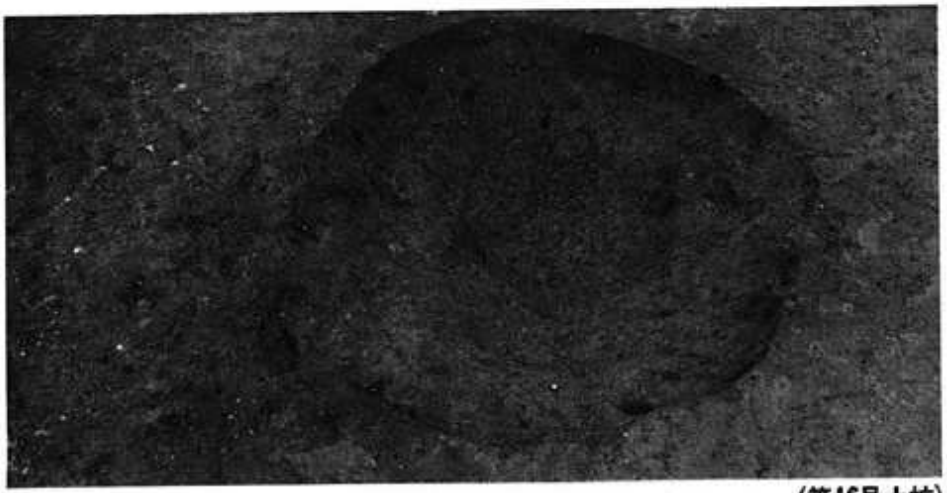


(第14号土坑)

第16図版　第13・14号土坑

(第15号土坑)

(第15号土坑)

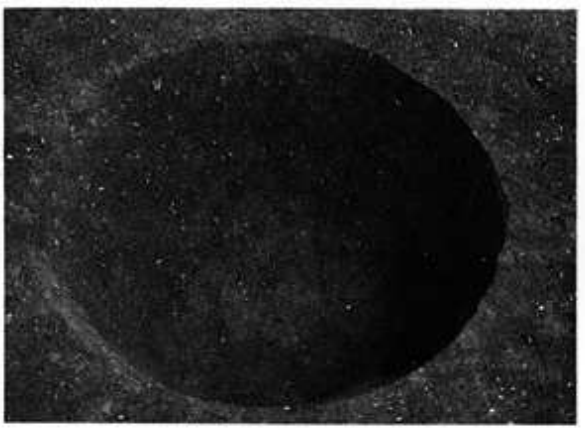


(第16号土坑)

第17図版　第15・16号土坑

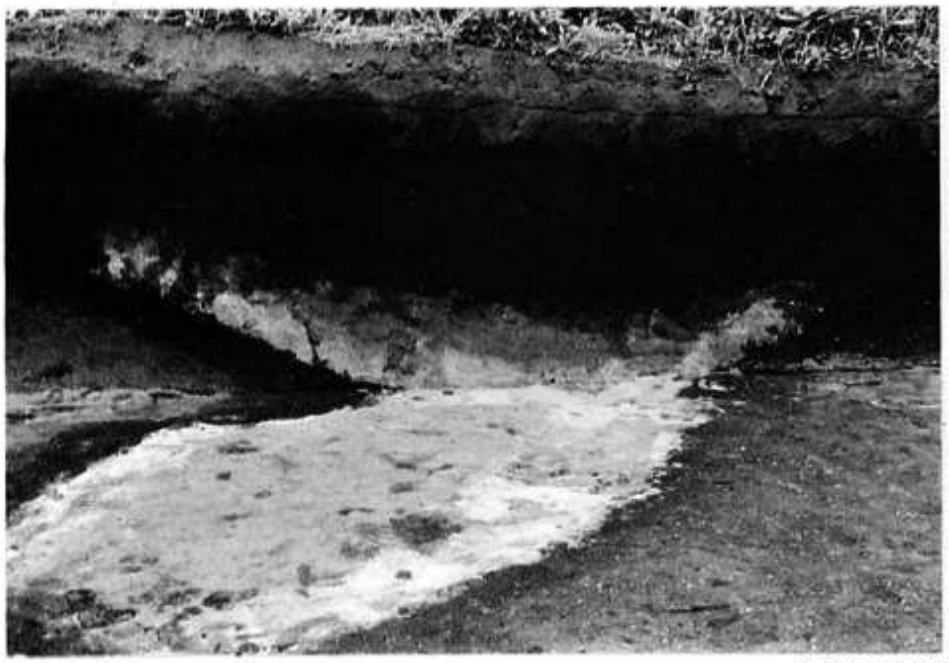
(第17号土坑)

(第18号土坑)



(第19号土坑)

第18図版　第17・18・19号土坑



（第20号土壙）

（第20・22号土壙）

第19図版　第20・22号土壙

第20図版　第23号土坑

（第２・５号溝状ピット）

（第５号溝状ピット）

（第２号溝状ピット）

（第５号溝状ピット）

第21図版　第２・５号溝状ピット

（第３号溝状ピット）

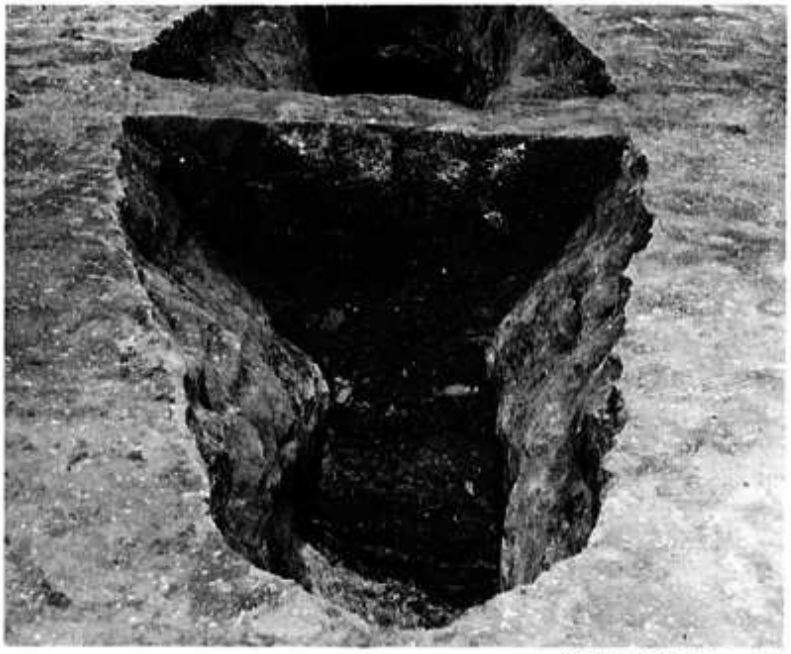
（第４号溝状ピット）

（第４号溝状ピット）

第22図版　第３・４号溝状ピット

（第６号溝状ピット）

（第７号溝状ピット）



（第７号溝状ピット）

第23図版　第６・７号溝状ピット

第24図版　第１号風倒木

（第４号風倒木）

（第４号風倒木）

（第５号風倒木）

（第５号風倒木）

第25図版　第４・５号風倒木

(第７号風倒木)

(第８号風倒木)

第26図版　第７・８号風倒木　(第８号風倒木)

(第9号風倒木)

(第9号風倒木)

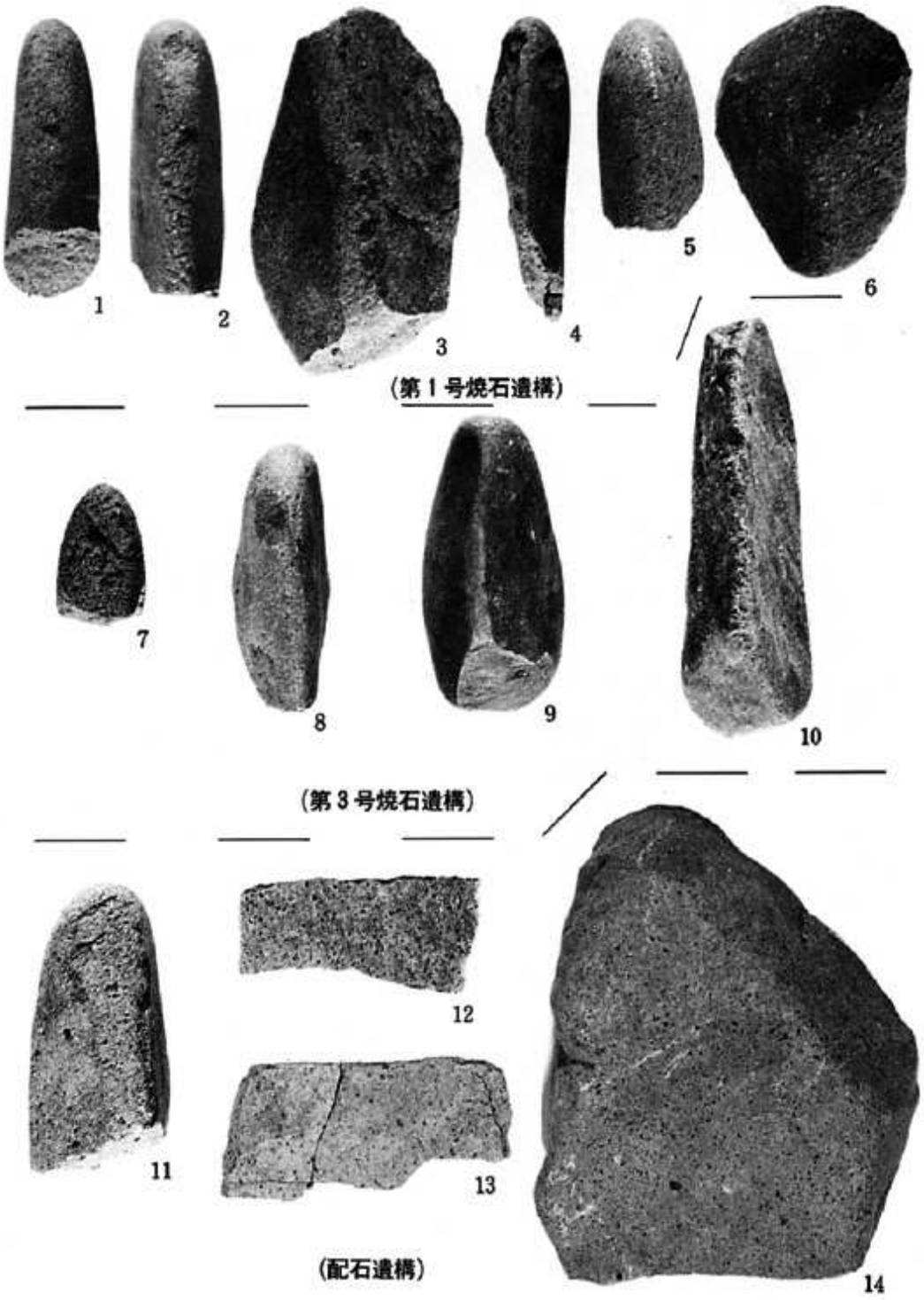
(第10号風倒木)

(第10号風倒木)

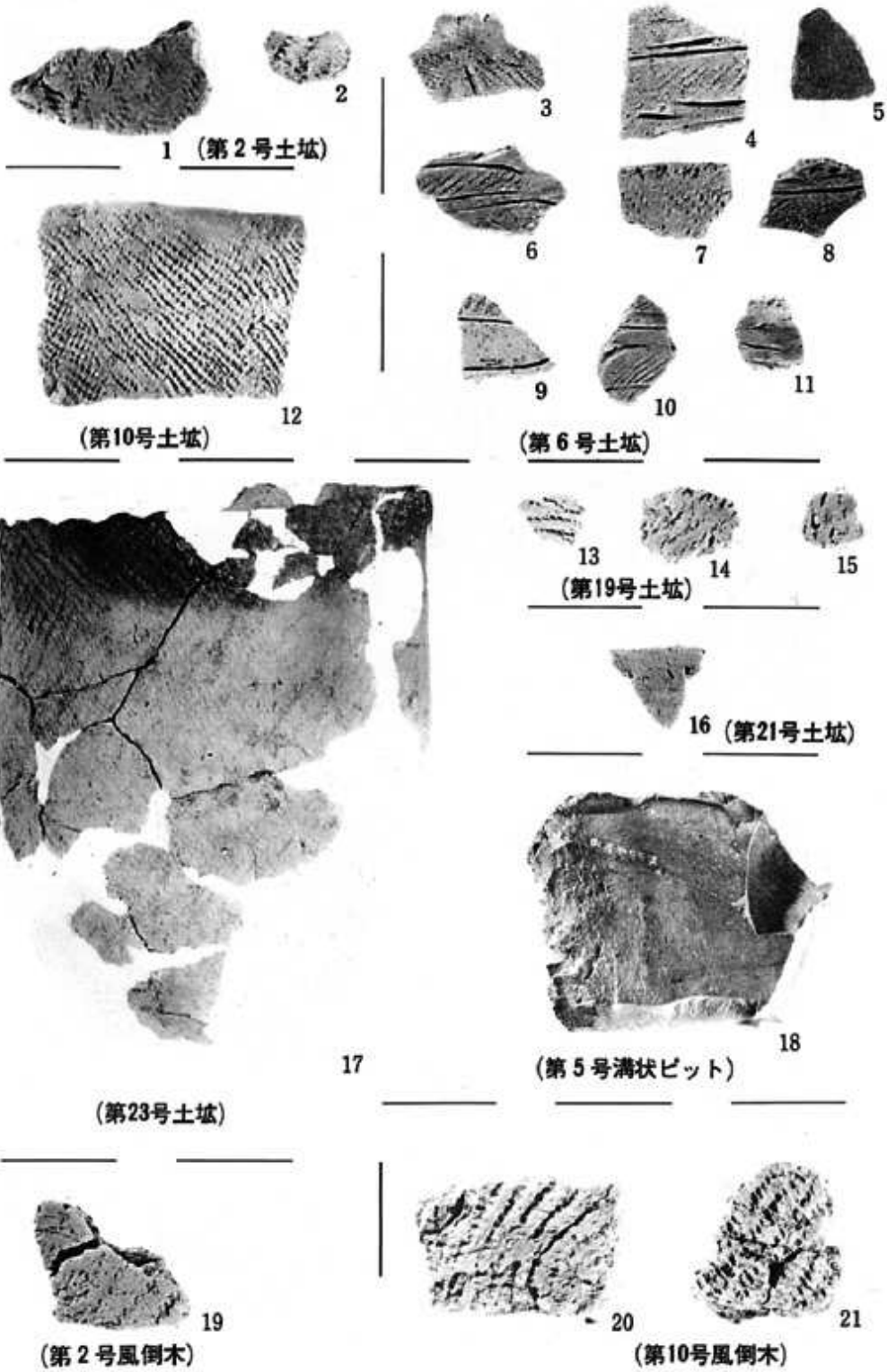
第27図版　第9・10号風倒木

第28図版　遺物出土状態(1)

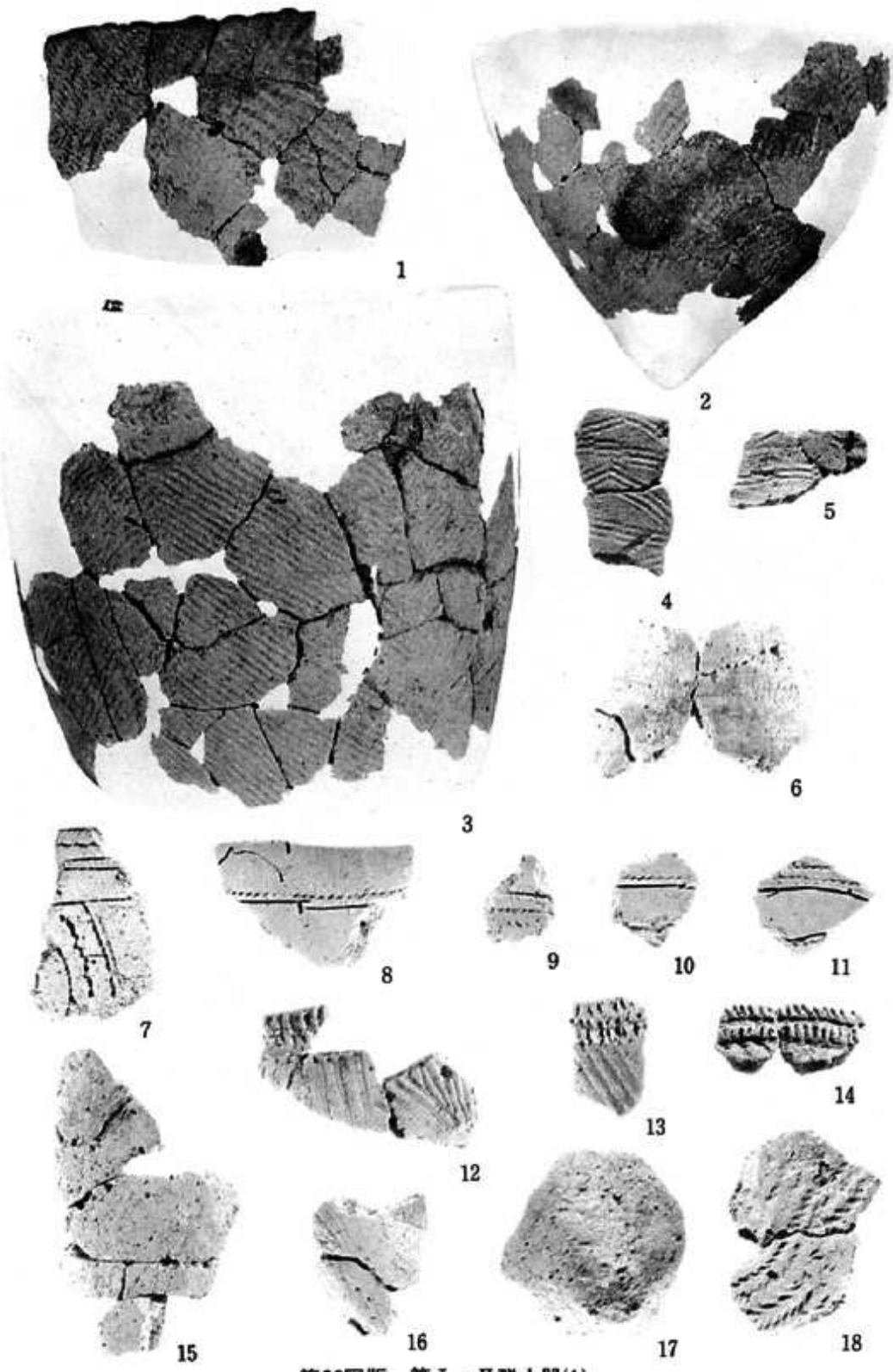
第29図版　遺物出土状態(2)



第30図版　第1・3号焼石遺構、配石遺構出土遺物

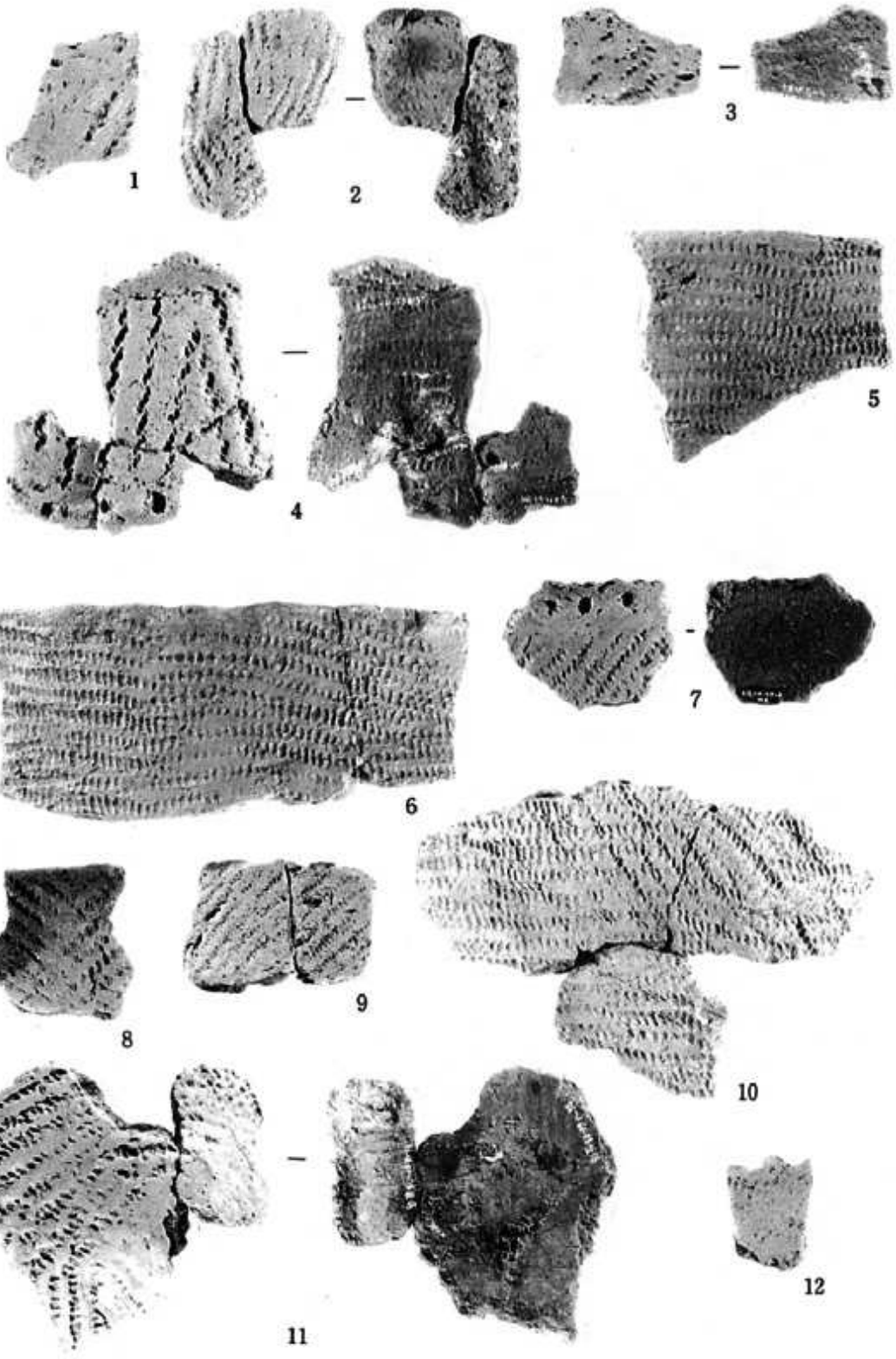


第31図版　遺構内出土遺物

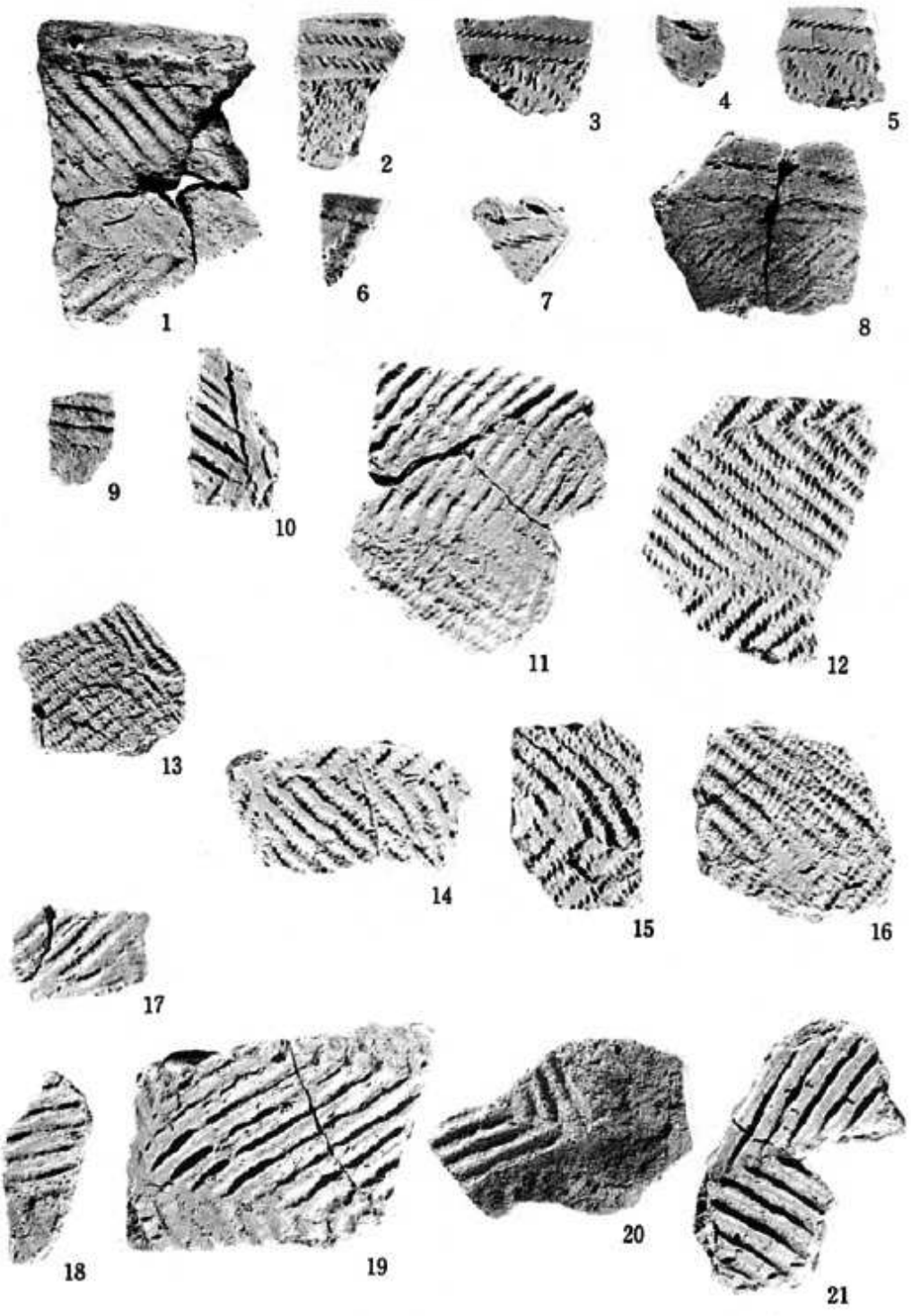


第32図版　第Ⅰ・Ⅱ群土器(1)

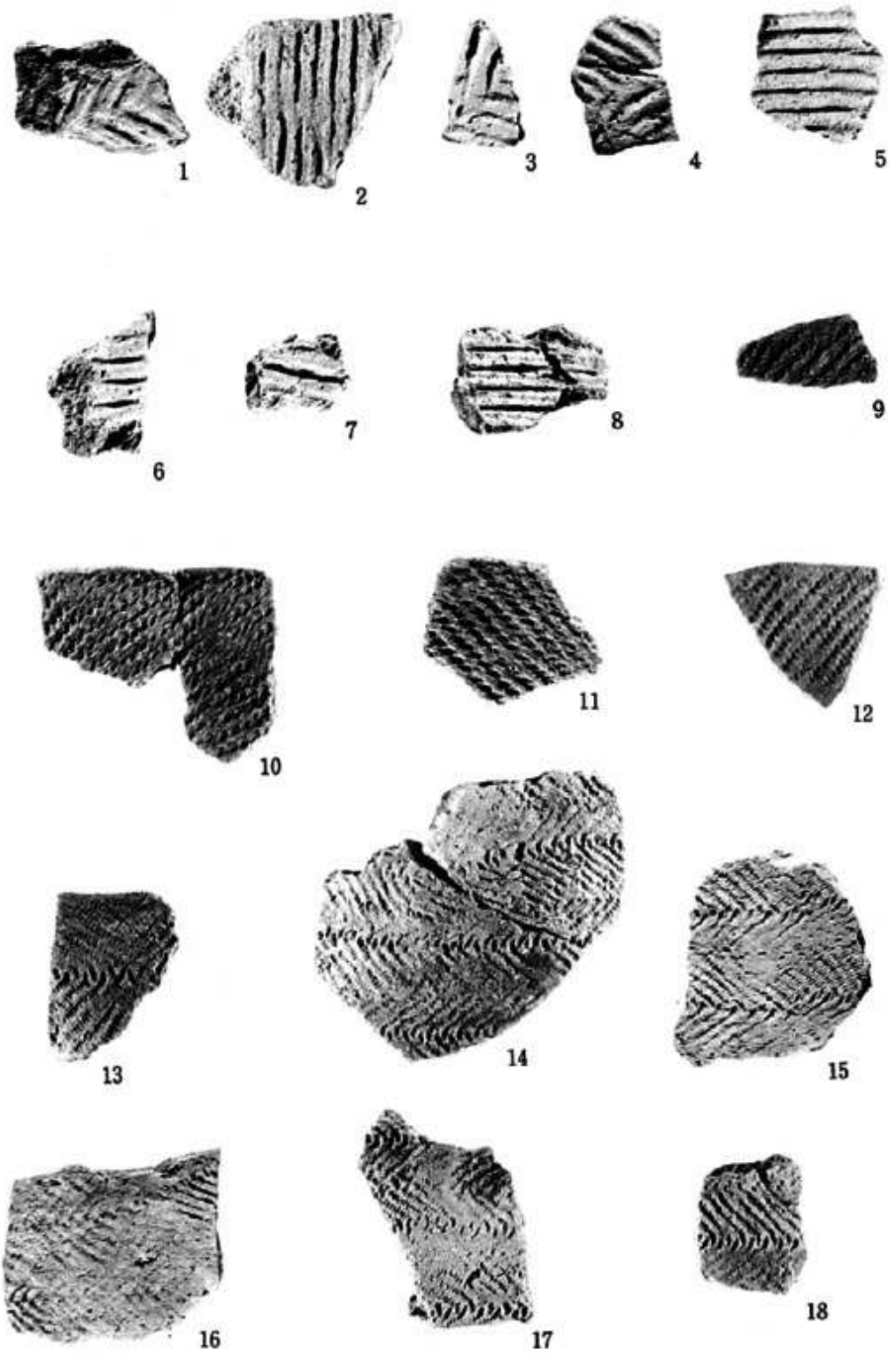
第33図版　第Ⅰ・Ⅱ群土器(2)



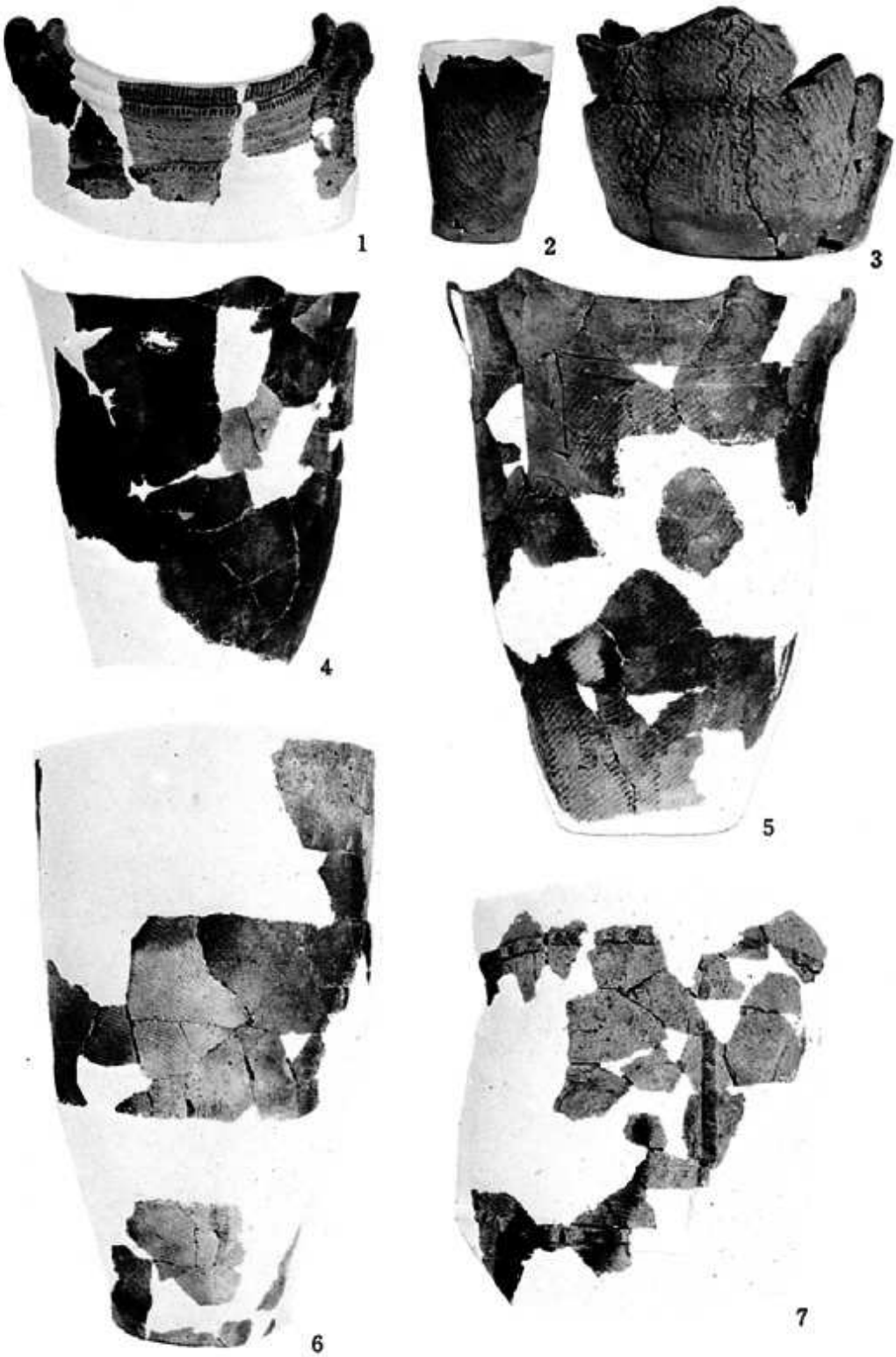
第34図版　第Ⅱ群土器(1)



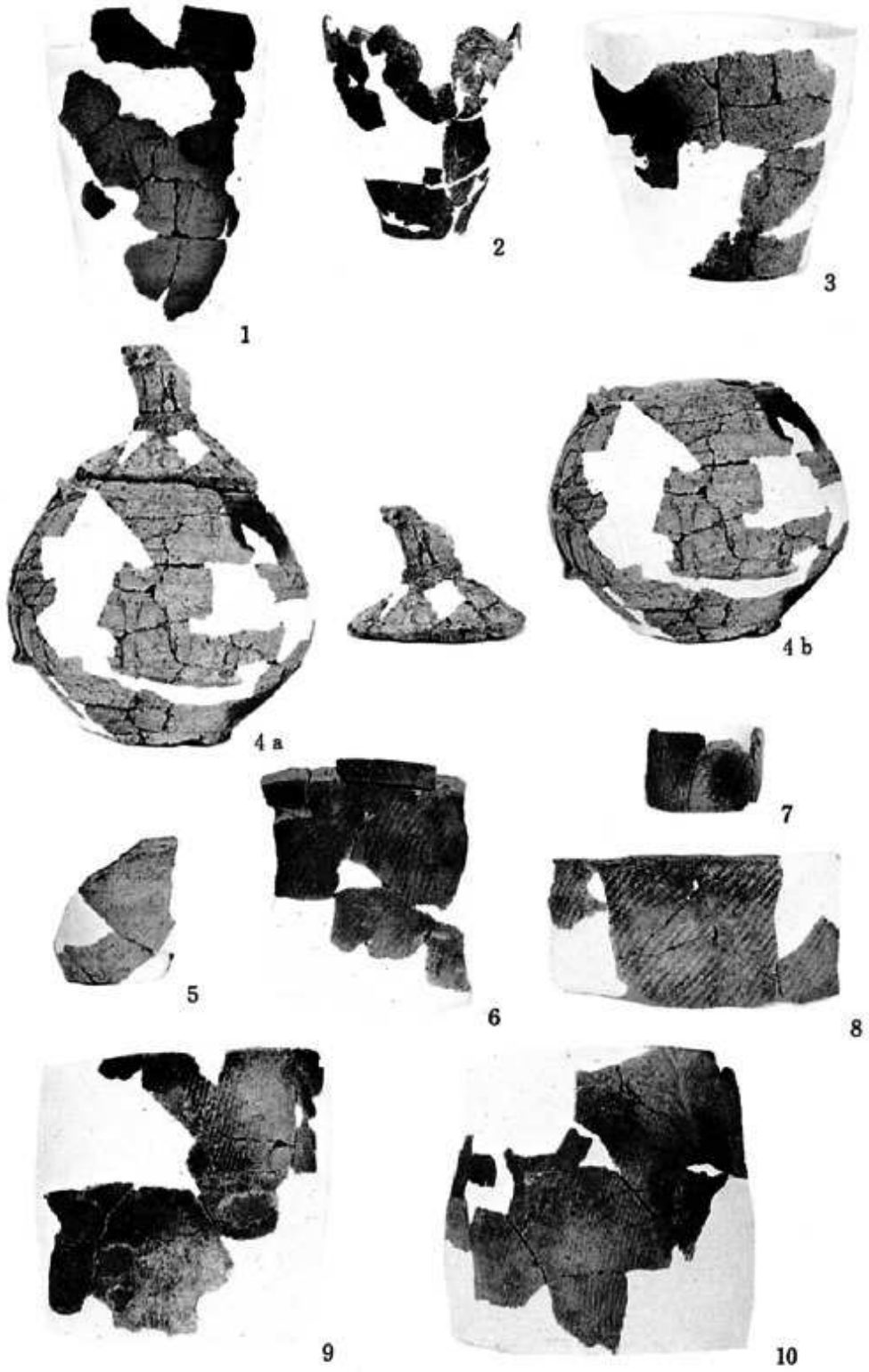
第35図版　第Ⅱ群土器(2)



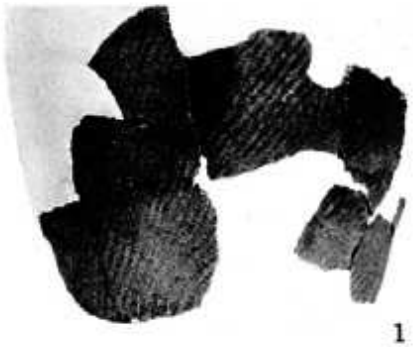
第36図版　第Ⅱ群土器(3)



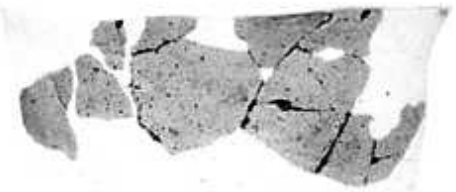
第37図版　第Ⅲ・Ⅳ群土器



第38図版　第Ⅳ群土器



1



2

3

4

5

6

7

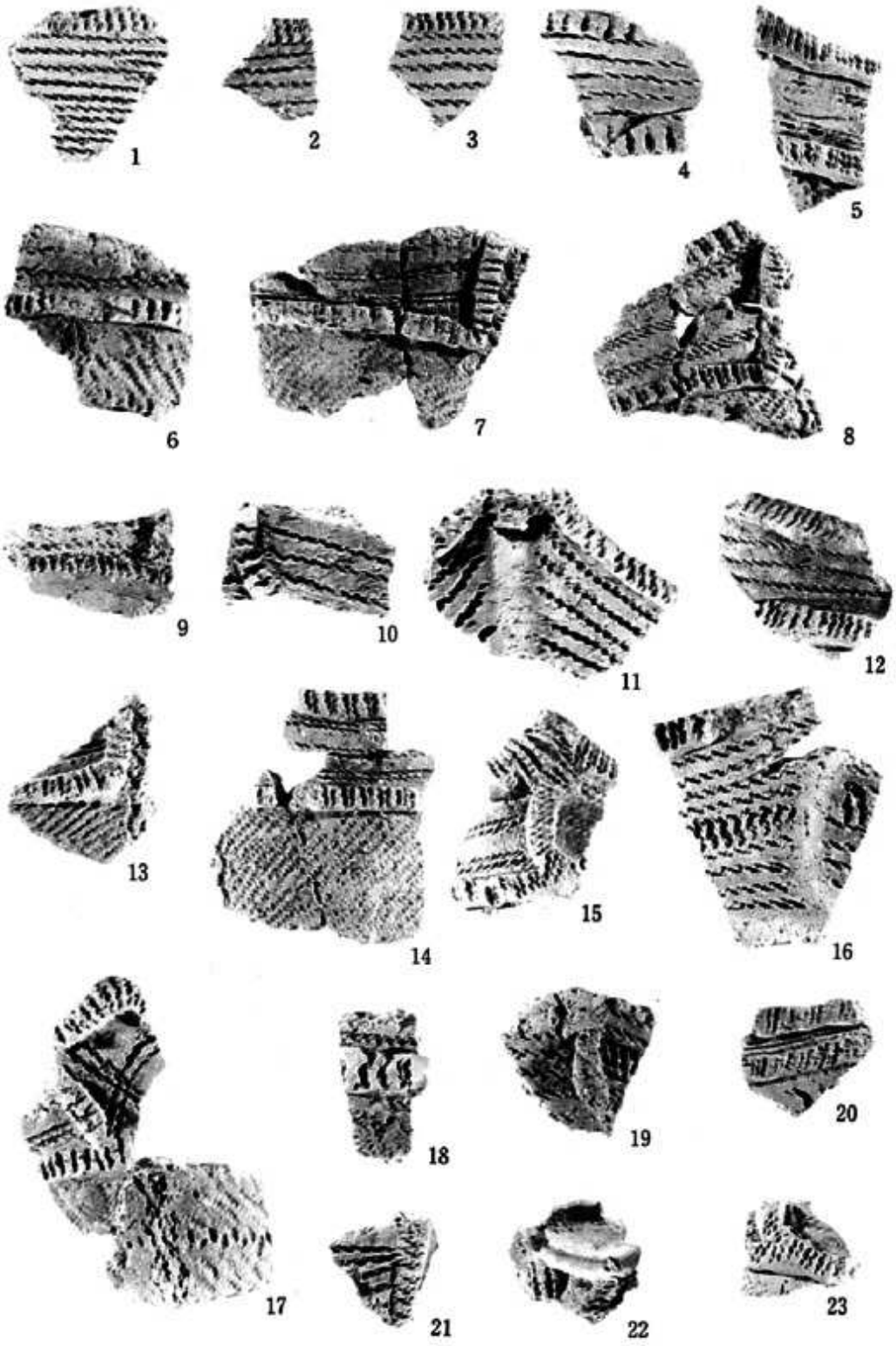
8

9

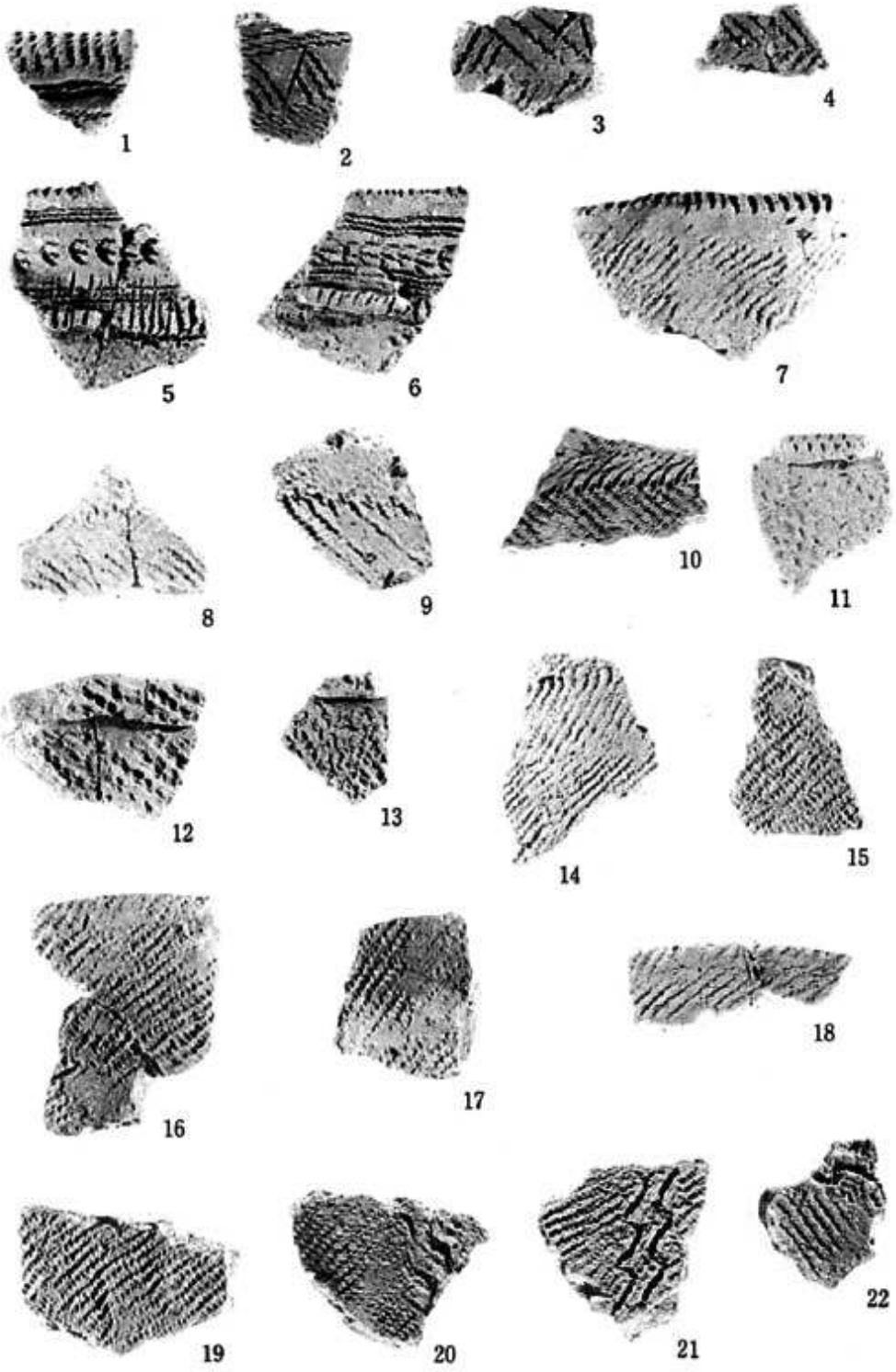
10

11

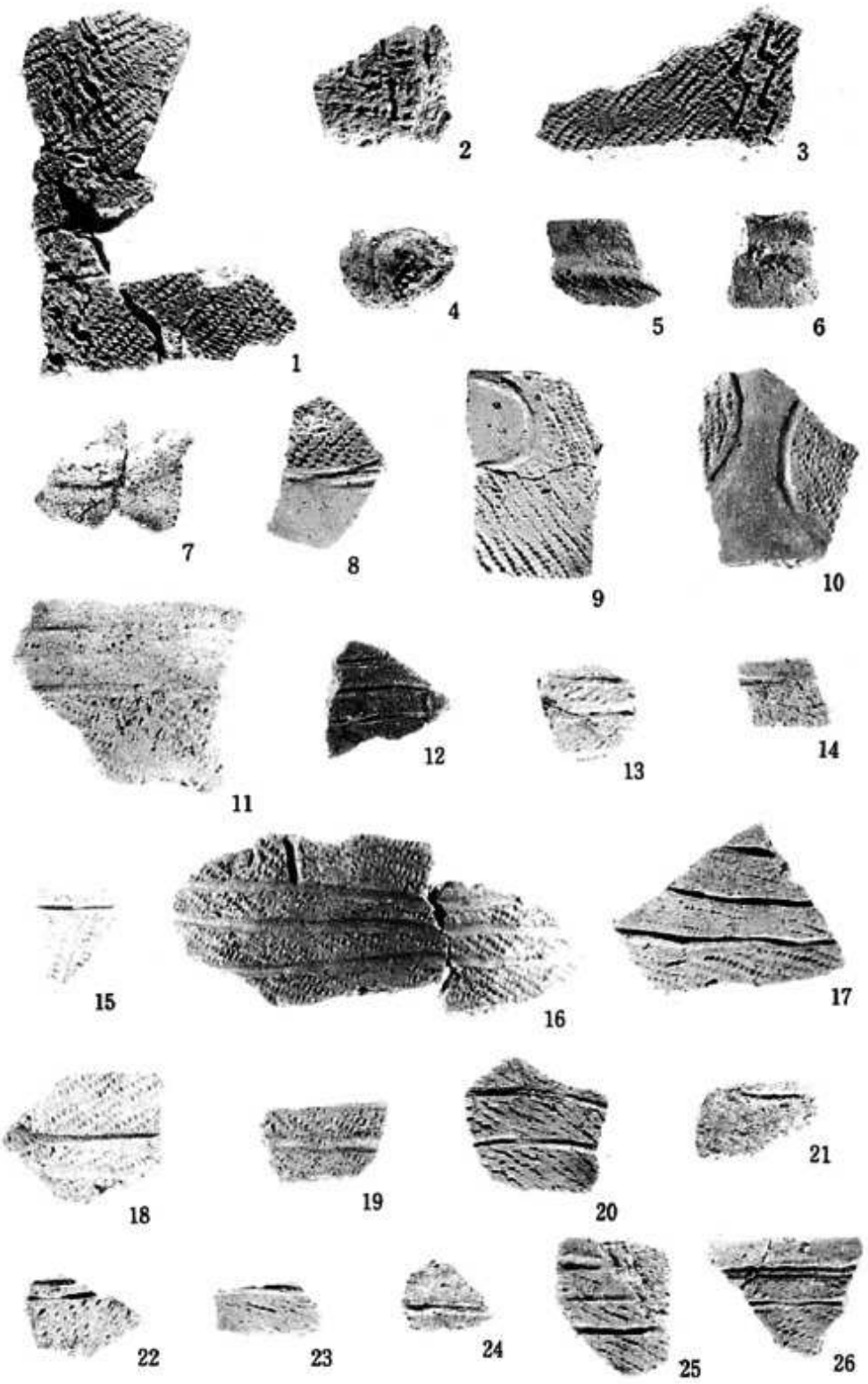
第39図版　第Ⅳ・Ⅴ群土器



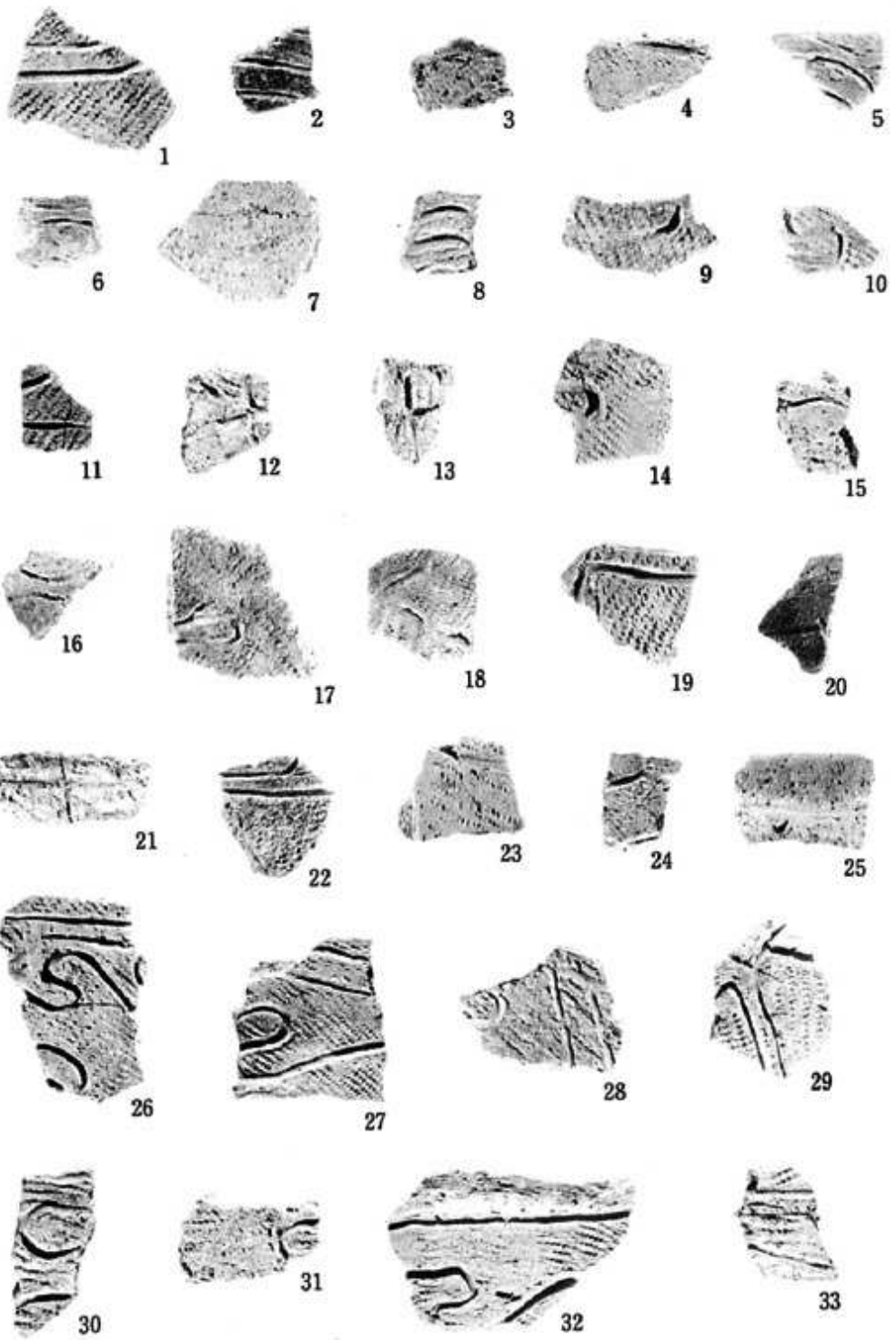
第40図版　第Ⅲ群土器(1)



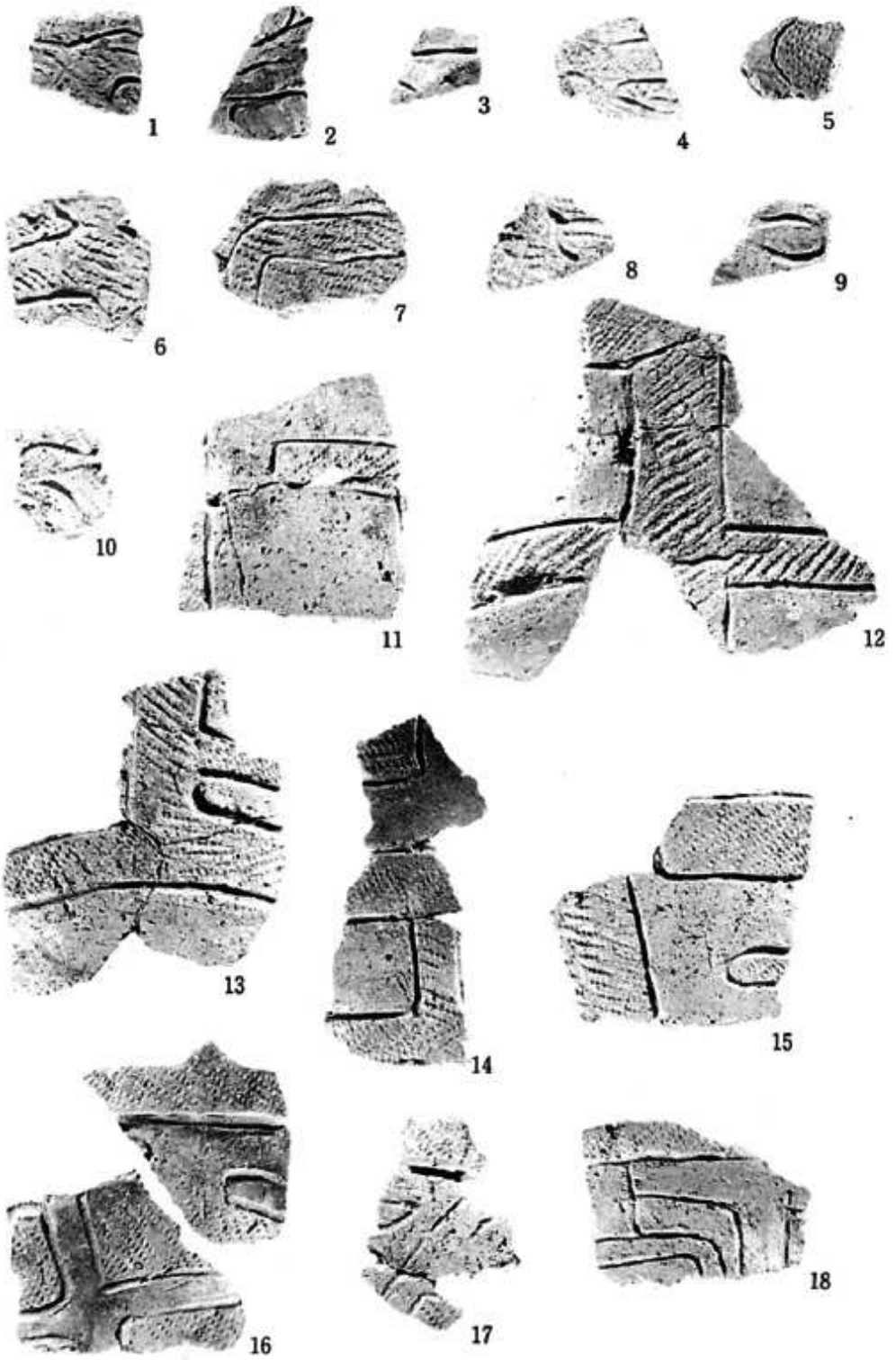
第41図版　第Ⅲ群土器(2)



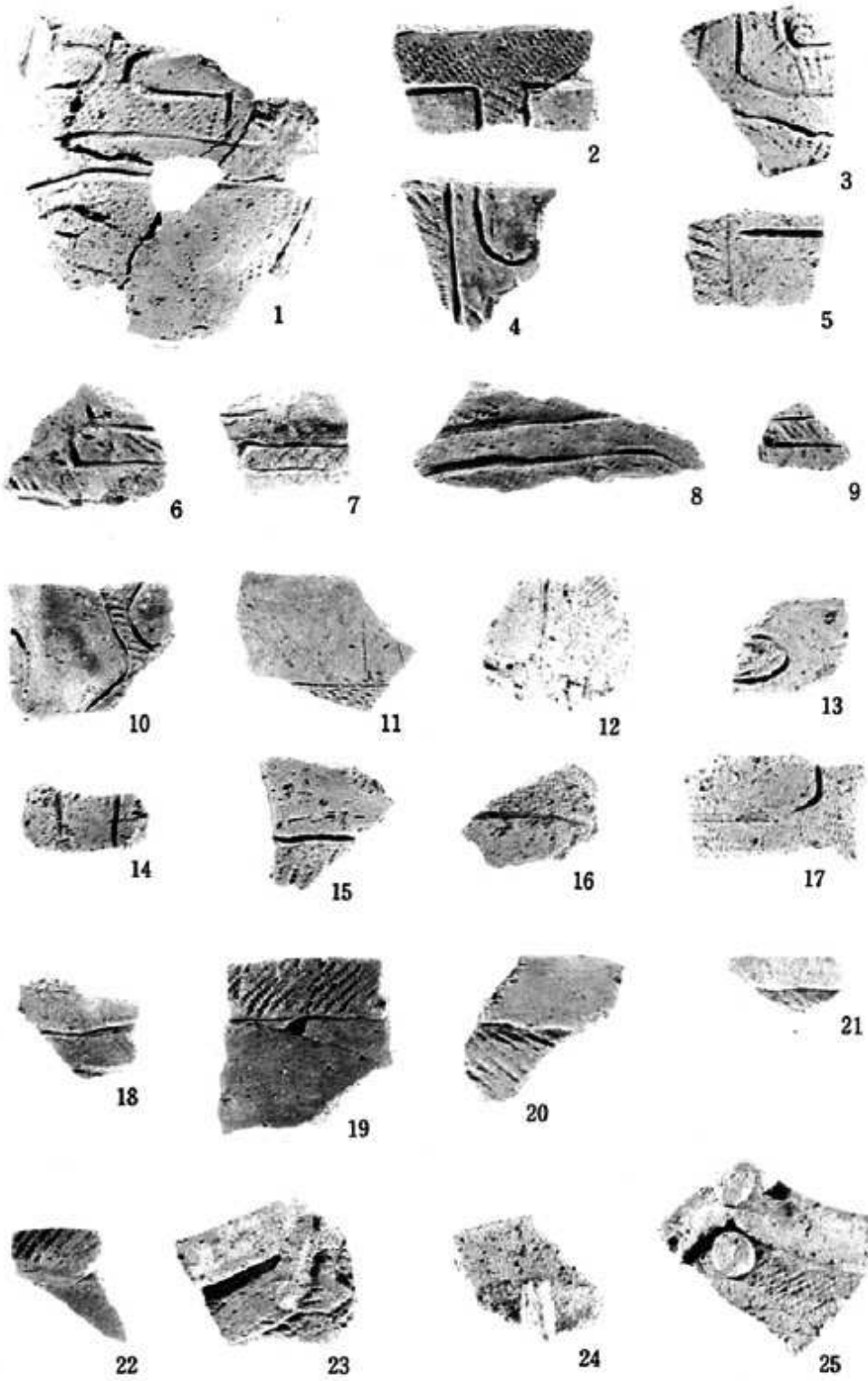
第42図版　第Ⅲ・Ⅳ群土器



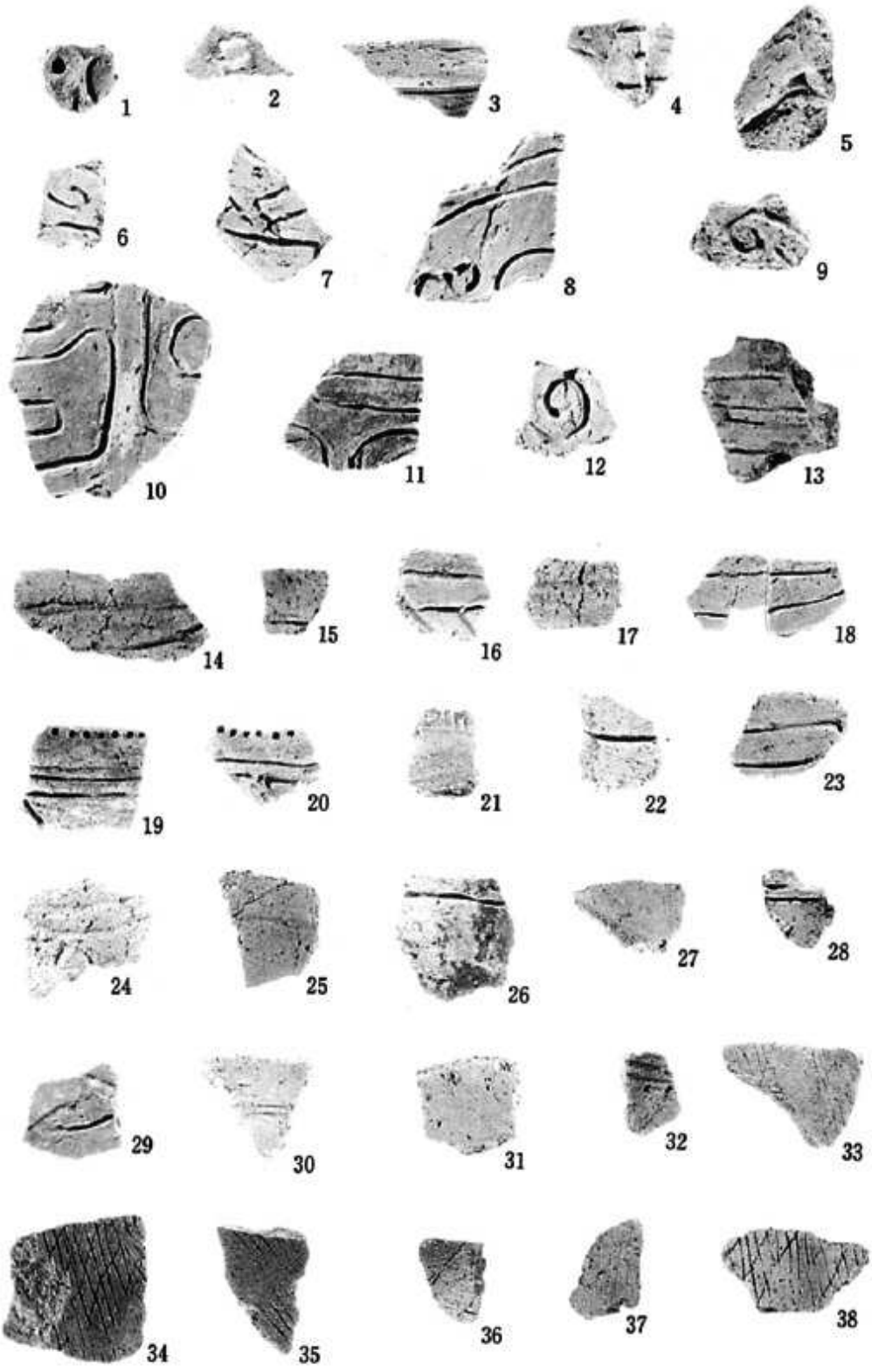
第43図版　第Ⅳ群土器(1)



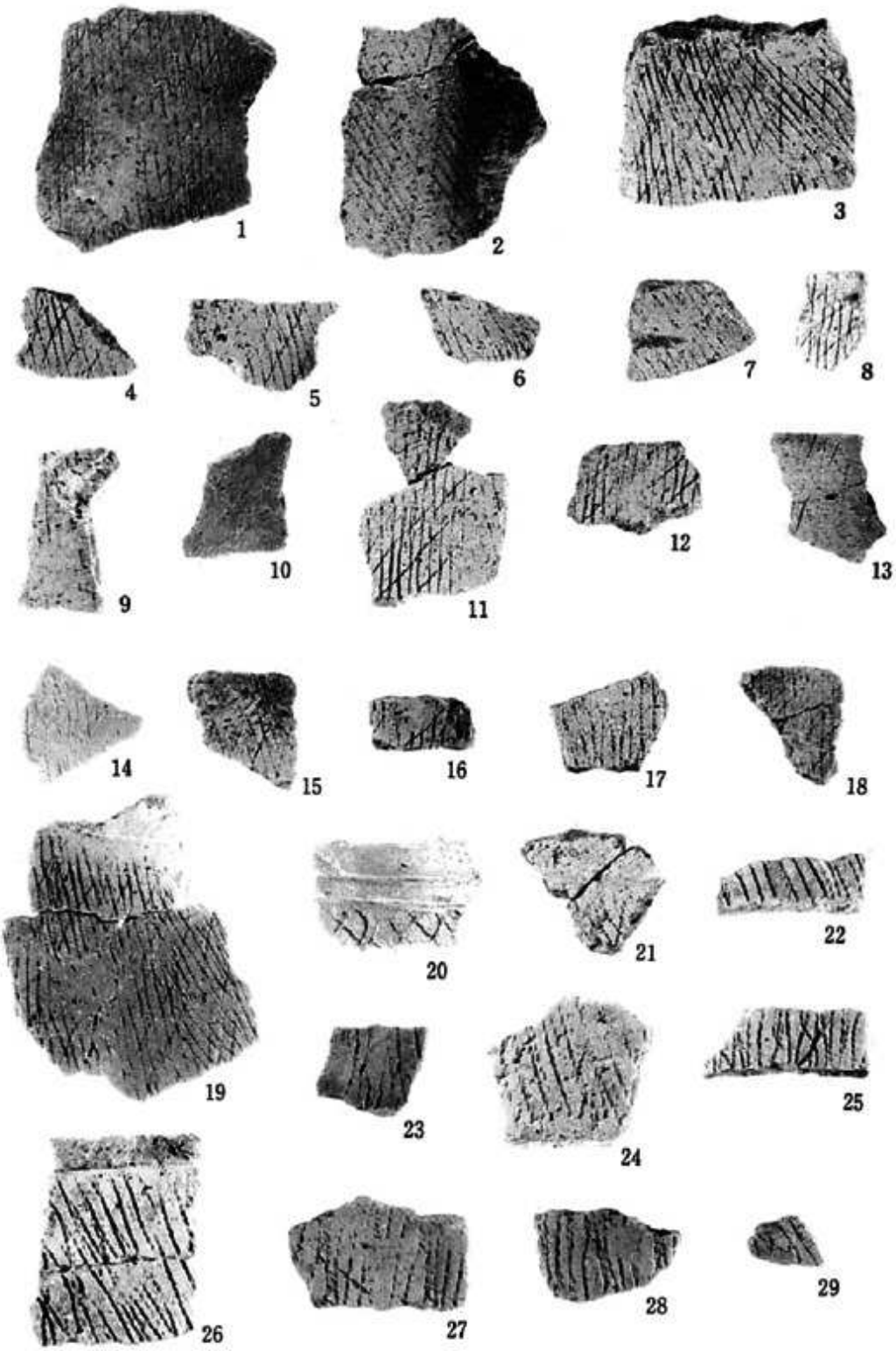
第44図版　第Ⅳ群土器(2)



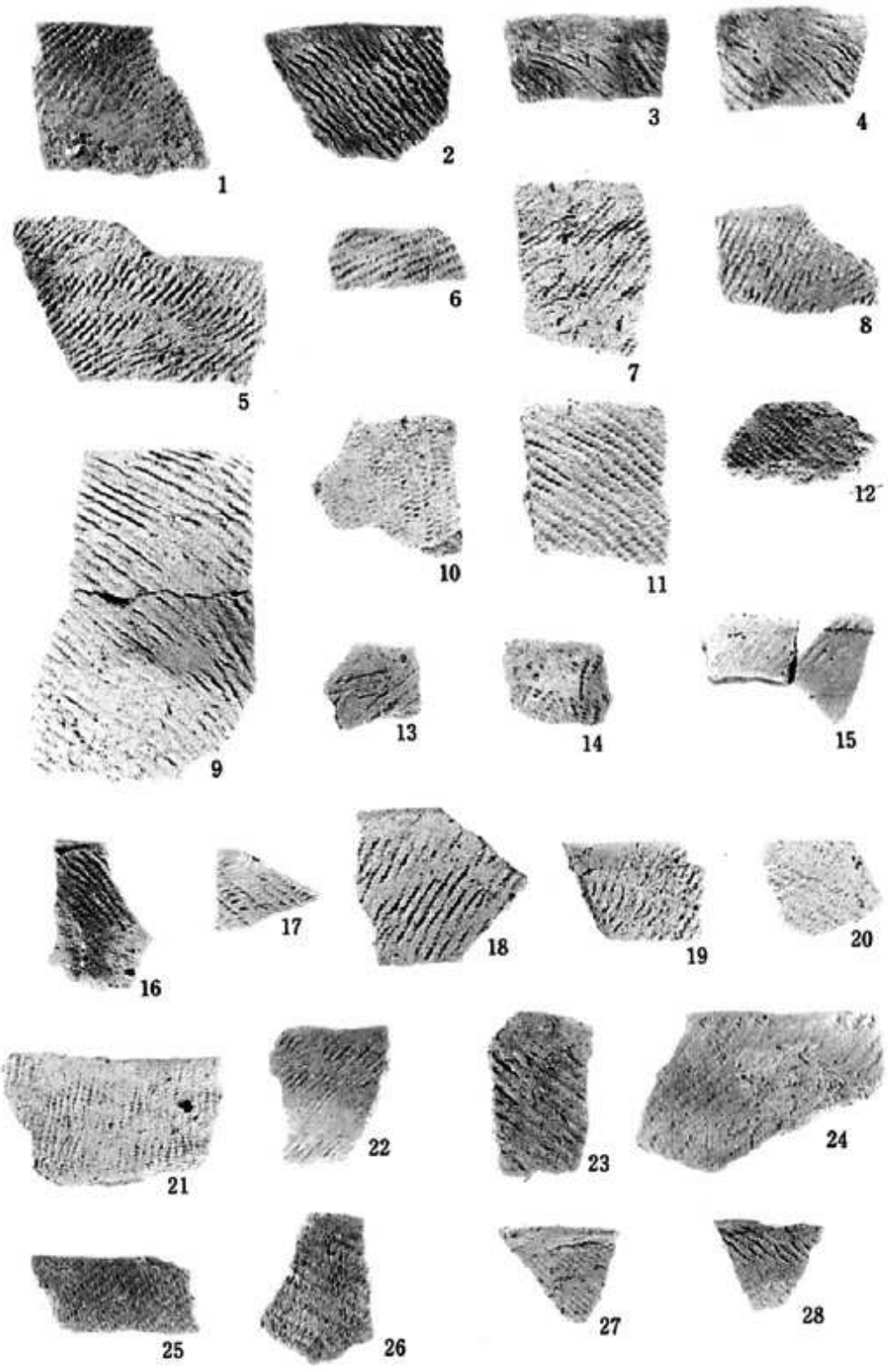
第45図版　第Ⅳ群土器(3)



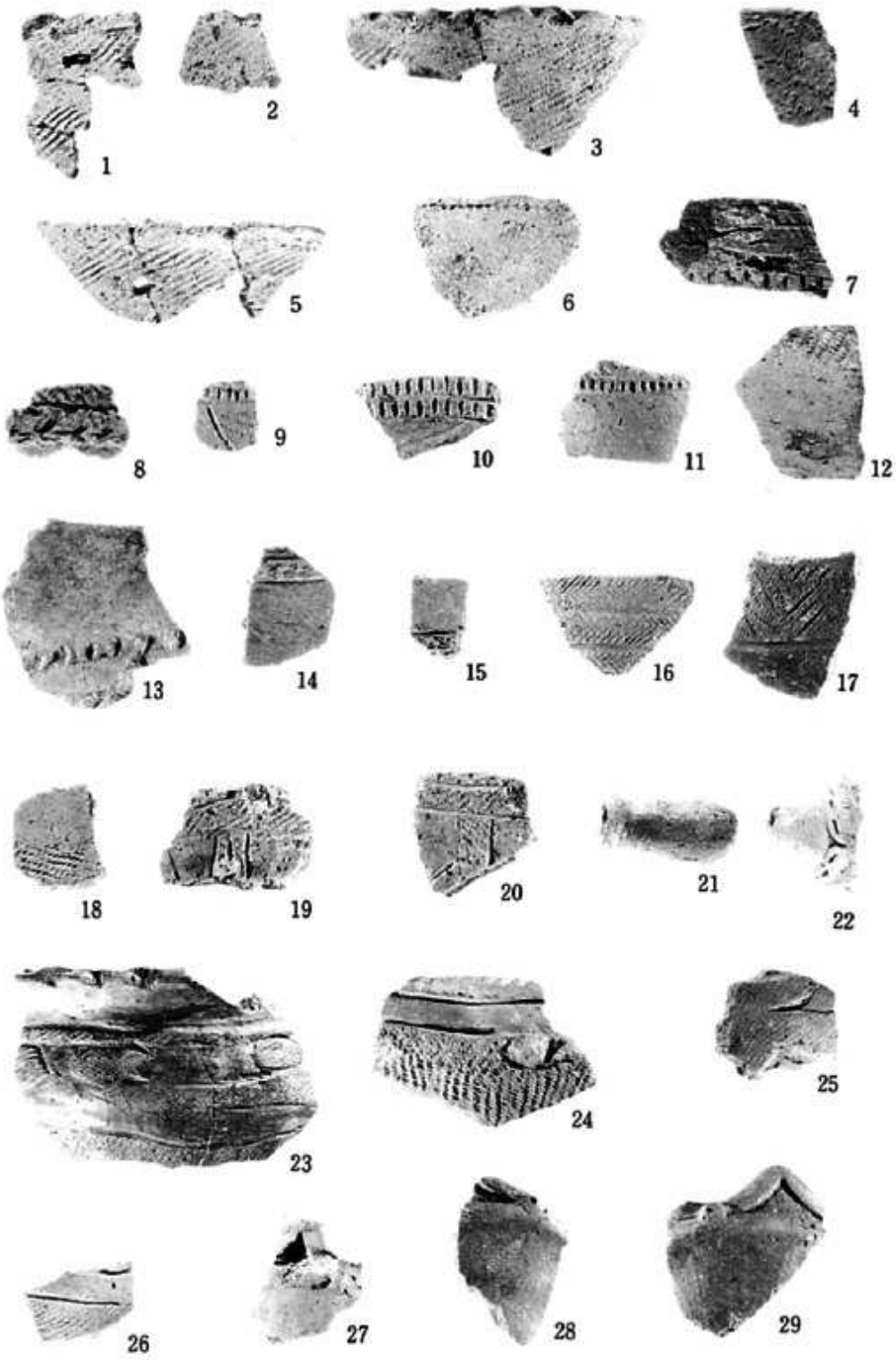
第46図版　第Ⅳ群土器(4)



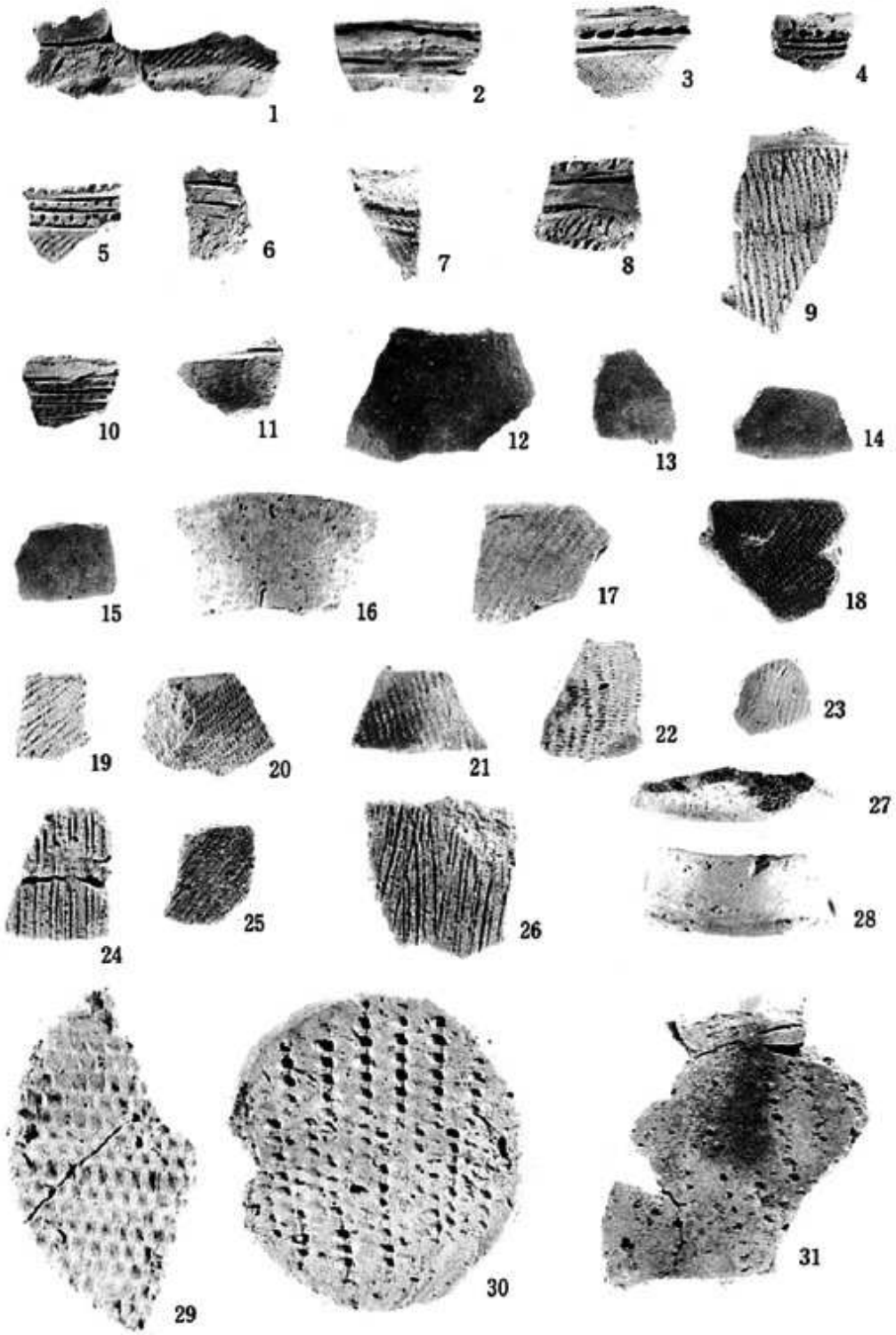
第47図版　第Ⅳ群土器(5)



第48図版　第Ⅳ群土器(6)

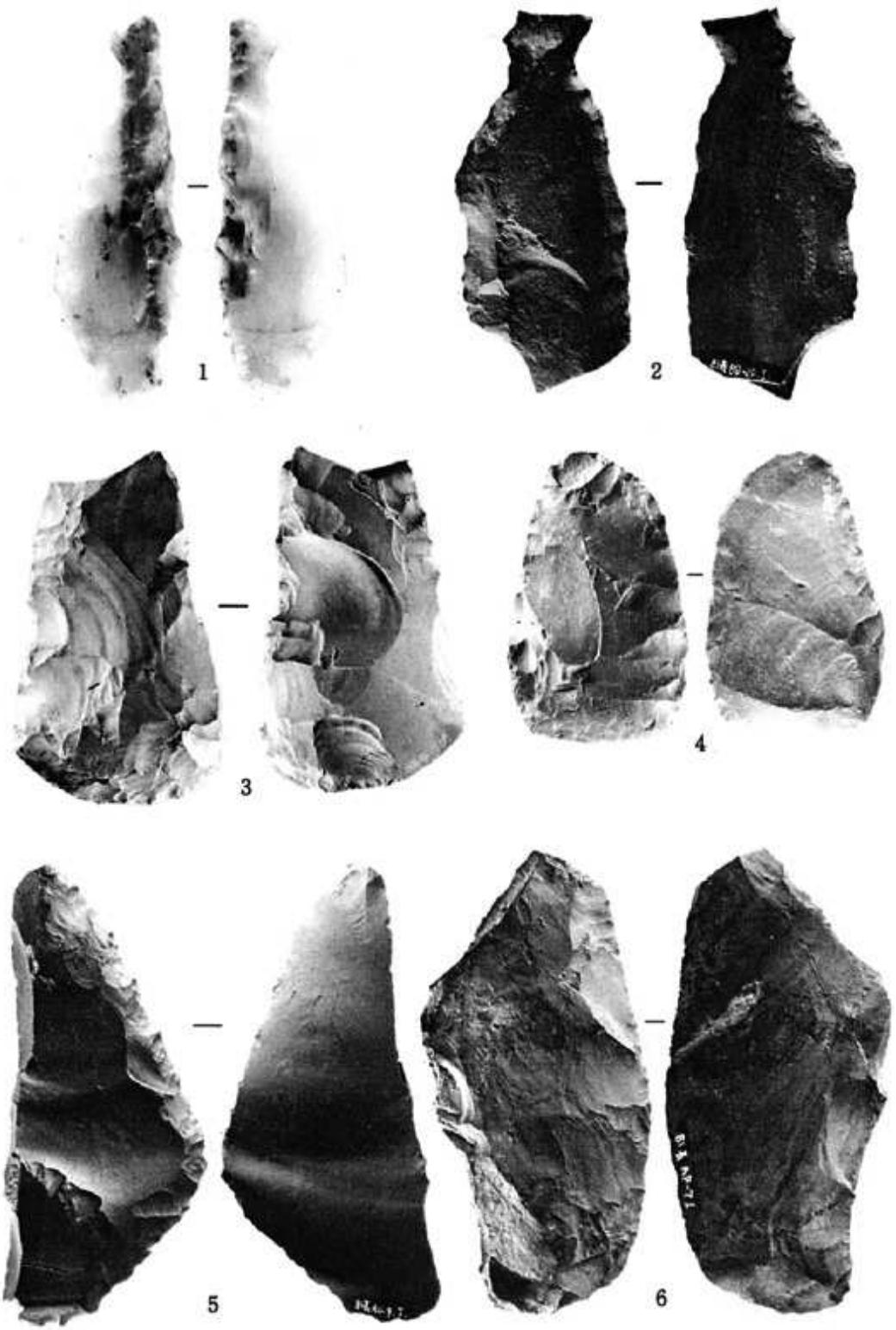


第49図版　第Ⅳ・Ⅴ群土器

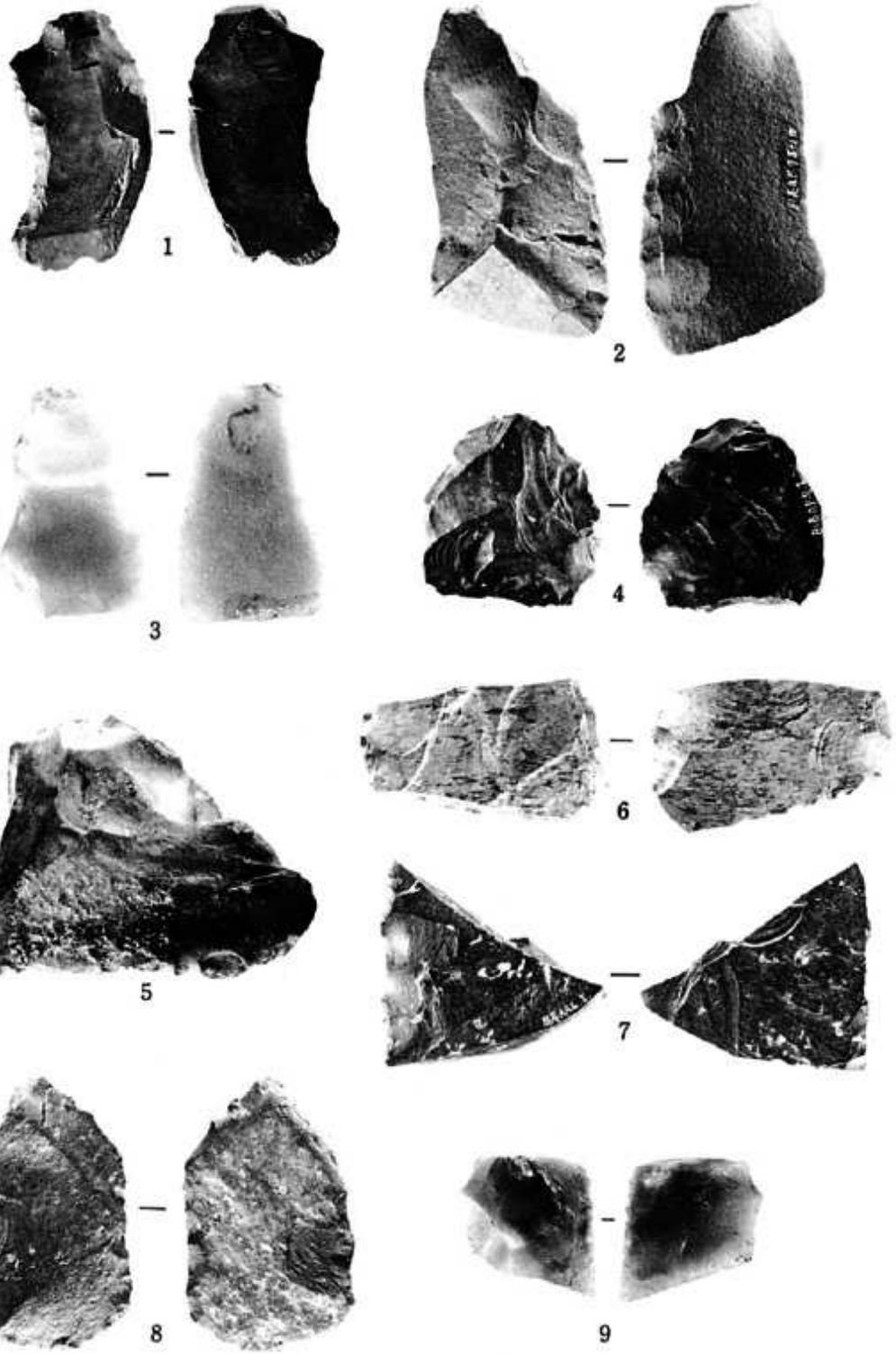


第50図版　第Ⅴ群土器・底部

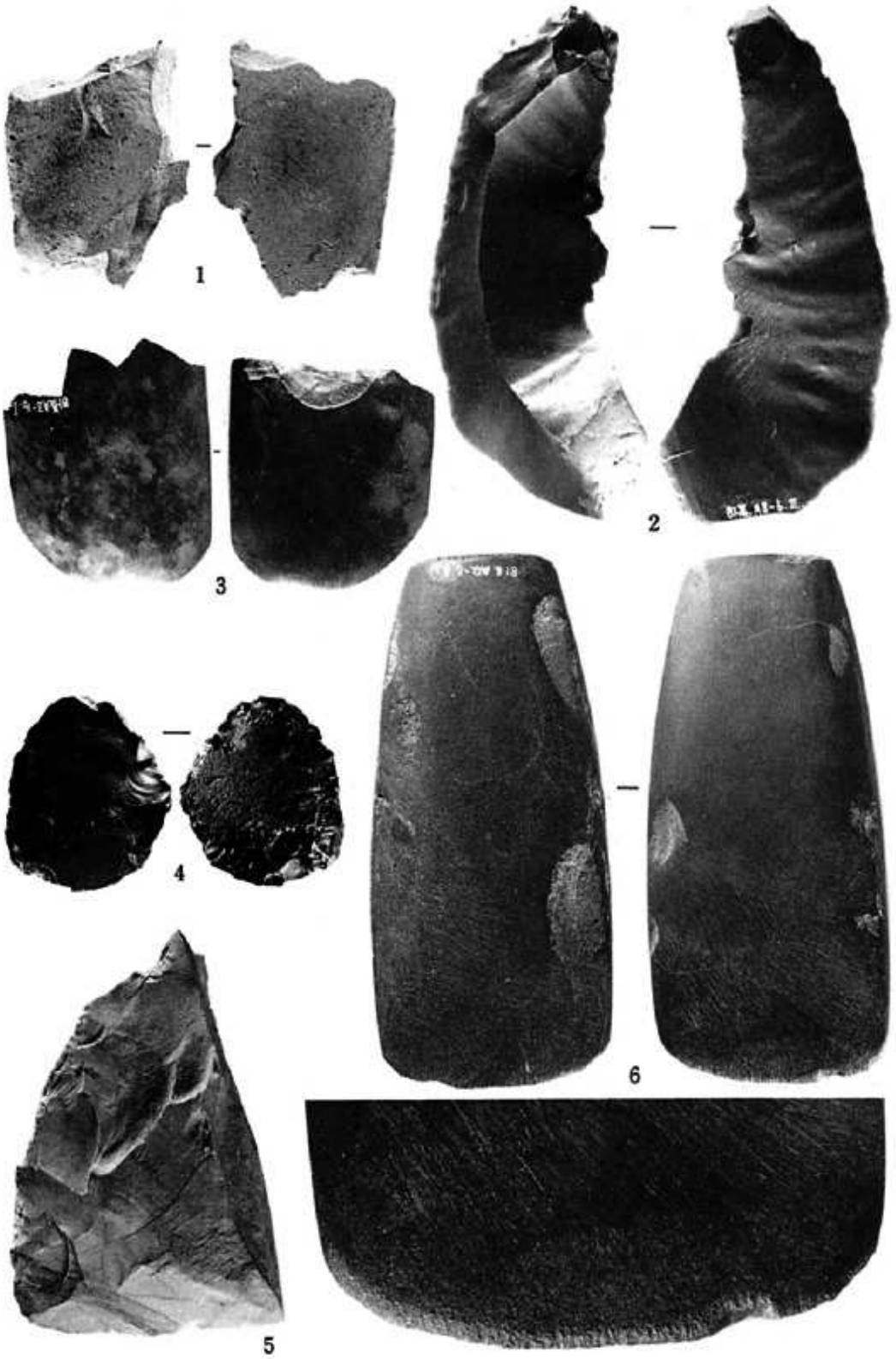
第51図版　石鏃・石匙



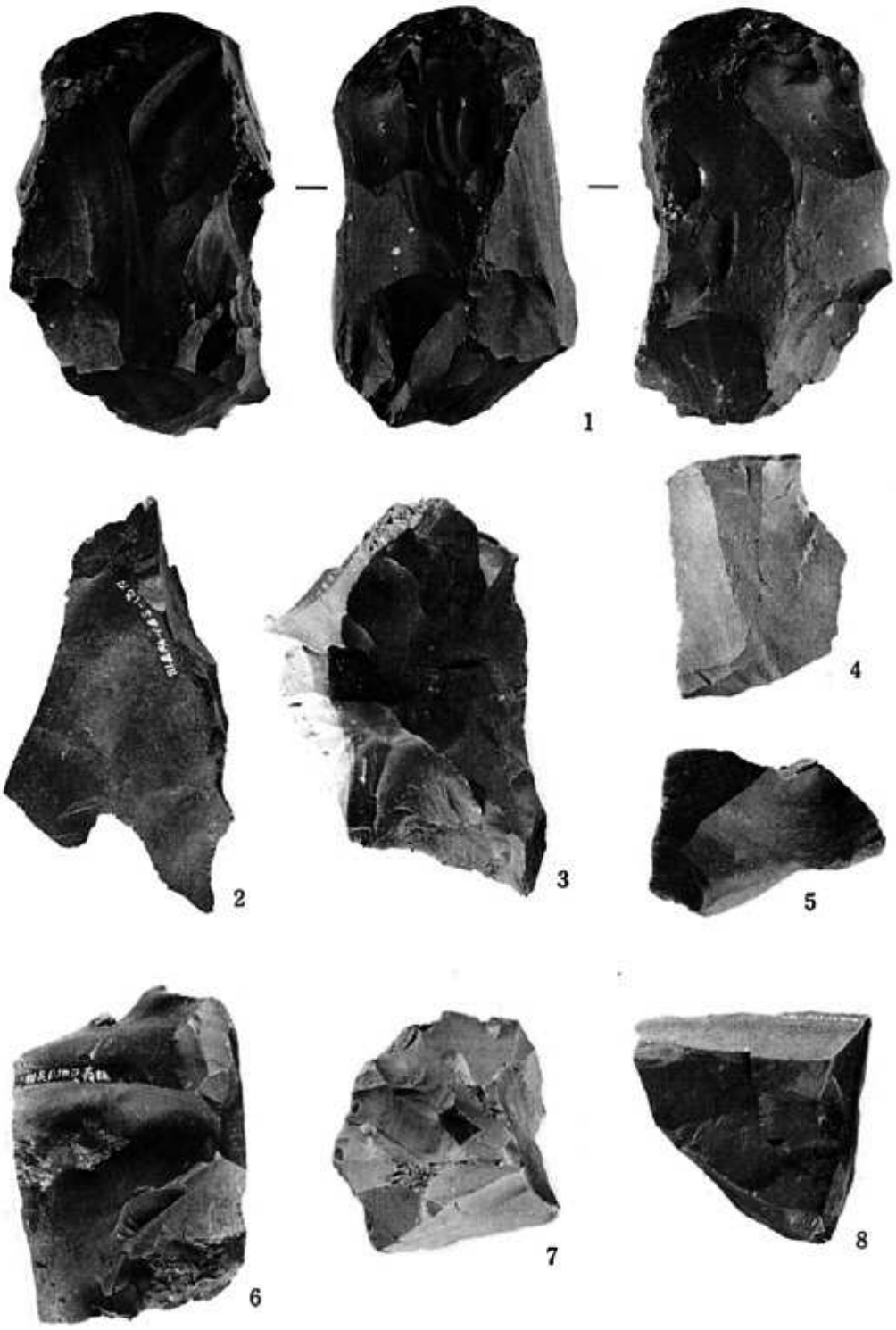
第52図版　石匙・石篦・不定形削器



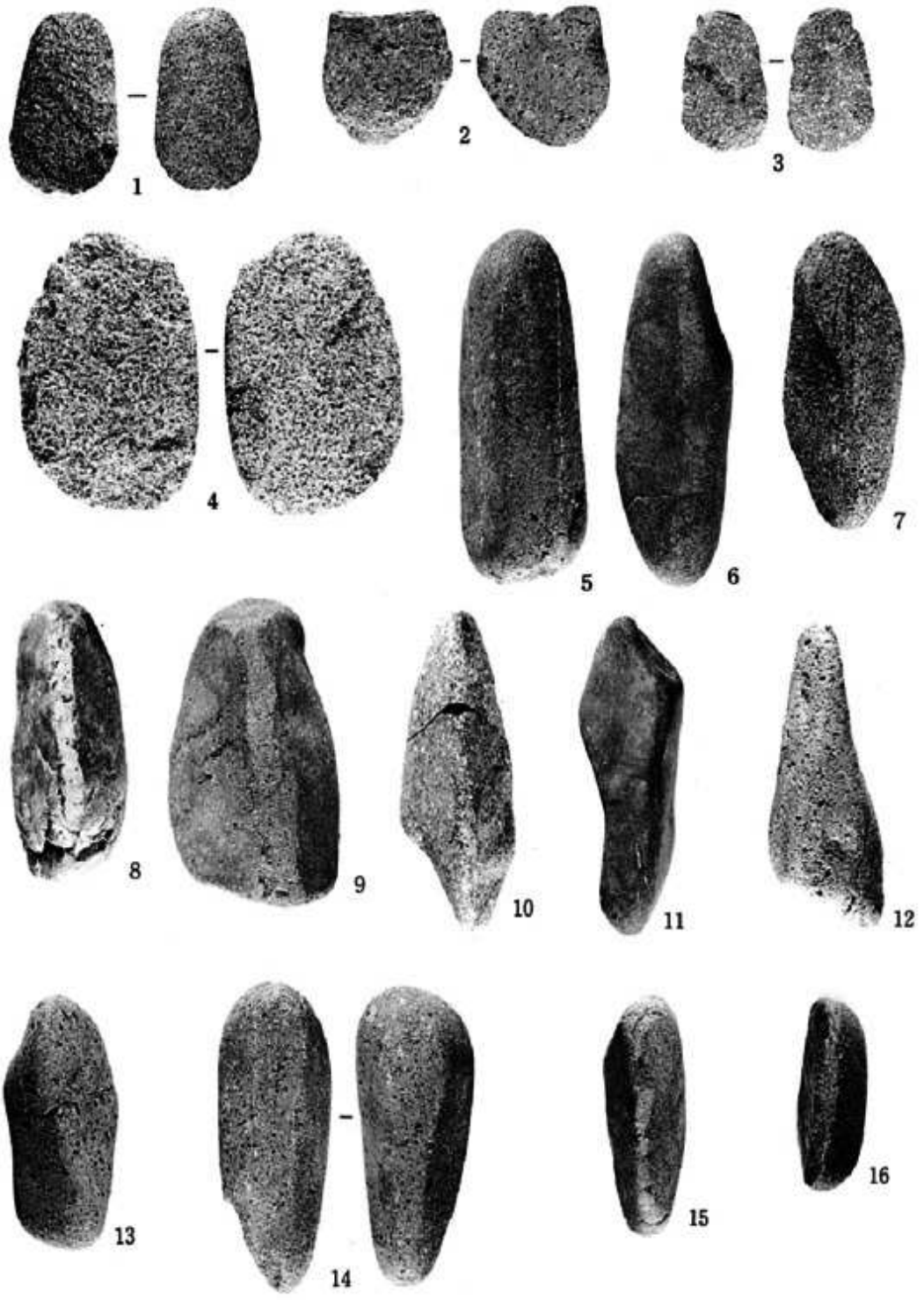
第53図版　不定形削器・Ｒ．フレイク



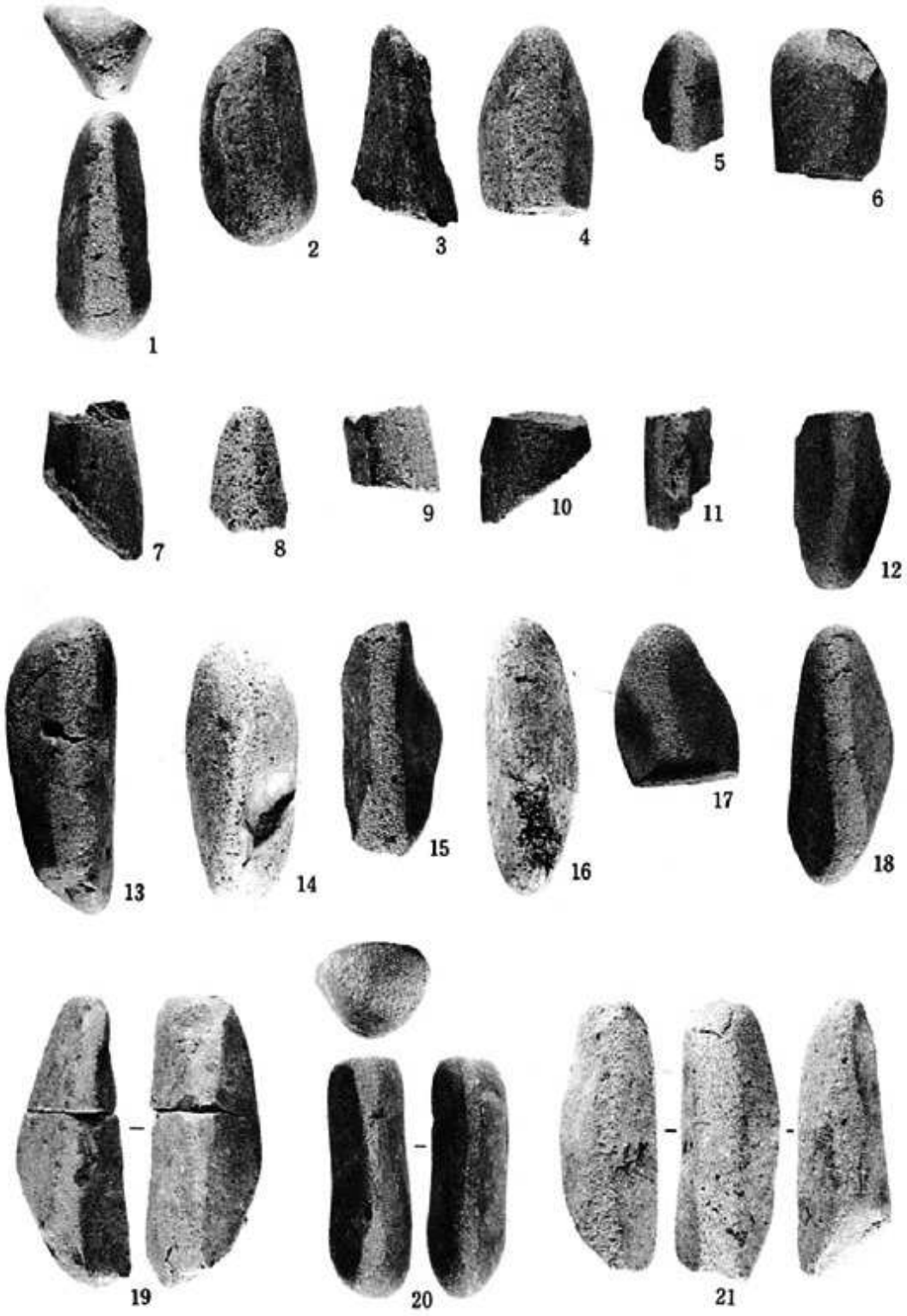
第54図版　R．フレイク・磨製石斧、磨製石斧拡大写真



第55図版　残核・剝片

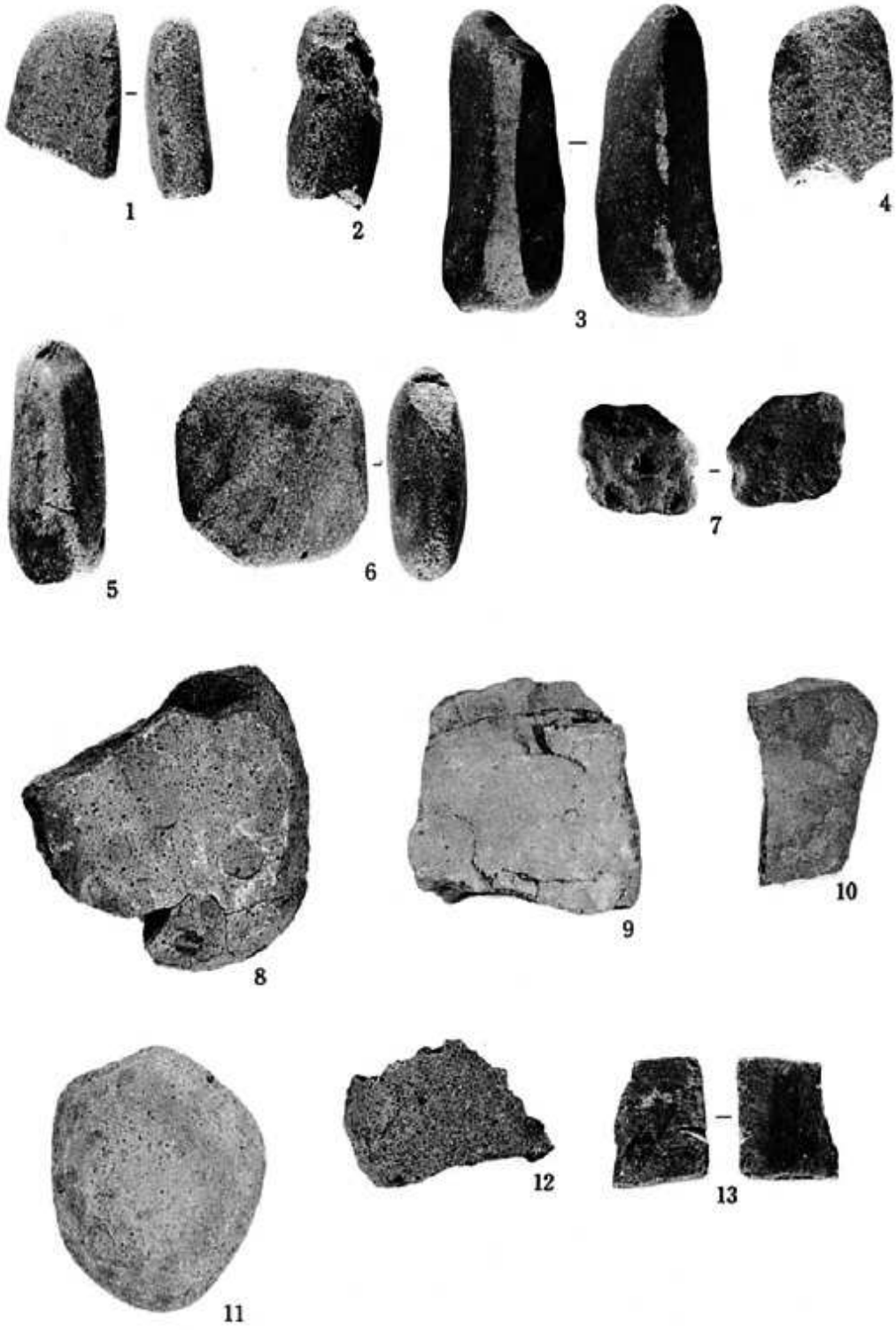


第56図版　打製石斧・半円状扁平打製石器・磨石

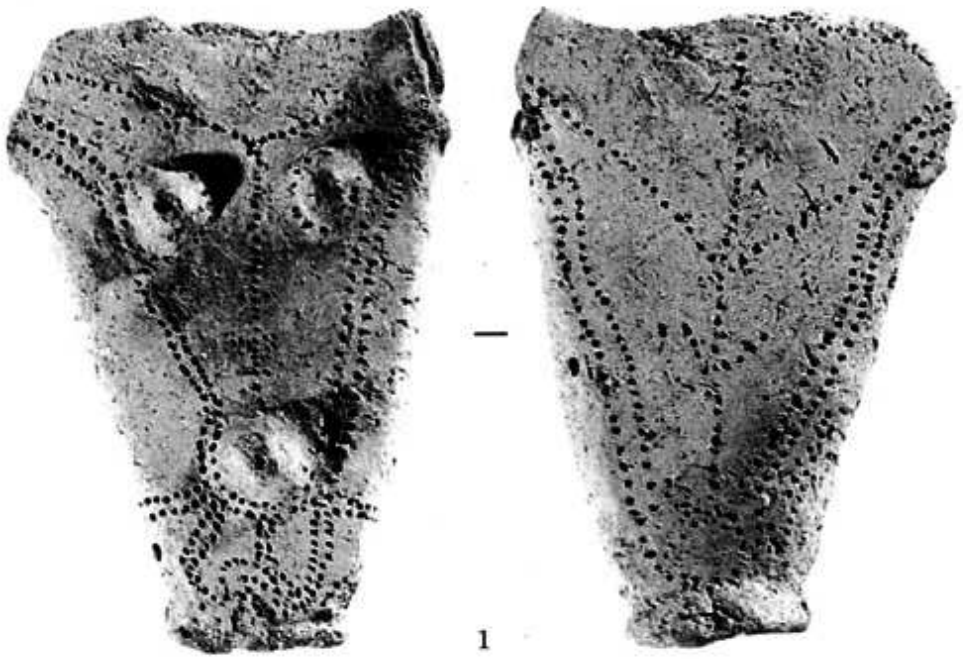


第57図版　磨　石　(1)

第58図版　磨　石　(2)



第59図版　磨石・敲石・凹石・石皿



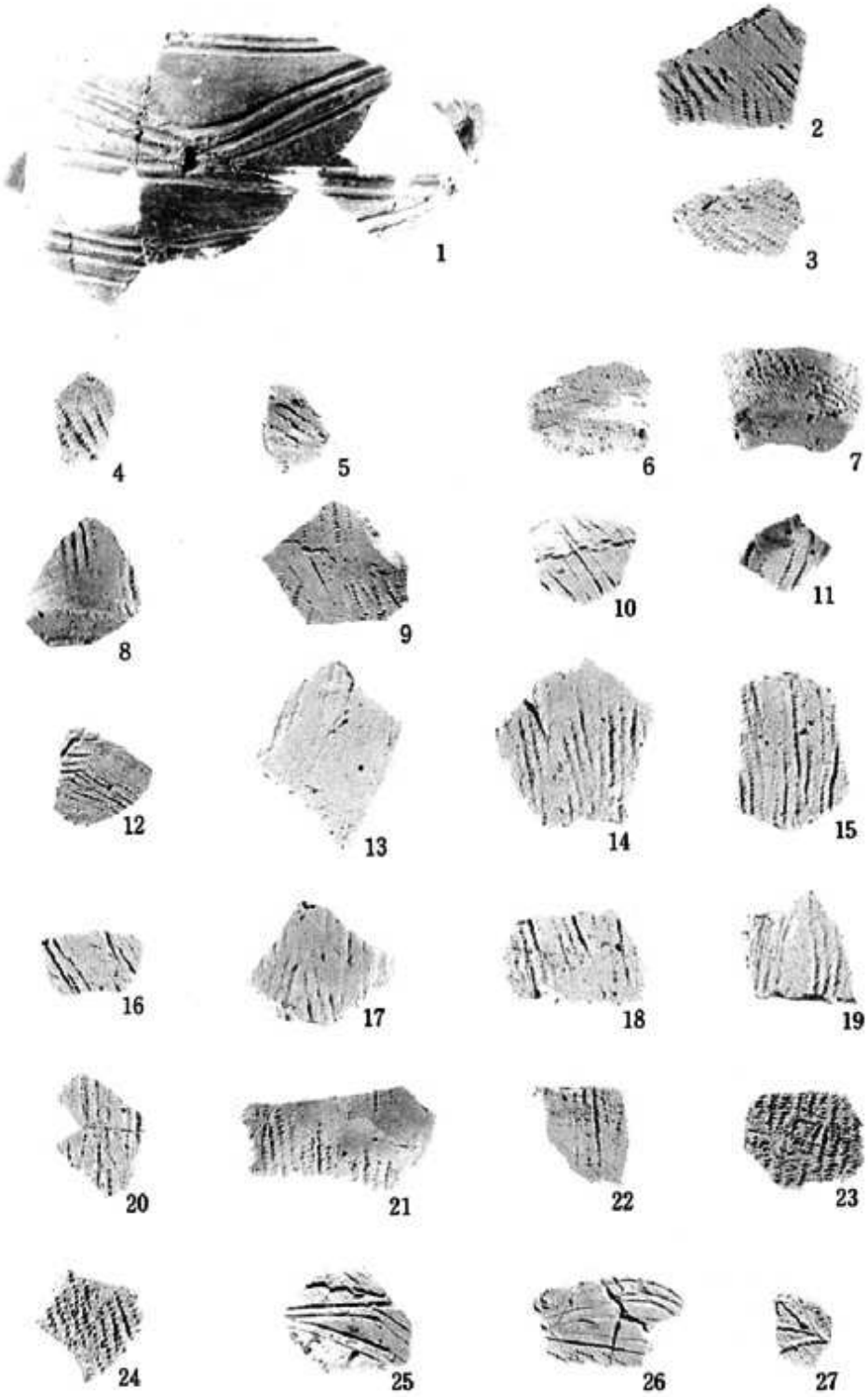
1

2

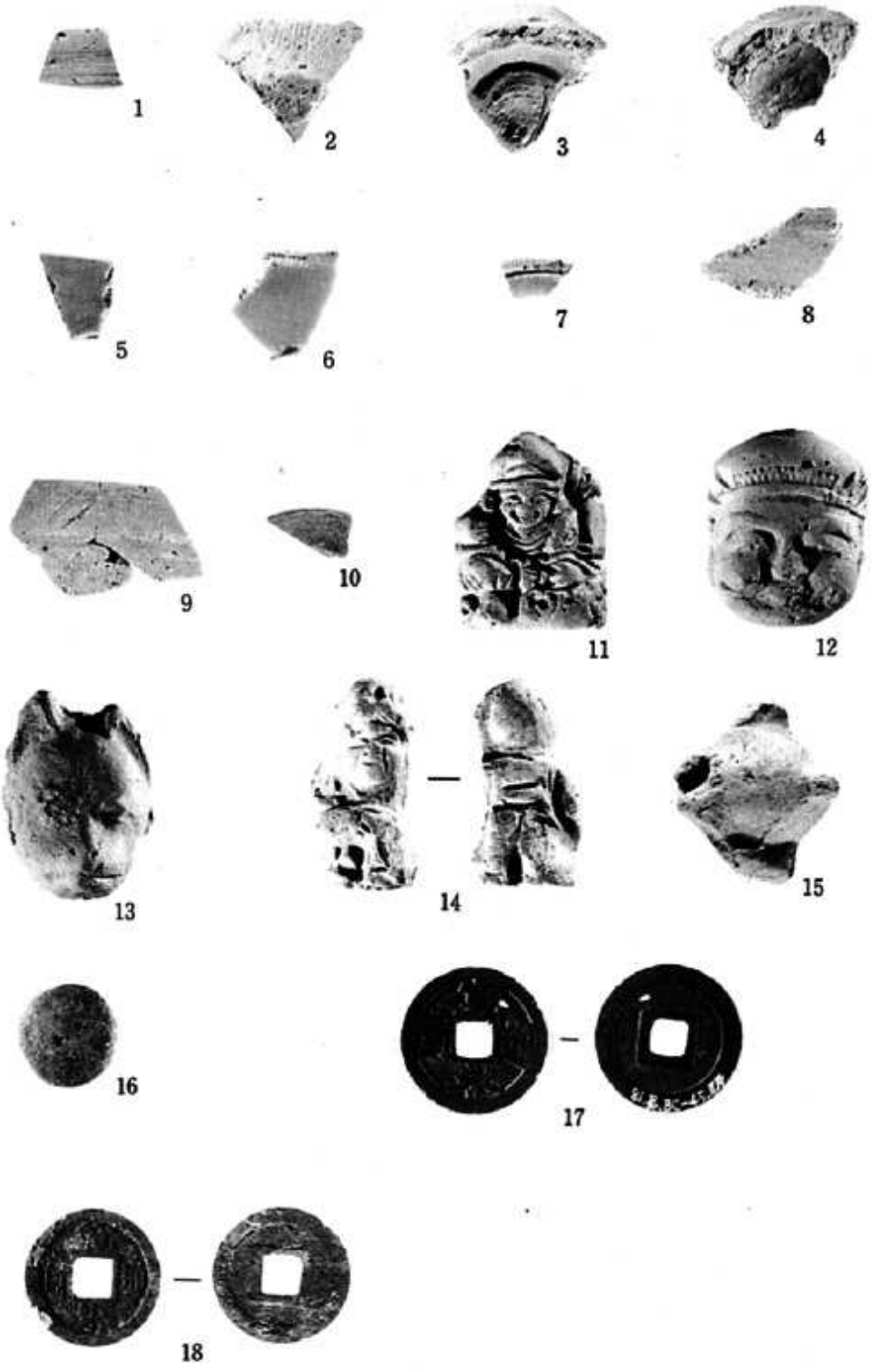
3

4

第60図版　土偶・土製品



第61図版　弥生時代土器



第62図版　土師器・陶磁器・泥面子・古銭

青森県埋蔵文化財調査報告書第74集

長者森遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道八戸線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅴ

発行年月日
昭和58年3月31日

編集・発行
青森県埋蔵文化財調査センター
〒030 青森市大字新城字天田内152－15

印刷所
東北印刷工業株式会社
〒030 青森市合浦1丁目2－12
TEL 0177(42) 2221(代)